
ウィズアウト

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイズアウト

【Zコード】

Z2051F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

ここは魔物と人間が対立する。そんな世界。力が全てを決める。そんな世界もあるのだ。その中で、父を亡くした少年ラジウは父の残した城。古城にやつてくる。そこで出会ったのは……？

序章～小さな王の誕生～

序章～小さな王の誕生

ここは魔物と人間は対立する。そんな世界。

その中でどれだけの戦乱が繰り返されただろうか。

ある時は魔物が世界を治め、ある時は人間が世界を治めた。

現在は魔物の統一する世界。

それは人がたやすく死んで行くということ。

魔物の圧倒な力というものに押さえ付けられて。

力が総てを決める。そんな世界でもあるのだ。

「父上！父うええつ！」

ここにも一人、力で押さえられたものが居た。彼の名はラジウ。金髪の髪は短く切り、気が強そうなきりつとした眉にまだあどけないくりつとした瞳と顔。先刻まで彼は、何不自由なく暮らしていた。胸を張つて誇れる父と共に。

ラジウの父は一国の王で、民からの信頼は絶対なものを獲得していた。頭も切れ、何より子供には優しいことから、ラジウにとつて自慢の父であったことは誰の目からも明らかだったのである。しかし、彼の父は国を守るために首から上が無くなつて子供の元に帰つてきた。

魔物の力に屈してしまつたのだ。国の平和と引き替えに。

「ラジウ様！落ち着いてください！」

布を被せられ、板の上に乗せられた父の体を、歪む視界でラジウは見つめていた。彼の目は大きく見開かれ、唇は青く密かに震えている。

ラジウが父へと手を伸ばそうとした時、彼の視界を塞ごうとするよう、彼の前に立つ銀髪の青年が居た。腰まで伸ばした銀髪に弱々しそうな垂れ耳。頭には上部と顔の部分だけがない、耳と後頭部を隠す薄黄色い布を巻き付けていた。布の下の切目の部分には白と黄色で模様が描かれている。

青年は必死でラジウの視界を塞ぎ、彼を抱きしめた。

「クレクつ……父上はつ！」

青年の名はクレク。ずっとラジウとラジウの父に従つてゐる者だ。ラジウは視界を塞いだ彼の服を力一杯に握り締めた。それから、額の高さにある彼の腹に頭をぐつと押し付ける。

なんでも。と小さく呟き大粒の涙を流すラジウを、クレクはただ抱きとめてその場に立つしか術を知らなかつた。

しかし、この場にいるのは彼らだけではない。彼ら以外の人が素早くラジウの父を何処かへ運んでいってしまう。父の姿を見送ることなく立ち去るラジウ達に、陰が三つ四つ近づいてきた。

「ラジウ様。この度は大変残念な結果になつてしまい。遺憾であります。」

決まりきつたその台詞にラジウはピクリと体を反応させるが、クレクの腹に頭部をつけたまま動こうとしないふうに、黙り込んでいた。ただ、手だけはクレクの服をより強く掴んで小さく震えていた。近寄ってきたのはラジウの父に遭えてた者達である。だから、ラジウにもクレクにも面識はあつた。

「しかしながらラジウ様。いつまでも感傷に浸つてはいられません。この国には王が必要なのです。前王がお亡くなりになられた今、貴方しかおられないのですよ！」

先程とは別の人物が真剣にラジウに言った。だが、ラジウが反応を示す前にクレクがその者達を睨みつける。

「こんな幼いラジウ様にそんな重大なことをさせむおつもつですか！？しかも前王が亡くなられた感傷に浸ることさえするなどおっしゃるのですか！？」

声は静かだった。静かだが、低く怒氣をはらみ、責めているような口調である。

明らかにクレクは彼らに対して怒りを露にしていた。ただ、ラジウ

を抱きとめる手にはいつもの優しさが残つてはいるが。

「クレク、私達がいつてるのは形上。上辺だけの話です。」

クレクと同じように静かな声。しかしその声は無機質で感情を読み取ることができないものだつた。

クレクが反論しようと口を開きかけた時、ラジウが彼から離れた。それを驚いた田でクレクは追う。

「いいよ。やつてあげる。何をすればいい?」

ラジウは顔を下に落としたまま体を回転させ、彼らに向かって言つた。普段と変わらぬ声色にクレクは少しほつとしたものの、何をしだすのかとドキドキハラハラでラジウを見守つている。

「流石ラジウ様です。物分かりがよろしくよつで。まず初めに明日の朝、民の前で演説をしていただきたいのです。文はこちちらで用意いたしますので。」

「うん。わかつたよ。後で部屋持つてきて。明日の朝まで自分の部屋にいるくらいいいいかな?」

静かな声と、ラジウの余韻。一方は相手を見下すように凝視し、一方は顔を落としたままの姿勢で問いかける。

「もちろんですよ。承つてください誠にありがとうございます。ラジウ様。」

ラジウの返答に安堵したのだろう、笑みを零してからラジウの前に四人は膝まずいた。ラジウはうん。と小さく返事をすると踵を返す。

彼の赤いマントがたなびく。

「クレク。行こう。」

「はい。ラジウ様。」

歩き出したラジウの後をクレクは追つた。膝まづいでいる彼らを見ないようにして。部屋につくまで決して、ラジウもクレクも口を開こうとはしなかった。

部屋について、ラジウは何を思ったのか部屋の中をあさり始める。

「ラジウ様……？」

クレクが眉を潜めてラジウの行動を目で追つた。彼は大きな鞄に服などの身近なものを次々に詰め込んでいく。

灯りもつけない薄暗い部屋。けれど、しつかりとした棚や質素だがしつかりとしてる絨毯。それらによって部屋の形は浮かび上がっていた。

ラジウは鞄にある程度物をつめ終わると、窓を開け放ち空を見た。

「ねえ、クレク。僕が何やってもついてくれる?」

風がラジウの光る髪をなせて、窓の内側にある布を揺らした。ラジウの目には自分の目と同じ爽やかな青が写り出されている。

ラジウの後ろ姿は、昔も今も変わらないあどけなさと、悪戯じみた雰囲気をかもしだしていて、クレクにふと笑みが零れさせる。

「当たり前ですよ。私はラジウについていきます。貴方がどう変わろうと、どんなことをしようと、味方が誰一人いなくなろうと、私は貴方について行きますとも。」

「ほんとうに？父上がいなくなつたのに？」

クレクの答えに、ラジウはまだ疑うかのようすに言葉をかけた。ラジウは空を見上げたままで、一切クレクを見ようとしないから、クレクからは彼の表情を見ることができなかつた。

「ええ。私は前王ではなくラジウ様。貴方に忠誠を誓いましたから。

」

クレクは一礼をして笑む。そんな彼にラジウは窓から一気に駆けてきて抱きついた。

ラジウがクレクを見上げ嬉しそうに微笑む光景は、いつまでも変わらない部屋と同化している気さえする。

そのくらい、微笑ましい光景だつた。

次の日。ラジウは城の一部で、街に面している場所に立つていた。そこからは、集まつている大勢の人々を見渡せる。もちろん天井がないそこは、空や街さえもよく見える。

昨夜受け取つた紙の束を片手に、ラジウは皆に見えるように壇を登つた。あまりにぶ厚い紙の束。それにはぎつしりと言葉が詰まつていた。そのため、初めて見た時、ラジウは眉を潜めて溜め息をついたものだ。

「ラジウ様のお言葉です。」

静かな声がラジウを促すかのように耳に告げた。ラジウの周りには椅子に腰をかけた大人が数人。どれもこ難しそうな顔をしている。ラジウは小さな頃、その顔達に何度も笑いを刻んでやろうと試みたことがある。ようは悪戯なわけだが。しかし皺の入った顔はよけいに難しい顔になるだけだった。そして、額に皺をよせている顔の中にクレクの姿は見当たらない。

「この度は前王が亡くなり大変遺憾である。しかしながら、我が国には王が必要であり、彼の血をひくこの私が王になると誓おう。」

ラジウは紙の束に書かれている文章を読み上げた。それに応えるかのように観衆が喜びの声をあげる。

ラジウはそれを見て、次の言葉をつむぐ前に笑んだ。笑顔は優しい、父と同じような笑みだった。しかし、笑顔とは裏腹に彼の手は、紙の束をビリビリと破り捨てていた。いきなりの出来事に民衆は静まりかえる。

そして、ラジウが口を開いた。

「なーんて、これにはそう書いてあつたけど。僕、この国の王になる気がサラサラないんだ。」

ラジウの口調はウキウキと弾むような。また、自信に満ちているような。そんな感じだった。顔は笑みがこぼれている。紙が散々になつて舞つた。紙吹雪がひらりひらりと舞つているのだ。それはまるでラジウを祝っているかのよ。

「この国は僕が築いたわけじゃない。父上が築きあげたんだ。僕、父上のお下がりなんてごめんだね。だから僕は一から始めるよ。今はもう使われない古城、丘の跡城で。」

「ら、ラジウ様。お考え直しを。」

こ難しい顔の一人が立ち上がりてラジウを見る。その顔には驚きと焦りの色がありありと浮かんでいた。

ラジウはそんな彼等に向き直った。目は鋭く、怒りを露わにし、しかしその反面静かに彼は言った。

「嫌だよ。僕知ってるんだ。父上を犠牲にすること、あんたらが決めたんだって。僕は父上のにの舞い踏むなんて嫌だから。」

そこでラジウは口を閉じ大きく息を吸つた。それから背筋を伸ばし顔を上げ胸を張る。目をゆっくりと開け自分の城であつたそれを見据えた。その動作を恐々と見守るこ難しい顔達。

「僕は……死んで守るじゃない。死んで英雄になるじゃない。生きて……生きて守り続けるつ。生きて英雄になるんだ！自分の力で！」

ラジウのその言葉は、そこにいる者達に向けたものではなかつた。もう会えはしない……この国の王だつた者に別れを告げたかったのだ。

「ラジウ様！」

ラジウを呼ぶ声が下から飛んでくる。彼はその声に応えるかのよつに素早く振り返り城の堀に足をかけ、蹴つた。彼の体が上に飛び。彼は顔をもう一度城を見て言った。

「王になりたいやつがなればいい。満足だろ？」

それは下にいる者達には決して聞こえない程度の声だった。がしかし。こ難しい顔達にははつきりと聞こえた。

ラジウはだんだんと下に落下していく。それは彼の重みで速度を増していた。

ドサッと大きな音が響き渡る。すると、辺りはシーンと静まり返った。鳥のチュンチュンといった鳴き声や、遠くにある川のせせらぎが聞こえるくらいに。

「あたた。」

ラジウが身を起こす。彼の下には見慣れた銀髪のクレクが苦笑を浮かべていた。彼がクレクを受け止めたらしい。しかし、流石に高さがあつたのだらう、落下の強さに押され、ラジウともども倒れたようだ。

「大丈夫ですか？ ラジウ様。」

クレクも身を起こしながらラジウに問う。彼等の隣には馬が立っていた。毛並みが鮮やかで、白い毛が風でなびく。どうやらクレクは、受け止めるさいは馬にのついていたようだ。ラジウを受けとめるために馬から落ちたらしい。

「うん。全然平気。クレクこそ平気か？」

立ち上がりつて馬に乗りついとしているクレクをラジウは心配そうに見上げる。作戦ではしつかり馬の上に着地するはずだったが、どうも着地点をミスつたことが気になつているようだ。

「私はそんなにヤフではありませんよ。わ、乗つてください。」

クレクは優しい笑みを浮かべ馬の上から手を差しのべた。

ラジウは片方の口だけ上げて苦笑いをしながらその手を取り、引っ張られるようにしてクレクの前に腰を降す。

「行きますよ。」

今だに静まりかえつて、ただ呆然とラジウ達を見ている回りの民たちの間を、クレクは上手な綱さばきで馬を走らせていく。人垣をやつと抜けると、ラジウがクレクの脇腹から顔を出し城と大勢の人を見て叫んだ。

「僕は父上をいつか抜かすよ！もし僕についてくれるなら丘の跡城に来て！！」

それはまだ幼い子供特有の高い声で、必死になつてることが伝わつてくるくらいはつきりとしていた。けれど、自信がなさそうに弱々しくもあつた。

馬がだんだんと人混みから離れていく。静まりかえつていたはずのその場所から、今はザワザワとした人混み特有の音が出てきていた。クレクはいつたん馬を止め、街をラジウと共に見た。日は暮れ始めていて辺りを赤く染めている。街はポツポツと灯りがともされ、輝いていた。

ラジウがクレクの袖を引つ張り、そして顔で丘にある跡城を指す。ようするに街を見てないで行こう。と言つているのだ。それは同時に彼にとってこの街は何の意味も持たないのだとクレクに教えてくれた。

クレクは小さく頷くと手綱を動かしその城に向かつたのだった。

城につく頃には、既に辺りは暗く、どつぶりと口が沈んでいた。闇夜を星明りが照らす。

「懐かしいね。」

暗い中に、どつしりとびえ立つ丘の跡城をラジウは見上げて呟いた。

近くに来ると城はかなりの大きさがあった。あの街にあった城よりも大きい。けれど、ところどころ錆でいるところや崩れていところがあり、見た目は何か出そうなくらいだ。何年も使われていないのだろう。シタも巻き付いている。

「はい。昔を思い出しますね。」

クレクは馬から降りると、ラジウに手をかし彼も降ろした。それから、中に入りました。と促し、ラジウが頷いたのを確認すると城へ足を踏みいれた。

城の中はガランとしており広さだけが身にしみる。

「うー。あんなに賑わってたのに……今は何もないんだね。」

ラジウは残念そうに肩を落とした。

この城は彼が生まれ、また今は亡き父と過ごした場所だった。昔、城に入ったすぐの広間にはいろんな店が出ており、人で賑わっていたものだ。が、今では何もないガランとした空間とかしている。

「ね、クレク。僕……あんなこと言つたけどさ……。」

ラジウは顔を落として弱々しい小さな声を発した。しかし、このガランとした空間にはその小さな声でさえよく響く。

彼はそれを肌で感じながら唾を飲み、喉をゴクリと鳴らしてから言葉をつむいだ。

「本当に……自信がないんだ。」

ラジウの言葉にクレクは彼の肩をポンと叩いた。いつもの優しい笑みのままで。

ラジウはクレクを見上げた。その顔は不安と驚きが入り混じってなんとも奇妙な表情になっている。

「自信がないなら辞めてもいいですよ。誰だって何か新しいことをする時は不安です。その不安に討ち勝つても、その後良いことがあるとは限りませんから。逃げるのも一つの手です。でも……今の貴方の望みは、逃げ出してしまつて絶対に叶えることはできませんが。

」

相変わらず優しい笑みのままさらりと言つてみせるクレクに、ラジウは苦笑った。

「そんな風に言われたら僕、逃げられないじゃん。」

「別に逃げても良いですよ？ 貴方が後悔しないなら、自分の生き方は自分で決めてください。貴方の人生ですから。」

クレクの笑みはそのまま。けれど、クレクはラジウの性格をよく知

つていた。決して彼が逃げ出さないこと。それは彼の父ゆずりだと言つことも。それでも、辛いなら逃げ出して欲しいとクレクは思つていた。その気持ちが言葉になつて出て行く。

「クレク。お前判りすぎなんだよ。僕が絶対に逃げないってわ。ただ背中を押して欲しいだけだった。つてさ。」

ラジウは頭を搔いてクレクを横目で見る。彼の言葉で自分の気持ちに気付いたことが恥ずかしかったようだ。しかし、その顔は先程よりも明るく笑みが溢れていた。

それにクレクは少しほつとした。逃げ出すなら、きっと彼が後悔し続けることがよつこに想像できたから、逃げないで居てくれて良かつたと。

「そんなこと私は知りませんし、しませんよ。甘やかしてもラジウ様のためににはなりませんから。で、決心はおつきで？」

「もつちゅうと！絶対に逃げないよ！逃げたらきつと後悔しちゃう。」

クレクが確認がてらに問つと、ラジウは顔を正面に向け、にっこりと笑んだ。そこには子どもの無邪氣さが滲出していた。そんな彼の笑顔にクレクはせつときより柔らかい笑みを返す。

「それでこいつラジウ様です。貴方らしい。付いてきた私達も安心しますよ。」

「は？ 私達？」

クレクの言葉に照れていたのもつかの間、妙な単語にラジウは固まつた。片頬がぴくぴくと痙攣を起こしている。

「はい。後にいらっしゃる方々ですよ。」

「ラジウはギギギといつた音が出そうなくらいこぎれいかなく振り返った。そこにはドアから顔を出している数人の少年と少女が居た。彼等の視線は明らかにラジウに注がれている。ラジウの顔がだんだんと赤く染まって行く。

「あ、あんたら何時からそこに？..」

上擦った声で問う。彼等の年頃はラジウより小さくもあり大きくもあつた。ようはバラバラの年代が集まっているのだ。しかし、彼等はけして大人ではない。

「最初から。」

一番小さな女の子がラジウを凝視したまま呟いた。ラジウはその言葉に耳まで真っ赤にする。最初からということは弱気になつた自分を見られたということ。それをラジウは実感しているようだ。

「つ……もう絶対に弱音なんか吐かないからなつ！..」

耳まで真っ赤にし、恥ずかしさのあまり大きな声で叫び、あまつさえ膨れているラジウは、そこにいる少年少女となんら変わりはない。それをクレクは微笑ましそうに見ていた。

「うん。ね、ラジウ様。父ちゃんと母ちゃんの仇とつてくれよ。」

「それで早く平和な世界にしてつ。こんな恐い世界嫌よー。」

彼等は未だにラジウに視線を送っている。何故自分に彼等がついてきたのか、ラジウはよくわかつた。彼等と自分は同じなのだと。ラジウは手を握り締めた。仄かに暖かくなつた胸がドクンドクンと波打つて身体中に勇気を与えてくれる。そんな気がしたからこそ彼の顔には笑みが溢れたのだ。そして彼はこう言つた。

「 もひろん! 」

と。元氣よく。

今はまだ、小さな子どもたちが集う城だが、いつの日か彼が王になり平和な場所になるのかもしれない。

ただ、少年と少女達がクレクヘと、ラジウのことを”小さな王だね。”と言つたことは確かである。

序章へ 小さな王の誕生
完

第一章～三通りの道しるべ（1）～

第一章～三通りの道しるべ

暗闇が辺りを支配する。そんな静まりかえった夜に、活動を開始するものがいる。夜行性の動物同様、暗闇のなかで目を光らせ、獲物を耐えず狙っている。人は彼等を山賊と呼ぶ。

今日も丘の跡城で、盗つた獲物を競い酒盛をしようとしてきた。しかし、丘の跡城にある一室、昔ラジウが使っていた部屋では、ラジウ、クレク、着いてきた少年少女達が床に布団をしき寝つ転がっていた。

荷物を運び、綺麗に飾り付けした部屋はここしかなかったのだ。だから皆でここで寝ることにしたのである。

がたつ

静まりかえった城に物音が響く。クレクがその物音につづりと田を開けた。耳をそばだてるトガヤガヤとした何人もの声がする。それはだんだん大きくなり、騒音として部屋にこだました。

子ども達も目を擦り体をゆっくりと起こす。

ラジウが、自分の隣で状態を起こしたクレクに視線を投げる。

「クレク。何だろう？」

「私にもわかりません。……見に行つて来るのでここで静かに待つていてください。」

話す相手にだけ聞こえるよう、「一人は」などと会話をつむいだ。クレクは確認をするべく、音を立てないよう立ち上がる。そしてドアノブに手をかけた。

「やだ。」

「はい？」

緊張の糸をあつさりと打ち破ったのはラジウ。頬を膨らませてみせる。彼の否定の意だ。クレクを止めるかのようにラジウは否定の声をあげたのだ。それに思わずクレクは聞き返してしまつ。

「やだ。絶対いやだつ。」

もう一度はっきりと告げるラジウに、クレクは固まつた。その彼の横に、彼の行動を気にすることなく、ラジウは起き上がって素早く移動する。

ラジウは、真剣にクレクの紫色の瞳を覗き込んだ。

「クレクがいなくなつたら、彼等を誰が守るの？」

ラジウの視線が、部屋の中の少年少女達へと向けられる。結局は力がない子供ばかりがここにいるのだ。大人であるクレクが唯一頼れる存在なのは事実である。

クレクは觀念したように苦笑い頷いた。

「わかりました。皆で行きましょう。」

「やつた！」

小さくガツツポーズをとるラジウ。彼の目は好奇心に輝いていた。その瞳を見て、クレクは溜め息をつく。彼の座右の名が激悪戯つ子だったことを思い出したのだ。今回も何か企んでいるに違いない。そう思うと多少不安になつてくる。

「あ、早く見に行こひ。

しかし、「わきあき」と肩を弾ませ外に飛び出してしまうラジウ。陽気な彼に続いて子ども達も楽しそうに飛び出した。これではもう、どうにも止める事は不可能のようだ。クレクは仕方なく彼等に人指し指を立て、静かに警告をした。彼等はそんなクレクの真似をしてシーツと言ひ、「どうやらその点に関してはしっかりと理解しているようだ。

騒ぎのする方へ音を立てずに移動すると、広間に出了。「ラジウ達は壁際からそつと中を覗き込む。広間には大勢の人がいた。身なりは品の良いもの、ボロボロなものとそれぞれだ。しかし、顔は皆

「うわあ……三流悪役つ。

である。

ラジウの言葉に小さく乾いた笑いをしたもの、クレクは眞面目な顔に戻り観察している。

そんな緊張が伝わったのだひつ、ラジウも口をあわつと結ぶと、クレク同様じつと広間にあつまる三流悪役を見た。

その時

「じんつー！」

「いー？」

いきなり彼等の後ろでぶつかる音がした。ラジウは思わず身をすぐめ小さく声を出してしまつ。なんとなく嫌な予感がし、振り返るのをためらつが、仕方なく少しの間を置き、そろりと後ろを振り替えた。

「ふえ……。」

そこには、座り込んで今にも泣き出しそうな幼い少女がいた。この一番年下の少女が転んで、さつきの音をたてたようだ。額がうつすらと赤い。彼女はラジウ達が見守る中、目に溢れんばかりの涙を溜めて、大声を出そうと息を吸つた。

彼女以外の全員が慌てた。

こんなところで泣き叫ばれたら、広間にいる人相の悪い奴らに見つかるだろ？。そしたら、どうなつてしまつのだろ？か？そんな疑問がラジウの頭のなかに浮かんだ。

少女が大きな口を開ける。ラジウは手をばたつかせるだけ。混乱して何をしていいのかわからないのだ。

ぼふつ

少女の泣き声が出るつ！そう思った瞬間、鈍い音が彼等の耳に届いた。

ラジウはびくついた時に閉じてしまった瞳をゆっくりとこじ開ける。開けた視界の先にはラジウよりも年のいった少年が彼女の口を片手で塞いでいた。

もごもごと幼い少女は声を出そうとしているが押さえられているた

め、ぐぐもつた声しかでない。

「妹がすいません。」

少年は苦笑つて小さく呟いた。ラジウも頬を引きつらせながら釣られて笑う。どうやら、少女が声をあげるのは防げたようだ。ほつと安堵した空気が辺りに流れた。

「ん~っ~..」

しかし、それも束の間。少女が苦しそうにもがきながら状態を前に倒した。

まだ成長途中の少年少女の体は、その衝撃を押さえられる程大きくはない。あつと息を飲むうちに少年と少女は倒れて転がり出した。その方向は壁がない、つまりは広間から丸見えのところである。ドテツと音がするような止まり方。スピードが落ちた二人は壁もない場所で、うつ伏せで止まったのだ。

「うひ、うひ……あーーんっ！痛いよーっ！…」

少女が起き上がるつともせずに泣き出した。その泣き声にざわめきがピタリと止まる。そして、視線が彼等に集中した。もちろんラジウ達だけではない、広間にいる者達も睡然として彼等を凝視しているのだ。

少年がその視線に気付き慌てて起き上がる。その顔は耳まで赤く、視線があちらこちらに泳いでいた。また、あはは。と小さく渴いた笑いもある。

「わああーっん！わあむぐっ……。」

少女の泣き声がこだまする。それにはっと我に返る少年。彼は急いで少女の口を手で塞いだ。それから死にもの狂いで少女を引きずり、元の場所に駆け戻ったのだった。

まだ辺りは静まりかえっている。少年が息を切らしている音だけが妙に煩く聞こえた。いや、ラジウ達にとつてはそれよりも、自分の心臓の鼓動が煩いに違いない。あつといつ間の出来事にポカンと口を開け冷や汗を流しているのだから。

第一章～三通りの道しるべ（2）～

「わっ！？」

ラジウをいきなり浮遊感が襲つた。足がぶらぶらと床より数センチ上を行き来する。ラジウには何が起つたのかわからない。

「ラジウ様を離してください。」

常備している『』をいつの間にかクレクは構えていた。矢の先端はラジウの後ろの人物、ゴロツキの喉仮に触れるか触れない程度で向かれている。

ラジウはゴロツキの一人に服を掴まっていたのだ。

「なんだ？お前達は……？」

三流悪役は少し冷や汗を流すものの、動じることなく疑問をクレクにぶつけた。余程こということに場慣れしているのだろう。

クレクは『』を構えたまま鋭い視線で、そのラジウを捕まえている敵の後ろを垣間見た。たくさんのゴロツキがこちらに目を向けている。自分でどういふができる人数ではないと、クレクは感じた。

「……私たちは、一般市民ですよ。住む場所を追われてここに来ただけです。貴方達こそなんなんですか？」

クレクは、相手を逆撫でしてはいけないと踏み、嘘を折りませた返答を返す。

いつ襲い掛かってるとわからない相手に武器を降ろすことはできない。だが、こちらが敵意を見せれば、相手もこちらを攻撃していく

るだろう。仕方なくクレクは弓を降ろした。

相手を知ることで勝機が見えるはずだ。そう判断し、なるべく丁寧な口調で問いかけを付け加える。

「山賊だ。ここは人気がないから使っているだけだ。別に何の意味もないぜ。」

口の端をあげ、いやらしく笑みを浮かべる山賊にクレクは眉を潜めた。余裕綽々、そう感じ取れる笑み。

「おい！そんなことに僕の城を使うなよ！――！」

今まで必死に服を掴んでいる手から逃れようとしていたラジウが、きつと山賊を睨みつけて大声を出した。それに対して大人達は全員目を見開き固まってしまう。それから、さもおかしそうに目に涙を溜めてクレク以外の大人は笑い出した。

僕の城だってよ。そんな台詞が笑い声の合間から木霊する。

「――」は僕の城だ！出でけよ！

なおも喚ぐラジウ。クレクは溜め息をついた。まったくもつて自分が行っていた行動がラジウによつて崩されたのだ。こんなにも山賊を煽つてしまふ彼を、クレクは助けなければならぬ。だから強く弓を引きなおした。

「はつはつは。そりゃいいぜ。城の主を殺せばこの城はオレ達のもんになるってわけだ。」

いやらしく笑みながら賊は言った。その彼の目は実に愉しそうだ。ラジウの背中に冷たいものが走る。だから思わず動きを止めたのだ

る。ラジウは暴れるのを止め、男の目に釘付けになっていた。その目は躊躇なく人を殺せるであろう残忍さをかもしだしている。クレクが弓をゆっくりと上げ構えた。

ゴッ

クレクの弓は当たらなかつた。ただ、強く叩いた音が城内に響く。ラジウが地面に落ち、男も地面に倒れ込む。

弓よりも早く舞つたのは、ラジウよりも少し薄汚れた金髪だつた。肩よりも下に伸ばした髪は長さがバラバラで、更に言つなら右側だけ申しわけ程度に結んである。彼は地面に着地すると漆黒の瞳でラジウ達を見た。肩越しのため睨んでいるようにも見える。

クレクは、彼が男の顔に飛び蹴りを食らわせたのだと理解した。ラジウを助けてくれた彼に刃を向けることは礼儀に反する。従つて弓を降ろし彼と対峙した。

「シリキアー？ めえ、何しやがるー？」

賊の一人が彼目がけて怒鳴り散らす。その目は驚きを隠せてはいない。

名前を知っているということは仲間なのだろうか？ そんな疑問がクレクの頭の中に浮かび、弓を強く握らせるのだった。

「お前達を狩りに。」

少し低い声は、はつきりと告げた。顔は仄かに口元が緩んだだけで变化はない。はつきり言ってあまり興味がない。そう言つてゐようつだ。

「な、何故だ！？同じ山賊だろ！」

慌てて一步後ずさる山賊達。シルキアと呼ばれた男は少し顔を歪めた後、馬鹿にするように鼻で笑つた。

「一緒にしないで欲しいねえ。オレ達は正義の山賊よ？」

シルキアの言葉より先に、軽い感じの声がシルキアと反対方向から飛んでくる。声の先に居たのは、濃く黒めの赤髪を左分けにしている男だった。目はシルキアよりも丸みを帯びていて悪戯っぽい緑眼だ。ただ、右目を海賊がするような三角の黒い眼帯で隠している。そして彼は子供達に刃先を向けていた男をねじ伏せていたりする。口にはクレクとは違う軽い笑みが張り付いていた。

「正義？……山賊に正義もくそもないだろ。馬鹿。」

シルキアが溜め息混じりにそう言つた。
赤い髪の男はひとしきり笑つてから立ち上がり、シルキアの隣に移動する。それから口を開いた。

「とこうわけでさあ。オレ達と戦う？それとも逃げる？今回なら見逃してあげつけど？」

余裕の表情に見下すような口調。しかし、軽いふざけているような雰囲気が彼を傲慢過ぎる嫌なやつとは決して見せなかつた。
男達が自分の獲物を握り締める動作を確認すると、彼の目は冷たく細められた。戦うなら容赦はしない。彼の目はそう言つていた。山賊たちはちつと舌打ちをすると獲物をしまい込んだ。

「くそつ。アレンまでつー逃げるぞーー！」

その掛け声をきっかけに悔しそうな顔達は散っていく。それに軽い雰囲気の男は満足そうに笑った。

城に残つたのはラジウ達、それに無愛想と軽快な男二人。ラジウ達をしり目に彼等は話し始めた。

「……逃げたな。」

「あつはつは。物分かり良くていいじゃん。正義には勝てないってな。」

逃げた奴を見送った視線のまま、無愛想な男シルキアは呟いた。それに、軽快な男アレンは笑いながらまたふざけた言葉をつむぐ。それには呆れた目を向け、シルキアはため息を吐いた。

「……まだ言うか。馬鹿。」

「はは。団の名前は正義だから。」

「何時の間に……。」

ケタケタ子供ように笑いながらなおも明るく言うアレンに対し、驚く様子も見せずただただ突つ込みを溜め息混じりに入れるシルキア。いつものことなのか、もうすでに呆れた視線を彼に向けることはない。

しかも、何やらアレンの言葉に納得しているらしく、考え込むようにシルキアは手に顎を乗せた。

なんでこんなにも違う一人が一緒にいるのかと、ラジウは疑問に思つたらしく、眉を額に寄せている。

「ついでつき。」

そんなシルキアに、追い討ちの「」とくきつぱりとつげるアレン。それに、ついにシルキアはそうか。と呟いた。ラジウは、それでいいのか！？と思わず突つ込みたくなつたが、そこはそれ。我慢をするのだった。

あまりに不自然な視線だつたのだろう、シルキアがラジウ達の視線に気付き、アレンを肘でこづいた。それから顎でラジウ達を指す。

「あ、悪いね。急に割り込んだりしてさ。」

くつたくのない笑顔。まるで詫びられた様子ない。

「いえいえ。大変助かりました。ありがとうございます。」

クレクもいつもの笑顔のまま対応した。そして軽く頭を下げる。それにアレンは笑つて一言。

「はは。ならお礼にお茶でも付き合つてよ。お嬢さん。」

「私は男です。」

その言葉に、一瞬にしてクレクの笑顔から殺氣が放たれた。アレンの笑みがそれに対しても少し引きつる。

「あはははー。『めん、『めん。女みたいな顔……。』

言葉はヒュンという音に遮られた。アレンの右頬から一筋の赤い血が伝う。クレクが彼に向かつて躊躇なく弓を放つたのだ。

そして、クレクは満面の笑みで言つた。

「はつ倒しますよ?」

場が静まりかえつた。むしろ固まつたと言つた方が的確であろう。クレクは女っぽい顔立ちをかなり気にしているようだ。彼にとつて女顔、女みたいな禁句になる。トラジウは心に留めるのであつた。

第一章～三通りの道しるべ（3）～

「うんと、俺。この城の主でラジウって言うんだ。こいつは保護者のクレク。後ろにいるのは俺の仲間。」

シンとした場の雰囲気をじつにかしきつとラジウは懸命に自己紹介をする。

「あつは、こんなちつこいのが主？ちゃんとやらおつかしい。」

アレンは、頬の血を拭つてから気にした風でもなく、相変わらずふざけたようにラジウをからかう。

そんな彼にラジウは頬を膨らませてみせた。

「ちつこくつても、主だよつ！あんたらは何なのさ？」

「ああ、悪い悪い。オレはアレン。山賊の頭だよ。こいつはシルキア。オレの子分。」

怒つてじと目を向けるラジウに、アレンは笑いながら説明した。説明直後にガツという音がして、さつきとは逆の頬から血が滴り落ちた。一瞬身を硬直させるアレン。シルキアと彼の延長上には、柱に刺さった小さなナイフがあった。

「……何すんだよつ！？」

アレンは慌てて振り向きシルキアに食つてかかつた。

「ムカついたから真似ただけだ。」

「真顔で言つなーっ！」

無表情のまま言つシルキア。しかし、ナイフを投げられたアレンにしてみれば心臓ぱつくばく。怒らずにはいられない。身体をわなわなと震わし、怒鳴りつける。

「こつものことだら。」

ただ怒つてみても、シルキアは相変わらず無表情でしれっと答えるだけだった。アレンはため息をついて、もういい。と小さく呟いた。そして、ラジウ達に向き直る。それから、気を取り直してまた話始めたのだった。

「ちなみに山賊つつーても、一般人からは盗らないからな?..だいたい同じ山賊か、悪い金持ちがターゲットだ。いわゆる義賊つてやつる。」

胸を張つて自信満々に台詞を紡ぐアレン。

「義賊と言つても、誰かから物を取りあげることに変わりはない。」

「まあな。」

しかし、シルキアのチャチャによりアレンは苦い顔をした。無表情で真面目に言つシルキアに、冗談交じりのアレンの台詞は先ほどから空回りしてばかりである。

苦笑つて頬を搔いているアレンを尻目に、シルキアはラジウの前に進みでた。ラジウに視線を合わせようと片膝を付きしゃがむ。その顔は、額に皺がより不愉快そうだ。しかし、目だけはラジウの青い

田とかち合ひ、しつかりと真剣さを伝えている。

「な、なんだよ?」

田の前に来たシルキアはまつたくしゃべる気配がない。だから、内心ラジウは焦り、どもりながらも話しかけた。じゃつかん腰が退けているように見えるが氣のせいだらう。シルキアの田をしつかりと見据えているのだから。

「……何故、お前達はここにいる?」

シルキアはラジウの田を見たまま言った。静かな低い声。それにラジウはドキッとしたらしく、少し体を固ませた。

「えと……この城から僕……新しく頑張るのと思つて。」

ラジウはたゞたゞしく答えるながら田を泳がしていた。どうやら考えがうまくまとまらないようだ。しかし、そんな彼を、シルキアはずつと見つめている。それが余計にプレッシャーとなってラジウを押しつぶしているのだらう。

「親はどうした?大人は、この頼りない保護者だけか?」

シルキアの言葉に、クレクがラジウに走り寄りうつする。しかし、アレンがそれを腕で遮った。そして、首を横に振る。そんなアレンの田は、さつきまでの悪戯じみた田ではなく、真剣そのもので。さらに言つなり、彼の片手にはキラリと光る短剣が握られていた。それらは全て、クレクに動くな。と告げている。

「母上は知らない。父上は……父上は、この間死んで……残ったこ

の城で、僕は……。」

ラジウは答えるも、だんだんと声が小さくなり、視線も少しづつ下がっていく。最後には、完全に下を向き、言葉を詰まらせた。それを読み取ったのか、シルキアが聞発入れずに言ひ。

「貴様はまだ、親が恋しいようだな。」

「ちがつー。」

シルキアの言葉に勢いよく頭を上げ、目を見開くラジウ。そして、必死に否定の声を上げた。

「なら、その顔は何だ？不安でいっぱいと言つた感じだが？」

シルキアの視線の先、ラジウの顔には、流れる透明な滴が姿を現していた。表情も眉は八の字に曲げられ弱々しそうである。

「……。」

ラジウは両腕で涙を懸命に拭き、シルキアをキツと見た。しかし涙は、ラジウが必死に止めようとしても、次から次へと溢れでてきてしまう。ラジウは唇を強く噛んだ。

「まだ、父の死を受け入れられていないんだ。貴様は。」

シルキアの淡々とした無感情な口調。さらに、突き刺さるような言葉は、ラジウをドキンとさせた。彼の言葉はラジウの心を見透かしてるように、ラジウは言葉を詰ませ、再び下を向いてしまった。そんなラジウをじっと見つめているシルキアは、涙を気に止める様

子はなくせりに言葉を続ける。

「ゾロは、ある意味戦場だ。府抜けたガキは帰れ。邪魔なだけだ。」

端的な言葉を言い放ち、シルキアは立ち上がった。

「行くぞ。」

アレンにそう言つと、ラジウ達に背を向け、さっさと歩き出してしまう。自分の言いたいことを言い放ち、相手への弁解の余地を与えない。それは、ラジウにとつて手堅い痛手を生み出した。

「あー、もう。自分勝手だなあ。」

アレンは苦笑いをしながら短剣をしまい、シルキアの後をついていく。

「あ、そつそつ。オレもシルキアと同意見なんだ。」

しかし、途中でピタッと止まり、振り返つた。そして、言葉をつむぐ。

「戦いの場に、弱い奴は邪魔なだけ。ホゴシャさんはわ、ここに曰賊が出来るつて、知つてただろ？こんな大人数の子供を、一人でなんて守れないのに、こんなところに来るホゴシャさんの気がしれないね。まあ、ついてくるガキもガキだけど。そんじやな。」

軽い口調なのに、軽蔑しているような冷たい視線が言葉に冷酷さを持たせていた。言葉の冷たい痛さがラジウ達に突き刺さる。アレンは踵を返し、既に見えなくなつたシルキアを追つた。

「うわああああ、あ、ー！」

残されたラジウは膝をつき、大声で泣き出した。先ほどとはうつてかわつて大粒の涙が床へと後を残す。

アレン達は姿を消し、城にいるのはラジウとクレクと少年少女のみ。ラジウの泣き声は悔しくて悔しくて、言い返せない自分が情けなくて、死んでしまった父が恨めしくて、残されたことが寂しくて。そんな感情がひしひしと伝わつてくるくらい悲しい泣き声で。そんな泣き声は、次から次へと他の子供に飛び火した。

小さな子供からラジウに続いて泣き出して、最後には全員が泣いて泣いて……悲惨な泣き声だけが城に木霊する。

そんな中、クレクは眉を潜め黙っていた。それは、この状況で自分はどうしていいのかわからず、ただ見守ることしかできなかつたから。だからクレクは、自分の力のなさを改めて実感していた。

しばらくして、泣き疲れて眠つた子供達を、クレクは寝室へと運んだのだった。

もう、時計の針は次の日の朝を指しており、辺りも段々白く明るくなつてきていた。

第一章～三通りの道しるべ（4）～

1日寝て、2日田の毎になつても、ラジウにはいつもの元氣がなかつた。起きてはいるものの、布団を被り、ベットの端に足を抱え座り込んでいる。食事は少し口をつけるものの、ほとんど残し、クレクはそれが心配だった。けれど、彼はラジウに無理矢理食べらなどは決して言わなかつた。ただ、見守つているだけ。

今日も他の子供達は庭で遊んでおり、クレクはラジウのそばで本を読んでいた。

「おーい！」

広間の方から、小さくだが声が聞こえてきた。クレクは疑問に思い、本を机に置き耳を澄ます。

「誰かいないのかい！？」

少し怒つたような高い声が、さつきより大きく聞こえた。
声からして、女性か若い男。クレクはラジウに、ここで待つよつ注意を促し、広間へと出でていつた。

「はーい、今行きます！」

クレクは、広間に向かいながら大声で返事を返す。なぜなら、その声はここにいるであろう人に、ずっと呼び掛けていたからだ。

「ああ、いたいた。」

広間に出ると、白衣に身を包んだ女性が立つていた。

彼女は、青とも緑とも言えるような長い髪を、お団子状に結んでいる。顔は美人とは言いがたいが、引き締まつた気の強そうな瞳が独

特で。それが、彼女の魅力なのだと、クレクは思つた。

けれど、彼女をケレケは知らない。見たことがない顔だ。

「えつと……。」

「ああ、私はキヴィ。医者です。一応。」

キヴィと名乗る女性は、につこりと笑んだ。

最後の言葉が多少気はないにはしたが
浮かべ、言葉を返す。

「私はクレクです。キヴィさんは、Jの城に何か用ですか?」

「ええ。ヒーリングカードで、ジャスマニアが何を教えるかがわからぬ。」

キヴィは、なかば強引にクレクが来た方向に歩き出す。そんな彼女の行動に、クレクはポカンと口を開けてつ立っていた。

「何をモタモタしてるんだい? ひとつひと子供のところまで案内しな。」

ボケツとつゝ立つてゐるクレクに、さつきよりも低い独特の声で、
キヴィは言った。

彼女は見た目からして、明らかにクレクより年下だ。しかも、面識などまったくないはずなのに、彼女はきつぱりと次の行動を彼に指示している。

「どうやらこの女性は、気持が高ぶると、いつもの口調に戻るらしい。と、クレクは勝手に解釈をした。そして、足早にキヴィを追い、一緒に歩き始めた。

「キヴィさんは、ラジウ様を」存じなのですか？」

「い、いえ。ま、まったく知りません。」

からつと答える高い声に、クレクはその場に立ち止まつた。キヴィは氣にも止めずに、廊下を突き進む。

「私は、シルキアからここに来るよつて言われただけです。」

不思議そうな顔をしてこるクレクに、キヴィは振り向くもせず言つた。

「シルキア？」

「寝癖ばっかついてる金髪で、無愛想な奴さ。アレンっていう、赤髪の軽い男と一緒に、あんた達に会つたつて言つてたけどねえ。」

「あ、……あの山賊の。あの方が？」

「あいつらが山賊なんて、ちやんたりおかしいね。なんだかんだであります、子供好きなのよ。」

いぶかしげに首を傾げるクレクと、豪快に笑いながら歩くキヴィは、まるで正反対。

クレクは苦笑つて、キヴィの後を追い、彼女の肩を掴んだ。

「キヴィさん、いこですよ。」

そして、左の扉を親指で指す。キヴィがわざと柴を過ぎて、ラジ

ウがいる場所を通り過ぎたのになつたのだ。

「おや、リリかー。」

キヴィは止まり、扉の正面に立つ。それから躊躇つことなく、扉を押して開けた。ずいぶんと開けた場所で、キヴィは端から端に目を移動させる。ベットや絨毯は、暗めの赤をベースにしており、棚などでいくばかのスペースが埋まっていた。

「……誰？」

ベットの端にあつた赤黒いタオルケットに包まれている何かが動いた。すると、真っ青な目がキヴィの青緑の瞳とかち合つ。

「私はキヴィ。医者さ。あんたがラジウだね？」

おぐする」となくキヴィは、ベットに近付いていった。そして、ベットの脇にしゃがみ込み、真っ青な瞳に自分の視線を合わせる。

「わうだけど……何？」

赤黒いタオルケットをギュッと握り直し、ラジウは後ずさるようこの体を動かした。しかし、壁に阻まれてそれ以上後ろへは行けない。キヴィは確認の言葉を聞くと、自分が持つていた長四角の白い固い鞄を床に置いた。それをパチンと音を立てて金具を外し、大きく見開く。そして、その中から聴診器を取り出すと身に付けた。

「診察してあげる。タダで。」

「うわっ！？」

キヴィはそう言つて、にやりと笑つた。かと思つと、ラジウがはおつていたタオルケットを、あつと言う間に取りあげた。

金髪のサラサラした髪と、黄褐色の肌が姿を現す。真っ青な瞳が小さくなつて、キヴィを見つめかえした。

「わつわと上脱ぎな。診察できなうだろ？」

まだ目を大きく見開いているラジウに、キヴィは鞄から医療の道具を取り出しながら促しの言葉をかける。

その声はハキハキとしており、逆らえないような感じだ。だから、ラジウはわけがわかないまま、いそいそと上着を脱ぎ始める。

ラジウが上着を脱ぎ終ると、キヴィはテキパキと診察を始めた。聴診器を胸、腹、背中と順々に当てた後、口を大きく開かせて覗いてみたり。一通り終わりラジウが服を着ると、キヴィは立ち上がりて言った。

「異常なし。だね。全くの健康体だよ。」

そして、ラジウに手を差し出す。

「元気なんだ。こんなところでウジウジしてないで表に出るよ。ほら、わつわと立ちな！」

ラジウがその手を取ると引き起こし、彼女は彼の背後に回つた。また、彼の背中をグッと押して、部屋の外へ押し出してしまつ。

それからパタリと扉をしめてしまつた。扉の向こう側から小さく叩く音と、何かを叫んでいる声がするが、キヴィは扉を開ける様子をまったく示さない。

第一章～三通りの道しるべ（5）～

「……どんだけあの子は泣いたんだい？」

キヴィは、後ろに立っているあるいはクレクに近くまで立った。その口調は、やつままでのじの声よりも低くて、真剣そのものだ。

「……。」

クレクは、その問いに答えられずに顔を下に向ける。また、返答がなくとも、キヴィは言葉を続けた。

「田が酷く腫れ上がりつたし、喉も若干赤く腫れてたよ。それと、あの子の田は……何かに怯えている。」

「……。」

いつまでも黙つているクレクに、キヴィは振り向いてグッと彼の胸ぐらを掴んだ。そして、口を大きく開けた。

「あなたがしつかりしなきゃいけないんだろー？」「ここに連れてきた、あんたが責任持たなきゃいけないんだろ！？？」

「……すいません。」

クレクを見据えて怒鳴り散らすキヴィ。そんな彼女に、苦笑い、眉を潜め、顔を歪めて、クレクは謝りの言葉を述べた。

その目は、さつきのラジウの瞳よりも弱々しく輝きがない。そんな彼の表情を見て、キヴィめ眉を寄せ、やるせないといった顔

をした。

「う…なんて顔するんだい。そんなんじゃあ、あんたの方があの子
よつよつぽじ辛そうで何かあるみたい……。」

「余計なお世話ですよ。キヴィさん。」

キヴィの言葉をさつきと同じ優しい声色のまま、クレクは遮った。
そして、彼女の手をそっと取り外す。

しかし、声やその仕草に相反してその紫色の瞳は細められ、酷く冷
たくキヴィを見透かしており、口許に笑みさえもなかつた。

「あ、ラジウ様見ていいないと。また何かしでかしかねますから。」

クレクはこいつと笑んで、先ほどキヴィがラジウにしたよつて、
彼女を部屋の外へと押し出した。また、自分も外に出てから扉を閉
める。

廊下には、ラジウが崩れつ面をして立つており、その目はさつきよ
りも遙かに赤みを帶っていた。そのことからして、また彼は泣いてい
たのであらうことだが、二人には手に取るようにわかつたのである。
キヴィはチラリとクレクを見た。そこには、会つた時とまったく変
わらない笑顔が、自分とラジウを見ていた。キヴィは口の先端を上
げ、苦笑つた。まったくもつて彼の内心が掴みとれなかつたから。
そして、溜め息をつきながらラジウに向き直る。その行動に、ラジ
ウは眉を潜めて彼女をいぶかしげに見上げた。

「ま、いいわ。ちつここの、おいで。」

そう言つと、キヴィはラジウの小さくて細い腕を掴み歩き出す。と
言つても、廊下を横断した、手摺の部分までだが。

「よつと。」

彼女は手摺の所まで歩いてくると、ラジウを手摺の向い側に放り投げた。

「うわーーー？」

「ラジウ様ーーー！」

慌ててラジウは受け身を取り、草地を転がった。クレクはその様子を田を丸くして凝視する。キヴィは周りを気にする「ことなく、自分もフェンスに片手をつき、向い側に飛び出た。

「ラジウはラジウと向かい合ひよつに立ち、強気な態度のままに言った。
髪の山賊さ。」

キヴィはラジウと向かい合ひよつに立ち、強気な態度のままに言った。

ラジウは、彼女の言葉に手をついて座つたままつまんでしまつた。

「……悔じないのかい？」

「悔じーーー悔じこけどーーー怖かったんだ。」

バツと顔を上げたかと思つと、姫姫の調子と共に笑いつき下していく。

「父上の」と言われて、ドキッとして。僕はじめておしゃけない

んだ。って。僕は間違ってるんだって。そう言われた気がしたんだ……。」

田から次々に大粒の涙を流しながら、つつかえつつかえにラジウは話を続けた。

キヴィは、そんな彼の腫れた眼が更に赤くなるのを見て、眉をひそめる。しかし、クレクがラジウに走りよひと動く前に、彼女は躊躇わざ口を開いた。

「悔しかつたら、見返してやりな。」

「でも……怖いよ。」

「怖かつたら元を断つんだよ。奴を負かして、あんたの自信取り戻しな！」

きつぱり言い放つキヴィに、ラジウは首を横に振つて小さな、今にも消え入りそうな声で呟く。それに対し、キヴィはさつきよりも大きな声で反論した。

「……勝てると思つの?..」

ラジウはうらめしそうにキヴィを見上げた。

その田は勝てるわけがないじゃん。とキヴィに訴えてくる。

「勝つ自信がないやつに勝利なんてないね。自身を信じれない奴は、強くなんてなれないよ。」

「だけどつーー。」

ラジウは大声でキヴィの言葉の最後をかき消した。拳を握り締め、肩をわなわなと震わせている。

彼も、そんなことは言われなくともわかっているのだ。けれど、一度覚えてしまった恐怖と、敗北を認めてしまった弱さは、なかなか勝てるということに繋がらないので。

第一章～三通りの道しるべ（6）～

「だけど……僕は間違ってるんじゃないか。って、不安で……不安で、怖くて、勝てる気がしない。自分自身を信じられないんだつ！」

「あまつたれんじやないよ！』

大声で叫びに近いラジウの声に反論するかのように、キヴィも出来るだけの大聲で怒鳴った。

びくっとラジウが身を強ばらせ、キヴィを凝視する。

「あなたは善悪が解らないほど幼いのかい！？自分で何が正しくて、何が間違ってるのか判断もできないのかい！？ええ…どうなんだい！？他人の言葉に惑わされるんじゃないよつー」

キヴィは、一気に怒鳴り散らしたせいか息遣いが荒い。

一回息を吸つて呼吸を整えるとラジウを見た。反論されると思ったからだ。

「……あなたは、僕を信じてくれる？」

返つて来たのは自分をじっと見つめる涙に濡れた青い瞳と、思いもよらない問いかけだった。

今度はキヴィが眼を見開いてきょとんとラジウを見る。

「僕が、正しいと思う？」

返事を返さないキヴィに、もう一度問いかけるラジウ。

青い瞳に見られてキヴィは溜め息をついた。それは、キヴィがやつとラジウが訴えかけることを理解したということ、それとその内容に呆れていることを示していた。

彼女に対して、ラジウは頬を膨らませる。

「自分で判断くらいできるよ。できるつ……けどね、人の言葉に左右されるな。なんて、無理だよ。やつぱり気になるもん。……だから、さ。」

じつとキヴィを見ていたかと思うと、恥ずかしそうに苦笑した。キヴィは、そのはにかみ笑いに彼の気持ちが出来ていることに気付く。そして、同じく苦笑つて、彼の次の言葉を待つた。自分が何も言わなくても、彼なら自分で言えるだろうと感じたから。

「あんたの言葉で僕を左右してよ。」

期待通りの言葉に、キヴィは思わず吹き出した。口を押さえながら笑いを堪えて肩を震わせる。

そんな彼女の反応にラジウは顔中。いや、耳まで真っ赤にして眼を反らした。しかし、表情は頬を膨らませてすねているようだ。

「つ……あんた、もう心はすでに決まってるんだね。まったく、後一押しのが欲しいだなんて自分で言つなんて……ふつ。」

キヴィはなんとか笑いを堪えて言葉を綴つた。すねているラジウを、さもおかしそうに見ながらである。

「へんなことになーつ！だって、そう思つたんだもん！」

「あはははは。『めん』『めん』。まつたくあんたは……氣に入つたよ。

「

ラジウは大口を開けてキヴィに食つてかかる。顔はまだ真つ赤。対してキヴィは、涙目になるまで大爆笑。そして、その涙を拭つてポンと膝を叩いたかと思うと、立ち上がった。

ラジウは大口を開けたままポカンと彼女を見上げる。

「ラジウ、あたしは正義なんてくそくらえと思つてる。だから、正しいなんて言えやしないけど、あんたは勝てるって信じてるよ。」

キヴィが、柔らかい笑みを浮かべ、ラジウにそう言った。すると、パアツとラジウの顔が明るくなる。それを確認して、クレクはほつと胸を撫でおろした。一人のやりとりにおろおろとしながら入るに入れなかつた彼にとつて、このことはとても良かつたに違いない。

「さて、シルキアを見返したいかい？」

「うんー。」

「勝ちたいかい？」

「もちろんー。」

ラジウは涙に濡れた目を拭い、キヴィの言葉に大きく首を縦に振る。そして元気よく立ち上がつた。顔は、悪戯っぽくキヴィに微笑んでいる。

キヴィはそんなラジウよりも子供っぽく、悪戯じみた緑眼を光らせた。

「よし！それじゃあ、わたしと勝負しようがー。」

「くつ？」

ラジウは彼女をきょとんと見上げた。
そんなことお構いなしに、キヴィは白衣のポケットからゴム玉を取り出す。ゴム玉はテニスボールくらい。それをラジウにつき出すようを見せた。

「か弱いわたしに勝てないで、あいつらには勝てないだろ？このキヴィ様から、このボールを奪つてみるんだね。時間は無制限。道具の使用は一切不可。以上がルールだよ。ほら、来な。」

ゴムボールを持つていない方の手で、キヴィは人指し指を動かしてラジウを挑発した。

「くつそー！ なめないでほしいなつ！」

馬鹿にされたと思ったラジウは、一度頬を膨らませ、地面を勢いよく蹴つた。一気にキヴィとの間をつめる。

「行くよ！ おばさん！」

そして、大声で宣言し、ゴムボールに手を伸ばした。

「ゴンつ！ ！」

大きな鈍い音が辺りに響く。

「だーれが、おばさんだつて！？あたしゃ、こいつ見えても二十歳になつたばかりだよ！！？」

大きな音の原因は、横にずれてラジウを避けたキヴィイが彼の頭に思いつきり肘鉄を食らわせたせいだつた。やけにばかでかい声で巻くし立てながらである。また、数メートル先で止まり、振り返ると同時に、ラジウに向かつて中指をおつたてて見せた。ようは戦線布告である。

「そんな風に言つガキに、手加減なんてしてやらないからね！覚悟おし！」

「望むところだよ！」

痛みに頭を抱えてうずくまつていたラジウだが、キッとキヴィイを睨みつけた。それからスクツと立ち上がり、またキヴィイ目がけて走り出した。

そんな様子を、クレクは溜め息をついて見てゐる。しかし、溜め息をついているわりに、顔は微笑ましそうだ。子供相手に真剣に遊ぶキヴィイの楽しそうな顔と、避けられては転がり悔しがるラジウのランランと輝くいつもの瞳に。

クレクは微笑みながらも、きっと彼女がしたことは、自分では決してできなかつただろう。と感じていた。

「さて、二人が疲れたら、きっとお腹も空くことでしょう。」

そう呟いて、クレクは屋敷の奥へと消えていった。まだまだ元気に遊ぶラジウとキヴィイを残して。

第一章～三通りの道しるべ（ア）～

「だーつーくそつー！なんでキヴィはそんなに体力あるのさー？」

したたる汗を手のこすりで拭いながら、ラジウは叫んだ。汗をだらだらと流し動きも鈍くなっているラジウに対して、白衣を脱ぎ捨て薄いシャツになりつつもまだまだ軽い動きでラジウの攻撃を避けているキヴィ。

「人を体力馬鹿みたいに言わないでくれるかい！？」

キヴィは、なおもボール目掛けて飛び掛つてくるラジウを避けたついでにペシッと彼の額をこ突いた。すると、こ突かれた瞬間、ラジウはバランスを崩して倒れ込む。

「つ……まだまだーつ！」

声と共にすぐさま起き上がり、構えなおした。
そこへ、クレクが戻つてくる。

「二人とも、休憩にしませんか？」

ラジウがキヴィに再び飛びかかる前に、穏やかな声でクレクが一人に呼び掛けた。

「おっ、いいねえ。」

「えー！？後ちよつとなのにーー」

口々の反応に、クレクは微笑んでタオルを一人に放り投げた。そして、庭に出るとお菓子を入れたカゴや、カップやポットを乗っけている皿を白い備え付けのテーブルに置いた。

それから一人を笑んだまま手招きしたのである。

それにラジウとキヴィは顔を見合させ、肩を同時にすくめた。どうやら一時休戦のようだ。一人とも、クレクに誘われるまま、テーブルの近くの椅子に腰を下ろした。

ラジウはさっそく、皿の前に用意されたお菓子と飲み物に手を伸ばす。

「なーんで、キヴィは僕より疲れてないのさ？」

お菓子を食べながらラジウはキヴィに食つてかかった。

「あんたが弱いからだよ。」

キッパリと放たれた返答に、思わずラジウは立ち上がる。

「まあまあ、落ち着いてください、ラジウ様。キヴィさんは、ある一定の場所でしか動いていなかつたんですよ。」

クレクはラジウをなだめて座らせると、紅茶を飲んでいるキヴィに視線を向けた。

「なるべく最小限の動きで避けてたからね。ムダがとつても多い動きをしていたラジウより、疲れてないのは当たり前のさ。それに、あんたは動きが大き過ぎて読み易すぎるよ。」

キヴィは自分に話題が振られたことを理解し、ラジウに向かつて言い放つ。言い方は、涼しげであまり興味がない、そんな感じだった。

よつするに、当たり前に書かれていた前に反付すべきだと書いているのだ。

「しかも、今攻撃しますよ。つて体全体で書ってるみたくボールを見てますしねえ。後、勢い良すぎてキヴィイさんから離れ過ぎてますし。」

さらにトドメをさすかのようなクレクの言葉に、ラジウはうなだれ机に突っ伏した。また、溜め息もつく。ラジウには戦いつとこう経験がない。それが何より自分の弱点に気付かない理由である。だからこそ、キヴィイもクレクも彼に言葉によつて伝えようとしているのだ。伝えたからといってすぐ実践ができるとは思っていないが、知っているのと知っていないのでは明らかに動きが異なつてくるものなのだ。

「……僕って、本当に弱いんだね。」

そのことが伝わっていないのだろ。ラジウはただ落胆して弱気に呟いている。

「何言ひへるんですか。弱いからいふ、強くなれるんですよ。」

クレクは、そんなラジウの背中を軽く呶いた。そして、背中を呶くと同時に、言葉でも彼の背中を押す。

「できないからいふ、できるようにになる可能性があるんです。できる人には、できるようになる可能性はありませんから。できないなら、できるまで、ことんやってみましょ~」

「駄目だったといふは直せばいいだけだからね。」

クレクとキヴィの励ましに、ラジウの顔はぱあつと明るくなつた。
そして、

「うん！ 絶対とつてやる！」

大きな声でそういった。その彼の顔は満面の笑み。それから勢いよく立ち上がり、キヴィの腕を引っ張った。

クレクはお皿を片しながらそれを見ている。まだ太陽は高く彼らを照らしていた。

空が赤くなり、夕暮れになることを、グレグは洗濯物から掃除まで一日にやる家事を一通り終らせていた。だから、様子見がてらに一人の元へとやってくる。

「ちょ！ パスだよ！」

「？」

まだ、ラジウとキヴィの姿を確認しないうちに、声とゴムボールが飛んで来た。クレクはきょとんと目を丸くし、そのゴムボールを受けてくる。

「アーネスト・カーティス」

甲高い大きな不満声が頭に直撃し、クレクは思わず耳を塞いだ。声の方にチラリと視線を向けると、砂や汗まみれで汚れに汚れたラジウとキヴィが倒れている。

キヴィは仰向けに荒くなつた息を吐きながらクレクを見、ラジウにいたつては腹這いになりながらもクレクが持つているボールに手を伸ばして悔しそうに顔を歪めていた。明らかに彼はボールしか目に

入っていない。

「はあ、やつと来たかい。あたしゃ、疲れたよ。保護者も来たことだし、もう勘弁してくれよ。」

キヴィはゆっくじと立ち上がりて服を叩いた。確かに顔には、疲労の色がありありと見てとれる。ラジウはそんな彼女に首を大きく横に振つて抗議した。

しかし、キヴィは歩き出す。

「やだやだー後ちょっとなんだー！」

ラジウは慌てて立ち上がり、立ち去りうとする彼女の腕を引っ付かんだ。

キヴィも負けじとフーンスまでラジウを引きずる。

「明日元気でおくれ！」

「こーちーだーつー！」

クレクは、キャンキャンと喧嘩をする二人の近くに歩み寄った。

「ラジウ様、キヴィさんは疲れていますし、もう口も沈みかけていますから、明日元気ましょ？」

「やだやだー！ねーあと一回ー一回でいいからー！」

クレクのあやうつな優しい言葉にも、やつと動きだした体を冷ましたくないのか、ラジウはしきりに首を横に振つた。まだキヴィの腕をしつかりと掴んでくる。

「しょうがないねえ。じゃあ、あと一回だけだよ?ただし、制限時間は五分だからね。」

キヴィは溜め息混じりの言葉と笑みをラジウに向かた。OKー!と言つてラジウは彼女に笑い返す。

キヴィそれを確認してからクレクに、首から下げていた金色の懐中時計を投げてよこした。

「あんた、計つといてくれ。」

クレクは懐中時計を受けとると、逆にボールをキヴィに投げた。顔はこつこつと笑み、彼女に対しても頷いた。

「よーしー絶対取るよー。」

「ふん、あんたなんかに取らせなによー。」

いちにつくと、元気よくラジウが声をあげる。さらば、キヴィもそれに対するよつと声をあげた。

第一章～三通りの道しるべ(8)～

「それでは、よーい……スタート！」

クレクの掛け声とともに、ラジウが地面を蹴った。キヴィもゆっくりとだが右へ移動する。ラジウがキヴィの一歩手前でブレーキをかけた。

「おつ……。」

キヴィもその変化に気付き、後ろへと一步退く。それを追うかのように、ラジウは状態を低くし、足をぐんと曲げる。また、彼の目はキヴィの右手に持たれているボールに注がれてはいなかつた。視線はキヴィの腹。ようは目の前を凝視しているのだ。

ラジウの足が伸びる。

「ちつー！」

このまま突っ込まれては避けきれないと理解したキヴィは、仕方なく左手を内に曲げた。そして、その手を払うようにラジウに向けて繰り出した。

ラジウは地を蹴ったと同時に前のめり、地面に両の手をつく。それによつて、彼のスピードは失速した。次に、足を手の近くに着地させる。はたから見ると、かえるのような格好だ。

いきなり低くなつたラジウのせいだ、キヴィの左腕は宙を切つた。彼女の腕が自分の頭上を通りすぎると、ラジウは勢いよく手足のバネを伸ばして、キヴィの右手目がけて飛びかかつた。

「しまつた！」

避ける前に、キヴィにラジウの体重がのしかかる。だから右手を軸に、キヴィは後ろに倒れこんだ。

ラジウは彼女と違つて、軽々と地面に着地し、両手を高々とあげバンザイをしている。

その手にはゴムボールがしっかりと握られていた。

「やった!!」

「あーあ、やられちまつたねえ。…………やべやつたよ。」

苦笑いをしながら立ち上がったキヴィが、ラジウの頭を軽く叩いて褒める。

「へへ。だつて、キヴィが攻撃する時は読みやすいし、した後は隙があるつて言つてたからね。やってみよつと思つてさ。」

照れて頭を搔くラジウ。顔は嬉しそうで、ほんのり赤い。

「ね、クレク！ 時間は？」

ラジウはクレクに駆け寄つて、フェンス越しに聞いた。クレクを見上げるその目は、とても強く輝いている。

「約一分ですよ。素晴らしい戯いぶりでしたね。ラジウ様。」

クレクはラジウの頭を優しく撫せて微笑んだ。

そこにキヴィも駆け寄ってきたかと思うと、ラジウよりも先にフェンスを飛びこえた。それからクレクと向かい合つて苦笑う。

「悪いんだけど、今日はここに泊まつてもいいかい？今から帰ると、家につく頃には真夜中になっちゃうよ。」

「ええ、どこでも空いてるので好きに使って下さい。お風呂は右の方に、夕飯は食堂が左の方にありますので、お気軽に使ってください。」

「わかったよ。ありがとう。」

クレクは微笑みをキヴィに向けた。そこにフェンスを登りながら、ラジウが割り込んだ。

「キヴィー！ いつそのこと、ずっとここに住んでよー。」

「考えとくよ。」

背中を一人に向け、キヴィは片手をあげた。そして去っていく。ラジウに満面の笑みが溢れているのを見て、クレクはまたラジウの頭をそつと撫でた。また、キヴィが去つていった方向に、深く頭を下げたのだった。

太陽が高く登り、もつとも暑くなる時間帯に、ラジウは目を覚ました。久しぶりにぐっすりと寝れたことに、大きな欠伸をしてから嬉しそうに笑む。

ベットから降りて着替えると、勢いよく扉を押し開け、廊下に飛び出した。

「クレク！ キヴィ！」

一人の名を呼び、キヨロキヨロと辺りを見回す姿は、とても元氣で子供っぽい。

「アーティスト」

ラジウの声に返答が返つてくる。声のする方を見やると、フェンスの外。ようは庭で、クレクとキヴィが白いテーブルを囲んでいた。テーブルの上にはカツプとクッキーの入つたお皿がのつていて。どうやら一人でお茶をしていたようだ。

ラジウは一人に駆け寄つた。

「おせよ! ハー・クレク、キヴィイ。」

『ねはより、ヤコモす。ラジウ様。』

ラジウの挨拶に、二人はハモつて挨拶を返した。
ラジウは驚いて、きょとんとしながらキヴィイを見る。

「どうかしました？ ラジウ様。」

「…………キヴィ…………だよな?」

「当たり前じゃないですか。何言つてるんです?」

なおも昨日とはまつたく違つた笑顔と口調のキヴィに、ラジウは目

を大きく見開いたかと思つと、

「……こんなのキヴィイじゃない！！」

わっと駆け出し、近くの開いている扉に隠れてしまった。そして、扉からそつと一人の様子をうかがつてゐる。はつきり言えばアホ丸出しである。

しかし、それを見てクレクはなぜか楽しそうに微笑んだ。

「なめてんじゃないつづーの。ここのくせガキ。」

ガラツと口調と声色を変えて、キヴィイは毒付いた。さつきまでの和やかな雰囲気はどこへやら、大雑把なきっぱりとした雰囲気をかもしだしている彼女。

しかし、その雰囲気にラジウは嬉しそうに反応した。

「あ、キヴィイだ。」

彼女の雰囲気に安心し、ラジウは扉からそそくさと出てきた。そして、キヴィイ達の元に駆け寄つた。

キヴィイはそんなラジウを見て溜め息をつき、背もたれにどっかりと寄りかかる。

「あんたねえ、人がせつかく大人とする関わり方でやつたげたのに
……まったく、子供だねえ。」

キヴィイの顔は緩く笑つていた。

彼女の言葉に、へへつとラジウは笑い、子供だよ。と認める。それから彼は、クレクの隣に座り、出されたパンを頬張つた。

キヴィイは少し真剣な瞳に戻つたかと思うと机に肘をつき、前のめり

になつてラジウの瞳を見つめた。

「ラジウ、戦う勇氣はあるかい？」

「はるー。」

彼女の問いにラジウは大きな声で即答した。しかし、口の中にはパンがつめこまれていたため、『ある』と言つたはずが、濁つた音になつてしまつたようだ。

「そうかい。それじゃあ、さっそく作戦立てて、今日のひけに挑みに行くかねえ。」

爽やかな昼時、ラジウはパンを片手にキヴィの話を聞き、クレクはそれに助言する。その内容は、どのようにして敵を陥れて勝つか。である。

見た目だけは和やかな昼時の食卓であった。

第一章～三通りの道しるべ（9）～

「シルキア、見てみろよーほら、サークルステント！」

「バカか。」

やけに元気よくはしゃぐ赤髪の男に、薄汚れた金髪の男シルキアは、細い目を彼に向けることなくすぐさま言つた。

場所は、城の裏手の近くにある開けた草原。草原と言つても、大きな岩がいくつも出ており、木も大きな木から小さな木までとにかくどころに聳え立つてゐる。

そこよりもっと離れた、平たい何もない場所に、大きなテントが張つてあるのが見える。それを差しながら、アレンは楽しそうに田を輝かしている。

「ひつでえ。また昔みたくサークルステントが張つたのによ。」

「貴様だけでやつてゐ。」

しかし、さらなる連れない突つ込みに、赤髪の男はショックを隠すことができず口を開ける。

「相変わらずだねえ。」

女にしては少し低めの声が、シルキアの見ている方から聞こえた。シルキアは声の主を見て、眉を潜める。

「……かえ」

「キヴィ———っー！」

赤髪の男が、目の前に現れた女の名を呼んだ。もちろんシルキアの言葉を遮つて。

そこに立っていたのは、青緑の髪を持ち、キリッとした強気な瞳を持つキヴィ。彼女は白衣を着たままの姿でそこに立っていた。

「アレン、久しぶりだねえ。元気だつたかい？」

近寄ってきた赤髪の男アレンに、キヴィはカラカラと笑いながら聞いた。

アレンは懐かしむような柔らかい笑みから、一カツと子供のような笑みになる。

「元気、元気！ なあ、キヴィ。シルキアつたらひどいんだぜ？」

アレンはシルキアをビシッと指差し、キヴィに訴える。それがとてもおかしいらしく、キヴィは笑いながら、いつものことじやないかと呴いた。シルキアは黙つてその様子を見ると、深いため息をつく。

「あら？ アレン。その髪飾り可愛いね。」

キヴィはアレンの赤い髪に栄える、金色のピンどめに目を奪われた。といつよりは社交辞令である。

「だる、だる！ シルキアつてば、気持悪いっつーんだぜ？」

「気持悪いに決まっているだろ？ 女ものをつけるな、アホ。」

「そつかねえ。かわいけりや良いと思つけど。シルキアもつけたらどうだい？」

既に三人の会話は、世間並になつてゐる。また、シルキアの言葉にショックを受けたアレンは、キヴィに抱きつき抗議する。その様子をポカンと口を開けて、ラジウとクレクは見ていた。ラジウにいたつては内心、大人つてこんなもんなんだ。という衝撃を受けていたりもするが。

「あつ。」

ラジウはアレンと目が合つた。ラジウはキヴィの後ろにいたため、彼女に抱きついて後ろを見たアレンとちょうど視線がぶつかったのである。しばし固まつてしまつラジウ。

「……いたんだ。ちつさくてわかんなかったわ。」

アレンは口だけで笑んだ。それにラジウがムカつとしたのは言つまでもない。アレンの言葉に思いつきり眉を潜めている。そして、大口を開けた。

「いたよーつか、キヴィ。こんな人とも知り合いだつたのー？」

こんな人とは、明らかにアレンを指している。ラジウはキッとアレンを睨み上げた。怒つている彼をふんっと鼻で笑い、アレンはキヴィから離れる。鼻で笑われたことに、ラジウはさらに額に皺寄せた。

「ああ、アレンとも知り合いだよ。だつて、私たち三人は、おせ」

「心の友だ。」

キヴィが振り向いてラジウに答えた。が、しかし、アレンがキヴィの語尾を搔き消してしまった。また、彼の発言に全員が口を開け、目を真ん丸にし、「まつ？」と声を出しあつた。

「いや、だから。心の友。」

「恥ずかしい」と一度も言ひつな——つ……

「そんな嘘くさいものでまとめるな。」

アレンが再びその言葉を発した時、一いつの論点がずれまくっている突つ込みと同時に、ドスつやら、バシつなどの激しい音がした。それは、もちろんキヴィとシルキアが、突つ込みと共にアレンをどついたからである。キヴィはハリセンで後頭部を、シルキアは背中を足蹴にしていた。

「じつたーつ！？」「冗談なんだから本気で突つ込むなよ！」

アレンは後頭部を押さえながら一人に対してわめく。

「冗談でも言つんじゃないよー鳥肌がたつちまうだろ。まつたく……。」

キヴィはわざと体を身震いさせながら頭を搔いた。それに対してもアレンは詫びれた様子もなくおかしそうに笑んでいる。

「こつらとは、たんなるクサレ縁ゆ。小さこ頃、よく一緒に遊んでね。用は幼馴染みさ。」

三人の漫才に、またもやポカンと口を開けているラジウとクレクに、キヴィは苦笑いを浮かべながら説明した。

説明を聞いて、ラジウは思った。この三人でどんな風に遊んでいたのか。と。

「どうでもいいが、何しに来た？」

シルキアが、ナチュラルにアレンを無視してラジウ達に問いかけた。その顔はこの間同様、額に眉を寄せており、ラジウはつい一步後いてしまう。しかし、クレクが退いたラジウの背中を軽く押すと、彼は顔を引き締めてシルキアを見上げたのだった。シルキアもラジウを無言で見返す。

しばらく黙つてしまつたラジウだが、意を決して口を開いた。

「た、戦いに来た！」

「帰れ。」

上擦つた声でやつと絞りだした言葉は、即答で却下された。案の定ピシッと石のように固まるラジウ。そんな彼を氣にもとめず、シルキアはせつせと背中を向けた。

「負けるのが恐いのかい？」

歩き去るひとする背中に、キヴィは腕を組んで挑発的な言葉を投げつけた。

「……ふん。負けるわけないだろ。」

振り向く気配さえも見せずに鼻で笑われた。キヴィがむつとしないわけがない。そんな一人をクレクが冷や汗を流しながら見守つていた。

「そんなん、やつてみなけりや わからないだろ！？だいたい敵に背中みせる奴があるかい！逃げるんじゃないよー！」

キャンキャンと吠えるキヴィに、シルキアはため息をつく。アレンはその様子を見、苦笑いをして肩をすくめた。彼の雰囲気はまさにやれやれと呆れている感じだ。

「……条件は？」

シルキアは振り返つてただ一言聞いた。しかし、それだけでキヴィは満足そうに微笑んでいる。彼女は彼がもう引き下がらないことを知っているのだ。

キヴィは踵を返してクレクとラジウのもとに戻る。

「3対3の勝ち抜き戦。それ以外のルールはその都度、変更する。変えてもいいのは負けた方。ようするに新たに戦う奴が決めるってことさ。もちろん、最後に勝ち残った方が勝ちだよ。さらに負けた方が勝つ方に従つてーのはどうだい？私達が勝つたら、あんた達全員ラジウに仕える。つてことや。」

「……こいつが勝つたら貴様ら全員、元居た場所に戻れ。」

不敵な笑みを浮かべるキヴィと、それを鬱陶しそうにみつめるシルキア。何故か、その二人の間で火花が散つている。本当のところ、大将はラジウなのだが。

第一章～三通りの道じるべ（10）～

「OK。それじゃあ始めようか。」うちの一番手はクレクだよ。そつちは？」

「できとう。」

なんですよー！？といつ内心突っ込みを、シルキア以外の全員がしてしまった。その証拠に、全員の顔に陰が入っている。

「ちよ、シルキアー？」

アレンが、慌ててシルキアを凝視する。シルキアは、額から一筋の汗を流しながら眉を潜めるアレンに視線を返すだけだった。

「……もしかして、シルキアって誰とも話してない？」

さらに汗を流しながらアレンは問う。

「……ああ、話す前に貴様が全部話すだろ？」

真顔で返答され、アレンは開いた口が塞がらなかつた。そして、同時に理解した。彼が仲間の中で誰が強いのか知らないのだと。また、目が少し閉じかけているのを見て、選ぶのが面倒くさいのだということも悟つた。

「わかつた……オレがなんとかするよ。」

アレンが溜め息混じりに両手を挙げてそつまつと、シルキアは彼か

ら視線を外した。それから近くの岩へと腰を降ろす。

アレンはしばらく顎に手を当て考え込むしぐさをする。しかし、すぐさま顔を上げてにっこり笑う。何かを思いついたようだ。

「ハネッタ！」

そして、何かを呼んだ。すると、近くでドンガラガツシャン…とう物が壊れる音がした。続いてドタドタとこう慌てた足音がこちらに向かってくる。

ラジウ達は慎重に目を凝らしてこちらに走ってくる人影を見た。

「な、なんっすか？」

走ってきたのは、大きな瞳に抜けている顔立ちをした少年とも青年ともつかない男だった。手にはオタマとナベを持ち、黄色のシンプルなエプロンを着用している。顔や服はリードや他の食べ物で汚れていた。

へらつとした表情をアレンに向ける彼。少し恥ずかしそうに頭を搔いているのは、さつき作っていた料理を引っくり返してしまったからだろう。

「あのなあ……まあ、いいや。ハネッタ、お前にチャンスをやるよ。

」

「本当っすか！？」

アレンは溜め息をついて頭を落としたが、すぐに気を取り直して顔を上げた。そして、ハネッタと呼んだ男に視線を投げる。

アレンの言葉にハネッタは彼を見返し目を輝かした。また、口からは驚きと喜び、警戒が混じった返答が飛び出す。

「ああ。今から戦う相手に勝てたら解放してやるよ。つてことで、こっちの一番手は」いつ。ハネッタだ。」

嬉しそうに頷くハネッタを、アレンはクレクの方に押し出した。双方が睨みあう。

ラジウはこの対決を密かに主婦（夫）決定戦。と名付けた。心の中で。

「ルールは、どちらかが参った。もしくは死ぬか。のデスマッチでよろしいですか？では、武器の使用も有りでいいでしょうか？」

クレクは微笑むと、ハネッタに優しい口調で問つた。ハネッタは、うんうん。と頷きながらもクレクをじっと凝視している。どうやら様子を伺っているらしい。

「それでは、キヴィさん。かけ声をよろしくお願ひします。」

クレクの言葉に反応するかのように、ハネッタは目を閉じた。ナベとオタマはまだしっかりと握っている。

「OK。それじゃあ、よーい……スタート……」

キヴィが始まりを告げた。同時に空が曇る。クレクは眉を潜める。目の前の光景がみるみるうちに変わっていくのだ。彼は自分の武器に手をかけず、それをじっと見つめていた。

ハネッタの腕が、茶色い羽根に覆われていく。足は既に鷹のような鋭い爪が姿を現し、腕同様茶色い羽根に埋め尽されていた。

「……魔鳥ですか。」

クレクは田を細めて確認する。その間にもハネッタの体は変化していた。肩まであつた赤茶の髪が炎のように舞い上がり、田は模様が浮きだち大きな目が鋭くつり目になっていく。

クレクは背中の『』を手にとり、矢を『』に収めた。しかし、まだその武器は降ろしたまま。

ハネッタは地面を蹴つて空に舞い上がった。高い空上からクレクを見下ろす。

「キーッ キッ キー 追い付けないだろ！？」

さつきとさつきと変わった甲高い声は頭にキーンとこだまする。クレクの頭上を円を描いて飛び回るハネッタ。その飛ぶ速度はドンドン増すばかり。

クレクは無言のまま『』を空に向けて構えた。そして、ゆっくりと『』を引く。

そして、ためらひなく放つた。

「そんなん当たらないよーそれー！」

「ーー？」

ハネッタが掛け声をかけると、彼に向かってきた矢は光とともに灰となつた。天井から光と熱が放たれたのだ。そう、雷である。それに、クレクは眉を顰めたが、もう一度『』を構えなおす。冷静にハネッタの行動を見て、機会をつかがつているのだ。

「じゃ、今度はこっちからー！」

ハネッタは思いっきり羽で空を仰いだ。すると、羽から何枚もの羽

根がクレクに風を切りながら襲いかつてくる。しかし、クレクは微動だにせずにハネッタを凝視していた。

羽根がクレクの頬を、腕を、足をすり切る。さらに羽根は、クレクの顔を自分の攻撃範囲内に捕らえた。それを確信したハネッタの顔が緩む。

「つーーー？」

次の瞬間、ハネッタは田を白黒させながら落下していた。ハネッタの翼の根、肩に矢が刺さっていたのだ。これでは羽を動かして飛ぶことはできない。

クレクは彼の注意が散った瞬間に弓を放ち、弓の棒の部分で自分に襲いかかって来た羽根を叩き落していた。

「弓は本来、遠くのものを仕留めるために作られたもの。鳥などの空を飛ぶものも例外ではありません。貴方では、この武器に勝つことはできませんよ。負けを認めてくださいますか？」

地面に落ち、矢が刺さった部分を庇うようにして蹲っているハネッタに近寄って、クレクは笑みもこぼさずに丁寧な口調で聞いた。それは、ひどく冷たさを感じさせた。

ハネッタは目を見開きクレクを凝視する。その体は徐々に初めの姿へと戻つていっていた。そして、足を地面で押し、彼はクレクから離れるように後ずさつた。

「……ま、まいった。」

元に戻ると、ハネッタはやつとそれだけ口にした。声も体も震えている。クレクはそんなハネッタからまだ視線を外さない。そして言葉を紡いだのである。

「……貴方は、魔族ですよね？」

突き刺すような冷たい瞳がハネッタに注がれる。クレクは嫌悪感を明らかに露わにしていた。口調が、視線が、空気が、いつもに比べて明らかに異質で、相手、いや他の者にも恐怖心を煽っていた。ハネッタはそんな彼に怯えながらしきりに頷く。

「魔族の貴方が、何故そんなにも早く戦いを諦めるのですか？人間に負けを認めるのですか？何故、人の元につくのですか？」

クレクはハネッタに問いをぶつける。落ち着いていたクレクの口調はだんだんと荒げてきて、ハネッタに圧力をかけていた。また、緊張した雰囲気が辺りを包む。それもそのはず、この世界では今。魔族や魔物が世界を支配している。そんな彼らが人間に負けを認めるなど、ましてや人間に従うなどあるはずがないのだ。

「ハネッタ！ 戻れ！！」

アレンが蛇に睨まれた蛙のごとく固まっているハネッタに呼びかけた。しかし、二人とも動こうとしない。

「……ちつ。そいつは、オレに負けたんだよ！だからオレに従つてるだけだってば！もう、終わりだろ！？次は、オレが相手だ！！」

「従つてる！？負けただけですか！！？」

アレンが大声でクレクにくつてかかつたが、クレクはもっと大きな声で叫んだ。信じられないと言つた感じで。

クレクの目はまだなおハネッタに注がれている。また、いきり立つ

たまま言葉を続けるのであった。

「魔族というのはプライドが高いんです。負けたら、寝首を搔いてでもその相手を殺します。そういう奴らなんですっ！」

「……あんた、いったい誰のこと言つてんだ？ハネッタはそんな奴じゃない。」

クレクの言葉に、アレンは眉を顰めて首を横に振った。

アレンは尋常でないクレクの反応が気にかかつた。彼の台詞はハネッタに向けられたものではないと感じたから。だからだろ？アレンがクレクを見る目には多少の哀れみが覗いていた。

「こいつは元から気が弱いんだ。戦うより、家事が好きって奴だよ。その証拠に、あんたに怯えてんじゃねえか。」

アレンはハネッタに近づき、腕を掴むと立ち上がらせた。ゆっくりと、相手に聞き取りやすいように言葉をつむいでいく。そうすると、自分で、自分も相手も落ち着けさせようとしているのだ。

「人間にだつて、魔族にだつて色んな奴がいるさ。あんたがどんな奴らを見てきたか予想は付くけどな。魔族だつて、人間に怯えるんだぜ？」

アレンの言葉に、クレクは目を見開いてから段々と血の気が引いていき下を向く。頭に上った血が下がつて冷静になり今の状況が掴めたクレクは、後味が悪そうに何かを噛み殺すような苦い表情をしていた。

それを見たラジウは顔をしかめて駆け寄つていき、心配そうにクレクのすそを掴んだ。

「……モフ……ですね。すいませんでした。」

苦笑いをラジウに向け、クレクは彼の頭を撫でた。また、アレンとハネッタに向かつて謝罪の言葉を述べる。

クレクの口調はだんだんといつもの柔らかい口調へと戻つていった。「魔族を久しぶりに見たもので……警戒心が強くなつたというか、頭に血が上つてしまつたみたいで。すいませんでした。」

「そ、まあ、わからんでもないし。良いよ、モフ。」

アレンは軽い口調でそう言い、ハネッタを石の上に座らせた。そして、まるで氣にしていなかのようにニヒト笑い、クレクに視線を投げる。

「じゃ、もう頭は冷えたみたい?」

「ええ、今はもう冷めます。冷静ですよ。……次の戦いをお願いしてもよろしいですか?」

やつとクレクは微笑を浮かべた。アレンはOKとウインクしてみせると、クレクの正面に移動した。

二人が次の戦闘相手だと、互いに認め合つたのだ。双方の視線が絡み合い、騎士が立ち上っている。

第一章～三通りの道じるべ（1-1）～

「ルールはさつさと同じでここや。めんざくさこいし。」

「わかりました。それではお願ひします。」

アレンとクレクは同時に頭を下げ、身構えた。キヴィイの手をパン！
となした音が合図となる。

アレンが地を蹴り、一瞬にしてクレクとの間合いを詰める。クレク
が「」を構える暇を取ることもないくらいに速く。ガキンという音
がした。

「その服、動きづらくなありませんか？」

矢の鉄の部分でクレクはアレンの拳を止めていた。いや、アレンも
クレクが矢を出したことに気づいたらしく、正確にはアレンが腕に
つけていた金属とクレクの矢がぶつかって音を出していた。

アレンの服は少し変わっていた。上は肩だし腹だしの短く紅いチヨ
ッキを、同じような薄い白いシャツの上に着、下は腰辺りに巻いた
千切れ白布が風で中を舞っている。その布の下に黒いスパッツを穿
いていた。ここまで普通だが、アレンは腕と足に金属を巻きつけ
ているのだ。下に白い布を敷き、金属は腕輪のように丸いので丁度
布を止めているような感じだ。足の下の方では白い布を包帯のよう
に巻き、足の裏の形にくり抜いた板を押さえている。

「ん？ああ、この金属？べつに～。」

アレンはにやりと笑んでクレクから飛びのいた。それと同時にクレ
クは「」を構えなおし、アレンに向かって矢を放つ。

「遠くのもの狙う道具つづーことは、接近戦に持ち込めばいいってことだろ!?」

アレンは地面を蹴つて放たれた矢に自ら突き進んでいく。ぶつかるすれすれで彼を身をかがめた。矢はアレンの頭上掠めていく。クレクはもう一度矢を放とうと、背中の矢に手を伸ばす。しかし、それはアレンにとつて遅い行動だった。アレンはさらに速さを増し、既にクレクの目の前に赤い目がちらついていた。

ガツッといつ何かが刺さる音が辺りに響き渡る。

「ぐつ……。」

クレクはぐぐもつた声をあげ、苦々しげにアレンを睨みつけていた。

アレンは、愉しそうにほくそ笑む。

状況はどうやらから血が流れているわけでも、アレンの右手がクレクの首を捕まえているわけでもない。アレンの手は肘から地面に向けられ、クレクの首に平行であった。ただし、アレンの腕についていた金属が変化しクレクの首を閉じ込めていた。腕に巻きついていた金属はいつの間にか二つに割れ、反対側に反り返り木の幹に突き刺さっているのだ。

「おつと、動くとの首。切り落とされざ?..」

金属がキラリと光る。よくよく見ると、二つに割れてたうちの片方が刃のように鋭くなっていた。

「……それが武器でしたか。」

まったく警戒をしていなかつた自分をクレクは悔やんだ。甘く見た

その一瞬で戦いとは勝負がつくのだ。そう思つても苦に思いは込み上げてくる。クレクは眉を潜めて息を静かに吐いたのだった。

「そっ。早くギブアップしてくんない?じゃないと、首切り落とすよ?」

「……。」

余裕綽々に笑むアレンを、クレクは黙つたまま睨んだ。それが気に食わなかつたのか。

「……オレ。男には容赦しないから?」

アレンの目が細くなり、冷たくクレクを見下した。ゆっくりとだが彼の腕が動き出し、刃の冷たさがクレクの首に伝わる。額から一筋の汗が流れ落ちる。それでも、クレクは黙つたままアレンを睨み続けている。アレンが動かす手を止める様子はない。

「クレク!」

緊張が走つたその時、ラジウが叫んだ。クレクやアレン、その場にいた全員がラジウに目を向ける。ラジウはクレクをじっと見つめている。クレクは落ち着かない様子でその視線を受けていた。ラジウはクレクが自分を確認したと判ると、口を開いた。

「クレク。まいった。って……言つてー」

「……。」

必死に訴えるラジウの言葉にも、クレクは答えようとしない。二人

の視線が交錯する。ラジウは、息を大きく吸い込んで吐いた。

「これは……”命令”だ。クレク！」

命令といつ言葉にクレクはびくっと身を固ませた。彼はラジウの顔をマジマジと見る。今にも泣き出しそうに目は潤み、口をへの字に曲げているラジウ。この言葉を使いたくなかったであろう造作もなく読み取れる。

「……わかりました。ラジウ様。」

クレクはラジウに返事を返した。ラジウは、ほつと胸を撫で下ろしたが、いささか気分は優れない。それは、クレクが自分の”命令”という言葉に逆らえないのを、知つてしまつたからだろう。

「まいりました。アレンさん。」

クレクは、アレンに視線を戻すと、静かに負けを宣言したのである。アレンはきょとんと目を見開き、クレクを見た。しばらくして状況を把握したらしく、金属を木から引き抜きクレクを解放したのだった。

「クレク、ケガは？」

ラジウがクレクに駆け寄つてくる。クレクは、微笑んで首を横に振つた。首から少しの赤い血が滴り落ちているが、傷は浅いよつだ。アレンは、二人のやり取りを眺めながら肩をすくめる。よくわからぬ。と言つたようだ。

「クレク。お疲れ様。さ、次はあたしの番だよ！」

クレクに労いの言葉をかけ、キヴィイはアレンに近づいていった。胸を張り、目を輝かせ、実に楽しみだとそういうような彼女。彼女にかわり、ラジウはクレクを連れてその場からさつさと離れた。

「キヴィイ？キヴィイもやんの？」

アレンは手を点にしている。キヴィイが戦いに参加することが予想外だったのだろう。

「あつたり前だろ！？あたしが持ちかけたんだ、最後まで責任持つよー！」

ふんぞり返つてきつぱりと言い放つのがなんともキヴィイらしくて、アレンは笑みを溢した。ただ、どうしようという気持ちもあるのか、頬がいささか引きつっている。なんと言つてもキヴィイが女であり、もともと仲が良かつた人物なのだから、戸惑うのは仕方がない。しかし、仲がよく知っている人物だからこそ、キヴィイが絶対に引かない性格だということも知っていた。きつと何を言つても彼女は無理矢理自分と戦うだろう。そうアレンは思つて、しぶしぶキヴィイとの戦いを受け入れることにした。

「そつ、じゃあルール決めてよ。キヴィイ。」

「OK。」

アレンの返答に満足そうに笑むキヴィイ。そんな彼女にアレンは苦笑い、後ろのシルキアは眉を顰めていたりする。

「ルールは。まず、武器の使用不可。アレン。あなたのその腕と足についてるやつ、外してもらつよ？」

「いやん。オレの素肌がそんなみたいの？」

「んなわけ、あるかーつー！」

冗談交じりに笑いながらアレン。もひひた、あぐをまキヴィのハリセンが彼の頭を打つ。

「元から露出は高いがな。」

「別に、肌を見たいわけじゃないつーのー。こいつから、やつをとお脱ぎー！」

シルキアのボケに、つい怒鳴りつけるキヴィ。そして、アレンを急かすように手をパタパタと振る。

「はーいはーい。」

アレンは舌を出して、笑いながら素早く金属を外した。キヴィはそれを確認すると真剣な顔つきに戻り、白衣の胸ポケットから小さな青いビー玉を取り出す。

「あたしが持つ、この小さなビー玉を使つ。これを、アレン。一時間以内にあたしから奪つてみせな！そしたらあなたの勝ち。一時間守り続けたらあたしの勝ち。どうだい？」

キヴィは、ビー玉を指で挟んでアレンに見せ付けた。それは、ラジウに使つたボールとは比べ物にならないくらい小さく、細いキヴィ

の指と同じくじらうだつた。

アレンはそのままビーポー玉を手を細めて確認するかのようにじしまりく見入つてゐる。

「ふーん……攻撃有り?」

「ああ、もちろんだよ。」

問い合わせるアレンに、キヴィはにっこり笑つて頷く。自信満々な彼女の態度がアレンの目に映る。アレンは彼女とビーポー玉を見比べながら、少し考えて口を開く。

「……じゃあ、30分でいいよ。」

キヴィはアレンの言葉に頬を引きつらせた。自信満々の自分に、時間の短縮を求めているのだから、バカにされていると感じたのだ。

「へえ……ずいぶん自信満々だね?」

「もう一…その時間で十分だからさ。」

「いい度胸だね!絶対後悔させてしまうよーー。」

「チクリ笑むアレンに、キヴィは肩を怒らせながら怒鳴りつけた。そして、キッと睨みつける。かなり怒っている。キヴィはこのゲームで負けたことが今まで一度もなかつた。だから、甘く見られたことにプライドを傷つけられたのだ。

予想以上に憤怒するキヴィに、アレンは焦つたように一步身を引く。

第一章～三通りの道しるべ（1-2）～

「そ、それじゃあ。行くよー!」

キヴィの掛け声にクレクが時計を見て時間を計り始めた。

アレンはじつとキヴィを見る。キヴィも彼を見返した。しばらくその場の時が止まった。アレンがため息をついてからにやつと笑む。

「キヴィ、オレを甘く見るなよー?」

アレンが動いた。声を出すと共に地面を蹴ったのだ。

「なつ！？」「

キヴィが驚嘆の声をあげる。クレクと戦った時よりも、アレンのスピードが速かったのだ。すぐさまアレンはキヴィの目の前に現れる。キヴィは田を見開いたままアレンを凝視して身動きがとれないでいる。

「もう、終わりつかな？」

アレンはそつとビー玉に手を伸ばす。キヴィは、はっと我に返ると慌てて身を引いた。額には冷や汗がにじみ出ている。アレンは、そんな彼女を薄笑いを浮かべながら見れていた。

「ひ……どひしてー?」

ビー玉をぎゅっと握り締め、胸にその手を押し付けたキヴィは、アレンから田を離せないでいる。その顔は驚きの色を隠せていない。

「アレンがただの武器だと思った？」

「くわい……重いの役目も担つてつたつてーのかいー?」

予想以上の速さに、いかとかキヴィは頭の中が混乱していた。しかし、少し考えればわかる」とだった。武器を捨てることで素早さが増したならば、それは武器が早さを抑えるための重りであつたといふこと。完璧にキヴィの計画はこの予想外のことに打ち砕かれたのだ。

一時間と言つたのは、クレクとアレンの戦いを見た上での計算でしかない。それが狂わされたことで、初めてキヴィは30分も危ういのではないか。と危険を感じていた。

「やつ、軽いのもあるけど。普段は重いのつけてんの。」

アレンはケラケラと子供のよつて笑い、それから皿を細めてキヴィを見た。

「諦める?」

「ばつ……ふん。バカ言つんじやないよ!たかだかほんのすこーし速くなつたからって、調子にのつて!やのぐらこじや、このキヴィ様には勝てやしないよ!」

アレンに罵倒し、キヴィは意を決したように口をあわすと結んだ。そして、力強くアレンを睨みつけた。じつや、やつと驚きと動揺を抑えられたようだ。

「やうこなくつちやー!」

アレンは楽しそうに笑むと、再びキヴィに突進していった。

軽い攻防がしばらく続いた。

アレンは軽い動きで幾度となくキヴィに襲い掛かる。しかし、流石このゲームのベテランであるキヴィに攻めあぐねていた。残り10分。

キヴィは薄手の服になつていて、汗が地面に滴り落ちる。顔には疲労の色がありありと浮かび、動きもだいぶトロくなっていた。対して、アレンはさつきよりも動きの速さが増していた。顔には余裕の笑みが溢れでている。キヴィはまたアレンの攻撃をすれすれで避けた。しかし、キヴィはよろめいてしまつ。

「キヴィ！」

ラジウが焦ったようにキヴィを呼ぶ。その声に、彼女は立ち上がりアレンを見据えた。アレンは動くのを止め、キヴィを見つめ返した。その目は決して先程のクレクに対する獲物を狙う目ではなく、どこか優しさが残つていた。

「……キヴィ、そろそろ諦めたら？」

「……イヤだね。」

吐く息が荒く、キヴィは言葉を詰まらせながら苦しそうにアレンに返答した。アレンは一旦眉を潛めたがすぐに眉を上に軽く上げ、口の端も上げた。

「ふーん。じゃ、もうひままでだけねっ！」

アレンは今までよりも、もっと速い速度でキヴィに襲い掛かった。

「ぐつ……」

キヴィは、体が動かないのか避けない。そのせいで地面に倒された。アレンがキヴィの首を掴み、彼女を地面に押し付けている。だから、キヴィは起きることができなかつた。必死にアレンの手にビー玉を持ったない手の爪を食い込ませるキヴィ。しかし、アレンはそれにピクリとも反応を示さない。キヴィは力の差を感じ、更に額から汗が吹き出る。

「時間もないしね。ジ・エンド。だぜ？」

アレンが、もう片方の手をキヴィの片手に握られたビー玉に手を伸ばす。キヴィは、爪を食い込ますのを止め息を吸つた。諦めたのかとアレンはほつとする。

「わああああああーー！」

キヴィがいきなり大声を上げた。アレンはそれに驚き行動を止めてしまう。それを見たキヴィは、すかさず彼の腹を思いつき蹴つた。男にしては軽いアレンの体は大きく飛んだ。いきなりのことにつ、アレンは目を白黒させながらもキヴィから離れたところに着地する。

「ぐつ……。」

腹を押さえながら、キヴィを凝視する。彼女は既に立ち上がりついた。

「アレン。なんであたしがこんな小さなビー玉を選んだかわかるか

い？」

キヴィは疲労が見え隠れする顔で、少しだけ笑んだ。アレンは眉を顰めて訝しげにキヴィに視線を送る。キヴィはゆっくりとビー玉を口元に近づけた。

「ちょっ！？」

アレンが腕を伸ばすが、キヴィはそのままビー玉を口に含み、じくじくと喉を鳴らしてそれを飲み込んだ。それを見ていたアレンは口を金魚みたくパクパクとしている。

「ふう。ビー玉は呑みやすくていいねえ。」

にやりと笑むキヴィ。アレンは手を細めてキヴィを睨んだ。冷たい視線にキヴィは鳥肌が立ち、一歩後ずさつた。

「最初に言ったよな？ 攻撃有りつて。よつは、吐かせればいいわけだ。」

アレンはキヴィの腹に狙いを定めると、地面を蹴った。キヴィには、それを避ける体力すらもう既に余っていない。立ち尽くして、ぎゅっと皿をつぶり唇を強く噛んだ。決して吐き出してなるものか。と。

第一章～三通りの道しるべ（1-3）～

「アレンー。」

自分の名前を呼ばれたことで、アレンの拳はキヴィの腹寸前で止まつた。体に衝撃がないことを不思議に思い、キヴィはそつと目を開ける。アレンは目の前に居た。しかし、彼の動きは止まっている。キヴィはアレンの後ろに目をやつた。後ろでは、いつの間にか立ち上がったシルキアがこちらを見ている。アレンを呼んだのはシルキアだろう。

「……次にオレが決着をつけてやる。少しくらいは俺にゆずれ、アレン。」

シルキアは、アレンに相変わらず無表情のまま言った。アレンは一旦肩を竦めるが、顔をキヴィに向け笑いかけた。

「はは、オレ達。女には甘いよ？良かったね。キヴィ。」

そうじつて彼女からすつと離れた。シルキアが帰つてこようつとするアレンを睨む。達は余計だつたらしい。アレンは笑つて誤魔化した。キヴィはといふとほつと息を吐き、その場にヘナヘナと座り込んでしまう。ラジウとクレクが彼女に駆け寄つた。そこで、シルキアは三人に目をやるとふんつと鼻を鳴らした。

「立てなくなるまで踏ん張るとは、相変わらずだな。」

「仕方ないだろー。性格なんだだからー。」

「ふん……まあ、いい。さつさと退け。」

「言われなくとも！」

キヴィはラジウとクレクの肩を借りて起き上がった。シルキアの言葉にここまで食いつくなまだ大丈夫のようだ。

キヴィとアレンの戦いは、見た目的には引き分けだが、実際はアレンが引き下がつたことにより一応キヴィの勝ちである。しかし、キヴィ対シルキアの戦いは、キヴィが体力的に次の戦いができないため場を降りた。となると、今度はラジウ対シルキアで、負けたキヴィ側。つまりはラジウがルールを決める番だ。やっと大将戦と言つたところだろう。

「……ところで、ルールはどうする？」

シルキアがラジウに視線をよこす。ラジウは既に戦い方が決まっているのだろう、すぐさまシルキアを見上げ口を開いた。

「シルキアって、この近くにある洞窟知ってる？」

「ああ。」

「そこでさ、次勝負しない？」

「……別に構わない。」

シルキアのそつけない返答を受け、ラジウは大きく頷いた。シルキアのあつさりとした答えにも、ラジウの心臓が大きくなるのには十分で、ラジウは落ち着こうと深呼吸をする。

そして、キヴィの歩くのを補佐するように自分の肩を貸し、彼女を連れて歩き出そうとした。

「……明日でもこいが。」

「え？」

シルキアの突然の発言にラジウは足を止めて思わず振り返った。

「どうせ、そこの奴も来るのだろう？」

シルキアは顎でキヴィを指した。ラジウは頷いて答えたが、顔が不思議そうにシルキアを見ていた。何を言い出すのだろうかという顔だ。

「足手まといは『ermen』だつてさ。それに、キヴィが心配なんだよ。」

アレンがシルキアの意思を汲み取つたのだろう、あははーと笑いながら弁護する。が、アレンの頭にシルキアの手とうが入つた。

「ふん。貴様が心配で気が散るだらうへ、そんな奴を相手にしてもららん。」

シルキアは痛がるアレンを無視し、ラジウの目をじっかりと見ていた。

あながちアレンの言つてることが当たつているのかもしれない。そういうラジウは思ったが、口には出さず彼の黒い瞳を見返していた。シルキアはすっと背を向けて歩き出した。

「じつかり養生しなよ、キヴィー！ひつじのも、せいぜい一晩で強

くなつてみるよお！

アレンも笑顔で手を振り、ハネッタを退き擦りながらシルキアを追いかける。

「一言よけいだよ！明日の暁、洞窟前な！！」

ラジウはアレンにあつかんバーをして、シルキアに大声で伝えた。シルキアは片手を挙げて返事する。

彼等を見送つてから、ラジウ達も帰路へと着いた。やはり、空はいつものように赤く染まっている。

太陽が高く上り、暑さも増す時間。近くの洞窟へと向かっていく人影が三つ。

「おっ、きたきた。」

そう言つたのは、洞窟前で待つ一つの影のうちの一つだった。ラジウ達が到着するこには、既にシルキア達はその場で待ち構えていたのだ。

アレンがラジウ達に気付いて笑顔で手を振つてゐる。それに対してキヴィも彼等に手を振り返した。

「あ、それじゃあ。さつと始めようか。」

着いてそつそう、キヴィは取り仕切る。それに頷くラジウと彼女に視線を投げたシルキア。一人ともわかっている。とでも言つたげだ。

「じゃ、ラジウ。お願ひね。」

一人の仕草を確認し、キヴィはラジウにワインクを飛ばす。ラジウはさつきよりも大きく首を縦に振り、頷いた。

「ルールは、この洞窟内にある。えっと……玉玉をとつてくこと。あ、何してもOKね。」

ラジウがたどたどしくルールを説明する。ちらりちらりとキヴィを見ることから、不安さが伺えた。それを見て、どうせキヴィに覚えさせられたのだろうと、アレンは勘織った。また、シルキアはふんと鼻を鳴らし、了承の合図をする。それから彼は、もう一度キヴィに視線を投げて口を開けた。

「……キヴィ。どうせ貴様が何か仕掛けたんだろ。」

「ふふ、たくさん仕掛けたよ。勝てるかねえ？」

「負けはせん。」

キヴィはシルキアを挑発するように口の端をあげ、にやりと笑う。それにシルキアは興味なさそうに一言答えた。こいつは本当に勝負する気があるのか。とラジウを不安にさせるくらい、顔から鬪気を感じることができない。

「上等！私たちも後から行くよ。それじゃあ、位置についてー。」

ラジウとシルキアが、洞窟の前に立つた。キヴィの掛け声を待つ二人。その場に一瞬の緊張が走る。

「よーい……スタート!」

声と同時に一人とも地面を蹴った。シルキアはすぐに洞窟の暗闇に姿を消す。それを必死にラジウも追つた。

「大丈夫でしょうか……ラジウ様。」

二人の背中を見送りながら、クレクは不安そうに表情を曇らせ、ぽつりと呟いた。

「心配症だな、あんた。そんなに心配なら、『こんなことさせなきゃいいのに』。」

クレクのあまりに心配そうな顔に、アレンは肩をすくめて言った。その言葉に、クレクはアレンを一瞥したが、何も言つことはなかった。

「さ、私達も行くよ!」

手を叩いて一人の視線を自分に集めると、キヴィは大きな声で述べた。それから一人の返答も聞かずに、洞窟へと歩き出す。一人は慌ててキヴィを追うのだった。

第一章～三通りの道しるべ（1-4）～

さて、先に入つて行つたシルキアとラジウだが、相変わらず変化のない暗闇の中をひたすら走つていた。

「……。」

両者とも、スタート時点からまったく言葉を発していない。ラジウはちらりちらりとシルキアをかい間見た。まったく表情を変えることもなく、ただひたすらに彼は走つている。ラジウの隣をキープしながら。

スタート時に、置いてかれる…と思つたラジウは、それが不思議でしうつがないのだ。だから、何度も彼を盗み見ては変わらぬ表情に、内心更に首を捻つっていた。

「……なんだ？」

「え？」

シルキアが、突然声を発した。ラジウは驚いて彼を凝視する。彼は前を向いたままで走つている。

「さつきから何度も視線を寄せますが、何だ？」

「な、なんでもない！」

シルキアの言葉に、ラジウの心臓がドキッと鳴つた。それのせいか、ラジウは走る速度をあげる。が、額からは汗が滴り落ちている。

「前。」

シルキアはラジウに一言いった。それに反応して、ラジウが顔を上げる。焦つてアレコレ考えていたせいで、前から来ているものにラジウは気付いていなかつた。

「えつ！…？」

気付いた時には、既に彼の目の前に大きな影が迫つていた。大きな岩が前から転がってきたのだ。思わぬ出来事に、ラジウはしばしこまつたまま岩を凝視する。

頭の中が真っ白で、ラジウは動けない。
岩が彼を襲う。

「バカ。」

罵る言葉と同時に、岩は止まつた。よくよくみると、シルキアが片手で岩を止めている。

「…………えつと。ありが……どひ?」

しばらく固まつていたラジウは、やつと頭が動いたのか、シルキアに礼を述べた。

シルキアが岩を止めたことに、ラジウは驚いた様子を見せない。それは、罵ることは一応全てキヴィに聞かされているからだ。
この大きなものは一見岩にこそ見えるが、実はもっと軽くて殺傷能力の低いもので作られている。それゆえに、当たればかなり痛いが、止めてしまえば大丈夫なのだと聞いていた。

「……ふん。」

シルキアは鼻を鳴らし、舌を押した。すると、岩がゆっくりと転がり道が開けた。シルキアは振り返りラジウを見る。

「見とけ。」

そう一言発すると、彼は地面を蹴つて走り出した。ラジウは慌てて彼を目で追う。

シルキアは更にスピードをあげ、ラジウを引き離した。かと思つと、シルキアは急に立ち止まつた。そして、再び振り返りラジウを見た。

「今の道、ついてこれるか？」

「え？」

「……今俺がここまで来た道で、ここまでこれるかどうかを聞いている。」

淡々といつシルキア。何故そんなことを聞くのかわからず、ラジウは首を傾げながらも頷いた。しかし、ラジウはシルキアの動きなどまったく覚えていない。ただ、置いてかれる！と思った、その感覚しか思い出せなかつたのだ。だが、引くことはしたくなかった。仕方なしにシルキアがいる方向に一步進みでた。

何かを踏んだ感触と押された音。ラジウの血の気が退いていく。

ポチ

「だあああーー！」

ラジウは慌てて地面から足を離す。次の瞬間、タライがラジウの居た場所に景気よく降ってきた。しかし、ラジウはほつと一息。つくことができなかつた。なぜなら、着地後の自分の手が、何かを押しめた感覚を訴えてきていたからである。

案の定、木の棒がラジウの目の前から、猛スピードで彼目がけて飛んで来た。慌てて身を屈めるラジウ。木の棒は虚しく空を切つた。しかし、またもやラジウの耳にカチッという無造作な音が入る。今度は、横からたくさん槍がラジウを襲う。

ラジウは既に何がなんだかわからなくなつていた。頭の中が真っ白だ。けれど頭よりも体が反応を示した。ゴロリと転がつて槍をやり過ごしたのだ。

ラジウは、荒く息をする。目の前にシルキアの足を確認すると、ほつと胸を撫で降ろした。

ポン

「ひやつ！ー？」

頭に軽い衝撃を感じ、ラジウは情けない声をあげた。しかし、頭は痛みを訴えてはいない。ラジウは不思議そうに手で額に触れた。何かが額に引っ付いている。矢みたいだが、先には丸い吸盤がついているようだ。ラジウは確信した。頭についているのは、子どもの玩具のような矢なのだと。みるみる顔を赤くするラジウ。慌てたように矢に手をかけた。スローン！という軽快な音が洞窟内に響き渡る。そして響く音が收まり、辺りが沈黙に包まれた。

「…………バカ。」

呆れたよつに何度も目かの同じ言葉。それだけでラジウはかつと頭に血が上つた。だから、茹で蛸のように耳まで真っ赤にして、うつむいてしまう。

「……ふん。俺は先に行くぞ。」

いつまでも黙りこくれているラジウに、シルキアは言葉を投げた。それに小さく顔を動かし反応すると、ラジウはゆっくりと起き上がる。シルキアはじつと彼を見る。そんな中、ラジウは歩き出した。次の瞬間、ボコッという音がシルキアの耳に届く。それと同時に、いきなりラジウがシルキアの視界から消えた。シルキアが視界をゆっくりと下に移す。金色に輝く髪だけが、彼の足元にあつた。

ラジウは落とし穴にはまってしまったのだ。必死に手を床にくつづけ、落ちまいと踏ん張っている。

「……。」

シルキアは黙つて凝視している。たかがキヴィの罠だ、彼が死ぬことはないとたかをくくつているのだ。

ラジウの手が、どんどんと引きずられていく。プルプルと小刻に震え出したかと思うと、ラジウの手は床から一瞬にして離れた。

「わーーっー！」

「大馬鹿野郎っ……。」

流石にシルキアも慌てたように、ラジウの腕を掴んだ。ラジウの下の穴は暗く、底が見えない。シルキアは力を込めて、ラジウを落と

し穴から引きずり出した。ラジウが重かつたのか、シルキアは少し息を荒げている。ラジウはといつと、目に涙をいっぴにしながら、大きく息をしていた。

「はあ……はあ……むづ……ヤダよ。」

弱々しく吐かれる言葉。シルキアが小さな目を見開いてラジウを見た。ボタボタと床に落ちる涙。辛そうに寄せられた額の皺。ぐしゃぐしゃになつた顔。シルキアは頭を搔いてから、ラジウに片手を差し出した。

「……………ビツするんだ？」

「……………僕、もづ諦めるよ……。もづ、嫌だもん……。」

ラジウはシルキアの片手を握つて立ち上がるが、顔落としながら涙を拭う。拭つても次から次へと溢れてくるのだが。

「ふん……元からやらなければ良いものを……行くぞ。」

小さな声で呟くと、シルキアはラジウの手を握つたまま歩き出した。

「え？」

「帰り道などわからんだろう。」

シルキアは歩く速度を落とさずに、ラジウを引つ張りながら一言こぼした。ラジウは、自分よりも大きな少し冷たい手をギュッと握り返す。そして、遅れないようこと小走りで彼についていった。もう、ラジウの瞳に涙はない。

第一章／三通りの道しるべ（1-5）

さて、二人を追っている三人組はと言つと。洞窟内のいくつかの罠を潜り抜けて追つてきていたが、今は立ち止まって話し込んでいた。クレクとアレンは同じように眉を顰めながら慌てたように汗をこぼしており、その目の前にはいつもと変わらぬ平然とした表情のキヴィが立っていた。

「ちょ、キヴィ……それマジな話し？」

「うん、ごめん。迷つた。」

アレンが上擦つた声でキヴィに問いかける。カラツと笑いをこぼし、キヴィはキッパリと良い放つた。彼女が言つ通り、三人は道に迷つているらしい。

キヴィの言葉に青ざめていく一人。

「キヴィ～～～どうすんの！？このままじゃあ、シルキア達に追いつくぞ！」か、ここから出られないじゃん……」

「ラジウ様、大丈夫でしょうか……。」

「人の心配より、自分の心配しろよ……。」

やかましく騒ぐアレンと、反対に弱々しく人の心配をするクレク。どちらにしろ、二人とも冷静さを欠き、取り乱しているのに変わりはなかつた。キヴィに連れられるまま道を突き進んできたのだが、そんな彼女が迷つたというのだ。アレンとクレクが戸惑い慌てるのも頷けるだが。

「落ち着きなつて。進めばそのうち知ってる道にでるよ。なんたつて洞窟の隅々まで知つてるキヴィ様がついてるんだから大丈夫だよ。

」

「その道案内が迷つたんでしょう」「……はあ。キヴィってさあ、慌てるとか困るとかしないわけ?」

やけに落ち着き、この状況に置いても自分を自負しているキヴィに、アレンは溜め息をついた。
しかし、キヴィはアレンの言葉に視線を上にし、困ったように頬を搔いた。

「うーん。いや、悪いんだけどねえ。一番困つてるのは、このキヴィさんだつたりするんだけどねえ。」

「はつ?」

キヴィのさり気ない台詞に、アレンが疑いの眼差しと声をあげる。
クレクは、ラジウのことを心配しているのか、一人を見ながら口を開じたまま何かを考えている。

「……はあ。あたしゃもう、こつから動けないんだよ。」

明らさまな態度のアレンに、キヴィは嫌そうに顔を歪めて言葉をつむいだ。なんで?とアレンはまだ胡散臭そうにキヴィに聞く。キヴィはそれにさらに大きく溜め息をついた。

「はあ……。」

「だから、なんですかー？」

それが机に触つたらしく、アレンは不機嫌に少し声を荒げてもう一度キヴィの答えを促した。

「さっきのトラップで足をもつちましたのさ。」「

渋々答えるキヴィの台詞で、アレンの視線が下の方に移動していく。しかし、遠田から見てるせいか、まったくもって正常のよう見えた。

さつきのトラップとは、横の壁から矢が数本出てきた罠のことだらう。あの時も、キヴィはいつも通りサラッと避けていたような気がする。と、アレンは記憶を思い起こして、首を捻った。

その時、クレクが動いた。ゆっくりとキヴィに近付き、彼女の手の前までくると止まる。

「キヴィさん、足を見せて頂いてもよろしいですか?」僕の手当てなら少なからずできますので。」

笑顔でキヴィに向け、いつもの優しい口調で問いかける。そして、蹲ると彼女の足に手を伸ばそうとした。

「いや、いいよ。あたし自身医者だから、それくらい自分でやるよ。」「

キヴィは慌てたようにクレクの顔の前で両手を振る。まるでクレクを拒絶するかのように。元より

そんな彼女の行動にアレンは眉を潜めた。何かオカシイ。そう彼は感じたのだ。しかし、アレンは口を塞いだままクレクを見やる。

「やつですか……。キヴィさん、お伺いしたい」とがあるんですが、よろしいですか？」

「ああ、いいよ。じんと来なつ。」

アレンは、クレクに何か考えがあるに違いないと踏んでいた。だから暫く様子を伺おうと決めたのだ。

そういうしてこるうちに、クレクとキヴィの問答が始まった。クレクは先程からの笑顔のままであり、キヴィは未だ平然とした表情である。

「キヴィさんは洞窟の中を隅々までじ存じなんですね？」

「ああ、やつだよ。」

「それなぜどうしてですか？」

「えーっと、小さこ頃にこいで遊んでね。調べてしたんだよ。」

キヴィは、しばらへ記憶を辿りながら答える。クレクは問い合わせを続けた。

しかし、彼の多少の変化をアレンは見逃さなかつた。ほんの一瞬彼の目が細められたのだ。

「それは異もですか？」

「いや……元々この洞窟には異なんてなかつたんだよ。私達が遊びで沢山の異を仕掛けたんだ。」

キヴィの思案しながら答えた言葉に、アレンは目を見開いてから、

ああ、そう言えれば。と小さく呟いたのであった。といつのも、幼い頃確かに、悪戯で洞窟内に沢山の罠を仕掛けたことを思い出したのだ。念のため言つておぐが、シルキアとアレン、キヴィは腐れ縁もとい幼馴染みである。

「ほう、凄いですねえ。さつきの矢が出てくる罠も凄かつたですね。避けするのが大変でした。アレを作った人はさぞかし頭が良いんですね。」

「あははは～。照れるねえ。でもアレはしゃがむと全部当たらな…」

…。

絶賛するクレクに、思わず照れながら頭を搔くキヴィ。しかし、会話の途中で固まり、動かなくなつた。ギギギと音がしそうなくらい、ぎこちない動きで、キヴィはクレクを見る。話の内容からして、先程の罠はキヴィが普仕掛けたもので、きつちりと彼女はそれを覚えていたのである。まだそこには優しい笑みがあった。

「キヴィさん、足の方はいかがですか？」

「ぐ……グッジョブー！」

クレクは穏やかの笑みを絶やさずに、もう一度聞い掛けた。キヴィはそれに大丈夫の意の言葉で返事を返した。よつするに、キヴィは無傷なのである。

「……キヴィさん。時間稼ぎをいつまでするつもりですか？」

クレクのこめかみがピクリと動くのを見て、アレンは細く笑い、キヴィは頬を一回引きつらせた。しかし、すぐにキヴィはため息を吐

く。

「あー、ひ、バレバレだったかい？」

さつきまでの焦りや神妙さはどこへやら、キヴィイはカラリとした口調で聞き返した。その顔は先程と打って変わって綻び、楽しそうだ。
足の怪我。見た目的には何も問題ありませんでしたし。ちょっと力マをかけてみました。」

「ふつ……なるほねえ。よくできました。つてところかね。」

クレクの返答に、キヴィイはウインクを一つ。どうやらもう開き直っているようだ。ずいぶん陽気なキヴィイに、クレクは苦笑した。
しかし、どうして彼女がこんなことをしたのか眞理検討もつかない状況であつたため、クレクは真剣な表情に戻ると疑問を口にした。

「それで、キヴィイさん。どうじてそんなことを?」

「ラジウに頼まれたから。」

「え……?」

キヴィイが問いかけにきつぱりと答えを言い放つ。しかし、彼女の單刀直入な答えにクレクは戸惑いを隠せなかつた。また、アレンもキヴィイを訝しげに見つめる。

驚く一人を交互に見ると、キヴィイは少し躊躇つてから口を開いた。

「ラジウがね、戦いを見られたくないって言ったんだよ。」

「どう……して？」

「私が教えた戦い方はね、正々堂々なんかじゃないんだ。」

驚きを隠せないクレクに、キヴィは視線を床に落としながらだがはつきりとした口調で答えた。もう隠す必要もないとも言つかのようだ。

しかし、彼女の台詞にクレクよりも早くアレンが反応を示した。

「ちょ、それってまさか。あのガキに仕掛けたってこと…？」

「（ノ）名答。相変わらず頭の回転が早いね。アレン。」

アレンの大声に、キヴィは彼に視線を戻してにやりと笑った。アレンは信じられないというように田を見開き一歩下がった。

「それってどういふことですか？」

クレクは、まだよくわかつていいないらしく、首を傾げてキヴィに聞く。キヴィは一瞬言つていいのか躊躇し、アレンに視線を送った。一応アレンは彼女の敵である。彼が居る前で話していいものか考えあぐねているのだ。

アレンは彼女の思考を読み取ったのか、クレクの問いに自分なりの答えを突きつけた。

「卑怯。つて」と。

「卑怯？」

「キヴィがどんなことを教えたかは知らないけどね。不意打ちとか。
そういうこと。」

クレクの目がアレンの説明で見開かれ、次に細められた。その細められた眼からは、怒りがひしひしと伝わってくる。クレクが口を開けた。

「私は、ラジウに勝つ可能性を『えただけだよ。』

クレクの罵倒が飛ぶ前に、キヴィははつきりとした口調でそれを制した。クレクの視線が自分に向いたことを確認すると、キヴィはそのまま言葉を続けた。

「正々堂々戦つたんじゃ、ラジウに絶対勝ち目なんかない。それくらい、あんたらわかるだろ？！」

キヴィはいつもより強い口調で、きつく射る様な強い視線を向けてクレクに言い放った。

キヴィだって、好きでその方法を選んだわけではないのだ。勝つためなのだ。仕方が無い。そう彼女の瞳は訴えている。

「それに、受け入れたのはラジウだよ。そして私に言つたんだ。決着が付くまで、クレク。あんたを連れてこないでくれ。って。」

「……なんですか！？？」

狼狽しながらもクレクは声を張り上げる。しかし、キヴィは更に目を細めて彼を見た。まるでクレクを品定めするかのごとく視線を這わす。そして、口を開いて静かに台詞を紡いだ。

「クレク、あんたはラジウがひどい怪我を負つていても、彼にそのまま戦いを続けさせるかい？」

むきになつていたクレクだが、最後のキヴィの問いかけに押し黙ってしまう。とても強い衝撃を受けたらしく、固まつたまま言葉が出てきはしない。確かにラジウがそんな状態になつてしまつていたら、クレクは有無を言わざず連れて帰るだろう。

「……。」

クレクは黙つたまま、キヴィに背を向けた。そのまま何も言わずに歩き出す。

「ちよ、今の話聞いてたのかい！？」

キヴィが慌てて後を追う。しかし、慌てたせいでキヴィはいつもの注意力が落ちていた。

「キヴィ！」

アレンが彼女の名を呼ぶ。キヴィの膝がガクンと沈んだ。それに一番驚いたのは目を見開いたキヴィ自身だった。いきなりのことに彼女は体勢を立て直すことができず、そのままふらついて倒れこんでしまう。

アレンが地面を蹴る。素早くキヴィに近づくと、彼女を片手で突き飛ばし、自分も飛んだ。

次の瞬間、ズドン！といつ鈍い音が響き渡る。

第一章／三通りの道しるべ（1-6）

「つたー……。」

煙が晴れ、キヴィ達が居た場所には大きな胴の鐘が佇んでいるのを確認できた。アレンが彼女を突き飛ばさなければ、彼女はその鐘の下敷きになつていただろう。

「キヴィ。大丈夫？」

突き飛ばされ壁に背を預けながら座り込んでいたキヴィに、アレンは駆け寄つた。クレクも音に驚いたのか、走つて戻ってきた。

「嘘から出た誠。つてか?……「ゴメン。足くじいちゃつたみたい。あは。」

心配そうに覗き込む一人に、冷や汗を流しながら乾いた笑を向けるキヴィ。その彼女の台詞に、二人は固まつた。

キヴィの右足が、ほんのりと腫れあがつてゐるが、一人の視線にちらりと入つてくる。くじいたというか、明らかにねじてゐる。クレクは、しゃがみ込んで彼女の足を診た。どうやら捻挫のようだ。とアレンに報告する。

「……あーあ。これじゃあ、私は動けないね。次の分かれ道を右に曲がつてまっすぐ行けば、ゴールだよ。とつとといつちまいな。」

体の力を抜き、本格的に座り込むと、キヴィはクレクに手をパタパタと振つた。言葉同様に、さつさと行きな。と言つてゐるようだ。アレンは、キヴィから視線を動かしてクレクを凝視した。彼は眉を

顰めてキヴィを見ている。

「何故、道を教えるのですか？」

「ラジウが心配なんだろう？あたしゃ、もう動けないからね。あんたを止めることなんかできやしないよ。ここであなたに迷子になられたつて困っちゃうし。」

笑いながらキヴィは言った。しかし、額にさつさらと汗がにじみ出でている。足が相当痛んできているのだ。それに氣づくと、クレクは更に顔を顰めた。

アレンは静かに一人のやり取りを見守っている。クレクがどうでるのか楽しみなのか、顔が少し歪んでたりもするが。クレクが行動に出た。屈み込んで、キヴィと同じ田線になる。

「うわーー？」

いきなりキヴィの身体を浮遊力が襲つた。思わず驚いて声を上げるキヴィ。

「ヒュ～。」

アレンが口笛を吹いた。キヴィは、眼を点にしたまま、耳まで真つ赤にしている。なんと、クレクが軽々とキヴィを持ち上げたのだ。

「いいなあ。お姫様抱っこ。」

アレンがにやにやと笑を浮かべながら言ひ。そう、いわゆるお姫様抱っこで抱えられているのだ。キヴィは金魚のよつこ口をパクパクと動かすが、声が出ない。

「オレもじて欲しい。」

「お前はする側だらう。」

「しませんよ？」

アレンが口を出すと、キヴィとクレクから同時に厳しい言葉が返ってきた。えーっと口をへの字に曲げ、不満そうな声をあげたものの、アレンの目は笑っている。

その突込みを気に、キヴィは我を取り戻したらしくクレクに赤い顔をキッと向けた。

「ちよつと一降りしどくれ……。」

「どうしてですか？歩けないでしょ、うへ。」

叫ぶキヴィとは対照的に、穏やかで朗らかな口調でクレクは返答する。まるで子供をあやすかのような雰囲気である。それが更にキヴィを煽る結果となる。

「い、いいだろ別に！ほつとこてくれりやあ、そのつち一人で帰れるよーー！」

逆上したキヴィが、しまいには両手足を思いつきりバタつかせ暴れて始めた。何度もクレクの顔にもキヴィの手が当たる。流石にこれにはクレクも多少痛さを覚えたのか、息を吸った。

「静かにしないと、落としますよ？」

爽やかで極上の笑みがそこにあつた。にこやかに笑んだまま、さつきと変わらぬ穏やかな口調でクレクは静かにそう言つたのだ。思わず体をこわばらせ、動きを止めるキヴィ。眼がクレクから離せずに固まつている。

「…………は、はい。ごめんなさい…………。」

いつまでも崩れないクレクの笑顔に、キヴィは顔を引きつらせ小さく謝つたのだった。

「よろしい。」

優しそうな笑みに戻つたクレクは、ゴールと反対方向に歩き出した。クレクがラジウの方向に向かうとばかり思つていた二人は、驚いたように彼を見る。

「お、おい。逆じゃないのか?」

アレンがクレクを追いかけながら、おそれおそれの彼に話しかけた。すると、クレクは彼に背を向けたまま立ち止まる。顔は正面を向いたままアレンを見ることがないが。

「ケガ人の手当ての方が優先ですよ。……それと、私はラジウ様を信じていますから。」

少し躊躇つてから言葉をつけたし、最後の言葉でクレクは笑顔をアレンに向けた。吹つけられたような爽やかな笑顔に、アレンはつい一歩退いて手で顔を庇う動作をする。それを気にすることなく、クレクはアレンに言った。

「私のことは気にせずに、アレンさんはどちらに向かってください。」

それからまたわざと歩き出す。アレンはその言葉に肩を竦めたかと思うと、にっこり笑い、小走りでクレクに追いついてきた。

「オレ一人で行つても寂しいだけじゃん？それに、キヴィも心配だしね。」

キヴィに視線をやり、ワインクするアレン。それにクレクは微笑み、キヴィは眉を顰めるのだった。キヴィは直感で感じていた。アレンが二か企んでいるであろうことを。それが、十中八九自分をからかう事なのもわかつたていた。

「そんな大した怪我じゃないつーに……。」

だからため息をついて、ぶつぶつと恥ずかしそうに文句をたれるのであった。

アレンはキヴィを見ながら笑みをこぼす。その笑みはクレクとは違ひ、明らかに何か悪戯をしたがっている子供のような表情。ふと、彼は口を開いた。

「ねえ、キヴィ。その抱えられ方つてさ、子供抱えるときと同じだよね～？」

アレンの言葉に、キヴィは赤ん坊の抱き方を思い出す。すると、すぐ力尽きと耳まで赤くなつた。そして、アレンにきっと睨みつけるように顔を向け、思いつきり叫ぶのである。

「あたしゃガキじゃないよーー！」

「顔赤くして可愛い～。」

しかし、アレンは受け流してさらにからかいの言葉を投げかけてくる。そのことにキヴィの頭に血が登らないわけがない。キヴィは更に激怒し大声を張り上げた。

「可愛いない！」

「うぬわ～って言つてるでしょ？」「

キヤンキヤンと吠える一人に、先ほどの笑顔を向けるクレク。しかし、こめかみがピクピクと痙攣していることから、本気で怒つているのが伺える。まあ、耳元でこうギャーギャー喚かれたら、誰でも怒る気もするが。

「いめんなさい。」

「わりこ。」

キヴィとアレンは顔を引きつらせ、同時に小さな声で彼に謝った。どうやら、二人の中での勝者は、クレクのようだ。

第一章～三通りの道しるべ（17）～

一方、まだ勝者の決まっていないラジウとシルキアは「う」と。わきあいあいの三人組とは正反対に、沈黙のまま「ゴールに向かって歩いていた。

ラジウはこの沈黙に耐え切れず、早く「ゴールが見えないかと眼を凝らしていたのだった。だから、彩られた扉が見えたとき、ラジウはパアッと顔を綻ばせた。

「ね、アレだよ！」

「ああ。」

ラジウはその扉に元気良く走りより、シルキアを呼んだ。しかし、シルキアは彼の後ろから平然と歩いてくる。まるでよく知っているとでもいった感じだ。

「なんだよ。もひちよつと驚くとかさ～。」

「知ってるからな。ここが最奥だ。」

「へえ。」

シルキアはさも当然といつぱに話ながら、さつさと扉を開ける。その様子に、ラジウは慌てて両腕を振った。

「ちょ、トランプとか大丈夫なの！？」

ラジウは問いかけて、シルキアは鼻を鳴らした。馬鹿にしているような

印象を受けるその行動に、ラジウは頬を膨らませて対抗する。しかし、シルキアは気になった風もなく言葉を綴つていくのだった。

「ふん。どうやら奴のは言葉だけのハッタリだつたようだからな。今までの道すがら、昔も今もトラップに変わりはない。この中のトラップも俺は知つている。」

立ち止まろうともせず、ずかずかと中に入つていくシルキアの様子からは、自信が伺える。

中は人が一人住めるくらいの大きさで、小さなテーブルが真ん中に一つ佇んでいるだけだった。そのテーブルの上に大人の掌ぐらいある大きな水晶が飾られている。他に高価そうなものは見当たらず、まさしくこの水晶がキヴィの言つていた宝物であることを容易に想像することができる。

躊躇うことなくシルキアはそれに近付いた。ラジウは何もしないのか扉の所に佇んで彼の行動を見送っている。

このまま勝負は決まつてしまふのか。そうだとしたら、あまりにも出来すぎている。シルキアはそう思案すると水晶の前まできて立ち止まつた。

ガシャン！

鉄が落ちたような音が部屋に響いた。いきなりの出来事に思わず目を見開いて固まっているシルキア。彼は鉄の檻に閉じ込められていた。檻が上から降つてきたのだ。

「貴様……。」

シルキアは扉の方に視線を向けた。そこには、扉の取っ手についている隠しボタンを押し、こちらを見ているラジウがいた。笑みがこぼれており、してやつたり…という雰囲気を漂わせている。

「へへ……油断してたでしょ？この隠しごとれだけだもんね。」

ラジウの言葉にシルキアは舌打ちをする。確かに彼は油断していた。この部屋にあるトラップはただ一つ、手動のこの罠だけである。手動であるからして、人が仕掛けを押さない限り発動しないのだ。シルキアはまったくラジウのこの可能性を否定していたのである。このトラップは今までに一度も使われたことがなかった。なぜなら、卑怯、裏切り。といったような意味を持つ罠だからである。

「……ふつ、なるほどな。罠は貴様だったというわけか。」

自嘲気味に笑うシルキア。ラジウは扉から離れるときシルキアを通り越し、水晶が乗っているテーブルまでやってきた。

「やうだよ。だって、他に罠仕掛けてもあんたじや全部ぐぐりぬけちゃうしあした。」

シルキアの言葉に頷き、ラジウは水晶を手に取った。そしてシルキアに向き直る。彼の表情は嬉しそうではなかつた。なんとも曖昧で困つたような、でも少しほつとしているような内心が読み取れない顔をしているのだ。

「キヴィに言われたんだ。いくら罠を仕掛けたって、あんたとシルキアの実力の差なんて埋まらない。だから、弱つちいあんたが真っ向勝負をしたって確實に勝てないよ。って。」

シルキアは黙つてラジウの話に耳を傾けている。割つて入つてくる気配がないので、ラジウはそのまま言葉を紡いだ。

「だから、キヴィに言つたんだ。勝てる方法を教えてくれ。つて。恥を搔いたつて、どんなに慘めになつてもいいからつて。そしたら、キヴィは言つた。卑怯になれと。弱い者が勝つには、それしかないんだ。つて。罷を何も仕掛けなかつたのは、あんたに氣を張らせないため。」

「…………革の罷にかかつたのもわざとか？」

「そうだよ。初めから罷にかかるつもりで、キヴィには罷の場所を教えてもらわなかつたんだ。ただ、ちょっと量が多くすぎて焦つたりしたけど……。」「

シルキアがぽつぽつ話すラジウに問いを向けた。それに答えるもの、恥ずかしそうに段々と声が小さくなつていいく。予想以上に多く激しかつた罷を思い出したようだ。

「なぜ？」

「あんたを足止めするためだ。キヴィが言つたんだ。」あいつは罷にかかるような弱いやつを置いていかなこや。子供なら尚更ね。」つて。先に行かれたら追いつけないからや。」

「ふつ。」

ラジウの説明に、シルキアは鼻で笑つた。まだまだ自分は甘いな。と小さくラジウに聞こえない程度に咳き、檻に背を預けた。それに、ラジウは首を傾げた。彼から戦う意気がまったく見られないから。

「…………。」

「…………やつやつと行け。」

無言で水晶持ったままラジウはシルキアをじっと見ていた。それを不思議に思ったのか思はないのか、無表情のままシルキアはラジウを促した。それにラジウは堪らず口を滑らしてしまう。

「負けを認めるの?..」

「ああ。」

「そんなんにあつやつと?..」

「ああ。」

「なんで!..?」

ラジウの問いに、ただ頷いて肯定するシルキアにラジウは食つてかかった。どうやらシルキアの答えが気にくわなかつたらしく、少し怒つてもいるようだ。田を見開いているから驚きのほうが強いのかもしれないが。

「俺は油断して貴様に丸め込まれた。だから負けだ。」

きつぱりとシルキアは言い放つ。しかし、ラジウはさりげなく額に皺を刻み頬を膨らませた。明らかに不満たらたらである。

「むつ……卑怯とか思わないわけ?..」

尚も食い下がるラジウ。

「……ふん。これが本当の戦いだつたら、裏をかかれた時点で死んでいる。貴様自身が言つただろう？ 勝つための手段だと。そういうのは卑怯ではなく”策”というのだ。」

めんどくさそうに、しかしシルキアにしては珍しく長い台詞を返したのである。ラジウの額の皺が引かなかつたからかもしれないが、そんな返答にも、ラジウの頬の膨らみを改善することはできなかつた。

第一章～三通りの道しるべ（18）～

「……いいよ。わかった。あなたはそういう奴なんだね。」

まだ不満そうな顔をしながら、ラジウは水晶を両手で高々と持ち上げた。かと思うと、次の瞬間水晶から手を離してしまつ。シルキアが声を発するより早くバリン！という音が辺りに響き渡つた。水晶は床に叩きつけられ、もう見る影もなく粉々になつていた。さすがに、これにはシルキアも睡然となつた。そしてしばらくの間床の残骸を見ていたが、ふとラジウに視線を戻す。ラジウは落ち着こうとしているのか、大きく深呼吸をしている。手が震えていて血の気がひいているのがわかる。一大決心だつたのだろう。ラジウとシルキアの目が合つた。

「僕は、いつかあんたに実力で勝つてやる！…」

人差し指でシルキアを指し、きつぱりと大きな声で叫ぶラジウ。まるで自分にも言い聞かせているようなほど大きな声だ。これは彼によるシルキアへの宣戦布告だ。シルキアは間抜けなことに口を開け、ただラジウを見るしかなかつた。

「じ、実力では僕が負けてたんだ。策だつてキヴィが考えたんだし。僕一人で勝つたわけじゃないし。だ、だからっ！この勝負は引き分けだよ！…宝も無くなっちゃつたし。」

ぶいっとせっぽを向き、腕組をしながらラジウは言葉を続けた。言い訳のようにどもりながらの口調だが、彼はいたつて真剣だ。

「く……くくく。」

噛み殺した笑い声をラジウの耳がキャッチする。不審に思つて振り向くと、ラジウは思わず口を顎が外れるんじゃないかってくらい大きく開いてしまった。あの無表情のシルキアが密かにだが笑つている。顔と腹を手で押さえ座り込みながら、肩を小刻みに震わせているのだ。彼にとつて、ラジウの行動はよほど面白かったにちがいない。アレンやキヴィでさえも、今の彼を見たら驚くだろう。それほど珍しいことだった。

「く……貴様、バカ。だな。」

ほのかな笑い顔をラジウに向けながらシルキアは言つ。その何度目かの言葉、いつたいどのくらいきいたのだろうか。それでも今回、ラジウはその言葉で頭にくることはなかつた。けなし言葉だが、全くけなしているように聞こえないのだ。

「うつ……そうバカバカ言つなよ。」

ラジウも少しだけ笑みをこぼしながらシルキアに言つた。じゃれつくよつな口調である。

「すまない、バカ。」

「おーい、言つてるつて！」

笑い合つわきあいあいとした雰囲気に、ラジウはほつとしたよつて柔らかい笑みを浮かべた。

シルキアは、なんとか笑いを抑えてから立ち上がる。

「行くか。」

そう言つたシルキアは一瞬にしてラジウの視界から消え失せた。ラジウは目を点にして一步後ずさる。いくら凝視しても、檻の中にいたはずのシルキアは影も形もない。魔法なんて魔族の極一部が使える特殊なものだし、だいいちシルキアは人間だ。それともシルキアはマジシャンか何かなんだろうか？あれこれと頭に浮かんでは消える可能性。けれど、どれもしつくりとこないので、ラジウはしきりに首を捻つた。

「おー。」

「うひわー？」

横からの呼びかけに思わず驚きの声をあげるラジウ。そして慌てて身構えて振り向く。振り向いた先、自分の隣にはさつきと変わらぬシルキアが立っていた。目を見開いたまま口をあんぐり開けるラジウ。

「ちよ……どうやって出たのー？」

「ああ、テレポートとか言われるようなものだ。瞬間移動とも言つか。場所から場所に飛ぶんだ。」

説明にわからないと、両手を挙げ首を傾げるラジウに、シルキアは言葉を変えながら伝えようとする。しかし、ラジウはまだ不思議そうな顔をしている。仕方なしに、シルキアは特異な能力だ。とそう言つた。それで、とりあえずラジウは頷くのであった。

「へえ……って、何で使わなかつたのー？」

シルキアの珍しい能力も不思議だが、それよりもそれをさつき使わなかつたシルキアの行動に、ラジウは驚きを露わにした。そして彼に問い合わせる。

「負けたからだ。完璧にな。」

そう言って口の端を上げるシルキアに、ラジウはきょとんとした間抜けな顔をみせる。まだよくわからないでいるラジウが口を開く前に、シルキアは背を向けてたつたと歩き出してしまった。なのでラジウは慌てて後を追うしかなかつた。だけど、行きよりはピリピリとした緊迫な雰囲気はなく、緩やかな時間が流れそうだ。

第一章～三通りの道しるべ（19）～

「おっ、出てきた。」

アレンがちらりと見える人影に気づき、二人に合図を送った。キヴィの足の応急処置を終えたクレクがそれに素早く反応を示す。三人は洞窟をじっと凝視した。

ゆっくりと姿を現した二人のうち一人はボロボロで、泥だらけの傷だらけ。もう一方は無傷で、洞窟に入つていつた時とまったくといっていいほど変化はない。

「つーラジウ様！！」

もちろんボロボロなのはラジウなわけで、クレクは叫ぶと同時に彼に駆け寄つたのである。そして、ワザとだらう。思いつきシルキアとラジウの間に割つて入つた。かと思つとラジウの服をパンパンと叩きだした。いつものお世話というかお節介が始まつたようだ。

「わっふ。クレク！いいよ、大丈夫だから！」

埃を吸い込んで大きくむせながら、ラジウは何とかクレクを押しのける。クレクは眉を潛め不満そうな顔をしたが、仕方なく引き下がつた。

「で、勝負はどうなつたんだい？」

キヴィが、岩の上に腰を下ろしたまま、戻ってきた一人へと声をかけた。その言葉にシリキアはラジウに視線を寄越す。お前が説明しようと、ラジウに言つているのだ。

「うんと。引き分け。」

へラフと笑つて、ラジウはあつたつと答えを述べた。その答えに、キヴィとアレン、クレクまでもが驚いて固まる。全員違つ意味で固まつているようだが。

「…………はあ！？引き分け！…？」

一番信じられないのだろう、アレンが口をパクパクと動かしながら声を張り上げた。今にもシルキアとラジウに食つてかかりそうな勢いだ。

「は？勝てなかつたのかい？ラジウ。」

キヴィも間の抜けた顔でラジウに問う。それもそのはず、彼女にしてみれば勝てるようアドバイスをしたし、勝つだらうと大方の割合で思つっていたのだから。

「うん。水晶落つ」として割つちゃつた。ほし。」

語尾に自分で星といつほじ、ラジウは陽気に答えた。いや、しかし笑つてはいるが口は引きつっているし、額からは一筋の汗が流れ出している。誤魔化すのが本当に下手なラジウだった。

ラジウの行動に、キヴィとアレンが冷たい視線を送るのだが、

「……ラジウ様。いつたいどうなされたんですか！？口で星。なんて言つなんて！…熱でもあるのではないですか！…？」

見抜けない保護者がここに居た。慌ててラジウの額に手をやり、熱

を測つている。勢いよくまくし立てたので、ラジウは固まつたままクレクのなすがままである。さらに額から汗が吹き出る始末だ。

「ないよ。クレク。」

しかし、心情は冷静だつたらしく軽くクレクをあしらへ。

「つ……ラジウ。あんたねえ。」

いつまでも固まつて冷や汗を流しているラジウを見て、キヴィはため息をつく。それから少し頬を膨らませ、膨れつ面をしてから言葉を続けた。

「勝てたのにわざとやったね？」

「ちよ、待つてよー！ それつてシルキアが負けたつてことー？」「そーーーーー？」

キヴィの言葉にすかさずアレンが騒ぎ立てる。甲高い声の対立に、ラジウは思わず耳を塞いだ。

「ああ、負けた。」

「はあー！ ちよつと何認めてんのー？」

喚くアレンに、シルキアは当然とこいつみじめひりつと言つが、案の定。大きな声でアレンに反論されてしまつ。

「…………ふう。」

そして、もう言い返すのも飽きたのか諦めたのか、シルキアはため息を一つもらしただけだった。アレンはシルキアの態度に納得がいかず、再び大きく口を開けた。

「あ、だから！ 引き分けなんだってば！」

「んでだよっ！？ だいたい、お前。勝つたならなんでそんなに引き分けにしたいわけ？ それも思いつきり納得いかないんだけど。」

シルキアが何も言わないので、仕方なしにラジウはアレンが言葉を発する前に声をかけた。しかし、やはりすぐさま反論が自分に返ってきててしまう。さらには質問が増えて。

「え……？ ジャあ、アレンさんは僕に仕えたいの？」

「んなわけあるかーっ！…」

アレンの設問に、きょとんと田を見開いてさらりととんでもない事を聞くラジウ。アレンも思わず声を大にして突っ込んでしまう。

「え？ だつて。僕が勝つたら全員僕に仕えるって約束でしょ？」

首をかしげて、まだきょとんとしてラジウは聞いた。その言葉にアレンは、ああ。と小さく呟き、頭を抱え込んでしまった。どうやらよつやつと、一番最初に約束したこと思い出したようだ。ラジウ達が勝つたら全員ラジウに仕える。シルキア達が勝つたらラジウ達は各自がいた場所に戻る。といつ約束を。

「で、アレンさんは仕えたくないんでしょ？」

「仕えたくなんかない。」

ラジウの問いに未だに頭を抱えつつもきつぱりと答えるアレン。

「じゃあ。今まで通りでいいじゃんか。何にも変わんなくてさ。」

大きくアレンに頷いてみせるラジウの顔からは自信満々さが伺えた。
アレンは、目を見開いて彼を凝視する。

第一章～三通りの道しるべ（20）～

「ふつ……あはははは。」

が、彼は突如笑い出したのだ。笑いをこらえよつとはまつたくしていない。大笑いと言つていいだろう、腹を抱えて身悶えしている。

「これからそのつもりだったね？ラジウ。」

キヴィはため息交じりにラジウに言つたが、彼女もまた笑い始めた。

「へへ……。」

ラジウもそれにつられて笑みを浮かべる。シルキアもふつと鼻で笑つた。

「ふふ。それじゃあラジウ様。帰つてご飯にでもしましょつか。」

彼らを嬉しそうに見て、そつとクレクがラジウに微笑みかけた。ラジウは彼に笑顔を返し、大きく頷く。

「うんー。」

「……ふつ。俺も一緒に行つてやる。」

「えつ！？」

シルキアの突拍子もない言葉に、ラジウは驚いたように彼を見上げた。しかし、アレンはやつぱりね。と小さく呟き肩をすくめたので

ある。

「俺自身は貴様に負けたからな。約束は守る。」

その後、シルキアは小さくラジウに耳打ちした。“それと、貴様のその馬鹿さかげんも気に入つたからな。”と。ラジウはそれに頬を膨らませてから笑つた。

シルキアは一度ラジウと視線を合わせてからアレンに向き直つた。

「貴様はどうする……？」

「オレ～？ オレはいいや～。自由気ままに生きていいくぞー。サークัสとかして遊んでるよ～。」

シルキアの問いにアレンはカラッと笑い、軽く言ひ。それに、ふつと小さな笑みを溢し、シルキアはアレンに片手を差し出した。アレンもニッと笑いその手をとつた。

「ふん。バカだから死なんとは思つが。」

「あつはつはつはー。ひつでえー。シルキアのほうこそ、ガキに負けるような力でくたばるんじゃねえよ？ あつは、[冗談だつて！ また会おうな！]」

軽く笑いながら会話しているアレンだが、シルキアの手に力が込められたのに慌てて繕つように言葉を並べた。そして、ぎゅっとシルキアの手を握り返してから後ずさりをし、彼の手から逃れた。シルキアに舌打ちされたのは言つまでもない。

「ほんじゅ。キヴィも、ガキもホゴシャさんも、まったくねえ～。」

アレンが片手を上げたのを合図に、全員がそれぞれ彼に向かって片手を上げた。

「それじゃあ、また今度遊んでね！アレンさん！！」

「やなこいつたーつ。」

ラジウが手を大きく振つて叫ぶ。それに、アレンは笑いながらアッカンベーをし、手を振つたかと思うと駆けて行つた。

「んじゃ、行くかね。」

「ああ。」

「あ、待つてよ。」

キヴィはアレンを見送ると、背伸びをし立ち上がった。それからさつさと城へと向かって歩き出す。彼女に相槌を打つと、シルキアも同じようひとつ歩を進めた。

大きな声とともにラジウが慌てて一人の後を追い、クレクも笑いながらラジウについていく。

アレンとシルキアは違う道を。また、ラジウも新たな仲間を加え、自分の道を歩き出したのであった。

第一章～真実と真意～（1）

第一章～真実と真意～

穏やかな朝が来て、少し遅い食卓に足を運んだのは三人。

「はい、三人とも遅いですよ。」

既に朝食を終え、待っていたクレクが笑顔でそう言った。もちろん、起きてきた彼らの朝食の準備をしながら。

「…………。」

「昨夜、ちょっと本読んでてね。」

「『Jつはーん！』

シルキアは眠いのか、無言のままうつらうつらしている。キヴィは欠伸を一つし、言い訳を口にした。ラジウに至ってはクレクの話を聞いていないのか、興味深々で日の前のオムレツに日を光させている。

「もう、他の子供達は朝食を終えて外で遊んでますよ。」

「はーい。いただきまーす！」

咎める言葉もなんのその。ラジウはカラ返事を返し、与えられた食べ物にかぶりつく。まったく。と小さく呟くものの元気な彼の姿を

見て、クレクは微笑を浮かべていた。

「と、自己紹介がまだだつたね。そういうえば。」

キヴィもむづくつと物を口に運びながら発言した。

「わつですね。いろいろとあつましたし。」

それに答えるのはクレクだけだつたりする。ラジウは勢い良く次から次へと食べ物を頬張り、シルキアは顔を落としたまま微動だしない。

「短い時間だつたのに長く感じたね。」の三田間。」

「私たちひとつは長い四田間でした。」

しみじみとこの数日間を振り返る一人。それは、平和な朝を実感することによってのことだらう。

「おかわりーー！」

そこに割つて入つたのは、全てを平らげて綺麗になつた皿。もとい、素早く食べ終えたラジウだつた。

顔には食べ残しがちらりほらり付いている。クレクは、皿を受け取ると席を離れた。

「つたぐ、元気だねえ。」

キヴィが呆れたように咳く。しかし、ラジウはそんなことお構いなしに、クレクから2個皿のオムレツを受け取つてはいる。そして、案

の定。先ほどと同じように頬張り始めた。

「とりあえず、ラジウ。あんたのこと。教えてくれないかね？なんでこんなところに、大人一人とたくさんの子供が住んでるんだい？確かにここは誰も住んでない空き家だったはずだけど。」

「うんとね、僕はラジウ・マイナー。この城の下にある城下町の王、ホーデュ・マイナーの一人息子だよ。あそこにいるのが嫌になつて飛び出してきたんだ。クレクは僕の従者で、他の子供達は僕についててくれたんだ。」

キヴィの問いに、オムレツを食べる手を止め。視線を上にじ考えるよう答えるラジウ。

「ホーデュ・マイナーって、あのつい最近死んだ？」

「……そうだよ。」

ラジウはキヴィの言葉に一瞬押し黙るが、頷いて返答してみせた。

「あー、酷なことを聞くんだけど……それは、本当かい？」

「本當だよ。父さんが生きてたら、僕はこんなことする必要ないもん。父さんがいなくなつたから、僕は自分の身を守るために逃げ出してきたんだ……。」

少し躊躇いながらも問いをぶつけるキヴィに対し、内容のせいだろつ。ラジウはむつとしながら答えた。口調もほんの少し熱くなつてきている。

「おかしいねえ……。」

「何が?」

「逃げてきたって、ホーマイ国からだろ?」

「うん。父ちゃんのホーテュのホーと、マイナーのマイの字を繋げたホーマイ国から逃げてきたんだよ。それがどうしたってことの?」

ラジウの答えにキヴィは頭を搔いた。どうやら相当言いくらいのことらしく。しかし、意を決したようにラジウと視線を交える。

「実はね、噂で聞いた話なんだけど、ホーテュ・マイナーの息子。ラジウ・マイナーは、ホーマイ国の中納つかり納まつたと言われてるんだ。」

「はつー?」

「ええー!?」

キヴィの言葉に思わず声をあげるラジウとクレク。ラジウに至つては、使つていたスープーンをカラントに落としてしまつ程驚いている。

「ちよ、待つてよー僕、国民の前で逃げ出したんだよー?しかもそれ、四日前の出来事だしー!」

ラジウは立ち上がり身を乗り出す。そして、信じられないー?と叫んだ表情のまま言葉をキヴィにぶつけた。

「落ち着いてくれよ。逃げ出した噂ももちろんあるんだよ。ただ、次の日には戻ってきたとか、あれはパフォーマンスだったとか。噂ではそういうことになつてゐるんだよね。」

「そ、そんな風になつてたとは……通りで誰もラジウ様を連れ戻しに来ないはずですね。」

「ちよ、どうこうひとーー?」

食後のお茶を飲みながら、キヴィは噂を彼らに伝えた。それに、クレクは落胆しながらも納得する。しかし、「ラジウはこうと、まつたく状況を飲み込めてはいけない。

「ようするに、代役を立てられた。つてことだらうね。しかも、あんたでなく。そっちがラジウ・マイナー本人とされてるつてことだね。」

「ほ、僕、偽者じゃないよつーー!」

「わかってるよ、ラジウ。ただ世間ではそういう噂があるつていうだけなんだよ。それに、あんたはあの国を捨てたんだから、そんなことはもう、どうだってことだろ?」

熱くなり弁護するラジウを抑えるよう、元キヴィは言つ。しかし、それは逆効果だつたようだ。

「どうだつていいわけないじゃんかっ!! 僕は、ホーデュ・マイナーの息子なんだ! 絶対良い王になつて、父さんの國も守るんだからつ!!」

「うやー、ラジウの思惑とは違つたらしい。大声で自分の主張を述べるラジウに、半ば押され、驚きを隠せぬままキヴィは彼を凝視している。

「……ふつ……あははっーあんたって、やつぱり面白いねーなんて大胆な発言するかな。」

そして、噴出して笑い出す。そんなキヴィの行動にラジウはむつとし、頬を膨らませた。その後、ダンツと大きな音を立てて椅子に座る。椅子がぎしづしこと音を鳴らした。

「僕はもつ、何も言ひことないからねっ！」

一言やう言ひと、ラジウはそっぽを向いてしまつた。明らかに拗ねている。それが更にキヴィを笑わせることになつてゐるのだが、当の本人は気づいていない。

「ぶつ…くくく。わかつた、わかつた。じゃあ、今度はクレク。あんたがしておくれよ。」

「え？ 私ですか？」

なんとか笑いを堪え、クレクに話を回すキヴィ。しかし、いきなり自分に話を振られ、クレクは抜けた声を出す。そんな彼に、キヴィは当たり前。と言ひよつに首を大きく縦に振つた。

「……私は、ラジウ様の付き人ですよ。ホーテュ様とラジウ様に忠誠を誓つておりますので。」

クレクはそこで一旦話を止め、優しい柔軟な笑みを浮かべた。

「他の方がどうなろうと知つたことではありません。その点は」「了承ください。」

じつやらクレクはあまり仲良くするつもりはないらしい。明らかに言葉を強調し、宣戦布告を言い渡している。流石にこれにはキヴィも多少頬を引きつらせる。

「人見知りが激しいだけなんだ。気にしないで。」

しかし、そこですかさずラジウが自分なりのフォローを慌てて入れた。もちろん、キヴィがそれに爆笑したのは言つまでもない。机に突っ伏し腹を抱えてひいこら笑つている。

「ええと……キヴィさん、大丈夫ですか？」

ぴぐぴくと肩を震わせる彼女に、クレクは心配そうに問いかけた。

「だ、大丈…夫つ！」

キヴィは掠れた返事と共になんとか顔を上げ、涙を拭つた。よほどおもしろかったらしい。

「次はあたしだね。あたしはキヴィ・ライズン。前に言つた通り町医者さ。性格は大雑把。見ての通り。そんな感じだよ。」

キヴィは、さらりと自分の紹介こなす。大雑把な性格を自覚していたのか。と思わずラジウとクレクは、内心突つ込んでしまった。

第一章～眞実と眞意～（2）

「さーて、最後はシルキアかね。」

その言葉に皆の視線が移動する。しかし、視線の先の人物は微動だにしない。尚且つ、ずいぶん前に出されたはずの皿の上には、まだ丸々と綺麗なままオムレツが乗っかっている。

「…………すー…………。」

「寝てんなーつ……！」

スパーーンといった小気味の良い音が響く。どこからか取り出したハリセンで、キヴィがシルキアの頭を引っぱたいたのだ。

「…………ん？」

しばらく間が開いてから。薄く目を開けるシルキア。声には出さないが、反応遲延…とラジウが内心突っ込みを入れたりもする。

「まつたくあんたは！寝ることしか能がないのかい！？」

「…………ああ、アレンか。」

大きな声で怒鳴るキヴィとは対照的に、シルキアは顔だけ動かし彼女を見てから落ち着いた声で呟いた。まつたくもってマイペースである。しかし、言つてる事は明らかに間違つていたりする。それに、キヴィは肩を震わせ怒る。そして、つかつかと何処かへ行つたかと思つと、水のたっぷり入つたオケを片手に携え戻ってきた。

「……田を覚ませーっ！…」

「惑つ」となくキヴィはシルキアの顔を思いつきり水の入ったオケに押し込む。その出来事に畠然とするほか一人。あまりのことに顔から血の気が引いている。

「……水か……。」

キヴィが押し込んでいた手を離すと、シルキアは顔を上げた。次に出てきた言葉は、単なるオケに入っていた物の感想。キヴィ以外はそれにどう突っ込んでいいものかと迷ってしまう。

「お湯のが良かつたかい？まつたく。さつさと血口紹介おしよつ。」

シルキアにタオルを投げ渡し、今までのことなど日常だと言わんばかりに次の話へ移ろうとしている。

「いや、むしろ止める。……血口紹介？」

タオルを受け取り、顔を拭きながら不機嫌そうに呟つシルキア。

「なんだい、顔すつきり。つていう顔してるくせに。名前とか言やあ、いいんだよ。」

キヴィは拗ねたように口を尖らせ応戦する。しかし、どうみてもシリキアの顔はそんな爽やかそうな顔はしていない。むしろ額に皺が刻み込まれ、とても不機嫌そうだ。

「ふん。服が濡れる。…名前？シルキア・ライズンだ。知ってるだ

『違う。』

「やうかい。私にじやないつつーにつーー！」

「ライズンって？キヴィとシルキアって兄妹なの？」

ラジウは一人の漫才に慣れてきたのか、一人のボケに突っ込むことなく気になつた単語を拾う。

ラジウの国では、下の名前がファミリーネーム。家族の名前である。先ほどのラジウの父についての話もそつだつたように、下の名前が同じ彼らは家族である可能性が高いのだ。

「あ、いや。兄妹ではないよ。」

キヴィは気まずそうに視線を逸らし頭を搔く。

「夫婦ですか？」

『違う。』

クレクの問い掛けにシルキアとキヴィの声が被つた。一人とも同じように額に皺を寄せていることから、明らかに嫌がっている。

「いや、間違うのはわかるんだ。うん。でもね、私たちのは家族の名前じゃないんだよ。」

キヴィが話しづらそうに一人を伺う。いつもと様子が違つことになりウは首を傾げた。

「じゃあ、何の名前？」

「…………。」

ラジウの問いに押し黙るキヴィ。答えたくないようだ。口はへの字に曲げられ、困ったように眉間に皺が寄っている。視線は自然とシリシアへ赴いた。

「……ふん。研究所の名前だ。」

シリシアは面倒くさそうに背もたれによづかかり、ため息混じりに鼻を鳴らす。そんな彼の答えにラジウは目を輝かせた。

「研究所? なに? キヴィとシリシアって研究したりすんの! ?」

「俺はしない。」

「……あ、あたしだってやらないうつー医者だつて言つただろ。」

平凡としているシリシアとは対照的に、キヴィは慌てふためいていふ。額からは汗が滲み出でおり、弁護しようとは声を出すとどもつてしまつた。そして、その怪しい態度のまま話を続ける。

「む、昔ね。入れられてた研究所の名前やー。あの前の名前は忘れちまつたからね。使つてるだけなんだよー。」

「へえ——。」

強い口調で捲くし立てるキヴィに、ラジウは疑いの眼差しを向ける。

「なんだいー別にキヴィと呼んでくれりやあいいだけだろつー? つ

てこうか、それ以外じゃ反応しないからね！以上！――

頬を赤く染め怒り口調で怒鳴り終えると、キヴィは自分は食べ終わった食器をそそぐと片し始めた。

「ちよつと、キ

「ラジウ様！」

キヴィを呼び止めようとするラジウの声を、元気な声が搔き消した。その声に反応して振り向くと、窓から少年が元気に手を振っている。笑顔が良く似合ひ少年だ。

「あ、サー――ト――」

ラジウは少年の名前を呼ぶ。少年の名はサー――ト。彼はラジウを追いかけてきた子供の中で一番年上で、リーダー的存在だった。

「ラジウさま――！」

可愛らしげ顔と共に、サー――トの隣から小さな手が出たり消えたりしている。窓の向こうにまだ誰かいるようだ。ラジウは窓に駆け寄つて下を見た。

「ノメルも来たの？」

そこに居たのは、前に泣きじやくっていた最年少の少女ノメルだつた。彼女は笑顔でラジウを見上げている。

ノメルとサー――トは兄妹で、とても仲が良いと評判だ。

「うん！遊びましょ、ラジウ様！」

ノメルの誘いに、ラジウは嬉しそうに頷きながら、窓の淵に足を引っ掛けた。そして、思いっきり蹴ると、外へと飛び出していった。

「サー、ノメル！何して遊ぶ？」

「うーん、鬼ごっこがいいよーー！」

そんな会話がだんだんと遠のいていく。

「まつたく、きちんと靴は履き替えて欲しいものですね。」

ラジウを見送りながら、ため息混じりにクレクは呟いた。しっかりと欲しい。そんな親心の表れである。

「元気だねえ。よし、あたしも行つてくるかね。」

「はい、こつてらつしゃい。キヴィさん。」

片づけをするクレクと、オムレツに手もつけずにまた寝入っているシルキアを置いて、キヴィはスキップ交じりでその場を後にした。

「さて……シルキアさん。『飯食べて下さー』のままでは、片付け出来ません。」

クレクは声を掛けながら、明らかに寝息を立てているシルキアを揺す振る。口調は冷たい。

「…………ああ。」

揺さ振られて起きたシルキアは、面倒くさそうに冷え切ったオムレツを食べ始めた。

「まつたく……。シルキアさん。私は……。」

シルキアの前に入れたてのお茶を出すと、クレクは急に笑顔ではなく真剣な顔つきになつた。そして、唾を飲み、ごくりと喉を鳴らす。

「貴方を。信じていませんから。」

はつきりと強い口調で言い切つた。

「では。」

シルキアの反応を待たず、くるりと背中を向けるとクレクは食堂から出て行ってしまった。残つたのは、寝ぼけ眼で遅い朝食を取っているシルキアだけ。

「…………。」

「…………ふん。」

彼は、ただ無表情のまま冷えたオムレツを口に運ぶ。

鼻を鳴らす。それだけの行動をしてから、シルキアは静かに朝食を済ました。

第一章～真実と真意～（3）

「ラジウー。」

裸足で広い草原を駆け回っているラジウを、キヴィが呼び止めた。

「あ、キヴィ。どうしたの？」

肩で荒く息をする彼女に、ラジウは不思議そうに駆け寄ってきた。

「ラジウに聞きたいことがあるんだ。」

掠れた声で答えるキヴィ。城から離れたこの小丘に元気に走ってきたラジウを必死に追いかけたようだ。そんな彼女にラジウは首を傾げて続きを促す。

「実はね、あなたの父について聞きたいんだけど。」

「ホーデュ様のことですか？」

ラジウと一緒にいたサートとノメルもキヴィに駆け寄ってきた。サートが気になつたのかキヴィに質問の内容を確認する。

「そうそう。私はね、いろんなとこを転々としているせいできく知らないんだよ。サートだけ？あなたはホーデュ様のことよく知てるのかい？」

「はい！知っていますよ！ホーデュ様は、この国の守護神と言われるほどの人でしたから。キヴィさんも噂くらいなら聞いてると思いま

すよ。」

礼儀正しく笑顔で答えるサー^ト。見たところ、彼はラジウと同じくらこの年齢だね。それにしてはしっかりしている。そんなイメージを受けさせる。

「そつそつ。噂なら腐るほど聞いてるんだよ。だけど、どれが本當かわからなくてねえ。」

「ふーん。やっぱり父上って有名だったんだね。」

キヴィイが苦笑うのを見て、ラジウはしみじみと言つたように言葉を紡いだ。

「そりゃそうですよ。ラジウ様！ ホーテュ様といえば、魔物に対抗できた唯一の人間と言われるほどなんですから…。」

サー^トが興奮しながらラジウに説明している。そりゃ、この世界では今、魔物と呼ばれる種が力で世界を支配しているのだ。ラジウ達程の少人数の人間は滅多に相手にされることはなく、平和な日々が続いているわけだが。

「……へ、へえ。唯一……。」

サー^トの気迫はラジウを一步下がらせるほどだった。そして、ラジウは戸惑う気持ちに額に皺を寄せる。今まで大人たちからは何も聞かされずに育つた身として、何も知らなかつたことに戸惑っているのだ。

「そつだよ。だから、あなたの国以外は相当酷いもんだったよ。」

「噂で聞いてます。魔物に家畜として飼われたり、労働力として働かされたりしていると……。」

昔の記憶がキヴィを苦虫を潰したような顔にしている。それにつられて、サートの表情も曇った。ラジウはその言葉に驚き、二人を交互に見ている。

「それ、で？ なんで僕の国は平氣なの？」

「平氣？ そりゃあ、あんた、ホーデュ様の力さ。ホーデュ様を怖がつて魔物が寄つてこなかつただけの話。」

「けど、ホーデュ様がいなくなつた今。いつ攻め込まれるかもわからなんですよね。」

ラジウの疑問はあっさりとキヴィに返される。サートが心配そうに顔を落とした。昔と今では状況が一転していること、それがラジウにもしつかりと伝わってきた。

そして、それと同時にラジウの奥から隠していた思いが首をもたげてしまう。

「……そう。だよね。ねえ、父上つてどうして死んだか知ってる？」

「魔王に挑んだから。じゃなかつたかね。」

「ラジウ様……。」

突如目から大粒の涙が流れた。それを見て、サートが困ったようにならぶ。彼の名を呼んだ。

「じめり、平氣。ありがとう。キヴィ、サー。僕に、父上の仇を教えてくれて。」

ラジウは必死に涙を拭いながら笑つてみせた。けれど、涙はとめどなく流れ落ちる

「あー……ラジウ。あたしが聞いたホーデュ様の尊、他に変なのがあるんだけどさあ。」

キヴィは頭をガシガシと搔いて田を泳がせた。それから何かを思いついたのか、言葉を紡いだ。

「変なの？」

それにラジウはすぐさま食いついた。気を紛らわせるなら、他のどんな話題でも良かつたから。

「ああ、行く先々で現地妻作る。とか、愛人が星の数ほどいる。とか……女つたらし。だとか。」

キヴィの言葉は段々と小さくなつていった。なぜなら、ラジウが固まって動かなくなつてしまつたから。表情からはハテナマークが頭の中で無数に浮かんでいるのが手に取るようにわかる。それもそのはず、ラジウにとっての父のイメージは、厳格で優しくて何より母といぢやつきこいていた。というイメージなのだから。

「や、そんなことないよつ！父上は母上と、僕が見てられないほどラブラブだったんだよつー？」

「……じゃあ、やっぱり嘘なのかねえ。」

「あの噂、嘘じやなくて本当の『』ですよ。」

ラジウがキヴィにそうだよつーと叫ぼつとした瞬間、横からあつさりと肯定の台詞が飛んできた。その声はラジウの隣で一人の会話を聞いていたサークのものだつた。驚いた顔を自分に向けるラジウとキヴィに笑顔を返しながら、サークは言葉を続けた。

「ホーデュ様は無類の女好きで、おとした数もふられた数も星の数。だと。このことは国でかなり有名でしたよ。それさえなければ完璧なお人なのに。って皆言つてましたし。あれ？ ラジウ様、知らなかつたんですか？」

そんな彼の言葉に砂のよつになるラジウ。でこを突けばそのまま崩れ去つてしまいそうだ。そんな彼の反応に、サークは不思議そうに首を傾げた。ラジウはやつともとの状態に戻つたかと思うと、うつむいて肩をわなわなと震えさせ始めた。

「…………クレクーっ！…」

そして、両の手をぎゅっと力強く握大きな声で叫んだ。叫びながら来た道を走り出す。

「ちよ、ラジウー？」

「ラジウ様ー？」

「あれー？ ラジウさまー？」

そんな彼の名を、キヴィとサー、ノメルがそれぞれ呼んだ。しかし、ラジウは止まらない。そのうち見えなくなってしまった。仕方なく三人は彼を追いかけることにした。

息絶え絶えに走ったラジウが行き着いた場所は城の洗濯場。

「クレク！！」

「おやおや、どうしました？ ラジウ様。」

そこに居たのは、ちょうど洗濯物を干しているクレクだった。ラジウは息をしつかりと整えようと深呼吸をするが、気持ちだけが焦つてどうも上手くいかない。それに対してもクレクはいつもにこやかな笑顔で見守っている。

「父上が……父上が女好きだつたつて本当……？」

やつと言葉を紡ぐ。大きな声の問いただしに、ピシッと音をたてて固まるのはクレク。明らかに多大な衝撃を受けている。

「……誰がそんなこと……を？」

「ちょ、ラジウー早いよ、あんた！..」

口だけをやつとじを動かすクレクの視界に、やつと追いついてきた三人が捕らえられる。そして、その三人のうち唯一大人であるう女性にクレクの目は向けられた。

「キヴィさんですか？ ラジウ様に余計なことを吹き込んだのは。」

笑顔のままキヴィに疑問が投げかけられた。その疑問には激しい怒

りと不信感が上乗せされており、必要以上の気迫を感じずにはいられなかつた。

「は、はい……。」

キヴィはその気迫に押され、顔を引きつらせながら返事をしてしまう。

「ね、クレク！ 本当なの？」

クレクの意識がキヴィに向かつたので、ラジウは彼の服を引っ張り、自分の問いに答えさせようとする。

「それは……。」

ラジウに視線を戻すものの、押し黙つて返答をしないクレク。話しあくないのがみえみえである。それにラジウはこめかみをピクリと動かした。

「クレク…… 答えて。」

「…………ラジウ様、私の口からは…………。」

真剣に見つめるラジウの視線に耐え切れなくなつたのか、クレクは顔を逸らして否定の意を述べた。

しかし、その否定の仕方は本当だ。と言つている様なものでラジウの顔が曇る。

そして、そんな彼に更なる痛い追撃が繰りださられる。

「ラジウさまー。本当のことよ。わたし、ホーデュ様の娘だってマ

「マが言つてたもの。」

「オレ達、全員。ホーデュ様の子供なんですよー。あははははー。」

「

その痛い追撃を行つたのは幼い少女。ノメルだつた。单刀直入に言う彼女の言葉でラジウは背中に影を落とした。

そして、サー^トによる止めの一撃。

これは痛いではすまなかつた、ラジウだけではなくクレクも砂と化してしまふほどの威力。

キヴィは話を聞いて思わず三人を見比べた。血が繋がつてゐる、まあ片方だけだがそう言わると似ているような氣もしないでもない。

「あ、あれ? ラジウ様……? もしかして知りませんでしたか……?」

あまりに無反応を決め込む、実際は頭が混乱して動けないだけだが。そんなラジウにサー^トは慌てたように聞いた。

「…………つ。」

ラジウは顔を茹でタコのように真つ赤にして、向きを変えると一目散に駆け出した。逃げたとも言つ。

彼の姿は小さくなりやがて消えた。

それをポカンと見送るその場に残された者たち。

「あ……ラジウ様。」

「……クレク。あんたも知らなかつたんだね?」

「まさか、サー^ト君たちがそうだとは知りませんでした……。」

サーートが去つていったものの名を呼び、キヴィとクレクの一人も半ば放心しながらポツリポツリと話していた。

「サーートお兄ちゃん、ラジウ様どうしたの？」

「わからないよ、ノメル。」

兄妹の会話が全員の気持ちの代弁をしてることはましまでない。

第一章～眞実と眞意～（4）

さて、走り去つたラジウはとこうと、一人城の近くにある湖のほとりに居た。

湖の色は薄い水色。底は浅いのか深いのか水が透き通つていないのわからない。

水面近くを泳ぐ魚はちらつちらつと影を現してはいるが。

「うー……変な顔。」

湖の中に[レ]しださらられる自分の顔を見て、ラジウはしょんぼりと言葉を落とした。

眉に皺が寄つており、口はへの字型。その割りに弱氣な色を見せる瞳。

自分の顔じゃないみたいだ。と、そう思った。

しばらく自分の顔を見てから、裸足になりその足で水をかき混ぜた。ひんやりとして冷たい水が心地よい。

それから思いつき足をばたつかせる。バシャバシャと水が景気のよい音を上げた。

楽しくてそのままついつい遊んでしまう。しかし、それで頭の中のものが綺麗さっぱりなくなることはなかつた。

それが再び顔をもたげると、ラジウは足を止め、ため息をついた。

「……はあ、なんだか頭がおつかないや。」

僅かにわざきまでの振動で揺れる水面を見つめる。それはやがて静かに収まつていいく。

「僕……どうちかとこうと母上似。なんだよね。そういえば、サー

ト……父上に似てた……。」

ぽつりと誰にともなく呟く彼の目からは、きらりと光るもののが溢れ出す。自分はあんなに近くに居たのに、そんな自分よりも他人の方が父を知っている。そのことに苛立ちを覚える。それともう一つ。なんとも言えない、胸にぽつかりと穴が開いたような空しさに駆られた。

「父上……。どうしてもういないの……。」

水の中に無かつたかのように消える涙。また水面が小さく揺れる。聞きたいことはたくさんあるのに。答えて欲しいことがたくさんあるのに。いつもの笑顔がみたまに。声が聞きたい。名前を呼んでほしい。抱きつきたい。

ラジウの胸の奥底で誰かがそつやつて叫んでいる。
ぎゅっと胸元の服を握りしめた。

「うう……。」

小さな呻きと共に水面が大きく揺れる。
くしゃくしゃになつて苦しそうな、みつともない顔も一緒に揺らぐのを、曇った瞳で捕られる。

あまりに胸が苦しくて、ラジウは目を閉じて深く深呼吸をした。
そして、目をゆっくりと開ける。

「わっ！…？」

水面が激しく揺れて、自分の顔が崩れた。それに驚いて思わず大きな声を上げてしまう。
意識せずに体は身を引いていた。

そして、水面を揺らしたものが水の中から姿を現した。

ラジウの目が捕らえたのは白くて鋭く太い歯と、暗く深い深い空洞。一瞬、それがなんだかわからず、大きな口を開けて見入ってしまう。しかし、ラジウはソレと目が合つた。即座にそれが魚だということに気づく。とてつもなくでかい魚だと。

また、歯があることからしても普通の魚ではないことが明らかなのだが。

大口を開けた魚は、湖から飛び上がり宙を舞う。そして落下。更にその位置はラジウのちょうど真上。

今にも魚はラジウを飲み込もうとしている。しかし、目が離せないで動けないラジウ。

ドスツ！――

大きな鈍い音とともに、ラジウの視界に光が戻ってきた。彼は、いきなり入ってきた眩しい太陽に目を細める。
ボチヤンという大きな音が耳に入ってきた。それと同時に水しぶき。水しぶきは辺りに散り、綺麗で鮮やかな虹を作り出した。

「……ふん。」

ラジウの横にスタッフと軽い音を立ててシルキアが着地する。ビリヤラ魚は彼に蹴飛ばされたらしい。

中途半端に長い汚れた金髪が風で揺れる。

それを目で追いかがらポカンとしているのはラジウ。

彼にシルキアは腕組をしながらじっと視線を送っている。見下ろすような形で。

鼻を鳴らしだけで特に何も言つてはいけないが、その瞳は不振な目。こんなところで何をしているのか?と、ラジウを問い合わせていたりする。

「えーっと……シルキア。何でここにいる？」

しかし、意図を汲み取れなかつたらしく、もよとんとした顔をラジウはシルキアに向けた。

「…………修行？」

「いや、聞かないでよ。」

問いかけに対し眉を潜め、何故か疑問系でシルキアの答えは出てきた。

それに対して、ラジウはすかさず突っ込み返す。

「ふん。貴様こそ何をしている?」

またもや鼻を鳴らし、シルキアは突っ込みをあつさつと受け流す。そして、先程伝わらなかつた意図を今度は言葉でさりげ出す。

「え?……えっと……水遊び?」

「聞くな。」

答えに詰まつて、今度はラジウが聞き返してきた。それにシルキアはきつぱりと突っ込みを入れる。

「…………」

「…………」

次に続く言葉が見当たらないのか、見事に会話が終了を迎えた。

あまりの気まずさがラジウを顔を横へと逸らさせる。しかし、顔を逸らさせた理由はそれだけではなかつた。

ラジウは思い出したのだ。さつきまで泣いていたことを。顔は涙でぐしゃぐしゃなはずなのである。

ラジウが顔を背けたのを見ても、シルキアは黙つたまま彼を凝視している。

「え？」

突如、暖かい感触が頭に生じた。そのせいでラジウは不思議そうな声を上げたのだ。

シルキアが軽くラジウの頭に手を置いている。

ラジウは、シルキアを見ようとした。が、シルキアの手の力によつて下に向かされてしまつ。

「……貴様は、強くなりたいんじゃないのか？」

「…………わかんない。」

シルキアの低い声は、不思議とラジウの心を落ち着かせた。問い合わせて考えてみたけれど、正直な話。心中ではまだ答えが出てこなかつた。

「僕、まだ子供で。弱くつて。父上とは全然違つんだ。父上の子供なのに……」

「貴様は貴様である。」

思つてこぬじとをぽろぽろと口から溢す。

シルキアが一言。しかし、その後に何か様子は無い。それがラジウを余計に不安な気持ちに搔き立てた。

「僕は僕だけどつ。僕、強くなれる自信がないんだつ！父上だつていないし、僕。僕……もう、駄目かもしない……辛いんだ。胸が痛くて。何かを吐き出しだくなる。どうしていいのか……わからない。」

ラジウはシルキアの視界から消えた。しゃがみ込んだのだ。シルキアが視線をやると、膝を抱え、腕に顔を埋めている。胸が締め付けられるような痛さに、ラジウの瞳からまた涙の洪水が止まらなくなる。

どうして。こんなことに。僕は。何が。どう。したいのか。

ラジウの頭の中に言葉が断片的に出ては消える。

「貴様は、自分の力で生きて行きたかった。のではないのか？」

「……僕の力？」

「誰かに守つて欲しいなら、飛び出さずにいれば良かつただりつ。安全な場所から。」

シルキアの手が離れた。

途端、ラジウの心に冷たい風が吹いた。不安が顔を擡げる。その不安に駆られてラジウはシルキアをそっと盗み見た。いつもと変わらぬ無表情。その顔がラジウを見ている。いつもと変わらぬ無表情はラジウをほつとさせた。

哀れみなんてない。帰れなんて言つてない。敵意を感じない。そんな表情だつたから。

「それに、弱いからこそ強くなれる。特にガキはな。」

ラジウは小さく笑った。シルキアが励ましてくれているのがわかつたのと、それに元氣づけられた自分に気づいたせい。彼は自分が強くなれる。そういう保障をくれたような気がした。

「はは。オーケー。そうだよね。僕は、まだまだこれから一強くなろうって覚悟してきたんだ。父上になんか負けるもんかっ！って。こんなところで挫けてたら強くなんかなれないよね。僕、シルキアよりも父上よりも強くなるよ。覚悟しといてね！」

ふふんと鼻を鳴らして宣戦布告。新たな目標と今までの目標を思い出し、やる気が出てきたようだ。

「ふん。」

シルキアは鼻を鳴らしても、楽しそうな密かな笑みをラジウに向けた。

ラジウの挑戦は受け取つてもらえたのだろう。

「よつしー！シルキアー！そんじゅ、さつそく修行つけよーーー師匠、
師匠！」

ラジウはいじりとてわんぱかりに片手をハイハイと挙げて元氣よく跳ね上がっている。

その顔は先ほどとは大きく違い、顔いっぱいの笑みで埋まっている。とても楽しそうだ。

そんなラジウとは正反対に、シルキアは額に皺を寄せた。

「…………弟子はどうだ。」

「ええ！？そこ！？そこ、突つ込むと！」……？」

かと思うと突つ込みとも取れない言葉。

冗談で言つた台詞に真剣そのもので返してきたシルキアに、ラジウは驚きの声をめいっぱいあげた。

激しく喧しいことこのうえない。

しかも、その後、大爆笑なものだから、より騒がしい。シルキアの額に皺がさらに深くなつた。

「ふう……笑いすぎだ。バカ。」

「あはははは、『』、『』めん！」

呆れた様にため息をつかれても、ラジウの笑いが止まることはなかつた。

シルキアのこめかみが動く。

「……ふつ。いいだろ？。修行をつけてやる。一つ目の課題は、さつきの魚を倒すことendi。」

顔は笑つてゐる。といふか、嫌味な笑いにしかラジウには見えなかつた。

小さくラジウは『うそ……つ。』と呴くが、その後が続かない。どひやら思考が停止していふよつだ。

「とつとと行つて來い。」

そんなラジウをよそに、シルキアは彼の後に回つこむと躊躇もせずその背中を蹴つた。

蹴られたことによって簡単に崩れたバランスのせいで、ラジウは抵抗もできずに水の中へまっさかさま。

「ジャボン！」という音と水しぶきが同時にあがつた。

その振動によって、黒い影がラジウに迫る。

「ぐつー！あふつー！」

が、しかし。そんなことよりも先に、ラジウの命は危険に晒されたりする。

バシャバシャと音を立てながら沈んでいく様は滑稽である。シルキアが小さな皿をさらに小さくして、無駄に手足を動かしながら沈んでいくラジウを見ている。

そう、ラジウは泳げないのである。

「…………ふう。」

やつとシルキアも理解したのだろう、いつもより数倍は重いため息をついた。

それから地面を蹴るとラジウの救出に向かうのだった。

シルキアは、あつたりと水の中からラジウを引き上げながら、『陸で鍛えるか。』と小さく呟くのであった。

第一章～眞実と眞意～（5）

時刻は夕刻を過ぎ、城の食堂で美味しそうなにおいが立ち込めていた。

もちろんそれを作っているのは朝ごはんの準備もしたクレク。だいたいの人が食堂に顔を見せ、各自の椅子へと座っていく。しかし、クレクはそわそわと落ち着きなく辺りを見回していた。

「ラジウ様、遅いですね。クレクさん。」

クレクの手伝いをしていた、サーティが心配そうに同じく辺りを見回した。

夕食の準備は当の昔に終わっている。それにも関わらず姿を現さないこの城の主。

「そう。ですね……いつたいどこまで行つたのでしょうか……。」

城の主ラジウは、昼間泣きながら駆けていったのだが、それっきり姿を見せないでいた。

再び扉へと視線を投げるが変化はない。クレクの顔が暗く曇っていく。

昼間から姿を見せないラジウを、あの時追えば良かつた。と、クレクは思っていた。しかし、彼には多様な仕事が待ち受けていたため、追うことも探すこともしなかつたのだ。根底には、ラジウが起こすいつも軽い癪癩で、時間が経てば収まる。そう考えていたことがあげられる。だから、彼もいつも通り常務をこなしていたのである。

「たつだいま――つ――！」

暗い空間を打ち破るがごとく、噂の当人が元気よくドアを開けた。ドガガガタン！と音を立てる。

「うわあ、美味しそうな匂い～。」

上機嫌で入つてくると、目いっぱい息を吸い込むラジウ。顔は満面の笑みである。そして、料理へと目が釘付けになつていたりする。

「ラジウ様！！」

ラジウはビクと身を固まらせ、慌ててクレクへと向きを変えた。クレクは怒ったような、悲しいようなそんな声でラジウの名を呼んだのだ。そして、彼の顔からは不安や心配などが見て取れる。そもそもそのはず。ラジウの格好は毎間出て行つた時とは比べ物にならないほど擦り切れてところどころ穴が開いている。最悪、服が千切れで原型をなしてない部分さえもある。更に、服だけではなく肌も擦り切れていたり、赤く腫れていたりしている。何より、血がところどころから出ているのが気になるところだ。それどころか、青や紫に変色してしたり、血が黒く変色している部分さえもある。一番酷いのは目で、左目の辺りが全て青紫。打ち身になつていた。クレクはラジウに駆け寄ると視線を合わせ、彼をまじまじと見た。そして、しだいに皺が額に寄つていく。

「ラ、ラジウ様。このケガ……は？」

細く震えている声でクレクは聞いた。不安そうな声に、ラジウは視線を泳がした。そして彼同様、おたおたした口調で答え始めた。

「え……えっと、修行でちょっと……。」

「修行？」

歯切れが悪いラジウの言葉をクレクが反復する。理由を話すまでは決してばぐらかさせない。そんなイメージを受けるくらい真剣なクレク。

こうなると、ここでも動かないことをラジウは知っていた。だから、仕方なく説明をするのであった。

「う、うん。僕、弱いから強くなるのと思つて。シルキアに修行をつけてもらつてたんだ。」

自分の後ろに静かに立ち、表情からは何も読み取れないシルキアを、ラジウはちらりと見た。クレクの視線も、ラジウにつられシルキアを見た。その視線は鋭く射るような目だつたが、すぐいつもの穏やかな目になるとラジウに視線を戻した。

「……そう、ですか。シルキアさんに……。ラジウ様、キヴィさんに手当をしてもらつて下さい。それと、今後はこのようなことをすることをお止め下さい。」

ラジウに柔らかく笑んで、優しい口調で言うクレクだが、言葉の内容にはこさかとげしさが拭えない。

そして、クレクは椅子から立ち上がり、シルキアの前へと進み出た。ちょうどビ、ラジウとシルキアの間に立つような感じだ。

「ちょ、クレク！」

クレクは、自分の後ろへと追いやつたラジウの言葉には聞く耳も持たず、シルキアにきつい視線を送った。

「シルキアさん。ラジウ様を危険な目にあわせないで下さい…」

怒氣をはらんだ声。そして鋭く殺氣を帯びた目。クレクは明らかにシルキアを威嚇していた。元は敵同士であり、戦いでラジウに怪我が多かつたことなど、クレクが彼を敵視するのは当たり前と言えば当たり前だろう。

シルキアは彼に視線を返した。シルキアの場合、元から細い目であるため、きつく睨んでいるように見える。

「…………。」

しかし、言葉は返さずに無表情のまま立っている。

「ラジウ様にもしものことがあつたら…」

「クレク！何言つてんの！？たかがかすり傷だろ！？」

何も言わないシルキアに対し、今にも掴みかかりそうな勢いでクレクは彼に怒鳴った。そんなクレクの服を力いっぱい引っ張り、ラジウが抗議する。

「今日はこの程度の傷で済みましたがけど！シルキアさんとラジウ様の力の差では、死んでもおかしくないんですよ！？」

ラジウの抗議に、クレクは思わずその怒氣がはらんだ口調のまま、ラジウにまくしたててしまった。

「僕、死なないよ！」

売り言葉に買い言葉。クレクの言葉にのせられて、ラジウも声を張

り上げた。こうなつてしまえば、ビザが折れるまでこの言い合
いは終わらない。

「こいつ何があるかわからないでしょー? 危険なことは止めて下さ
い!!」

「い・や・だ!」

「ラジウ様! いい加減にしてくださいーこんなところで暮らすこと
さえ貴方はまだ慣れていらっしゃらないのに。これ以上無茶をし
ないで下さい!!」

「つぬつさこなあ! ムチャなんてしてないしー! 僕のことなんだか
らクレクには関係ないだろ!!?」

「関係あります! ござつて時に助けられないでしょー!? それに、
ラジウ様は子供なのですから、一人で全部なんてできません!!」

いつまでも大きな声で吠え合つ一人。しかし、クレクの一言でラジ
ウは一瞬押し黙り、顔を落とした。それからすぐに顔を上げると、
涙目でクレクをキッと睨みつけた。

「僕を子供扱いするなつー!」

大声で叫ぶと、ラジウはシルキアの腕をとつた。そして彼を引きず
るように、ドアに手をかける。

「もういいつー! クレクなんか知らないつー! 大つ嫌いだー!」

そう言い残すと、シルキアの腕を強引に引っ張り、ラジウはドアか

ら外へ出て行ってしまった。ドタドタとこづ足音がだんだんと遠ざかる。そんな足音を見送っているクレクは、微動だにできないほど固まっていた。

「……大嫌い……。」

今にも倒れそうなくらいクレクの顔は青ざめ、肩の力が抜けていた。頭の中はぐわんぐわんと揺れるよう。クレクはラジウの言葉に大きなショックを受けていた。

「あーあ、心配性だからねえ。」

キヴィが今までの出来事を見てやっと口を開く。

「クレクさん……でも、よくわかりますよ。ラジウ様、危なっかしいですもん。」

あまりに動かないでいるクレクを心配してか同情してか、サートが慌ててフォローをする。

「親の心子知らず。だね。あ、ノメル。こぼさないでお食べ。」

ため息を一つついてキヴィは状況を一言にまとめた。それから向かい側に座るノメルに、彼女は笑いながら注意した。サートがその言葉を受けて、手拭でノメルの顔を拭き、机を布巾で拭い去った。

「わっぷ。ねえ、ラジウ様、平気なの?」

ノメルは首を振って手拭から逃れ、首を傾げた。幼い彼女にもラジウの不安は伝わってきているのだらう。

「ああ、平氣だと思うよ、シルキアもいることだし。まあ、あの調子じゃあ今夜は帰つてこないかもしれないねえ。だけど、明日には帰つてくれるや。」

「やうやう。明日にはいつものラジウ様に戻つてゐるから、ノメルは気にしなくていいんだよ。」

「ふーん? そななんだ。早く元氣になるといいね、ラジウ様!」

キヴィの言葉にサークは頷き、ノメルの頭を撫でた。彼に頭を撫でられ、笑顔で返答してから、ノメルはまたご飯を食べ始めた。この間、未だにクレクは固まつたままである。

第一章～眞実と眞意～（6）

さて、ラジウとシルキアはとこつと。先ほど湖にいたりする。薪を集め、湖の辺で火をたき、串刺しにした魚を焼いている。その附近に、目を赤くし涙をとめどなく流しているラジウと、濡れた髪をほどき乾かしているシルキアがいた。ちょうど火を囲むように彼等は向かい合つて座っていた。火の明かりで影が揺らぐ。

「…………。」

シルキアは相変わらず己から何も離そとはしない。ラジウは、ゆらゆらと揺れる火を見ながら口を開いた。

「……なんで子供扱いするんだろ。」

「子供だからだろ。」

「つー・シルキアまでつーーー！」

ぽつりと呟いたラジウの言葉に、シルキアが反応する。しかし、その彼の台詞はラジウにまた大声を上げさせた。
そんなラジウをシルキアは一瞥すると言葉を紡いだ。

「……貴様が貴様であるよーに、子供は子供だ。」

シルキの声は静かで、ラジウの中の怒りをだんだんと鎮めていくようだつた。決して暖かくはない冷たいような静けさだが、ラジウは確実に彼の言葉と声で落ち着きを示し始めている。

「……伸びしたいお年じりなのー。」

口をわざとへの字にして、ラジウはそう言つた。その口調は、先ほど取り乱したようなものではなく、拗ねたようなものに変わつていた。

自分が幼いことはよくわかつてゐる。どんなに頑張つたことひで、年が取れるわけでもない。それは認めざるをえない事で。

ラジウは組んだ腕に顔をのせた。

「あーあ。僕ってそんなに頼りない? そりゃあや、王宮生活からこんなところに来て、いろいろ大変なことあるよ? でもそんなことで文句なんか言つてられないじゃんか。僕の他に人がいるのに、僕だけ文句言つて贅沢なんてできないよ。ねー、聞いてるー?」

今まで溜まつていたことをべラべラと言葉にして吐き出した後、ラジウは口を挟んでこないシルキアに確認の意図を込め、話を振つた。

「ああ。」

「……じゃあや、シルキアはビーヴ思ひづへ。」

一言の返答のみで台詞を続けよつとしないシルキアに、ラジウが仕方なさげに促した。

「ふん。貴様の好きにすればいいだう。何かをすれば何かが起きる。それを全て予測するのは不可能に近い。」

「そりゃあそりだけだ。じゃあや、質問変えよつ。僕つて、一
人で生きて行けなさそつ。」

身もふたもない言葉に思わず苦笑いを浮かべたラジウ。しかし、その返答は彼が聞きたいものとは異なっていた。だから心臓がドキドキするのを押さえ、ラジウは思い切って答えてほしい核心の問い合わせかかる。

「ああ、無理だう。」

「うつわ!? 即答!—!—?」

あまりにそつけなく素早い返答は、ラジウに大きな声をあげさせた。シルキアはしばしラジウの顔を相変わらずの無表情のまま見た。

「……ふん。半人前。」

「ええ！？ ひつどく泣くよ！？」

「勝手にしろ。」

「うわあ……冷たい。」

シルキアの言葉にラジウの大げさなアクションと声。しかしラジウからは、どこか楽しげな雰囲気が垣間見れる。

ラジウの台詞にシルキアは一度小さくこめかみを動かした。

「そうか。それならこれはやらんでもいいな。」

そして焼けた魚を全て手に取った。冷たいという言葉が、彼の機嫌を悪くしたようだ。その腹いせだう、案外大人げない。

「わっ！ やだっ！ タ飯食べてないからお腹減つてるのにー！」

「知らん。」

ラジウがシルキアの手から魚を奪おうと彼に掴みかかるが、いかんせん子供の力、びくともしないつえに魚を上に掲げられてしまい手も足もない。

「ぶーーっ！」

「変な顔だな。」

頬をパンクするのかと思つべらじん膨らませてみれるラジウに、さらりと思つたことを率直に言つシルキア。それにラジウは、ショックを受けたように呑めき口を開け、頬に手を当てた。その面白いこと。シルキアはその顔を見て、無表情のままだが少し噴出した。噴出されたことに更にショックを受け、ラジウが何か言おうと口を開く。

「ラジウ様———っ！」

くつとかかろうとしたその時、ラジウの名前を少し高い子供特有の声が呼んだ。声を方を一人が見ると、暗い中を小さな影が、こぢらに向かって駆けてくる。

「サー···何でここがわかつたの···？」

近づいてくる少年に、ラジウはびくつしたよつシルキアから離れ、駆け寄った。ラジウの前まで来ると、それがサー··トであることがよくわかつた。息を切らせてここのから、城からここまで走ってきたのだろう。

「はあはあ。そ、そりやあこれだけ大きな声で騒いでたらわかりますよ。」

サーートが息を整えながらしゃべる。「ラジウはその返事を聞くと、何を思ったのか辺りを見回した。しかし、人影は他にはない。

「あ、オレだけですよ？ ノメルは寝かしてきましたし、クレクさんはあの後倒れちゃって。それでキヴィさんが看病しています。」

そんなラジウの行動を読み取つてか、サーートはにっこり笑い説明した。

「たお……れた？」

サーートの口調に、ラジウは頬を引きつらせた。予想の範囲をこえていたのだろう、少しばかり焦りを見ることができる。サーートは頷いてラジウに答えた。

「あ、はい。だいぶショックだつたらしく……。」

「弱いな。」

思つたことを口走るシルキア。そして、ラジウは氣まずやつに首をたれた。

「もう、違いますよ、シルキアさん！ クレクさんせんせはまだラジウ様が大切なんですよー！」

「……守らなきゃいけない存在だからね。」

サーントがいきり立つて説明するが、それにラジウは寂しそうに反応を示した。しかし、次のサーントの言葉にラジウは固まるのだった。

第一章～眞実と眞意～（7）

「違いますよ！好きだからです……」

「は？？」

「守らなきやいけない存在だからじゃありません！クレクさんを見てればわかります。クレクさんにひとつドリジウ様は好きだから守りたい存在なんです……」

「ぶつ……は、恥ずかしい」と言つなよ、サー……」

真剣にラジウを見つめ熱弁するサーートに対し、ラジウは両手をぶんぶんと振つて慌てていた。彼の顔は耳まで真つ赤であるで茹蛸だった。よほど恥ずかしかったのだらう。

「あれ？……ラジウ様、顔真つ赤ですよ？」

「う、うるせーなっ！」

驚いたように瞳を見開き、不思議そうにサーートは首を傾げた。それに両の手で顔を隠そうとするラジウ。そんな彼を見てサーートはにっこりと笑つた。何かをサーートはわかつたのかもしれない。

「ラジウ様、クレクさんとのこりに戻りませんか？」

「…………。」

サーートの説得に折れたらしく、ラジウは小さく頭を縦に振つた。腕

の間から見える顔は、まだ多少赤い。

「貴様、すゞいな。」

「え～？ シルキアさん、褒めても何も出ませんよ？」

魚を平らげ腕組をしながらその様子を見ていたシルキアが、サークに言葉をかけた。その口調はどこか驚きが混じっていた。それに対して、笑いながらサークは答えた。

「あ、シルキア！ もしかして全部食べちゃったの！？」

「ああ。」

サークの視線がシルキアに向き、ラジウも彼に目を向けた。そして目に付いたのは魚がついていない串。それが何を示しているのかラジウはすぐに気づき、大声をあげた。

シルキアは平然と頷き後始末をし始めた。砂をかけ、火を消していく。それを見たラジウは肩をガクンと落とした。これ以上彼に何かを言ったところで仕方がないことがわかつたようだ。

「んもうー仕方ないから帰つてクレクに飯作らせるーーー。」

ラジウは、怒りを発散するかのように叫んでから踵を返して、足踏み荒く歩を進めていった。

「シルキアさんも相当なものだと思いますよ？」

「……ふん。」

その様子に笑みを溢し、サーントはシルキアも声をかけた。シルキアは鼻をならして返事をするだけ。それにサーントはひとしきり笑つてからラジウの方へと向きを変えた。

「ラジウ様、待つてくださいよーーー！」

さつむと先を歩いていくラジウを彼は追つ。傍から見れば何とも穏やかな光景だ。危険が迫つているとも知らずに、彼等は歩く。

湖の水面に泡が少しづづ浮き出す。水面の色が段々と淡くなる。光が水面の下から上つてきているのだ。

”何かいる”初めに気づいたのはシルキアだった。しかし、時既に遅し。水面から飛び出た”ソレ”はラジウとサーントに向かつて、襲い掛かるつとしていた。

「逃げろーーー！」

シルキアの咆哮がラジウ達の耳に届く。その声は、二人を振り向かせた。目の前には先ほどの光景とはまったく違う、水色に輝く長い布のようなものが目の前にあつた。しかも目と鼻の先まで迫つている。

「ラジウ様！」

ひとつにサーントはラジウを両手で強く突き飛ばした。

「つたあーーー？」

間抜けな声を発し、ラジウは勢いがついたまま大きく吹っ飛んだ。背中を地面に打ち付けたが、慌てて身を起こす。すぐさま、先ほど

まで自分が居たであるう場所に田をやつた。その場所はすでに何もない。あつという間に水色の”ソレ”がサートを飲み込み、湖の中へと引きずり込んでいった。あまりの出来事に、放心状態になりぼーっとしてしまうラジウ。

「ちつ。」

シルキアは彼を見て舌打ちをすると彼の傍へ走った。そして、走つたままの勢いでラジウを小脇に抱える。また水色の”ソレ”が湖から顔を出したのだ。

抱えられた瞬間、ラジウの視界は湖の光景ではなく、暖かみのあるオレンジの光に照らされたレンガの壁に変わっていた。シルキアが自分を抱えて、彼の特殊な能力の一つであるテレポートで移動したことがわかるまで、数秒かかる。

どうやら城の一室にテレポートしてきたようだ。白いベットが規則正しく三つ四つ並んでいる。部屋の端にある机の上は、書類の山で埋まっていた。その近くにある椅子の上には、いつもより大きな眼鏡をかけた、青緑の髪と瞳を持つ女性、キヴィがいた。ラジウ達を、口をあんぐりと大きく開けながら見ている。

ここが城にある病室だということに、ラジウはやつと氣付いた。

「何やつてんだい、あんたら？」

目を見開いたまま、不思議そうに問いかけるキヴィ。シルキアは、ラジウを床に降ろすと彼女に向き直った。彼の額にはじんわりと汗が滲み出している。

「……水色で、輝く触角みたいなものを何だと思つ？」

「そりゃあ、人間じゃないだろうね。動物にしたって、そんなもの

は聞いたことも見たこともないよ。極めて魔物の可能性が高いだろ
うねえ。」

真剣なシルキアの顔つきに、キヴィも真顔で答えた。何が起きて
るのか分析するかのように、ラジウとシルキアを交互に見ながら。

「そうか。」

「そうだよ。いつたい何があつたんだい？あんたの疲れ具合からし
て、部屋一個分とかそういう距離の場所じゃないね？」

何も状況説明などしないシルキアに、キヴィが業を煮やして問い合わせ
め始める。話の内容からして、どうやら彼女は、シルキアの能力に
ついてよく知っているようだ。

「ああ、魔物が居た。少し離れた湖にな。」

キヴィの言葉に、小さく頷いて台詞を紡ぐシルキア。

「そ、サートがつーキヴィ、サートがつー！」

今まで声を発せず、顔を落とし床を凝視していたラジウが、シルキ
アの言葉に反応を示すかのように、いきなりキヴィに訴えかけた。
しかし、上げられた表情は眉間に皺がより、目からは涙が次々に零
れ落ちている。同じ言葉をうわざりながら何度も叫んでいるのが、
混乱しているのを示していた。

「ちょ、落ち着きなよーラジウー！」

いきなり服を掴まれ、涙目で見上げられては、流石にキヴィも慌て

ふためく。それでも、ラジウが落ち着く様子は垣間見れず、必死な叫びは続く。

「サーートがっ！ サーートが大変なんだよーー！」

「ラジウーー落ち着けつていいてるだろーーー？」

喚ぐラジウに対抗して、大声で怒鳴るキヴィ。それに、ラジウはびくっと身体を震わせ黙り込んだ。そんな彼に、腰を落とし、逆に見上げるような位置にキヴィは身体を動かした。そしてラジウの腕を優しく握った。

「ラジウ。いったい何があつたのか。ゆっくりでいいんだ。落ち着いて説明しておくれ。」

「あ……サーートが……サーートが湖の中に……水色の変なのに……連れてかれた……の。」

ラジウは、震える青い唇をなんとか押さえ、小さな声で少しづつ語つた。キヴィは『よくできました』と言ひながら、小さな彼の頭を軽く撫でた。大丈夫、安心しろ。そう言つてゐるようだ、ラジウは強張らせていた肩をおろした。

「シルキア、ラジウ。クレクを連れてそこへ行くよ。何が起きてるのか、この田でじっかり見るためにな。」

キヴィはにっこり笑つてみせた。

第一章～眞実と眞意～（8）

そして、場所は湖のほとりに戻る。暗闇の中で、サラサラという水の音が辺りに響く。

月明かりが人影を四つ浮かび上がらせた。

「……何も変わったことはなさそうですが……。」

辺りを見回し、クレクは呟いた。確に辺りは静まり、月明かりに照らされたその場所は何の変化も見られない。

湖はただ月の光を淡く反射させるだけ。

「で、でもっ！－！湖の中から何か変なのが出てきたんだっ－－！」

「近付くな。」

そんなはずはない。そう心が急き立てて、ラジウは湖に駆け寄ろうとする。しかし、シルキアが、彼の服を掴み止まらせる。先ほど異変があつた場所に近付くのは、危険だと言つているのだ。

「湖に住む魔物といえば巨大魚、水の精靈、もしくは妖精。そう称される部類かねえ。大概そういう奴らは、」

キヴィはぶつぶつと思案しながら、近くにあつた手ごろな石を拾い上げる。そして、大きく振りかぶつた。

「自分の住処を荒らされたら出でてくるんだよつ！」

そして、そのまま石を投げた。湖に人が近づくことはなく、石が水

面を揺らす。すると、先ほどと同じ発光した水色が水底から這い上がり始めた。

「ほーら、お出ましだ！」

バシャッといつ音を立て、水柱が勢いよく立ち上る。水しぶきがあたりに撒き散らされる。それらがだんだんと收まり、視界から水色が消えていく。

「えっ！？」

ラジウが素つ頓狂な声をあげる。

水が消えると同時に現れたのは、透明な薄水色をし、辺りを照らす美女。人間のような形をしているが、足は水に溶け込み、体中には青い文様がところどころ浮かんでいる。また、長い髪は途中で体の中に溶け込み、表情は無表情のままラジウ達を見つめている。

その水の中から現れたそれに、困惑の色を浮かべているのはラジウ一人だけ。

「ふーん。見た目からすると、精霊みたいだね。」

キヴィが平然としながら言う。慣れているのか、性格のせいなのか定かではないが、どつしりと構えている。

「精霊？さつきから思つてたんだけど、魔物つて種類あるの？」

そんな彼女の態度につられてか、緊張がほぐれた様子でラジウは問い合わせをぶつけた。

彼は世界の状勢をつゆほども知らなかつたのである。だからそんな問い合わせが出てくるのだ。多分彼が知つているのは周りに居た物のこと

だけだらう。完璧に箱入り息子といったところだ。

「ああ、知らないのかい？魔物つてえのはね、人間と違つた形を持ち、人間よりも強い力を持つ者を総称して言うんだよ。特に好戦的な者を指すんだけどね。その中にはいろんな種類があるんだよ。だいたい見た目と能力によつてわけられてるんだけどね。精靈つていうのは、実態……いや、形を持たないものを言うんだ。」

「形を持たない？今、田の前に居るのに？」

「あれは私たちのマネをして形をとつてるだけさ。精靈は見るたびに変化する。それは何かと対峙する時、こいつはその形に似た姿へと変貌する性質を持つているらしいんだよ。だから、今はあんな風に人間に近しい形をとつてているんだ。」

キヴィは、次から次へ自分の頭の仲から知識を引っ張り出していく。隣でラジウが早くもプスプスという音を立て、煙を上げているとも知らずに。

「ええと、キヴィさん。完結に言つどビリコツとですか？」

そんなラジウを心配そうにみやり、助け舟を出すクレク。キヴィはそこでやつとラジウが自分の説明についてきてないことを知った。仕方ないねえ。とぼやきながら、キヴィは一言にまとめた言葉を吐く。

「サートを連れて行つたのは、多分こいつ。ってこと。」

キヴィの答えがわかつたのだろう、ラジウは氣力を取り戻した。

「そつか、こいつがつーサーを返せーーー！」

そして、薄水色の”ソレ”を睨みつけ、大きな声で叫んだ。それにキヴィが、やれやれと言う様に方をすくめるのだつた。

ラジウの声に応えるかのように、”ソレ”はやりと笑んだ。笑みは妖艶で、それでいて生氣が感じ取れない冷たいものだつた。それにぞつとして全員が固まつたとき、再度水しぶきがあがつた。さつきよりも大きな水しぶきで、湖は覆い隠されている。

「な、なにこれ……？」

視界がやつと開け目の前に現れたのは、灰色で円状の平べつたい階
がいくつか縦に連なつてゐる建物。水の上には一番広い一階しか出
ていないが、水面にはまるでそこにあるかのように、鏡のごとく六
階まで映し出されている。下に行けば行くほど縁が小さくなり、ま
るで逆さまに立つてゐるような錯覚に見舞われる。水面に写つてい
るものは現実には存在しない。

しかも、その出でしる部分へは、彼等が居る場所へと橋かかかっていた。

「うーー水の中に城つてか?ラジウ、見て!らん!一番小さな円の
ところ、てっぺんの窓つー!」

「ナーフ」

キヴィの言葉に全員が視線を移動させる。一番小さな円の窓に、サートの顔がちらりと覗いていた。身体には水の荊が突き刺さり、彼の動きをとめている。

「ちょ、キヴィ！助ける方法ないの！？」

異様な事態に焦りを露わにするラジウ。彼はキヴィへと真剣な視線をおくる。その眸は心配という色によって曇っていた。

「あるよ。……あの中に入つて、サートを助け出せばいい。それだけだよ。」

キヴィは少し間を空けながら説明をした。そしてさつ氣なくラジウの襟首を捕らえる。

グッ。そんな音がするかのように、ラジウの首に服がめり込んだ。彼女から説明を聞いたラジウは、矢も盾もたまらずに走り出そうとしたのだ。

「あなたは、そやつて最後まで話を聞かないんだからまいりよ。つたく。」

咽ここんでこるラジウの服を離し、ため息をつく。そして、ラジウが不満そうな顔を自分に向けてくるのを確認してから言葉を続けた。

「いいかい？ なんでわざわざ一階だけ地上に出でると想つ？ しかも『丁寧に道まで作つてさ。』

キヴィの間に、ラジウは首を一回、一回……三回とひねる。そして、少しの間のあと、はつとして手を叩いた。

「親切な人なんだね！」

「バシン！ ……」

「違うつ……」

ラジウの言葉にキヴィイのハリセンが炸裂した。思わず頭を抱えるラジウ。それを苦笑いながら見ていたクレクが、口を開いた。

「罠の可能性が高いのですよね？キヴィイさん。精霊達は、精神的ダメージを与えることが好きだと聞いています。」

「そうさ。だから間違いなく、あそこに入るのは危険なのが。というわけで、私はシルキアと私で行くことを押すね。」

クレクの言葉に頷きながら、キヴィイは提案をする。もちろん、その提案はラジウに対するものだつた。先ほどの行動を見れば、一目瞭然。サートを助けに行くと言いくに出すにちがいなかつたから。

「えーー！？キヴィイは危ないよ！そ、そりゃあ一人よりはいいかもだけど……。」

やはりラジウは不満そうに抗議した。自分も連れて行け、そう言つているのがよくわかる。

第一章～眞実と眞意～（9）

「それなら、私が一人で行きましょう。」

考えもつかない人物からの申し出に、キヴィイとラジウが目を見開いた。クレクはそれを見て、気まずそうな笑みを浮かべ、シルキアへと視線を移した。

「ふん。貴様一人ですか？ それなら、俺一人で十分だ。」

その視線に横目を返し、シルキアは自信満々の一言。その台詞に、クレクの顔が強張った微笑みへと変化する。

「あまり甘く見ないで欲しいのですが、どうせ協力などするつもりはありませんし。私は私、シルキアさんはシルキアさんで行けばよろしいのではないでしょ？」

固まつたままの笑みを浮かべ、クレクは言った。その笑みは冷たく無機質である。クレクが踵を返し、湖に向かおうとすると、ラジウが彼の服の裾を引っ張つた。

「僕も連れてってよー！」

そして自分の意見を主張する。それに対してクレクは眉を潜め、首を横に振つた。彼の行動は明らかに拒否を示していた。ラジウは彼の反応にいつたんうな垂れた。

だが、思い直したのかすぐに顔を上げた。そして、シルキアを見る。今度は彼に訴えているのだ。

「……足手まといはめんだ。」

「つーーー！」

シルキアの言葉に言葉をなくすラジウ。眉がハの字に変わり、頬を膨らませ、目からは涙がちらりと顔を覗かせた。それは明らかに落胆しているのが誰にでもわかつた。クレクにさえ胸をぎゅっと掴ませるくらいだ。

シルキアはラジウを見たまま言葉を続けた。

「だが、経験を積まなければ、足手まといはいつまでも足手まといだ。」

シルキアは話の途中でラジウからクレクへと視線を移した。シルキアの発言はどうどつてもラジウの肩を持つような内容だった。その発言は、ラジウにぱっと顔を輝かさせ、逆にクレクには額に皺を増やさせたものとなつた。

「それでも危険な目にあわせられません。それならば私と貴方が行けばいいだけの話しでしょう？ そうすれば簡単に方がつくはずです。」

クレクのひどく秘めたい視線と口調がシルキアに突き刺さる。クレクから感じられるのは敵対心。それでしかないことを、シルキアは感じていた。

「どうやら貴様は、俺に対して喧嘩を売つていいようだな？」

だからこそシルキア同じように鋭い視線を彼に向けた。クレクは待つてましたとばかりに速やかに背中に常備している弓に手をかけた。

「そうですね、貴方とはまったく意見が合いませんし、はつきり言って嫌いなタイプですから。」

「そうか、それならばその喧嘩。買つてやる。」

気持ちを露わにしたクレクに対応するかのようにシルキアは腰に差した短剣を手に取り構えた。二人ともが戦闘体制に入り、にらみ合っている。今にも戦いの幕が切つて落とされる。そんな緊迫した空気が辺りに漂つた。

「ちょっとお待ちー！」

その間に大きな凜とした声が邪魔をする。しかし、一人は睨みあつたまま動こうとしない。その様子に、キヴィはため息をついた。キヴィは、ラジウの傍に移動し、彼の腕を取つた。そして一人からラジウを引き離す。

「二人ともお聞き！私は精霊のことはある程度文献で知っているんだ。その中の一つで、奴等の城にはね、決して一人では入れないんだよ。わかったかい？だから、あんたら一人で行つとくれ。」

キヴィはラジウの手を引き、歩き出す。その行動の変容に、シルキアとクレクは彼女を見た。

「私はラジウと行くからね！」

そしてラジウにワインクすると、既に橋までの一步手前。そこからダッシュで精霊の城、塔へと駆け出した。ラジウは驚いたものの、引きずられないように足を動かした。

あつという間の出来事に、シルキアとクレクは田を点にして口を開け、見ているだけ。

「ちなみに、要望、変更、拒否は受け付けないからね！ハンマーとして先に生かせてもううからね！」

キヴィの声ではつとするが、やられた。そういう表情なのだらつ、二人の顔に影が落ちる。

キヴィとラジウは既に橋を渡りながら塔の入り口を田描していた。

ボーダー

正気を取り戻し、追おおつとする一人の耳に地鳴りが届く。慌てて辺りを見回すと、キヴィ達が走っている橋が、彼女達が走った後を追うようにして段々と沈んでいくのであった。そうまるで階段のように、一定の幅が次々と。

だから、もうクレクの足元より先は水の中に消え、ジャンプしたところで、まったく届かない位置まで水の中に埋まっていた。

「……ちよつ！私たち行けないじゃないですか！？」

思わずクレクが声を上げた。止める間もなくラジウを引っさらわれ、あまつさえ後を追うことさえもできない。そんな今の状態に、クレクは多少取り乱していた。

「ふん。キヴィのやつ……知っていたな。」

そんな彼の後ろで、シルキアがため息混じりに毒づいた。そして、

シルキアは何も言わずにクレクの肩に手を置いた。

彼の行動に驚き、とっさにクレクは逃げようとする。しかし、次の瞬間、景色が一変したことに身を固ませたのだった。

草や木といった緑色の景色から、一瞬にして全てが灰色の世界へと変わったのだ。誰でも驚きのあまり、体が動かなくなるのは当たり前だ。まして、シルキアのこの能力を初めて体験したものならばなおさらだ。

一つだけ色が違うそこから、キヴィとラジウがこちらに向かって走ってくる。しかし、何かが変だ。

「……逆さま？」

シルキアが眉を潜めて呟く。それによつやつと意識を取り戻したクレクが、シルキアの声に彼の視線の先を追つた。壁が切り抜かれ、外が見える入り口がそこにはあつて、それにラジウとキヴィが近づいてくる。しかし、彼等はクレク達と足がひきつけられている地面が間逆だつた。その光景を見ていると、まるで自分が天井にくつ正在するかのような感覚にとらわれる。

クレクが違和感まるだしの景色に意識を奪われている間に、キヴィとラジウはようやくと入り口まで走ってきた。息を切らしながらキヴィは一人を見ると、肩を落とした。

「あーあ、ずるいよシルキア。」

キヴィがため息混じりに抗議する。一方、キヴィに半ば引きずられながらやってきたラジウは目を白黒させていた。そんな彼をキヴィは入り口の中に捨てるかのようにポイっと放り投げる。投げられ宙を舞うラジウだが、すぐさま白の引力に引きずられ頭から床に向かつて落下する。慌てて手足をばたつかせる行動も空しく、ラジウの頭はガシンッ！といふ音と共にシルキア達の足元に打ち付けられたの

である。

キヴィはラジウの様子を見てから小さく頷くと、しゃがみこんで足から入り口に入った。すると、彼女は見事足から着地したのである。

「いったーっ！…」

「ラジウ、あんた受身ぐらいとれるよつになつた方がいいんじゃないかい？」

横で頭を抱え起き上がれないでいるラジウに、キヴィが一言。それどころではないうえに、投げた張本人に言われてはラジウもなんと返していいかわからない。しかし、『せめて頭は守れ』とシルキアにまで言われてしまつた。

「さてと。お?なんだい、クレクも來てたのかい。どうやつひこ今まできたんだい?」

ラジウの手をとつて起こしながら、キヴィはクレクが頭のことに首を傾げた。

「俺が連れてきた。」

その問い合わせクレクではなくシルキアが答えた。そして、まだ言いつ終わつていなか再び口を開くシルキアだが、

「なーんだ、仲良いじゃないか。じゃあ、チームは変えなくていいね。じゃあ、とつとと行こう!うじやないかラジウ。」

キヴィの台詞が割つて入つた。台詞を邪魔されたことにシルキアは眉を潜めてキヴィを見るが、彼女はラジウを見て目配せをしている

ため彼の不機嫌な顔に気付いていない。

「あ、うん。行こうか。」

キヴィの用配せに、ラジウは何度も激しく頷いた。キヴィとラジウは他の一人を無視するように、部屋の隅にある上の階まで続いているであろう螺旋階段へと足を運んだ。

「え？ ちょっと、キヴィさん？」

二人の行動に、今までぽかんと口を開け話についていけていなかつたであるうクレクが慌てて声を掛けた。
声に「人は一緒に振り向く。

「シルキア、クレクと組まなきゃ絶交だからね。命令！」

「クレク、シルキアと組まなきゃ駄目だからね。命令！」

キヴィからシルキアへ、ラジウからクレクへ、駄目だしの念が押された。シルキアはため息をつき頭を重そうにゆっくりと横に振り、呆れた様子である。一方、クレクは頬を引きずらせながら仕方なくラジウに頷いたのだった。

反論してこない彼等を見て、ラジウとキヴィは顔を見合わせて笑い、ずつと上まで続いている螺旋階段へと足を運んだ。

階段を上ると、二人の姿はさつと消えてしまった。

しかし、残されたクレクとシルキアは消えてしまつたことに驚きを示さなかつた。なぜなら、重力が違う時点で既にこの城の中は精霊の巣の中であることを理解していたからだ。何が起こつても可笑しくない。と彼等は認知していた。

「さて、多分ラジウ様やキヴィさんと一緒になることもないでしょう。心もとないですがシルキアさん、行きましょうか。」

まだ敵意と皮肉を捨てられない視線と口調で、クレクはシルキアに提案をする。

「ふん、仕方あるまい。どうやら一人でないと先に進めぬようだ。付き合つてやる。」

シルキアは額に皺を寄せた後、彼を見ることなく歩き出した。実は先程からシルキアは自分の力を使って移動しようと試みているのだが、どうも上手く行かないのだ。シルキアの力は、人か場所を思い描くか、その場所が視界に入つていれば使うことができる。それが上手く発動しなかったのだ。

さらに、二人で行動しなければいけないことの証明として、階段の前に立つたシルキアの伸ばした手がバチッと音を立ててはじかれた。先程あつさりとラジウとキヴィを飲み込んだにも関わらず、その階段の先はシルキアを拒否したのである。

クレクはそれを見て大きなため息を吐くと、しぶしぶと言つた感じでシルキアの傍へと足を進めた。

そして、二人は一緒に階段へと姿を消すのだった。

第一章～真実と真意～（10）

「何もないただっぴろい部屋に出たねえ。」

階段を上ってしばらく行くと、広い円形状の部屋がキヴィとラジウを待ち受けていた。

明るく声を出したのはキヴィで、その声が何重にも響き渡つて木靈する。

「ねえ、キヴィ？クレクとシルキア……大丈夫かな？」

肩を落としながら額に皺を寄せ、何かを考え込んでいたラジウが心配そうに言った。

「大丈夫も何も、嫌でも一人で行動しなきゃならないだろうね。」

「なんで？」

キヴィは周りを見ながら、興味なさそうに一人のことを見下す口にした。そのあっさりした態度と内容に疑問を持つたのだろう、ラジウがいささか強い口調でキヴィに問いかける。

「ああ、実はね、精霊つてのは本当性質が悪いんだよ。最悪の組み合わせで行動しないと、精霊のここまで決して辿り着けないようになってるんだよ、ここは。そこで仲たがいをさせるのさ。残るのはたった一人……そういうのが好きな連中なんだよ。覚悟しちきな。」

キヴィの話にさらに心配そうに眉を顰めるラジウを見て、キヴィは諦めるとでも言うかのように、肩を竦めた。

「いいんだよ。子供と女子がほつぱといで喧嘩してゐる野郎共などぞ、一度痛い目見れば。」

「キヴィ……。」

嫌味を紡ぐ彼女に、ラジウは思わずと遠ことじろに視線をやつてしまつた。

「だけどね、ラジウ。一人の心配ばかりしてゐる場合じゃないんだよ？私達だって、敵の腹の中にいるんだから！」

私って、誰？

キヴィの台詞に何かが割つて入つた。透き通るような高い声。キヴィは目を見開いて後ろを振り返る。

ねえ、私って誰？

「キヴィ！－」

妙な声に焦つているキヴィを、ラジウが呼んだ。彼の口調もまた、上擦つており慌ててゐるようだつた。キヴィはラジウの方へと体を向けた。ラジウはある一転を指差し固まつていた。彼の指の先を目で追つていき、キヴィはぎょっとして体を強張らせた。自分にそつくりな”ソレ”が自分を凝視していたから。

「アレ……僕。だよね？」

ラジウがぽつりと彼女に言つ。ラジウには、目の前に佇む”ソレ”

が自分に見えているのだ。それを彼の台詞で瞬時にキヴィは読み取り、にやりと笑みを溢した。何かを思いついたのか、余裕の笑みが彼女の顔に張り付いている。

「ふふん。ラジウ、あたしゃここの正体がもうわかつたよ。」

自信満々の発言をし、キヴィはラジウに田配せをした。しかし、まだ”ソレ”の正体がわからぬラジウは、田を白黒させて彼女を見るしかなかつた。

「ほんと! ? いつたい何なの? ハハ。」

「よし、じゃあヒントをあげよ。私にはアレが私に見えるんだよ。」

キヴィは答えを教えるわけなく、にんまりとした笑つたままヒントを出す始末。明らかに彼女は楽しんでいる。

ラジウは眉を顰めて、口をへの字へと曲げた。正直に言つといふ、キヴィもそうだがシルキアも、またクレクもこの出来事を楽しんでいるようにラジウは感じていた。サーツのことを見一人心配しないように思えて仕方なかつたのだ。

かといって、ラジウもサーツとは短い付き合いである。だから、サーツのことをよく知らない他人と区別してしまつキヴィやシルキアのことがわからなくなつた。なにせ、彼等の方がサーツとは関わつた時間は少ないのである。けれど、ラジウはサーツを助けたいと真に思つていたのだ。だから、彼等の行動にいたさか不満を覚えているのが今の現状である。

「ねえ、キヴィ? どうしてヒントなんて出すの? 教えてくれてもいいじゃん。」

いきさか怒り口調で、ラジウはキヴィに問いかけた。

ラジウが怒っているのは、他にも理由があった。ラジウはどうしても重ねてしまふのだ。居なくなつてしまつた父と、サートを。田の前から消え去り、戻ってきたときには……そのことがラジウの頭によぎり胸を締め付けていた。それが苛立ちとなり表に顔を出し始めているのである。

頭に血が上つた状態で、いくら考えたとしても答へはでこない。考えれば考えるほど胸のもやもやが募つっていた。

「それじゃあ、面白みがないだろ？？」

キヴィの一言が引き金を引いた。ラジウが肩を震わせ、大きな口を開けて吼える。

「キヴィ！ふざけてる場合じゃないよー？サートが大変なんだよー！」

悲痛な叫びを吐き出したが、ラジウは眉を顰めた。キヴィの様子がおかしいのだ。

キヴィはラジウの咆哮にびくっと身を震わせたかと思つと、田を大きく見開いて後ずさつたのだ。先程の余裕の表情とは打つて変わつて怯えたような表情になる。いくらラジウに吼えられたからと言つて、そこまでおののくことは可笑しな話だ。

「う、うるさいいねー鏡のクセに何言つてんかいー？」

そして、キッヒリジウの横を睨みつけ怒鳴り散らす。まるで、ラジウのことが眼中にないようじつと見つめている。異様な光景に、ラジウはキヴィの顔色を伺つた。血の気が失せ、少々青白くなつて

きている。目は見開いたまま微動だにせず、眉が折り曲げられ恐怖しているのがありありと伝わってきた。

自分の声が聞こえていない。そして、明らかに彼女は自分でない何かを見ている。それは、隣にいる自分。ラジウは、恐る恐る彼女の視線を追つてみた。

視線の先に立つていたのは、彼女が言つていた通り鏡に映しだせれているであろう自分がこちらを見ていた。しかし、様子がおかしい。自分とはまったく違う様子なのだ。怯え眼でラジウを見る彼。ラジウは彼の正体に気付いたからだろう、驚いてはいるが怯えてはいな

いのだ。

ねえ、君は本当にラジウ？ ラジウは、じついう不可思議な物を見て怖がらないほど、強かつたつけ？

彼はラジウに視線を向けたまま、ポツリと呟いた。その言葉にラジウは戸惑い、一步下がった。初めて目にする鏡の性質を持つ得体のしないもの。普通ならば、恐怖しないはずがない。けれど、ラジウには今、その感情は存在しなかつたのである。それを自分で感じてしまい、逆に不安がラジウを襲つた。

怖がらないなんて、君のほうが鏡なんじゃない？

怖がりながらも重い言葉を吐く、目の前の彼。

ラジウはもう一步後ろに退いた。自分は本当にラジウなのだろうか？ 疑問が頭を過ぎつては、また浮かんでくる。

君は誰？ 僕はラジウ。ラジウ・マイナー。ねえ、君は誰？

ラジウの戸惑いの表情に、鏡の彼は核心したよつて言つた。強い目の光がラジウを射抜く。

「ちがつ！僕がラジウ・マイナー。ホーデュ・マイナーの息子だ！」

「！」

今にもラジウは不安に押しつぶされそうになっていた。不安を振り払いたいがために、必死に大声を張り上げる。
相手に痛いほど不安が拭えないでいることが伝わるくらい、ラジウは必死さが滲み出していた。

父上のこと、何も知らなかつたくせに？

最後の止めといづばかりに、その言葉は深く深くラジウの胸に突き刺さった。無意識のうちにラジウの目から一筋の涙が零れ落ちた。ホーデュ・マイナーの息子だというのに、ラジウは彼のことを何一つ知らなかつた。さらに、サークル達から聞いた話で知らないことが明確になっていた。そこを指摘されることで、自分が”ラジウ”であることへの不安感、疑問、焦りが頭の中で渦巻き始める。
自分は”ラジウ”ではないのだろうか？一瞬だけ、ラジウの頭を過ぎた疑問。

それが敵の罠に陥ってしまったことに、ラジウは気付けなかつた。すぐさまラジウの意識は真っ暗闇へと放り投げられたのである。
部屋に残っているのは、目を瞑り倒れている二つの体。キヴィもまた、敵の罠を回避することはできなかつたのだ。
その場で、彼と彼女は死んだように動きはしない。

第一章～真実と真意～（11）

一方、別の部屋にはクレクとシルキアが対峙していた。二人とも手には自分の得物を構えている。

彼等がいる部屋には壁際に様々な武器が並べられ、戦えといわんばかり広いスペースが整えられていた。キヴィとラジウがいた部屋の四倍の広さがあるだろう。

「なるほど、キヴィさんが”一人組みでないといけない”と言つて、いた理由がよくわかりました。」

「ふん、どちらかをあの鎖に繋げということだらうな。」

目を細めてシルキアを見据えるクレクに対して、シルキアは彼から視線を外しある一点を凝視した。目をやつた場所には、一つの鎖と鉄の輪が壁に備え付けられていた。それは誰がどうみても、手錠の一種。

この部屋には、入ってきた入り口もなければ、出る出口すら存在しなかつた。何か仕掛けがあるに違いない。そこへ壁に不自然に備え付けられた手錠と、大量な武器。明らかに出口と関係があるので、誰もが気付く。

「貴方も私も譲る気がない。と、すれば、力尽くでどちらが行くかを決める必要がありますね。」

クレクは、弓に矢をつがえながら静かに言つた。言い終えると、シリシアへ矢を向け、狙いを定める。

音が風を切った。それからカンとこう壁に当たる音がクレクの耳に届く。

シルキアの頬から赤い血が滴り落ちた。思ったよりも早い引きこ、避けるのが少し遅れたのだつた。

「やはり貴方、お強いですね。」

クレクがシルキアの行動を見て咳きをもらす。彼の頬にもまた、一筋の血が流れていった。シルキアが、クレクの攻撃の際に持っていた探検を放つたのだ。

「……貴様もな。一つ、聞きたいことがある。」

勝負は五分五分と言つていいだろう。両者とも遠距離からの攻撃が得意であることから、勝負がつきにくいことを認知していた。だから、シルキアはクレクに話し合いを求めたのである。

「なんでしょう？」

クレクは、再び『』に矢をつがえ、シルキアに目標を合わせながら答えた。動けば射る。と言つているのだ。しかし、それは仕方のないことだつた。弓は矢をつがえないと、その間時間がかかり敵に攻撃のチャンスを与えてしまつからだ。

一方、シルキアの短剣は手に持つてさえいれば投げるだけで良いのだ。時間の差を考えれば、クレクの行動は当たり前のことだといえよう。

「なぜ、そこまでラジウに固執する？」

「そんなこと、貴方には関係ありませんし、説明したところで……貴方になど、決してわかりはしませんよ！」

矢が風を切り、走り抜ける。今度は警戒をしていたからだろう、クレクの矢をシルキアは軽々と避けてみせた。しかし、追い討ちをかけるようにクレクは更に素早く、彼に向かつて矢を放つ。

「……それなら質問を変える。貴様は、ラジウに何を求めている？」
避けながらも、シルキアはクレクから田を離さずに淡々と問い合わせる。

「求める？ 何も求めてなんていません。私はただ、ラジウ様に従う下僕でしかありません。」

矢をシルキアに向け、今度はしっかりと答えるクレクの瞳は、いつになく真剣で霸気を感じさせた。

「ふん。あいつはそういう想つてないみたいだが？」

シルキアが言葉を紡ぎ、短剣を抜いて彼目掛け放り投げる。反撃していくとは予想していなかつたのだろう、クレクは慌てて短剣から身を逸らした。

「ええ、ラジウ様はお優しいですから……ね！」

語尾を強調したのは、強く弓を引いた不可抗力である。矢と短剣が飛び交うが、いつもにそれらは相手に当たらない。痺れを切らし

たのか、クレクは次から次へと矢を放つ。

「いや、貴様もそつは思つていない。」

「何を！？」

シルキアは次々と矢を避け、意を決したように方向を変え、いきなり彼に向かつて走り出した。クレクが構える弓の前で立ち止まるシリキア。ちょうど弓の先端の前に、彼の胸が待ち構えていた。流石にクレクは驚きの声をあげ、まじまじとシルキアを見た。無表情なため、何を考えているのか読み取れはしない。

「ふん。下僕や従者なら主に従うはずだ。しかし、貴様はあいつの意思を汲み取ろうとさえしていない。だから、貴様は貴様自身が下僕や従者であると思つていはないわけだ。」

感情を出すことなく、淡々と言い切るシルキアの台詞に、クレクの手から汗が滲み出た。一度、ぐっと手に力を込め、シルキアを睨みつけるクレク。しかし、それにさえシルキアは微動だにせずに弓を持つ彼を見ているだけ。

クレクは苦い顔をしてシルキアから視線を外すと、弓を静かにそのまま下へとおろしたのだった。クレクはうなだれる様に頭を垂れた。

「……そうかもしません。私は主の命令や意思よりも、主の命の方が大事なんです。私は……一人の主を亡くしました。ラジウ様の父、ホーデュ様です。その時に、自分の居場所が無くなることを知りました。私は結局、私のことしか考えていないのですよ。貴方を見ると、悔しいですが自分が自分しか見えていないのを思い知らされます。」

クレクが顔をあげると、その表情は弱弱しく儂いものだつた。苦笑つたようなひどく辛そうな印象をシルキアは受けた。

クレクは自分自身でわかつっていた部分を指摘され、現実を突きつけられてしまつたのだ。しかし、その分少しほは冷静になれたのだろう、自嘲気味だが自分のことを客観的に見ようとしている。

「……俺のじーをじう見てそつ思つのかはせつぱりわからんが、失くしたくない程大切な者のだろ。あいつが。」

シルキアはふいとクレクに背を向け歩き出した。クレクは彼の行動に首を傾げて様子を伺う。シルキアは、とある地点まで行くと、立ち止まって屈み込んだ。

ガチン

金属音が室内に鳴り響く。

クレクはシルキアの行動に、目を点にしていた。シルキアが自分の左手に、壁に繋がつてている手錠をはめ込んでしまつたのだ。

「なん……で？」

ようやく搾り出した掠れ声で、クレクは彼に問い合わせた。人差し指が微かに揺れながらもシルキアの腕を差している。

「ふん。じんなところで時間を食つてる場合ではないだろ？」

「……貴方がそこまで心情身溢れる方だとは思いませんでした。」

シルキアの言葉に、クレクは口に手を当て大げさに驚いてみせる。大げさな動作に、シルキアはたらりと冷や汗を流した。

「違う。ラジウがサー^トを助けたがっているからだ。」

「やはり思いやりのある人なんですね」

「違う。いい加減にしろ。貴様がラジウに応えたいと思つて^{いる}だろ^うと思つたからだな……。」

きつぱりと言い放つシルキアに、クレクは驚いたまま更に一言。しかし、その台詞は途中でシルキアに一掃されてしまった。こめかみを押さえ、怒りと呆れを露わにするシルキア。それに、クレクは笑つた。

「冗談ですよ。気遣いありがとうござります。まあ、まさかそこまで考える頭があるとは思ひませんでしたが。」

「貴様……。」

しかし、笑顔はすぐに消えうせ、クレクは考えるように顎に手を置いた。シルキアは彼の言葉にじと目を返す。

シルキアの視線に気付いて、慌ててクレクは手を軽く振つた。

「はは、まあそ^う熱くならないでください。それより、貴方は先へ行きたいと思わないのですか？この先にはたぶん、サー^ト君やラジウ様の他に、キヴィさんもいらっしゃるかもしねいのですよ？」

あっさりとシルキアに引き下がられ、クレクはそのまま先へ進むのに気が止めたのだ。理由を聞こうと、彼と仲の良いキヴィの名を出

してみる。しかし、シルキアは眉一つ動かさない。

「何か勘違いをしているようだが、一言言つておく。あれはそう簡単にやられるたまではない。まあ、ラジウもサートもだが。」

シルキアの言葉には、ラジウの好きにやらせてみればいい。そんな意味合いが含まれているのだとクレクは感じていた。

「そういうところが嫌いなんですよ、シルキアさん。私が見えないラジウ様や他の方のことが見える貴方が、ね。」

クレクは踵を返し、シルキアが手錠をはめた際に静かに現れた壁の穴へと足を運ぶ。クレクの静かな口調に、シルキアは彼の背中に向かって、同じく静かに言った。

「ふん。当人達より周りのが見えるのは当たり前のことだ。俺には見えない部分は、貴様が見えているはずだ。あいつには、親身に心配する奴の手助けの方が必要だと思つたからこそ、貴様に譲るだけだ。俺なら、絶対途中で見捨てるからな。」

シルキアの言葉は、クレクの背中を後押しする。クレクは、笑つた。シルキアの言葉が冗談に聞こえたのだ。彼なら、口でも態度でも無関心を装つてゐるが、決して認めたものを見捨てるとはしないだろう。と、思つたからだ。そう思つたのは、もしかしたらシルキアが自分に多少似ているからなのかもしれない。

「それと、シルキアでいい。」

最後に付け足すようにシルキアは台詞を吐いた。思わずクレクは振り返り彼をまじまじと見る。別段冗談を言つてゐるようには見えな

かつた。

シルキアがクレクを認めたことが、クレクにも伝わってきた。
クレクは、もう一度シルキアに背を向け、穴の近くまで行くと足を止めた。

「言つてくれますね、シルキア。いいですよ。私の全力でもつて彼等全員守り抜けばいいのでしょうか？すぐ終わらせてきますので、待つていてください。」

「そりゃあ、見物だな。」

クレクが片手を挙げ、シルキアも答えるように片手を上げた。
二人が感じていたわだかまり、それは自分にないものを持つ相手への嫉妬、不満、自己嫌悪だったに違いない。それを認め合った今、二人の関係は前よりは少し良くなつたのかもしけない。

第一章～真実と真意～（12）

さて、暗闇の中に引き込まれたラジウはと、暗闇の中で薄ぼんやり考え方をしていた。

（いつたい、僕は誰なんだろ？……？）

考えていても、答えは全く出てこなかつた。暗闇の中、光がラジウの横を通り過ぎる。それが何だか、ラジウにはわからなかつたし、わからうともしていなかつた。ただ、頭を垂れ、うなだれているだけ。

光は次々とラジウの正面から後ろへと流れていく。光の正体は映像だつた。長い四角に切り抜かれたような映像が次から次へと流れていいく。

「私はラジウについていきます。貴方がどう変わろうと、どんなことをしようとも、味方が誰一人いなくなろうと、私は貴方について行きますとも。」

声がラジウの耳へと届いた。ラジウがよく知つてゐる声は、そうクレクの声。一コマの映像が声と共にラジウの横を通り過ぎていつた。ラジウが顔を上げて映像を目で追う。その場面を知つてゐた。自分が城を飛び出す前の、クレクとの会話のシーンだということにラジウは気付いたのだ。

今度は違う場面がラジウに迫つてくる。映像には、シルキアの横顔が映し出されていた。

「貴様は貴様であらう。」

これは父上の話をしていた時に、シルキアが言った台詞。ラジウはその言葉に立ち上がった。父上とは違うのだと、シルキアが思いを込めて言つてくれた言葉だと、ラジウは今更ながらに解つた。

「僕は……僕？」

過ぎ去つていく場面を見送りながら、ラジウはポツリと呟いた。

「あまつたれるんじゃないよー。」

いきなり後ろから大きな罵声が飛んできた。ラジウは思わず身を震わせ、慌てて振り返る。大きな声を発している場面にいるのはキヴィ。仁王立ちで腕を組み、こちらを睨みつけるように見ている。

「あんたは善悪が解らないほど幼いのかい！？自分で何が正しくて、何が間違ってるのか判断もできないのかい！？ええー…どうなんだい！？他人の言葉に惑わされるんじゃないよー。」

そう、この台詞はシルキアに負けてへこんでいた時にキヴィがラジウに向かって放つたもの。ラジウは場面に気付いたと同時に、この後言つた言葉達を思い出す。

『あなたの言葉で、僕を左右してよ。』

映像の中のラジウと、ラジウの声が被つた。彼の目には、輝きが戻り強い意志を持つ表情が映し出されていた。

「そうだよ。僕は僕でしかないんだ。自分を見失つて弱気になつての場合じゃない。だつて、僕をラジウだと言つてくれる人がいるんだ。だから、僕は自信を持つて言える。」

「ラジウは拳をぎゅっと握り締め、顔を上へと上げた。

「僕は、ラジウ・マイナーだ！！」

叫ぶと同時に、眩い光がラジウを包み込む。

「 つ！！」

光が収まると、ラジウの視界には床と壁が入り込んできた。円形状の造りが見てすぐにわかる構造。

ラジウは、目を瞬かせ腕に力を入れると、自分の体を起き上がらせた。ふらふらしながらも立ち上がる。

「……夢……？」

呟いてから、ふと視界に映り込むものに目を移動させる。すぐ隣に青緑の髪を持つキヴィが倒れ込んでいた。白衣を身に纏った彼女は、頑なに目を閉じており唇は青く変色していた。

「キヴィ！！」

ラジウは必死に彼女の名を大声で呼ぶ。けれど、彼女からは何の反応も返ってこない。

ラジウは、キヴィの手首に腕を伸ばした。

「冷たっ！」

ひんやりと冷たい彼女の手に、ラジウは一度手を引っ込めてしまう。だが、それでは彼女の生存確認ができるはしない。再びラジウは彼女

の手首へと手を伸ばし、脈があるかどうかを確認した。

「どうもどうも」と正常にキヴィの脈が鳴っていることに、ラジウはほつと胸を撫で下ろす。

「やっぱり、キヴィも僕と同じ状態なのかな……？」

眉を顰め、ただラジウを見守ることしかできない自分に、ラジウはふがいなさを感じていた。どうにかしたい。その気持ちが強くなる。

「……だめ……ねえさんっ！」

ラジウはびっくりして身を引き、目を見開いたまま彼女を凝視する。キヴィの瞳から一筋の涙が零れ落ちたからだ。

「……私の名前……名前は、キヴィ」

彼女が名前を言おうと口を開く。ラジウはキヴィに名前を言わせてはいけないと、直感的に感じた。

自己紹介をするさいに、言葉を濁した彼女のことを思い出す。きっとファミリーネームは人に言いたくなかったはずだ。それに、ラジウはその名前を聞いてはいけないような気がした。

「キヴィ！ 君はキヴィ・ライズンだろう！？ 豪快で大雑把で、そんなでもって短気なうえにすぐ調子にのるけど、芯があつて、自分自身に自信を持つて男らしいキヴィ・ライズンだ！？ 他の誰が何て言つても、僕は、君がキヴィ・ライズンだつて思つてるから！ だから……だから戻つてきてよっ！」

ラジウは、キヴィが口を開いて言つている言葉が自分に聞こえないように、大声でがなつた。彼女の冷たい手をぎゅっと握り締め、目

をしつかりと瞑り、一気にまくしたてた。

戻ってきて欲しい。その思いがラジウの心に湧き上がっていた。誰一人失いたくはない。ラジウの心が叫びを上げているのだ。

思いに答えるように、キヴィの手がぴくりと反応を示した。反応を感じ取り、ラジウは勢いよく目を開けた。

目の前には、瞳をうつすらと開け、微かに笑みを浮かべながら自分を見るキヴィがいた。

「キヴィ……！」

ラジウも田に涙を浮かべて、満面の笑みをつくり彼女の名を呼んだ。

「ラジウ……だあれが豪快で短氣で男らしつて？え？」

が、そんな暖かい良い雰囲気の場面はすぐさま終わりを告げる。キヴィが起き上がりてこめかみをぴくぴくと動かし、引きつり笑いを浮かべながらラジウの頬を掴み両側に伸ばしたのだ。

「ハハハへんっ。」

頬を摘まれ、引っ張られているせいでラジウは上手くしゃべれないが、涙を流しながら必死に彼女に謝った。それに文句をぶつぶつ言いながらも、キヴィはぱっと手を離した。

「だ、だつてえ。キヴィのこと悪い浮かべたらそういう言葉しか出てこなかつたんだよお。」

真っ赤に腫れた頬を押さえながら、ラジウは頬を膨らませて囁く。腫れた頬を膨らませたことにより、かなり顔が膨れたように見えてしまう。思わずラジウの顔に笑いそうになるキヴィだが、なんとか

それを押さえ込んだ。

「そつかい。覚えとくからね。今日の」と。……こしても、心配かけたみたいだね。ラジウ。」

鋭い目つきになつたかと思うと、キヴィはすぐに柔らかい笑みをラジウに向けた。それにほつとしたのか照れくさそうに少し赤みが差した頬を搔くラジウ。

キヴィの手がラジウの片方の手に重なつた。その手は先程と打つて変わつて暖かい。

周りに誰もいないことから、キヴィはラジウが自分にしてくれたことに気付いた。

「ありがとよ、ラジウ。」

キヴィは立ち上がり、ラジウの頭を優しく撫で礼を述べた。暖かい手の温もりに、ラジウはキヴィを見上げて笑む。

「へへ、どういたしましてー。」

キヴィの言葉にも暖かみを感じたラジウ。だから、自然にラジウの口はキヴィに対する返事が滑りでたのだ。ラジウの笑みにつられるかのように笑みを返してから、キヴィは辺りを見回した。すると、すぐに上に登る階段を見つけた。

「お、先へ進めるみたいだね。さ、行こうか。」

「……ね、ねえ、キヴィ。キヴィも自分が自分が自分じゃないって思ったの？」

わざと歩き出してしまつキヴィの後を、慌てて追いかけ、ラジウは戸惑つたよにキヴィの背中に問いを投げかける。今まで疑問に思つていたが、なかなか聞けないでいたのだ。

「ん？まあ、そんなところだね。」

しかし、答えは曖昧なものだった。ぽかして、その後の言葉を紡ごうとしないキヴィ。彼女は後味の悪そうな表情で、決してラジウを見ようとせずに視線を泳がしていた。これ以上触れて欲しくはない。そう言つてゐる事がありありと伺える。だから、ラジウはこれ以上突つ込んだ話をすることができなかつた。

「ほり、ラジウ。早く行かないと置いてくよ？」

「あ、ごめん！待つて！」

わざと階段を上り始めるキヴィに、ラジウも精一杯早く階段を駆け上つた。小幅が違うせいか、早足で行かなければ彼女に追いつかないものである。

第一章～真実と真意～（13）

階段を上った先は、先程よりも少々狭い部屋が待ち構えていた。また、前の部屋同様何もない。

ラジウ達が部屋に入ると、上ってきた階段はすっと姿を消した。キヴィもラジウも、階段が消えるのを確認すると、新たな出口を探して視線を辺りに巡らせる。

『あつー。』

声が三つ重なった。目の先にいる相手に、互いが驚いているのだ。ラジウ達の視線の先には、長い銀髪をなびかせ立っている人物がいた。

「クレク！」

「ラジウ様に、キヴィさんではありますか！」

ラジウに名を呼ばれ、クレクはラジウの元に駆け寄ってきた。真剣な顔つきで彼はまじまじとラジウを見る。しばらくしてから、ラジウの無事を確認できたのだろう、やっと安堵のため息を吐いた。

「「」無事で何よりです。」

「クレク、そんなことよシルキアはどうしたんだい？」

ラジウのことしか目に入っていないクレクに、キヴィは眉を顰めながら先程から気になっていたことを聞いた。クレクとシルキアは一緒に居たはずである。しかし、いるはずの者がこの場にいないとい

うことは何かあった意外には考えられない。キヴィを一抹の不安が襲つた。

「あ、シルキアさんなら下の階に無事でこらつしゃいますよ。」

いつもの笑顔でクレクはキヴィに答えた。しかし、彼女の顔はますます疑心暗鬼の表情が色濃く出てきてしまう。どうしてそう言い切れるのかがどうしてもわからぬでいるのだ。

キヴィが口を開く。

「つめたつー！」

が、ラジウの甲高く悲鳴に近い声がキヴィの台詞を邪魔した。彼の言葉で、冷たいという感覚にクレクとキヴィも気がつく。足元が水に使つてゐる。ものすごい速さで皆が見ている中、水はくるぶし辺りまでせり上がりてくれる。

「つー水攻めかいー？」

「まざいですね、早いですよ。」

キヴィはこの状態に舌打ちをし辺りを見回した。彼女の横でクレクが冷静に分析をしてゐるが、水は速さを増すばかりでくるぶしから膝下辺りまでやつてくる。キヴィやクレクにとつてはまだ何でもない高さだが、幼いラジウにしてみれば既に腹まで水に浸つてゐるわけで、かなり危険な状態ということが見て取れる。このまま何もないでいればすぐに頭まで水がやつてくることは必須。

クレクはラジウの状態を知ると、すぐさま彼を持ち上げて自分の肩の上に座られるように担ぎ上げた。

キヴィは横で行われたことに目を白黒させる。自分を担ぎ上げた時

も思ったことだが、見た目的には優男で女に間違えられそうな感じのクレクに、そこまで力があるとはまったく見えないので。しかし、子供とはいえる一人を軽々と素早く肩の上にのせてしまうのだ。それが、キヴィには信じられないのである。

「キヴィさん！私が上ってきた階段がまだあります！－」

腹まで浸かつた時、クレクがある一点を指差して大声を出した。声にはつと自我を取り戻し、キヴィはクレクが指示する先へと視線をやつた。水の中に埋もれているにも関わらず、下の階から光が漏れている箇所が存在する。

キヴィは天井を仰ぎ見る。天井はかなり遠く、待てば待つほど脱出が困難になっていくことを示していた。迷っている暇はない。キヴィは胸まで迫つてくる水の中に、ざぶんと音を立てて身を沈めた。

「ラジウ様、目を閉じて息を止めてくださいね。」

クレクはキヴィを見送ると、ラジウを肩から降ろした。一番背の高い彼でさえ、すでに胸の辺りまで水に浸っている。

ラジウはクレクに言われたとおり目をぎゅっとつぶり、口を両手で塞いだ。それを確認すると、クレクは彼の頭と肩に手をかけて抱きかかえ、彼女の後を追うべく水の中へと姿を消した。

階段まで辿り着き、一歩足が外に出るとキヴィの体は思いっきり重力に引っ張られた。

ドンガラガツシャン！！

何か壊れるようなぶつかるような音が一度、辺りに響き渡る。キヴ

イに続き、クレクとラジウも重力に引っ張られ階段を転がり落ちたのだ。

「いたたたた。」

一番最初に起き上がったのはキヴィ。頭を擦りながら自分の体を一周見、濡れていることを確認した。彼女の後に続き、ラジウとクレクも身を起こす。

「キヴィ？」

びしょ濡れの服を絞っているキヴィの名を、誰かが不思議そうに呼んだ。声に振り向くと、シルキアが多少目を見開いてこちらを見ていた。彼は左手が手錠によつて壁に括り付けられている。

「シルキア……あんた、何やつてんだい？」

シルキアの異様な光景に、キヴィは服を絞る手を止め、眉を顰めて彼を凝視した。シルキアは、眉一つ変えずに彼女を見返し、少し考えるような間を置いく。そして、多分自分が今おかれているだろう状況を口にした。

「ああ……人質？」

「あんた、お姫様つてガラじやないだろ！？」

スペン。

何とも気の抜けた音が耳に残る。いつの間にかハリセンを取り出してシルキアの頭を引っぱたいたキヴィだが、ハリセンも水に濡れているため、小気味良い音はどこへやら。気の抜けるような間の抜けた音しかでていらない。

その彼女の行動を目で追いながら、ラジウは服を絞り、同じように水を切つているクレクにぽつりと意見を述べてみる。

「キヴィの思考回路つてさ、変だよね。」

「そうですねえ、意外にメルヘン思考なのかもしませんよ?」

スペン、スペン!

彼女のハリセンが一度炸裂した。ラジウと彼の言葉に笑いながら返答したクレクへ、すぐさまキヴィが突っ込みを入れたのだ。

「だーれーが、メルヘン思考だつて!?!?」

少し顔が赤いのは怒っているせいなのか、恥ずかしがっているせいなのかはわからないが、キヴィは怒鳴り声をあげるのだった。しかし、水に濡れて重いハリセンは意外に痛いものである。ラジウは頭を抱えて聞いていなかつたりする。

「まあまあ。」

「それより、帰りが早かつたな。」

怒るキヴィを、クレクはなだめるべく声をかけた。しかし、シルキ

アがなだめる彼へと割り込むように言葉を投げかける。

シルキアの言葉にクレクは思わず固まつた。どうやら、行く前に啖呵を切つたことを言つてゐるらしい。

「えー、どうしてシルキアさんが手錠してゐるのか聞きたいでしょう？キヴィさん。」

シルキアの台詞を完全にスルーし、につこりと笑顔を浮かべながらキヴィに話しかけるクレク。だが、彼の額からは汗が滲み出でている。さらにシルキアに背を向けていることから、明らかにシルキアが出した話題には触れたくないらしい。

「おい。」

「実はですね、一人此処に括り付けないと次の階へ進めないようになつてゐるのですよ。ですから、シルキアさんが自ら手錠をかけて私を先へと進めてくださいました。」

「そのわりにあつさりと帰つてしまつたがな。」

まったくの無視を決め込んで話を進めるクレクに、シルキアは淡々と言葉を挟むのであつた。流石に何度も突っ込まれては、クレクもいい加減無視ができずに怒つたシ顔をルキアに向けた。が、クレクの視線が自分に向けられると、すぐさまシルキアはあさつての方向を向いてしまう。

キヴィはクレクの説明に目を見開いて驚いていたためか、彼等の行動やシルキアの言葉を一切聞いていなかつた。シルキアが他人にゆずることや配慮が出来たことにとても驚いてゐるのだ。キヴィがやつと正氣を取り戻し、顔をあげてシルキアを見た。これから何かを言おうという決意が垣間見れる。

「あ……とれた。」

その前にシルキアから一言発せられた。キヴィイ、クレクは目をひん剥いてしまう。はつきり言つて田が飛び出しそうだ。シルキアの言葉通り、手錠が彼の腕からぽろりと外れて落ちたのだ。誰もが言葉を失い、しばらく場に沈黙が訪れる。

「……あ、新しく繫ぐ者を決め直せといつことじょう。部屋に戻つてきてしまいましたから、ひとつやうこいつことですよ。」

なんとか口を開いたのはクレクだった。いつまでも驚いたまま音を発しないキヴィイの隣で、何とか平常心を取り戻し、クレクは頷きながら発言した。まるで自分に言い聞かせるよつた言葉に田口納得をしている。

「な、なんだ。そういうことかい。それなら……。」

キヴィイはクレクの説明に納得し、ほつと肩を降ろす。そして意味ありげに目を細め、クレクと目を合わせた。クレクは答えるよつに彼女を見返すと、今度はシルキアへと視線を移した。

「やはり、それがいいだろう。」

シルキアもクレクに目線を送り、頷いてみせる。シルキアの目がキヴィイに移動した。彼女も彼に瞳を合わせると頷き返す。

そして、全員の視線が一斉にラジウへと向けられた。今までぽかんと状況を見守っていたラジウは、驚きとともに開いていた口を慌てて塞ぐ。

三人の視線に嫌なものを感じ、ラジウは一步後ろに後ずさる。危険

信号を脳みそが発している。逃げなきゃいけない。ど。

「おい、連れて来い。」

シルキアが発言したかと思うと、クレクがラジウに近寄り笑顔をにつこりとラジウに向かた。極上の笑みに、ラジウの額に冷や汗が浮かぶ。

案の定、ラジウの体は宙に浮かび上がった。クレクはラジウが暴れても逃げられないように後ろへ回り、脇の下に腕を通して持ち上げたのだ。

「ちよつ！ クレク！ ！」

ラジウは、手足をばたつかせ小さな抵抗を試みる。しかし、抵抗空しく、ラジウはシルキアの所まで連れてこられた。

ガシャン！

手錠をかける音。ラジウには人一倍大きく聞こえたことだろう。手錠はラジウの腕の場所で黒く怪しく光り輝いていた。

クレクは手錠を確認するとラジウを降ろし、キヴィのところまで戻つていった。だから、ラジウが伸ばした手は空しく宙を切る。むすつとし頬を膨らませながら横へと視線を投げるが、既にシルキアも二人の場所まで移動している最中だった。

「なんで、僕なのさ！ ！ ？」

怒りに任せてラジウは三人に叫び訴える。身を乗り出したせいでジ

ヤラフと鎌が鳴った。ラジウの真剣な眼差しが三人を射る。三人は一旦目を見合させてからラジウに向き直った。

「そりゃあ、戦力外だし？」

「カナヅチですし。」

「馬鹿だから。」

キヴィ、クレク、シルキアが順々に口を開いて台詞をラジウに送った。言葉は槍となつて、次々とラジウに音を立て突き刺さる。ラジウはその場で動かなくなつた。

ラジウが戦闘不能になると、三人は新たに現れた階段へと足を運ぶ。

「……。」

ラジウは何も言わぬが、下唇を噛み、去り行く三人を見据えている。目は今にも泣き出しそうな程、目の中で水が流れている。

ラジウの様子を見かねたキヴィが、階段から消える前に彼に一言こういつた。

「ラジウ。感謝するんだね。」

ラジウはキヴィの言葉の意味がわからず、目を見開いてきょろんとするだけ。そんな彼を残し、三人は次の階へと進むのだった。次の階は、先程の水はどこへやら。ただの何もない部屋に戻つた。しかし、三人が部屋に足を踏み入れると、すぐさま階段が搖き消え地面から水が滲み出した。

「クレク。あんたずいぶん頭が柔らかくなつたもんだね？」

「何のことです？私は後で一生恨まれるのが嫌だっただけですよ。」

キヴィの意地悪な問いに、クレクは笑つて流した。シルキアは二人を見ているが、言葉を発さない。どうやら、ラジウの前で三人がしたアイコンタクトは、何か裏があるようだ。

「あははは。まあ、あの子は気付いてないだろうけどね。シルキア、あんたはなんでラジウを残してきたんだい？」

「足手まといはいらん。」

きつぱりとシルキアは答えた。しかし、その答えも一つの理由である。カナヅチであるラジウが、水攻めに合つ場所にいることは足手まといどころか自殺行為ものである。

「じゃ、クレクは？」

「おや？ わかりませんか？ キヴィさん。三人と一人。どちらが根性悪な最終ボスのどこに招待してもらえると思います？」

キヴィの問いに、試すようにクレクは尋ねた。彼の顔は相変わらず笑顔だが、余裕のあるものだった。

「そうだねえ。今まで二人で行動した結果。なんか仲良くなってる二人を見ると、明らかに見事何の関係も崩せずに失敗しているんだから。いつそ精神的ダメージを『えるなら』『えやすい』一人に絞るのがいいと思うけど？」

「そうですね。助けも来させずに一人をターゲットにし、なおかつ

他の人を苦しめて見せしめにすると効果的でしょうねえ。」「

カマの掛け合いとでも言つのか、わきあいあいに一人は相手を探つている。しかし、シルキアがため息をついた。

「ようは、また人質ということか。」

正直なところ、城に入つてからシルキアはまともな相手とまったく戦っていない。そのことが不満なのだろう、シルキアは不機嫌そうに腕組をしている。

「人質ね……もう少し優しく扱つて欲しいもんだね。」

胸まで来ている水に、キヴィはパシャパシャと愉快な音を立て遊びながら呟いた。

「で？ 勝算があるからこそ貴様は行かせたのだろ？」「

「もちろんだよ。つていうか、多分ラジウしか奴は倒せないよ。私は、まあ、できるかもだけど、あんた達一人には絶対無理だね。まだ決めた以上うだうだ言つてもしょうがないのさ。後はラジウに任せてみるしかないよ。」

遊ぶキヴィの手をとり、音を止めさせてからシルキアはキヴィに視線を流した。キヴィはシルキアにウインクで返した。台詞の語尾には、それ以上話しても意味がないという釘が含まれていた。

「ふん。あいつが相手を倒すまでにどうにかすればいいんだろ？」「

「……いつまでかかりますかね？」

シルキアは淡々と言い放つが、それにクレクが苦笑いをして言葉を挟んだ。クレクの発言は辺りを静かにさせるのに十分だった。キヴィもシルキアも黙り込む、水の揺れる音だけが耳をつく。しばらくして、キヴィが口を開いた。

「どうにかする。それを考えよつか。」

水の中で浮ける様、足を動かしながら三人は思案し始めた。

第一章～真実と真意～（14）

さて、置いていかれたラジウはと叫び、「キヴィに言われた言葉を座り込んでもんもんと考えていた。しかし、ガロンという音を耳が捉え、ラジウは現実に引き戻される。音の出所をきょろきょろと見回して探すが、特別変なものなどは見当たらない。

ラジウは首を捻り、もう一度端から端まで視線をゆっくりと移動させていく。

「えつ！？」

しばらくラジウは気がつかなかつたが、視線を移動させることであることにはつとした。地面がだんだんと遠のいていることに。

ラジウは、自分が上に昇つて行っているということを理解したのだ。自分の足元を見ると、四角いラジウを乗せている一角だけが天井に近づいていることがわかる。

ラジウは上を見上げた。天井はなく、黒い空間が自分を待ち構えている。

キヴィが言った言葉の意味を、ラジウは少しだけわかつたような気がした。これから自分が向かう場所、おそらくそこには何がが待ち構えている。何かはきっとサートを攫つた奴に違いない。ラジウは何故か確信を持っていた。

暗闇の中に入ると、すぐに光が目の中に飛び込んで来た。風景は先程居た部屋より、二回りかそれ以上狭い場所だった。壁の周りには何も置いていないが、真ん中に一つ、そびえ立っているモノがあつた。

「サート……」

ラジウは叫んだ。視線の先には水の荊が体のところどころに深く刺さり、血を流して立つてゐる黒髪の少年。瞳は閉じており、ラジウの声でまったく反応を示さないことから明らかに意識がない。

サートの体は非情にも、水の荊が彼の手や足に食い込み支えていた。

よく来た。

透き通るような、でも冷たいような無機質な声がラジウの耳に届く。後ろから声が聞こえたことに、ラジウは一瞬身を強張らせたが、無理矢理体を後ろに振り返らせた。が、目の前はただの壁が立ちふさがるだけ、何もない。

一安心できないま、ラジウは背中に冷たいものを感じた。何かが自分の背後にある。わかっているからこそ、ラジウは振り向きたくなかった。けれど、敵が背後にあるとわかってしまつてはいる以上、いつまでも背中を向けてはいられない。確認しなければと自分を奮い立たせるラジウ。

強張った体を、恐怖に駆られた心を必死に奥底にしまい、サートを助けたいと思う気持ちを起きす。ゆっくりとラジウは首を動かした。背後にあるモノが動く気配はない。ちょうど肩まで首を動かすと、それはラジウの目に飛び込んで來た。すぐ近く、触れるか触れないかの場所にソレは居た。

「つーーー」

声にならない声をあげ、ラジウは体と手で振り払うように素早く体を回転させた。しかし、ソレに触れた感覚は冷たい水以外の何ものでもなかつた。

振り返つた勢いで、ラジウはバランスを崩し尻餅をついてしまつ。顔を上げると、目の前にソレは立つていた。目がかち合つ。

透き通つてゐる水色にすらりと伸びた背、綺麗だと誰もが言つであ

らう容姿、ソレは人の形をしていた。今度はしっかりと足もあり、服のようにひらひらとした体と同じようなものを身に纏っている。

「……。」

よく来た。

水色のソレはラジウをじっと見つめると、口を開いた。

「あ、あんたいったい何なのさー?」

私は精霊。人間よ。我が糧となるか?

淡々としたしゃべりに強い命令口調。

人は今、魔物の餌とされていることもよくある。しかし、精霊は一般的に人間であろうと魔物であろうと、自分の縄張りに入ってきたモノを糧にしている。だから、精霊は先程から餌を弄んでいるだけにすぎないのだ。こんな問い合わせ遊びの一いつに過ぎない。

だが、それをわかる程、ラジウは精霊のことには詳しいわけではない。

「な、何言つてんのさー?僕はサークを連れ戻しに来たんだ!!」

だから、馬鹿にされたとでも思ったのだろう、ラジウは座り込んだまま口だけで吠えた。

逃がさない。逃げられない。

精霊は手をゆっくりと横に突き出した。ラジウは田で精霊の動きを追う。すると、突き出した先の壁が上へと移動していく。

「なつ……」

壁が動いた先はガラスで区切られ、向こう側の部屋がよく見えた。ガラスの向こう側は青に近い水の嵐になつていて。キヴィイ、クレク、シルキアがその中に浮かんでいた。

天井から頭一つ分しか、もう空氣がある部分が残されていない。荒々しく波を立て、水は彼等を襲つ。

「クレク！ キヴィイ！ シルキア！」

ラジウは手をついて勢いよく立ち上がり、壁まで駆け寄りつとする。

ニユル

何かがぬめる様な音とともに、ラジウの体は動きを止めざるを得なかつた。彼の首には水色の長いホースのようなモノが絡みつき、ギリギリと首を締め付ける。

絡みつく水を辿ると、精靈の腕が異様に長く伸びてラジウの首を締め付けていることがわかつた。腕はかなりの力があり、ラジウの体を地面から浮き上がらせたのである。

ラジウは苦しさから必死に長い腕を掻き鳴った。けれど、感触は水を切つているという感覚だけ。

「ぐつ。」

ラジウの視界にキヴィイが入つてくる。彼女は口を動かし何かを言つてゐるようだ。しかし、ラジウにはそれが何なのかわからない。辛うじて三文字の言葉を言つてゐるのは理解した。

けれど、ラジウの意識も朦朧となつていぐ。

「おこにちやーん。」

ラジウの意識が飛びそうになつた時、聞いたことのある子供特有の高い声を耳が捉えた。それによつてラジウは引き戻される。

「へ……メル?」

声の主の名を息を切らしながら呟いた。サートの妹のノメルの声が小さいが窓の外から聞こえてくるのだ。彼女は寝ているはずなのに、なぜ声がするのか。

「おーい。ラジウさまー?」

だんだんと声は近づいてきている。ラジウは悟った。ノメルは起き出して自分達を探しているのだと。そして、だんだんとこの塔がある湖に近づいてきていることを。

精靈がにやりと笑みを浮かべ、窓の外を見やる。ラジウは必死に精靈の腕に指を食い込ませようとするが、あつさりと水の中に飲まれ、手を握る形にしかならない。

精靈が、窓からもう片方の腕を伸ばした。

「や、やめやーつ!」

ラジウには叫ぶ意外に何もできなかつた。手を伸ばし、必死に訴えるが精靈は一切ラジウを見るることはなかつた。新たな得物の方に興味を持つてゐるようだ。

「あやつー。」

悲鳴とともに、ノメルがラジウの視界へと入ってきた。精靈が伸びる手を使ってノメルを捕まえ、最上階まで引きずり上げてきたのだ。腕をつかまれ、宙に浮いている茶髪の少女ノメル。その瞳には涙が薄つすらと浮かんでいる。

「な、なにい？」

状況がわかつていらないノメルに、精靈は笑みを溢し、彼女の首を絞め始めた。

ラジウとサーートを見つけ、一瞬顔を輝かしたノメルだが、首を絞められることで恐顔が怖に歪む。ラジウは、そんなノメルに手を伸ばすが、あまりに遠くどうにもならない。

首を絞められ、更には口を精靈の腕から這い上がる水が埋めつくす。ノメルの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

我が糧なり。美味ぞ。

精靈が笑んで、頭に響く声を発した。ノメルの涙が頬を伝い、精靈の体に吸収されていくのだ。ボロボロと流れ出る恐怖におののいて流れるノメルの涙は、精靈にとって最高の食事。

涙を糧にしている？水が本体だから触れる液体は全て吸収してしまうのだ。ラジウは目を見開くと、キヴィがいる方向へと視線を移動させた。

第一章～真実と真意～（15）

すでに全てが水に埋まつた中で、キヴィイは必死にガラスの壁を叩いていた。ラジウと目が合つと、人差し指を目に当てて、頬を沿い顎まで移動させてみせる。先程言つていたことが涙という言葉だと気がついたラジウは、精霊に向き直る。

ノメルが気絶しない程度に喉を絞め、大粒の涙を食らつている精霊。ラジウは目を閉じた。自分の心を奮い立たせなければいけなかつた。たぶん、精霊を倒すためには恐怖などの心を抱いてはいけなかつたから。

「いいんだ。僕にはやらなきやいけないことがある。こんなところで止め食らつていいわけがない。僕はラジウ・マイナー。皆を助けたい。助けなきや、僕は僕でいることが恥ずかしくて、きっと生きてなんか行けない。」

ノメルに氣をとられてか、ラジウの首を絞めている力は先程よりも弱いものとなつていて。ラジウは、自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

心中で何かが燃え盛つっていた。ラジウは顔を上げる。彼の目にも涙が滲み出でていた。

「僕は、死んだって諦めるもんかっ！」

そう叫ぶと、声を出した振動によつてラジウの涙が落ちた。涙はラジウの首を絞めている精霊の背へと落ちる。吸收されるかと思つたが、精霊と涙が触れた瞬間、精霊の片方の腕が消えていた。ドテッという音と共にラジウは床に落ちた。しかし、目の前の光景に目を白黒させるだけだった。精霊がノメルを離し、キツとラジウ

を睨みつける。

ノメルは既に氣絶しているようではくりとも動かない。ラジウは、腕に力を込め精靈から視線を外さないようこめつけりと起き上がった。

貴様、我に何をした？

怒氣をはらんだ口調で精靈はラジウに尋ねる。ラジウは首を横にふるふると振る。正直なところ、ラジウにも何が何だかわからなかつたのだ。

キヴィに促され涙を流そうとし、ノメルが恐怖で泣くを見て恐怖はいけないと思つただけなのだ。それがどうして精靈の片腕をあつさりと消してしまつたのか、ラジウにもさっぱりわからなかつた。

答えぬつもりか……ならば、他の者に答えるまでだ。

怒りを露わにしているものの、精靈は冷静なままキヴィ達がいるガラスのある方の手で勝ち割つた。

ガシャンという音と、水がどつと流れ込んでくる。キヴィ、クレク、シルキアもその水にのつてラジウがいる部屋まで流されてきた。

「げほつげほつ。」

荒く咳をする三人。飲んでしまつた水を吐き出すように前のめりになつてゐる。水はラジウがいる部屋まで来ると精靈に吸収され量を減らしていく。しかし、足の踝まで水の量の変位は止まつた。精靈は、三人を一人一人みやる。キヴィのところまでくると、視線を止めた。消えたはずの腕が生え、キヴィを捉え自分の場所まで引つ張つていく。

「キヴィ！」

「ぐつ！な、なんだいいつたい！？」

自分の近くまで連れてきたキヴィを、精靈はじつくりと品定めをするように目を細めながら見る。

貴様、こいつが我に何をしたか知つて居るのだろう？何か合図を送つたな？

精靈の言葉に、キヴィは鼻で笑つた。そして、状況を理解したからだろう、余裕の表情で精靈を見る。

「ふふ。あんた、実際はよくわかつてんんだろう？ラジウ、泣きな！めいっぱい泣きな！！」

黙れ！

キヴィはラジウに向かつて叫ぶ。精靈が吼えながらキヴィの首を絞め始めた。ノメルやらジウ達を締めていた時の比ではない。かなり強い力だろう、キヴィがすぐに氣を失つてしまつほどだ。明らかに精靈は動搖している。

「……わかった。泣いてみる。泣いてみるよキヴィ！」

ラジウはそう言つと目を閉じた。

決して負けてはいけない。僕は、僕は負けない。負けるなんて悔しい思い、もう一度としたくなんかない。誰かを失うなんてこと、したくない！ラジウは自分の決意に目を開けた。

なぜか決意を固めると、涙が出てきた。これまでの様々な出来事が

頭の中で周り、失いたくはない気持ちが頭をもたげるのだ。ラジウは、父のことを思い出していた。だから、涙が止まらなくなつていたのだろう。

しかし、それは以前の悲しみにくれる涙でないことを、ラジウは知っていた。

「父上、僕は強く生きてみせる…」

ラジウの目から数滴の涙が零れ落ちた。涙は床にある水に溶け込む。それを見た精霊は、量の手をラジウに向かつて伸ばした。

ラジウはそれを真つ向から見つめた。

「お前なんかに負けない、負けやしない！キヴィの分も、ノメルの分も、サーツの分も、みんなの痛みの分だけ僕が涙を流してやる！お前なんか、消してやる…！」

シルキアとクレクがそれぞれ武器を放つ。その武器は精霊の手を邪魔し、ラジウのところまで来ることを遅らせた。

守りたい。その気持ちからまたラジウの瞳より涙が数滴零れ落ちる。かと、思うとその零れ落ちた部分が、いきなり閃光を放つた。あまりの眩しさに全員が目をつぶる。

「あ、貴様。必ず殺して……や……

精霊の怒りが混じった声が、だんだんと薄れ消えていく。ラジウは、両の腕で目を庇い、そのまま固まつていた。
しばらくすると、光が止み目を開く。

「……あれ？」

暗闇の中何も見えなかつたため、ラジウは首を左右に動かして辺りを見回した。だんだんと目が慣れてきて、暗闇の中でシルエットがだんだんと浮かんでくる。

「何？ 湖？」

そこは、明らかに城に近い湖のほとりだつた。そこへ、自分以外に五つの影が転がつていた。ラジウは、立ち上がるごとに一つの影に近寄る。それはキヴィだつた。

ラジウはキヴィを搔きぶつけてみる。すると、彼女は目をぱくぱくと動かしゆつくりと瞳を開いた。

「キヴィー！」

「……ああ、ラジウ。あんた、ちゃんとやつたんだね。」

身を起こし、頭を振つてからキヴィはラジウに笑いかけた。ラジウは兆手をぎゅっと握つてガツツポーズをしてそれに応えた。

「おー、こつたい何がどうなつてゐる？」

いつの間にか起きたのだろう、ラジウの後ろにシルキアとクレクが立っていた。シルキアがキヴィに視線を投げる。今の状況を説明しようと田が言つている。

「ああ、実はね。精霊つてーのは体への攻撃がまったく効かないんだ。それで、精神攻撃をするしかないんだけど、水の精霊つていうのは厄介でね冷静沈着な奴等が多いんだ。だけど、欠点もある。それは、液体であれば何でも吸い尽くす体质なんだ。だから、体内に気持ちの籠つた水を直接流し込めばいい。聖水とかめつちや効果で

きめんなんだけど、持つてなかつたし。だから、ラジウの涙腺の弱さにかけてみたんだよ。」

キヴィはせりせりと説明を繰り出すが、説明のせいでだんだんとしうげくれているラジウには気付いていない。

「なるほど。それなら確かにラジウ様が一番適切ですね。泣き虫ですし。」

留めにについりと言い放たれるクレクの言葉。流石にラジウもその場に蹲つて膝を抱えてしまつた。シルキアがぽふつとラジウの頭に手を置く。

「シルキア……。」

ラジウが涙目でシルキアを見上げる。シルキアはそれに無表情のまま口を開いた。

「長所は生かしたほうがいい。」

「……うわーん！ シルキアの馬鹿！…」

最後の最後で結局フォローにもならない台詞を吐かれ、ラジウは泣きながら逃走してしまつた。それを追おうともせず見送る三人。

「で？ 実際のところはどうなつてたのですか？」

クレクが先程の返答では信じられないのか理解が不十分なのか、キヴィへと問いかけた。

「うーん。強い心で消えろ！と思つたりしたんじゃないのかねえ？精靈は液体と一緒に思いも吸収してしまったはずなんだよ。だから、ラジウの思いが知らずに吸収され精靈への命令になつたはずなんだよ。ただ、恐怖を克服しなきや、そんな効果は得ないんだ。私達なんかよりずっと負けず嫌いのラジウだからね、恐怖なんかより負けたくないって気持ちのが勝ると思つたんだよ。」

「なるほど。泣く面でも思う面でもラジウ様が適任だったわけですね。」

キヴィの説明に、クレクは納得し、頷いて見せた。

「ああ、私達大人には無理なことを、あいつはやってくれたのさ。」

「ガキだからな。」

キヴィはラジウの走つていた方向を仰いで呟いた。彼女の言葉にシリキアは相槌を打ち、彼もまたラジウが去つていった方向へと視線を投げる。

「さ、サーント君とノメルさんを連れて、私達も帰りましょうか。」

クレクは笑顔のまま未だに倒れ意識の回復しないサーントを担ぎ上げた。シリキアはノメルの方の手をとる。こうして、三人は一人を連れて静かになつた湖を後にした。

第一章～眞実と眞意～（16）

太陽が昇り、辺りを照らし出す時間。

「ラジウ様ー！」

元気に回復したサーテークがいつまでも寝て居るラジウの寝室へとやつてきた。昨夜、サーテークの意識が戻らないので、ラジウはまずつと起きて彼を見ていたせいか大声で呼んでも返事がない。と、言つても見ている間に寝てしまい、クレクに自分の部屋まで運ばれていたりするのだが。

「朝ですかー？起きてくださいよー。」

サーテークはお構いなしにラジウを揺さぶる。ラジウは身を起こすが目がまだ開かない。

「うーん……眠いよ。……ん？」

寝ぼけ眼を手で擦り、やつと目を開けるラジウ。目を開けたそこには、につこつと笑顔を浮かべながら笑っている黒髪を一つに結んだ少年がいることを確認して、ラジウは目をひん剥いた。

「サーテーク元気になつたんだー！？」

「はー、おかげまでー。」

身を乗り出して自分をまじまじと見るラジウに、サーテークは笑顔で元気良く答えた。サーテークはとにかくひどく、薬を塗つてその上から布

を被せたような部分が見受けられた。多分、かなりの傷の数があるのだろう、いつもと違つて長めのシャツを着ており素肌が見えないようになつてゐる。

「良かつたあ。」

ラジウもこいつらと笑つて胸に手を当てた。

「はい。じゃ、ラジウ様。ご飯食べに行きましょうー。」

「うんー。」

二人は一緒に食堂まで駆けていく。どちらが早いか競争でもするかのように全力疾走をしている。食堂につくと、キヴィとシルキアが椅子に座り、クレクが食事の準備をしていた。

「うひはーんー。」

ラジウが元気良く声をあげ、自分の席へとつぐ。サーテも遅れてやつてくると同じように椅子へと腰をかけた。

クレクが一人の前にパンといり卵、ハムがのつた皿を差し出した。

「元気だねえ。昨日あんなことがあつたつてえのに。」

キヴィが食後のコーヒーを飲みながら、ラジウを見て言ひ。しかし、聞こえてないのかラジウはご飯を夢中で食べている。キヴィはため息をついて「コーヒーをもう一口呑んだ」。

「キヴィさん。あの湖、まだ危険ですかね?」

自分専食事を持つて席についたクレクは、少しむくれているキヴィへと話しかけた。昨日は結局サーントノメルを看病する方に忙しへ詳しい話を聞けなかつたからだ。

「いや。ラジウの涙で消滅したし、いるのはせこぜこ大きな魚くらいじゃないかねえ。」

「そうですか。それなら遊ぶときはやはり大人がついてた方がいいでしょうね。」

キヴィの答えに、クレクは思案しながらラジウを見る。それにラジウは食事の手を休め、むつとしたよつてに顎を膨らませた。

「まあ、そつやつて子供扱いするー。」

「いじじゃないですか、子供なんですかー。」

食つて掛かるが、あつさつとクレクに流れられ、思わずこけやつになるラジウ。だけど、いじで引き下がることはできなかつた。

「やだよ、クレクの心配性ー。」

「親は心配するものですよ。」

しかし、またもやあつさつぱりと受け流すクレク。怒る様子も見せず、ラジウはなんだか拍子抜けしてしまつ。

「じゃ、じゃあいいよ。僕、またシルキアと遊びに行つちやうんだからねー。」

ラジウはこれでどうだ！と自信満々にクレクを煽った。クレクは顔をあげ、笑みを浮かべた。

「夕飯までには帰つて来てくださいね。」

ドンガラガッシャン

凄い音を立ててラジウは椅子からひっくり返った。あまりにあつけない返答に驚いたのだ。しかし、クレクは気にした風もなく、食事を続けている。

なんとかラジウは机に掘まつて起き上がる。

「……な、なんなんだよ。クレク……もしかして、大つ嫌いって言った事根に持つてる？」

机から皿だけを出してラジウは様子を伺っている。今度はクレクが食事をする手を休め顎に手を考えた。そういえばという表情をしていふことから、既に忘れていたようだ。

「『』、ごめんね？僕、本気で言つたわけじゃないだよ？ね？」

しかし、表情を読み取れないでいるラジウは恐る恐るクレクに視線を投げる。いつまでも怯えているラジウに、クレクは優しく笑み[『]大丈夫ですよ。』と一言言つて食事を再開し始めた。

「な、なんかクレクが優しいよ？どうしてかな？」

隣に座るキヴィに、ラジウは耳打ちをするように小さく聞いた。し

かし、キヴィも肩を竦めて首を傾げてみせる。

「それはですね、無愛想で何考てるかわかりませんが、たまに良いこと言つシルキアさんのおかげですよ。」

しかし、明らかに回りに聞こえていたラジウの言葉に、クレクは笑つて説明した。

「貴様、俺に喧嘩を売つてゐるのか？」

「そう聞こえます？ 褒めてるつもりなんですけど。」

すでに食事を終えたのであるが、傍観していたシルキアが眉を顰めてクレクに視線を投げた。しかし、クレクは冗談めかして笑うだけ。

「ふん。後、さん付けはやめると言つたはずだが？」

「いやですねえ。シルキアさんが嫌がりそつですからやめませんよ。」

シルキアの新たなる追撃にされ、笑顔で逆に返すクレク。ラジウが目を白黒させてしまつくらい、クレクは前とはちがくなつていた。

「な、なんかクレク、レベルアップしてゐるナビ。なんで？ねえ、シリキア？」

「俺は知らん。どうでもいいがあの嫌がらせを止めさせり。」

ラジウがシリキアに話しかけるが、不機嫌そうにシリキアはラジウに目をやる。明らかに多少怒っているのが伺える。

「えー？ やだよ。なんか、何か言つたら倍になつて帰つてきそうだもん。今日のクレク。」

「ラジウ様、遊びに行きましょー。」

シルキアの言葉に首を激しく横に振るラジウ。
シルキアが何か言つ前に、サーテは笑顔で彼に話しかけた。ラジウはうんと大きく頷いて、残りの飯をかっ込んだ。かと思うと、すぐさま立ち上がってサーテとともに食堂を後にするのだった。

「クレク。あんた、なんだか本当に柔らかくなつたねえ。」

キヴィが飲み終わったカップを置くと、クレクに言つた。クレクはそれに笑いながら答える。

「信頼できる仲間ができた。というだけですよ。キヴィさんもシリカさんも、ラジウ様のことよりしきお願いしますね。もちろん、他の子供達もですが。」

「……ふん。俺も行って来る。」

クレクの言葉に、シリカは鼻を鳴らすと立ち上がった。

「はい、夕飯までには連れて帰つて来てくださいね。シリカさん。」

「

「ああ。」

シリカは片手を上げると食事の片づけをしているクレクに振つて

見せてから食堂を後にした。

キヴィは、クレクからもう一杯「コーヒー」を貰つと、ゆっくりと本を読み始めた。彼女は感じていた。安心できる場所へとこの場所が変化していっていることを。

真実を知り、真意を知った相手へ許される暖かい信頼という場所へと変貌していくこの場所で、ラジウはまだ知らないことを知つていく。

今までも、これからも。

第一章～真実と真意～ 完

第三章～失うもの～（1）

第三章～失うもの～

鳥が鳴き、朝を告げる。まだキリが濃く太陽が霞む朝早い時間に、ラジウは珍しく起きていた。起きて、彼は城の入り口より奥に行つた場所にひつそりと佇む一つの墓の前にいた。

今朝とつてきた花を沿え、ラジウは墓をじっと見つめた。墓に彫ら

れている名前はホーデュ・マイナー。ラジウの父である。

「父上……いつか必ず、体も顔もここに埋めてあげるからね。」

呟いて目を閉じ、ラジウは一筋の涙を流した。そんなラジウの後ろに一つ、黒い影が立っていた。影に気付かずに、ラジウは目を開けると涙を拭い立ち上がる。

立ち去ろうと振り返り、初めてラジウは背後に入人が立つていたことに気付いた。思わず身構えるラジウ。

後ろに立っていたのは、背が高く体を一枚の黒い布で隠し、顔さえもその布をフード状に被り隠している。見える部分はフード部分から覗く黒くて長い髪。それと、額から突き出している鋭くとがった一本の角だった。それ以外はまったくどんな風貌なのかラジウにはわからなかつた。

「そう、怯えないでいただきたい。」

低い声でその黒装束の者は言った。どうやら男の人なのよつだ。ラジウは構えたままじつと彼を見る。

「ラジウ・マイナー様とお見受けしますが……。」

「そう、だよ。」

静かに低い声が呟く。ラジウは額から冷や汗を流し答えた。この人から決して視線を外してはいけない。そうラジウは感じていた。

「やはりそうでしたか。では、貴方の父の元へいらっしゃいませんか? ラジウ様。」

男の甘い誘いの言葉はラジウの心に揺さぶりをかける。しかし、ラジウは行きたいという思いを堪えた。なぜなら、男の額から見える角が彼をあるものだと証明しているからである。そう、彼は人間ではない。魔物の部類なのだ。

人間を食らう魔物もいることは、湖の件で痛いほど知っていた。だから、安易についていくのは危険だと判断したのだ。

「……何を言つてゐるのさ? 魔物についていくほど、僕は落ちぶれちやあいないよ。」

挑発的な態度でラジウは魔物を睨み付けた。しかし、魔物の表情がわからぬいためどう思つて居るのかが判断できない。

「そうですか。残念ですね。」

魔物は挑発にのることなく、淡々と言い放ちラジウに背を向けた。もう一度誘うこととはせずに、魔物はそのまま歩き去ってしまった。ラジウはぽかんと口を開けてそれを見送り、立ち尽くしているだけだった。

朝食の時間。ラジウの突拍子もない発言で、全員が口に呑んでいたものを吹いてしまった。『魔物と会つた。』その一言は全員の目をひん剥ぐのに十分すぎる効果を持っていたのである。

「い、い、い、い、いつビードー？」

キヴィイが、口を拭つてからラジウに食つてかかる。普段落ち着いているキヴィイでさえこの動搖つぶり。ラジウは頬を搔きながらしまつた。とちよつと後悔していた。

「うーんとね。父上のお墓に花を添えてたらね……。」

ラジウは今朝会つたことをかいづまんで面に話して聞かせた。それに、キヴィイは頭を抱えクレクは頬を引きつらせていた。ちなみにシリキアは今いない。

「ばつかじやないかい！？自分の正体ばらして、尚且つ挑発するなんて！無事なことが奇跡だよ。つたぐ。」

キヴィイにどやされて、ラジウは耳を塞ぎむくれる。クレクも今度ばかりはため息しかでないのか、キヴィイの言葉に頷いているだけ。そして、散らかった机の上を片し始めるのだった。

「まあ、いいじゃん。何もなかつたんだし。だいたい魔物だつて良い奴もいるじゃないか。ほら、アレンさんとこにいた魔鳥さんとか。

「

「確かにそうだけじね、あんた。ああいうのが稀だつてわかつてないだろ?」

頬杖をついてじと田でキヴィはラジウを見る。しかし、ワジウは笑つており、まったく反省していなことが伺える。

「大丈夫だよ。クレクだつて良い奴だし。」

「ラジウ様、あんまりよく動くお口でしたら、ゲンコツを入れて差し上げましょうか?」

ラジウの言葉に、クレクは右手を握つてみせ笑顔で強く言い放つた。こめかみ辺りがぴくぴくと動いていることから怒っているのは明らかである。

「そ、それよりさあ、角を持つあの魔物つていつたい何なの?」

怒つているクレクにこれ以上何か言つては何が起こるかもわからないと思つたラジウは、すぐさま話の方向を変えていく。

「うーん。聞いた限りじゃあ人型だと思つんだよね。黒い髪つていの人は魔力を持つてると言つてね、狙われやすいうえに魔物にされやすいんだよ。もしかしたら元は人間かもしれない。悠長にしゃべつてたんだろ? そいつ。」

「うん。すん。」礼儀正しかつたよ。」

「飯を食べながら、ラジウは「くくく」と頷いた。クレクが眉を顰め口を開く。

「人間を魔物にすること」が、可能なのでしょうか？」

「ああ。一説によると、人間を魔物に変えることができる魔物が存在するらしいんだよ。人型はあまり力はないが人に警戒されにくいう利点がある。だけど、人型の魔物なんてエルフや小人、人獣と呼ばれる奴等ぐらいだろうね。」

キヴィは、説明をさらりとしてみせる。知識だけはこの場の誰よりも持っているキヴィのことだから、あながち間違ってはいないだろう。

「にしても、妙だね。なんでこんな人が少ないへんぴなとこへ魔物が来たんだろうねえ。サーントでも狙つて来たのかね。」

「なんでサーント？」

「あんた、今の私の話を聞いてたのかい？黒髪だろ、サーントは。いわゆる魔物に好かれる体質つてわけだよ。まあ、魔力を持つても使えないのが人間なんだけどね。」

ラジウの気の抜けた問いに、頬をぴくぴくと動かしながら、ため息混じりにキヴィは答えた。それから、何を思ったのか白衣の大きなポケットから分厚い本を取り出してパラパラと見始める。

「ラジウ。どうやらあんたは今的情勢や、魔物のことについて知らなすぎるね。今日は、あたしと一緒に勉強だよ。つたぐ、いろいろ教えてあげるからちやーんと聞くんだよ？」

「え？ やだ。」

パラパラと本をめくっていたキヴィだが、ラジウの即答にその本を閉じた。本を右手に持ち替えて、高く上げたかと思つとそのまま振り下ろす。

ガツンというなんとも鈍い音が出た。本の角は、見事ラジウの頭にクリーンヒットしている。

「仕方ない奴だね。せめて、その魔物がなんで来たのかを搔い摘んで話してあげるからよーくお聞き。魔物つてえのは今、ほぼ全域を支配しているのは知ってるだろう? だけど、人間つてのもあらゆるところに散らばつて生きているんだ。だから、大きな街は魔物に攻め落とされたとしても、小さな村の集落などは生き残っているんだ。というか、魔物がそんな小さな集団は相手にしていないと言った方が正しいんだがね。で、私達がいるこの城も大した人数の人間がないから、魔物は見向きもしないはずなんだ。それがなぜ、ラジウの前に現れたのか。答えは簡単。」

ここでキヴィは得意げな笑みでラジウに視線を寄越した。しかし、本で殴られたラジウは目を回して気絶一歩手前。まったくキヴィの話を聞いていなかつた。

「うーじーうー。」

ラジウの襟首を掴み、揺さぶり起しすと、キヴィはやつと続きを紡いだ。

「なんで魔物があんたの前に現れたのか。宣戦布告だよ。」

「せ、せんせいふーく?」

田を回しながらも、なんとかキヴィの言葉を理解しようとラジウは奮闘していた。しかし、頭もグルグルと回っているせいか、か細く上擦った声になってしまっている。

「せうれ。ホーマイ国への宣戦布告。それが目的だと思つね。私は。」

本をしまい込み、キヴィは言い切つた。ラジウは頭を振り、なんとか自分の意識を取り戻した。

「え？ でもそれならなんで僕のところへ？」

「だから、ホーテュ・マイナーの息子だからだよ。あんたの力加減を見ておきたかったんじゃないのかねえ。」

ラジウの問いに頬杖をつき、もう説明するのもめんどくさいうにキヴィは答える。ラジウもさほど興味がないのか、ふーんと粗糙を打つだけ。そこに、片づけを終えたクレクが割り込んできた。

「しかし、ホーマイ国では、ラジウ様の偽者がおられるのではないか？ 普通でしたら、そちらの方へ魔物も行くのではないでしょうね？」

「両方行つたと思つよ。どちらかに山勘なんて真似しやしないよ。で、ラジウ。あんたどうするんだい？」ここまで攻め込んでくるかもしれないよ？」

クレクの心配げな態度にキヴィは手を顔の前で振つて軽く返答し、ラジウに向かい直るとこやうと笑みをこぼした。

「うーん。まあ、大丈夫だよ！キヴィもシルキアもいるし、クレク
だってそこそこ戦えるよ？」

神妙な顔つきに戻ったキヴィに、ラジウは頬にお弁当をつけたまま
につこりと笑い、あつけらかんと言い放つた。
緊張の欠片も感じられないラジウの台詞に、キヴィは開いていた目
を半分まで閉じ肩を落とす。

「あのねえ、ラジウ。あんたが今まで見てきたのはあくまで人と人
との戦いでしかないんだ。魔物との戦いつつたら、シルキアもク
レクも一瞬にして消されちまうレベルなんだよ。わかるかい？」

「えー？でもさ、クレクは魔鳥と戦ったよ？」

自分の名前が出るたびに、乾いた笑みを浮かべるクレクだが、今
二人の会話には入ってこようとはしない。どうやらなんとも言えな
い状態らしい。しかし、彼が割って入ってこないとなると子供の喧
嘩の「ことくキヴィがラジウに向かつてケンカ口調になつてい。ラ
ジウも子供であるからなおさら喧嘩腰で返してしまつという悪循環
へ陥ってしまうのだ。

「……人に近い魔物はいわゆるざ・い。なんだよ。レベルで言つた
ら2か3くらいの魔物。ちなみに人間はレベル1で魔物の王と呼ば
れる奴は確実にレベル99だよ。わかつたら街には近づかないこと
だね。」

キヴィはもうこれ以上話す事はないとでも言うように、ラジウが口
を開く前に立ち上がつた。それから大きく伸びをし、クレクへと
向き直つた。

「クレク。後で私のところに来とくれ。」

「わかりました。仕事を一通り終えたらお伺いします。」

端的なやり取りを交わした後、片づけをしていくクレクにキヴィは笑ってみせ食堂を後にしたのである。

「ねえ？なんで街に行っちゃいけないの？」

キヴィを見送り、しばらく口に入つたものを租借してから、ラジウは一緒に食堂に残つているクレクへと疑問をぶつけた。

クレクは洗い物をする手を休めずに、ラジウに背中越しから返答を返す。

「いろいろあるのですよ。どうせ行く気などないのじゃつ？」

「うん。まあ、ない。」

クレクの返答はひどく曖昧でほぼ核心に触れることはなかつた。だがラジウは彼の台詞に突つ込むこともせず、そういうえばそうだと思いつてしまつ。よほど街への興味がないのだろう、遊ぶ場所なら街よりもここの方がたくさんあるせいかもしれない。

「じゃ、僕も遊びに行つてくれるねー。サークル呼んでシルキアのところに行つてくれるよ。」

飛び出そうとするラジウに、クレクが何か言いたそうに顔を向けたので、ラジウは誰とどこへ行くのかをきつちりと報告した。それさえ言っておけばクレクが小言を言わないことを覚えたのだ。

クレクは行き場所を聞くと、笑顔で「いつてらつしゃい」と一言。

ラジウもクレクに笑顔を返し、食堂を元気よく飛び出しこつた。

第三章～失うものの～（2）

湖の辺には日が差し込み、キラキラと水面を輝かせていた。ちょうど、太陽が真上に来ているお昼時。数本生えている木の陰にある岩場に一人、腰を降ろしている人物が居た。

「シルキアー！」

遠くから甲高い声が人物の名を呼ぶが、彼はまったく動く気配を見せない。ラジウはだんだんと近づいている動かない影を見て、眉を顰めた。

「シルキアー！？」

もう一度、今度はさつきよりも大きな声で呼んでみる。しかし、やはり彼の反応は一寸もない。仕方なくサーツと一緒に近づいて行くラジウ。

シルキアを見て、サーツは眉を顰める。とあることに気が付いたのだ。

「あれ？ シルキアさんの釣竿ひいてません？」

ラジウは首を傾げてサーツが指差すシルキアの手を見た。シルキアの手に握られている木の釣竿が、微かにぴくぴくと動いている。

「ちよ、この湖つて……。」

ラジウが言いかけた時、今まで小刻みで小さい揺れをしていた釣竿が、一気に湖の方へと引っ張られた。シルキアの手は竿から離れ

ない。そのかわり、あつさりとシルキアの体が湖に引きずり込まれていった。

ボチャーンという音が辺りに響く。

「…………。」

「…………。」

ラジウとサーテは口を開いたまま、その場で固まってしまった。ラジウにいたっては、遠くに居るシルキアに、思わず手を伸ばしたままの状態で時が止まっている。

辺りがしんと静まり返る。

「…………あつー・シルキアさんーー!」

サーテが我に返り、湖へと駆け寄る。ラジウもサーテの声ではっと意識を取り戻したが、カナヅチであるうえにこの湖には嫌な思い出が多々あった。だから、行きたくても湖の近くに行くことができないのである。

湖が大きな波紋を辺りに散らかし、やがて消えていくのをラジウとサーテは見つめていた。

流石にやばい状況だと感じたのだろう、ラジウが慌てふためいて、画面蒼白になりながら叫ぶ。

「ど、どひじょーーー・シルキアが死んじゃったーー!」

「勝手に殺すな。」

しかし、突っ込みとともにシルキアがずぶ濡れの顔を水面から出してきた。いきなり飛び出して來たので、ラジウは驚いて尻餅をつい

てしまつ。

シルキアは氣にすることなく、顔から水を払つようとじきり頭を振つた。そして、近くの岩から陸へと登つて来る。

「シルキアさん、大丈夫ですか？びっくりしましたよ～。」

服を絞つてゐるシルキアの様子を見て、ほつと胸を撫で下ろすサート。流石に田の前で湖に落つこちられれば、誰でも驚くだらう。

「ああ。」

「シルキア！遊ぼうぜ！…」

ラジウは平然としているシルキアに安心したのだろう、元気よくシリキアに飛び掛つた。

バシャン！

ラジウの勢いに押され、シルキアはラジウと一緒にそのままもう一度湖へと落下していった。それもそのはず、シルキアが立っていた場所は、湖から上がつたすぐそこ。バランスを崩せば落ちるのは当たり前である。

「…………。」

今度はすぐさま水の中から顔を出したシルキアは、眉を歪め額に皺を寄せるとため息をついた。それから横で手をバタバタと動かしながら水を飲み、明らかに溺れているラジウに視線をやると、何を思

つたのか腕を伸ばす。シルキアの手は次の瞬間、ラジウの湖の中に押し込めていた。

ガボガボと空気を吐く音を立てるラジウ。今にも溺れてしまいそうだ。

サートは彼等のやり取りを見ながら、目に涙を浮かべて笑いを堪えようとしていたが。

「な、なに笑ってるんだよ！」

ラジウがシルキアの手をどかし、彼の手に必死に掴まっている。ゲホゲホと水を吐いてから、笑いを堪えきれていなかつたサートに噛み付いたのだ。しかし、それすらも面白かつたのか、ふつとサートは吹き出して更に笑いを増してしまつ。だから、上手く謝ることができなかつた。むつとしたラジウがサートにもう一度くつてかかるつとするが、タイミング悪く、もう一度シルキアによつて湖に沈められてしまつた。

「がぼがぼつーー！」

しかし、水面がラジウの動き以外で微かに揺れる。同時に、サートが水面に浮かぶ大きな影に気付き、笑うのを止めて目を見開いた。

「たつーー？」

目の前にいる彼の表情の変化が視界に入り、シルキアは沈めていたラジウの襟首を引っつかむと、丘に向かつて放り投げたのだ。顔から着地し、思わず声を上げるラジウ。

シルキアは振り返つて腰に差していた短剣を素早く抜き去つた。

「げつーあのバカでかい魚ーー？」

ラジウは身を起こし、慌てた様子で湖を見た。湖には、前に一度襲われたことのある池の主らしき魚が、シルキアに迫ろうとしていた。シルキアは魚を睨みつけて対峙する。一瞬だった。シルキアが短剣を見えないうちに放ち、その短剣が大きな口を開けている魚の横を通り過ぎていく。

ベリ

何かが剥がれるような音がすると同時に、シルキアは魚の前から消え失せていた。魚は空を切り、水しぶきを辺り一面に撒き散らして、湖へと沈んでいく。

ラジウとサークの目には、水しぶきと太陽の光が織り成す虹が映し出されていた。ラジウが綺麗だと思い目を細めた瞬間、虹を切り裂くように影が降つてくる。影はラジウとサークの前で見事に着地をはたした。

着地した彼の両手には、右に先程投げた短剣、左には大きな鱗が握られていた。

「……何それ？」

「ウロコ。」

「見りやわかる。」

ラジウが指をさし持つているものの正体を聞くが、シルキアは一言きっぱりと言い放つのみ。彼の返答に負けじと即答で突っ込みをかますラジウ。

「…………。」

「…………。」

ラジウとシルキアの間に沈黙が訪れた。風が一人の間を通り過ぎていいく。

「シルキアさん、そのウロコつてやつの大好きな魚のものですよね？」

「ああ。」

とりあえずサー^トは頬を搔いてから二人の間に割って入った。そうしないとこれ以上話が進まないと感じたのだろう。

シルキアはサー^トの問いに頷いて答えると、手に持っていた鱗をラジウへと手渡した。目の前に鱗が来て、ラジウは思わず手を出して受け止めた。しかし、シルキアの意図がわからず首を傾げて彼を見る。

「何これ？」

「ウロコ。」

「…………。」

ラジウのぽろりと零れ落ちた疑問に、またもや率直に答えを出すシリキア。ラジウは流石に押し黙ってしまった。

「キヴィに渡せ。」

しかし、黙り込んで額に皺を寄せしきりに自分を見るラジウを気にする」となじまつたなく、シルキアは彼に单刀直入に指示を出す。その言葉で、ラジウはやつと理解した。シルキアが薬の材料を探るべくこの湖にやってきたのだと。

「ふーん。あのでつかい魚、釣ろうとしてたんだ?」

「ああ。力負けしたがな。」

茶化してちょっかいをかけるラジウだったが、シルキアの思わぬ言葉によつて逆に内心突つ込みをサート共にしてしまひ。『力負けうんぬんの前に、あんた寝てたがなつ…』と。

「わ、わかつた。じゃあ、届けに行つて来るよ。」

暗い影を落とす中でなんとか自分を奮い立たせ、ラジウはサートにもう片方の手を差し出した。一緒に行こうといふ意思表示だ。

しかし、サートは胸の前で手を止め、首を横に振つた。

「すいません。少しシルキアさんと話がありますから。オレ、残ります。」

「そう? わかつた。じゃ、行つて来るね!」

ラジウは一瞬顔を曇らせたが、すぐにこりと笑つて頷いた。そして、シルキア、サートに片手を上げて挨拶をすると、そのまま踵を返し走り去つていく。

サートも手を振つてラジウを見送つた。

第三章～失うもの～（3）

「……ふん。話とはなんだ？」

ラジウが見えなくなるのを確認してから、シルキアはサー^トに話を切り出した。無愛想な表情から感情は一切読むことができず、振り返つてシルキアの顔を見たサー^トは苦笑つた。

「あのウロコ。キヴィさんから話を聞いてるんじゃないんですか？」

「……ああ。」

サー^トはシルキアから視線を外し、明後日の方^向を見て真剣な口調で言つ。シルキアも彼と同じ方向へ視線を投げると、一瞬と惑つてから返答を返した。

太陽が、真上から少し西へと傾いていくのが一人の視界に入つてくる。

「そうだ、シルキアさん。釣り、教えてくれませんか？」

暗い雰囲気を打ち碎くように、サー^トは笑顔をシルキアに向けた。氣をつかつているのがわかるほどの曖昧な笑みに、シルキアは小さく頷く。そして、近くに予備として作つておいた二つの竿の一つをサー^トに投げて寄越した。もう一つの竿はしっかりと自分の手に握られている。

湖を囲む岩にそれぞれが一定の距離を開けて腰を下ろした。決して近くではなく、決して遠くはない距離。互いの声が聞こえるぐらいの幅だ。

「……何を聞きたい？」

糸を湖に垂らしてから、しばらくの沈黙。最初に言葉を切り出したのはシルキアだった。

「シルキアさんって、旅してたんですね？オレみたいな人って……いましたか？」

シルキアの促しに、サー^トは彼を見ないまま問いかけをぶつけた。しかし、曖昧な言葉達はどこか戸惑いを感じさせる。

「お前みたいに……魔物が体内に巢食つている奴のことか？」

シルキアは、一瞬言葉を止め躊躇いながらも核心に触れてきた。それに対して静かにサー^トは頷く。

実は先日の水の精霊との戦いの際、ラジウが水の精霊を倒しはしたもので、サー^トの体には既に精霊の身体の一部が混入されていたのだ。それは、体内から彼の身体を蝕んでいく。

「いたな。たくさん。」

サー^トが何を問いたいのか、シルキアには大体予想がついた。だが、真実を告げるべきか否か。また、本当にその問い合わせなのか。それがわからないせいか、シルキアの目は細められ、真剣になつていて。彼の真剣な目つきにサー^トはゴクリと唾を飲み込み、喉を鳴らした。でも、聞かないわけにはいかなかつた。

「あ、あの。その中で助かつた人って……。」

「いなかつた。」

率直な答え。それがシルキアが出した返答だった。

今のサートに本当のこと以外を教えたところで、何の役にも立たないことは初めからわかつていたのだ。ただ、言つていいものか少し悩んだだけで。

シルキアは今までいろいろな所を旅して來た。だから、魔物に食とされ喰られて來た者や、種を植えられ体内から喰い破られてきた者など、数多く見ている。それらは死ぬという恐怖を植え付けられ、徐々に喰い殺されていった。

たくさん的人が殺されていく中で、生存者など見つけることは不可能に近い。いや、シルキアの経験や見聞きしたことの中で生存している者の話しさ一切出てこなかつたのだ。火のないところに煙は立たず。煙も立つほどの火がないということだ。

「そつかー。じゃあ、しようがないですよね。」

サートはあまりに酷い現実の言葉にも、カラッと笑つて見せた。シルキアは小さな目を多少見開いた。

「なぜ、笑つていられる?」

「えつ?」

シルキアの思いがけない一言に、今度はサートの目が丸くなつた。彼がただの子供である自分のことを気にかけるなど思いもしなかつた。そんな表情。

しかし、シルキアはサートから視線を離さないまま答えを待つている。質問に答えなければ彼が口を再び聞くことはないだろう。それが容易に想像できたサートは、頬を搔いてから、再び笑つてみせた。

「笑つてた方が良いことあるから、ですかね。」

それだけ言つと、湖から竿を上げるサー^ト。シルキアはその返答に満足いかないのか眉を顰めた。

「……辛くないのか？」

その一言に竿は途中で動きを止めてしまった。そのせいで浮は苗を舞い、針は水の中で波紋を広げた。

「……辛くないわけ、ないじゃないですか。怖くないわけ……ないに決まっていますよつ！けど……。」

サー^トは声を張り上げたかと思うと、突如肩を落とした。それと同時に口調も聞き取れないほど弱気になってしまつ。

「けど、オレ。自分が死ぬことより、周りの人を傷つける方が辛いです。偽善者つて言われるかもしだせんが、目の前の人を自分の意思でないとわかつても”殺したい”と思つたら怖くて……。オレ、いつの間にかラジウ様の首を絞めようとしたことがあるんです。あの日から、何度もあるんですよつ。」

サー^トの肩がガタガタと激しく震えるのを見、自分の言葉で彼の必死で押されていた感情を引きずり出してしまつた自分の馬鹿さ加減に、嫌悪感を感じてしまつシルキア。

しかも、どうやらサー^トは既に水の精霊の支配を受けてしまつているようだ。彼の言つあの日とは、水の精霊と戦つた日のことを示していたからだ。あの日からサー^トは精霊の一部を身体に入れられ、それが日に日に成長をし、今や自分を倒したラジウを恨む気持ちが彼の脳内を支配してきている。精霊がサー^トの身体を食い破り復

活するのも時間の問題である。そして、力を取り戻した精霊がラジウに襲い掛かるのは明白なことで、そのことはサートもシルキアもわかつていた。

「……シルキアさん。オレがホーデュ様の血を継いでるって知っています？」

「ああ、キヴィから聞いた。」

しばらくの沈黙の後、静かな口調でサートは話を切り出した。彼の表情は、顔を落としているせいで窺えはしない。

ホーデュというのは、ラジウの父でありホーマイ国の中王だった者だ。サートはラジウと腹違いの兄弟で、実際に彼の血が流れているのである。

「ホーデュ様の子供って本当にたくさんいるんです。オレ達もそうですし、他にもいろんなところにいるはずです。でも、なんでホーデュ様の息子として王の座につけるのがラジウ様だけか……シルキアさんは知っていますか？」

「……ふん。王妃との子だからではないのか？」

シルキアの返答に、サートの口元が秘かに緩んだ。けれど、その笑みはどこか影が薄く嘲笑しているかのよう。

「それもあります。けど、王妃様はふと長い間どこかへ行く癖があつて、王妃の座も危ういと言われてたんです。実際、ホーデュ様が亡くなつた今もその癖のため何処にいるかわからない状態です。いまや生きているのかどうかさえ……。まあ、そういうわけで、あまり王妃様のことを認めている方もないんです。だから、もちろん

ホーデュ様の子供を生んだ女人の中には、彼へ直々に申し出る方もいらっしゃったんです。」

緩んだ口元はすぐさま元に戻り、未だに顔を上げないせいで彼の表情はやはり窺いることはできない。視線がまったく合わない今の状況は、ひどく周りの空気を重くしているようで、シルキアに口を挟むことをさせなかつた。

「けれど、ホーデュ様は女人の人に言つたんです。『子供がもし、成人できたら我が子として認めよ』と。」

「……ふん、年齢が達していないということか。」

重々しい口調で綴るサートに対して、シルキアも彼を見ることがなく呟いた。しかし、サートは静かにゆっくりと首を横に振つたのである。シルキアの言葉を否定するために。

「いいえ。成人まで生きている人がいないんですよ。ホーデュ様の子供は全員子供の間に死にます。短命なんですよ。」

さすがにシルキアは言葉を失つてしまつた。何を言つていいのかよくわからないのだ。しかも、重い内容は逆に真実味が薄められており、口を開けば疑いが露わになつてしまつてゐる。

「嘘……みたいですよね。だけど、オレより年上的人は皆……皆死んでしまつたんです。もちろん、死に方はいろいろですよ。病気から戦士、事故死……今度は、オレの番なんです。」

自分で発言していくひどく苦しくなつたのだろう、サートは胸元をぎゅっと強く握り締めた。

「ふん。ならラジウはどうなる。貴様は死んで、あいつは生きているとなぜ言い切れる？」

ラジウがホーデュの息子だと認められ育てられてきたのならば、彼は成人まで生きると言つているようなものである。シルキアはそんなことがあるのを信じていないのか、信じたくないのか、不機嫌そうに問いを投げかけたのだった。

サートはおもむろに空を見上げる。彼の表情はどこか悲しげであつたが、目は輝きを失つてはいなかつた。

「占いです。」月無き暗闇の夜、気高き獅子のたつた一人の子供が誕生する。獅子最愛の闇ガラスとの間の子は、困難に負けぬ力を持ち、世界をもほろぼす力を持つだらう。』と、予言があつたそうです。獅子はホーデュ様をさし、闇ガラスとは王妃様をさします。』

「闇ガラス……？闇と言つ表現は確か、魔の物に使われるものではないのか？」

サートの説明の中で、引っかかった言葉を繰り返すシルキア。彼の言葉にサートの目は大きく見開かれた。どうやら驚いているようだ。

「よく知つてますね。そうです。闇とは魔力を持つ者を示し、カラスも同様に忌まわしき力のことを示してます。王妃様は魔女だったんです。』

「……そんな話し聞いたこともないが。」

シルキアは眉を顰めた。王妃が魔女だったといつことを、噂ですら聞いたことがなかつたのだ。

魔女とはほんどの者が黒い髪を持ち、何らかの方法で魔力を扱える人間のことを言う。しかし、元来魔女は人間でありながら人間ではない扱いを受け、人間の世界から追放されているはずなのだ。それが王の正妻だと聞かされても、誰が信じるというのか。しかも噂にすらならないわけがないのだ。

「当たり前ですよ。言つてたのはホーデュ様自身ですから。多分、ホーデュ様以外誰も知らないこと……なんだと思います。」

「……会つてたのか？」

納得したのか、シルキアからはもう疑いの台詞は出でこなかつた。一つだけの問いに、サートはこつくりと頷いてみせる。

「ええ。何度か”父”として会いに来てくれました。の方は、優しそうな顔です。ラジウ様はの方にそつくりで……顔も性格も。だから、オレの中に水の精霊が残つてゐるなんて、絶対にラジウ様には言わいでください。」

朗らかな笑顔がシルキアに向けられた。シルキアはその笑顔を意味を汲み取れず眉間に皺を寄せた。

「なぜだ？」

「あの日、ラジウ様は強くなりました。オレ、ラジウ様には強い今まで居て欲しいんです。ラジウ様は、ホーデュ様と同じで優しすぎる。もしオレの中にまだ水の精霊がいると知つたら……。」

サートは途中で言葉を止めた。しかし、その台詞の先は彼が言わずとも、シルキアにも伝わっていた。

シルキアは立ち上がるとサーントの頭へと手を置き、軽く数回叩いた。ペシペシと言つた音が響く。

「帰るぞ。」

ほんの一言だけ伝えると、シルキアは自分の竿を引き上げ、糸を竿の部分に巻きつけた。それを肩へとかける。サーントも彼の真似をして竿を肩へとかけた。

「あのつ……。」

何も言わずに踵を返すシルキアに、サーントは申し訳なさやつに声を掛けた。

「何だ？ 話しなら道すがら聞いてやる。」

振り返ることなく発せられたシルキアの台詞には、どこか暖かみがあるとサーントは肌で感じ、笑みを溢したのだった。早足で彼の隣へと行くサーント。彼が動き出したのを音で察したのだろう、シルキアはゆっくりと足を進めるのだった。

第三章～失うものの～（4）

時間は少し戻り、場所は城内のとある一室。キヴィイが一番よくいる部屋、医務室である。医務室と言つてもベットが数個並べられ、たつた一つに戸棚にキヴィイが持ってきた薬がしまつてあるだけの簡素な部屋だ。後は本に埋もれている机と椅子しかない。

キヴィイは椅子に腰を下ろしていた。ドアから光りが差し込み、読んでいた本を照らしたことでドアが開いたことに気付き、キヴィイは振り返った。誰が扉を開けたのか確認するまで一瞬緊張が走つたが、すぐそれが敵でないことがわかる。

「なんだい、ノメルじゃないか。どうしたんだい？」

扉を開けていたのは小さな少女だった。茶色の髪が風になびく。

「あの……眠れない。」

ノメルは顔を落として小さく呟いた。あの精靈の出来事からたびたびノメルは思い出すのであるう、何度も悲鳴を上げたり泣き叫んだりを繰り返していた。最近はだいぶ治まってきたが、夜寝付けないことが多かつた。

「昨夜寝てないのかい？……おいで。」

問い合わせに申し訳なさそうに頷くノメルを、キヴィイは優しく手招きした。少し微笑んで嬉しそうな表情を見せたノメルがキヴィイの元へと走り寄ると、キヴィイは彼女を受け止め抱き上げる。ノメルの身体は小刻みに震えていた。

「怖い夢でも見たのかい？」「

ノメルを自分の膝の上に乗せ、頭を軽く撫ぜながらキヴィはノメルを覗き込んだ。顔は少し青かった。ノメルはうんともすんとも言わずに、キヴィにしがみ付きじつとしている。

「やれやれ。」

呆れ口調なもので、キヴィの手はノメルの背中を優しく撫ぜていた。ゆっくりとノメルの震えが小さくなつていく。安心したのだろう、しばりくすると身体の震えも止まり、すーっという寝息が聞こえ出した。

「まあ、しょうがないか。あんだけ怖い思いしたんじゃ。つと、やつと来たかい。」

ガタンとこづ音で、再びドアに手をやるキヴィ。そこには今まで待つていた青年の姿があつた。銀髪の髪をなびかせ、つかつかと近寄つてくる。

「まるで母親みたいですよ、キヴィさん。」

にっこりとした柔軟な笑みが、キヴィの前で止まつた。キヴィの顔が一瞬で赤くなる。

「クレクつーあんた……」

「じつ、起きちゃいますよ?」

大口を開けて反論しようとするキヴィだが、すぐさま口に人差し指

を当たられ押し黙ってしまった。そして、視線を下にするクレク。つられてキヴィも下を見ると、気持ち良さそうに自分の膝の上で寝ているノメルが視界に入ってきた。

「ふふふ。まあ、お似合いで可愛いと思いますけど。」

キヴィが反論できないことを言ことと、クレクは変わらない笑みでからかいの台詞を付け足した。眉間に皺を寄せ、さらに顔を赤くするキヴィだが、なんとか口を閉じ大声を出さないようにしていた。頬が膨らんだしかめつ面を見て、ラジウを思い出しあしまったクレクは顔を背けて噴出してしまった。

「ふつ……。」

「く～れ～く～つ……」

「ああ、すいません。それより、お話とはなんですか？」

怒りを低い声でぶつけてくるキヴィに慌てて話をかえるクレク。しかし、キヴィは頬をもう一度膨らませてから腕組をしてぷいっと顔を逸らしてしまった。

「…………。」

「あの、キヴィ……さん?」

明らかに拗ねているキヴィに、クレクは冷や汗を搔き名前を呼ぶことしかできなかつた。実際の話し、会つてまだそんなにたつていな相手なのだから対応が分からぬのも無理はない。

「まつたぐ。まあ、いい。じゃあ、話してもしようかね。そこに座りな。」

ため息をついてから、キヴィはとげとげしい口調で自分の正面にあるベットを指差した。クレクは素直にそれに従う。キヴィは正面に座ったクレクをマジマジを見つめた。

「あのね、話つていうのは……あたしの仕事についてなんだ。」

言いくさうに頬を搔くキヴィにクレクは首を傾げた。いまいち彼女の意図が見えないのである。

「あー……あたしはこここの医者だ。誰かが怪我をしたらそれを手当てしなきゃならない。だから、一人ひとりの特徴をしつかり把握とかなきゃならない。その意味、あんたにならわかると思うんだがね。」

「……何を言いたいんですか？」

キヴィの真剣な表情に、クレクの顔からも笑顔が消えた。緊迫する空氣。密かな殺氣をキヴィは彼から感じていた。しかし、ここで退くほど彼女は大人しくはない。

「わかった、はつきり言おう。あんたが何なのか教えてもらいたい。人間じゃないんだろう?」

「つ……。」

キヴィも覚悟をしたようにクレクを睨み返した。クレクは彼女の言葉に明らかに同様を示した。しかし、すぐさま目が細められ、殺氣

が放たれる。

「貴方に言う必要性はありません。そういう話なら、私はここで失礼させていただきます。」

ひどく冷たい口調でキヴィを射るクレク。すっと立ち上がり、彼女に背を向けてしまつ。

「必要あるさ。人間には人間の治療法があるし、他には他の治療法がある。もし、あたしがあんたに人間の治療法を使つたら、あんたは助からないかもしねり。」

キヴィは、クレクの背中に静かにけれど感情がこもつた声で呼びかける。彼は動こうとしない。

「……そしたら、あんた。あたしはラジウにどう頭を下げればいいんだい？」

ラジウの名前でばつと顔をキヴィに戻すクレクの表情は、苦虫を漬したような不安な顔。本当のところ、自分が人間ではないことを知られること、ましてや種族をばらすことは命の危険性がある。信用できない人間に正体を告げることなど、できるはずがないのだ。

「…………。」

秘密を軽々しく口にはできない。そういうかのよつよぎゅつと口を結ぶクレクを、キヴィはずつと眺めていた。

「……わかった。あんたにだけ秘密をばらせというのも一方的すぎるよね。こうなつたら、あたしもあたしの秘密をあんたに話そうじ

やないか。」

いつまでも黙つてゐるクレクに、キヴィはポンッと手を叩き提案をした。彼女の顔はにやりと歪み愉しそうである。

「どうだい？ それならお互い秘密をばらさないだろ？」

キヴィの言葉に、クレクは田を喰りため息をついた。そして小さく「どうして、この人には敵わないのでしょうか。」と呟くのであった。それはキヴィの耳には届いていない。

「わかりました。そこまで言つのであればお教えしましょう。ただし、誰にも言わないでくださいよ？」

再び座りなおし、やれやれと頭を搔きながら今度はキヴィに聞く声量で口を動かす。もちろん、といつぱりにキヴィの首が勢いよく縦に振られるのを見て、クレは頭にやつた手を自分がつけている耳と後頭部を隠す薄黄色い布に手をやつた。

布の下の切目の部分にある白と黄色で模様が、キヴィにはとても印象的だった。

「……なるほど。」

無言のままクレクがその布を取ると、キヴィは頷いて納得した。明らかな特徴がそこに隠されていたのである。

キヴィの言葉に小さく頷いたクレクはすぐさま布を元に戻し、視線を彼女に投げてよこした。

「じゃあ、私の話つて訳だね。」

キヴィは、他のことには一切触れることなく自分の話を始めた。けれど、本当はもつと突っ込んでみたかっただろう、クレクの特徴を見た時の彼女の目は爛漫に輝いていた。だが、多分これ以上突っ込んで聞いたところで、クレクが答えてくれるとは思わない。それをキヴィは感じ取っていたのだ。

「じゃあ、一つ。私の本当の名前はキヴィ・エクストライラ。」

「エクストライラ？ その名前はどうかで聞いたことが……。」

「あるだらうねえ。私が小さい頃、最年少の学者として世間に公表された名だよ。」

クレクが考え込む仕草をすると、キヴィはあっせんと答えた。肩を竦め、どうでもよさげに。

「やつなんですか。あまり隠す必要はないよつに思いますが、……。」

自慢しても良いくらいだとクレクは思った。最年少の学者といえば、そうとう頭が良いのだろう。それをいちいち隠す必要があるのでどうか？ そんな疑問が彼の頭をよぎったのだ。

「馬鹿言つんじゃなによ。ただの一介の医者がそんな名前……いらなこわ。まあ、これ以上はあんたが他のことしゃべってくれんならしゃべってもいいけど、どうする？」

茶化すように笑つて軽快に言つキヴィ。しかし、口調とは裏腹に、言葉にはこれ以上何も聞くなと言つ感がひしひしと窺えた。

クレクは両手を上げ、小さく首を横に振りそれに答える。

「よし、それじゃあ、今後ともよろしく頼むよ、クレク。」

「もちろんですよ。」

キヴィがウインク一つ。それに対しても、クレクはいつも柔らかい笑みを向けて見せた。交渉成立。この話はもう口にはしないと二人の目が言つている。

「ああ、そうだ。もう一回あなたに言つておくことがあつたんだ。」

思い出したかのように、ポンと手を叩くキヴィ。それに、クレクは首を傾げて相手の出方を待つた。

第三章～失うもの～（5）

「サーートの」となんだけね……あんた知つてるかい？」

「……水の精霊の」とですか？」

キヴィイが言葉を濁し再び暗い雰囲気になつてしまつので、クレクは一瞬目を細めてから言葉を選び発言する。しかし、その言葉はあたりをよりいつそう暗くしてしまつた。

「ああ、やつぱりわかつてたかい。」

キヴィイが声のトーンを落として話す。あまり良い話題ではないのと、ひとに聞かれてはまずいかだろつ。

「ええ、何度かラジウ様に襲い掛からうとしていたところを止めましたからね。無理でなければ詳しく話を聞きたいと思つていました。」

「

クレクもつられて声を落とす。彼の目は真剣にキヴィイに向けられ話が続くのを待つていた。それにキヴィイは静かに頷いて、了解の意を伝えるのであった。

「実はね、水の精霊の支配の進行はかなり進んでいるんだ。多分、サーートが喰われるのも時間の問題だと思つてる。それは、あんたもあたしも、シルキアも……大人は全員理解しているはずだ。だから、言わしてもらひ。サーートはもう助からない。死ぬしかないんだよ。あたしにできるのは、氣休めに薬で少し寿命を伸ばしてやることだけ……。」

クレクが頷きながら相槌を打つので、キヴィの言葉は止まることなく流れ出た。もちろん感情も一緒に。悔しいというかのよつに下唇をかみ締め、眉を顰めるキヴィ。辛そうな彼女の表情に、クレクの胸がぎゅっと締め付けられた。

「…………。」

「…………。」

今の現状では、クレクにもキヴィにさえもどうすることもできないのだ。それを改めて思い知られ、沈黙が二人の肌を痛く突き刺す。

「キヴィさん！」

沈黙の中、いきなり自分の名前を大声で呼ばれてビクッと身を固めるキヴィ。クレクも慌てて声のする方向に視線をやった。一人の視線の先には、ドアからひょっこりと顔を出した一人の少年がこちらを見ていた。

「さ、サー、ト、い、こ、つ、か、ら、そ、こ、に、?」

キヴィが上擦つた声で視界に入った子供に問いをかける。焦つているキヴィに対し、サー、トは首を傾げて不思議そうに彼女を見ているのであつた。無邪気な顔に、今まで話していたことの後ろめたさがあり、キヴィは顎をひいて多少背を仰け反らせている。

「ついさっきだ。」

しかし、サー、トの変わりに彼の後ろに立っていたシルキアが彼女の

質問に答えた。『うやら、一人一緒にここまで来たらしい。

サートはシルキアの言葉に苦笑いを浮かべ、ちらりと彼を見る。すると、シルキアはふんと鼻を鳴らし、視線を彼から逸らした。

「あはは。いいのに、気を使ってそんな庇ってくれなくても。シルキアさんったら優しいなあ。」

「ふん。いちいちバラす必要もないと思つただけだ。」

笑うサートに対し、無表情のまま感情が窺えない声色で発言するシルキア。「恥ずかしいのかね。」と密かに咳いたキヴィの言葉は、クレクにしか聞こえていない。

「あははは。まあ、そうですが。それってなんか後ろめたいっていつか、後味悪いって言つか、なんか悪い気がしません? ま、というわけで。キヴィさんのお話、オレ達聞いてちゃいました!」

茶化すようにシルキアへ言葉を投げかけ、更にはキヴィにまつたくいつもと変わらない笑顔を向けてサートは告白した。それには流石のキヴィも目をぱちくつさせてしまつ。

「あんた……大したたまだね! それで、笑顔でいられるなんてあんた、そういう覚悟してたつてもんだ。」

キヴィは、にっこりと笑つてサートの目を見た。強い芯の通つた心が目を通して伝わってくる。『リビリと云わるサートの強い意志に、キヴィは唾を飲み込んで喉を鳴らした。彼女の瞳は輝いて、本当に愉悦しそうである。

「ありがとうございます。あの、それで、お一人にお願いがあるん

です。」

「なんだい？」

サーントは会釈をしてから、真剣な顔つきになつた。それにともない、辺りの空気が一瞬にして張り詰める。とても重要な話しなのだろう、サーントは目を一回閉じてから自分を落ち着かせると話を切り出した。

「「Jのこと、ラジウ様には言わないでくれませんか？」

緊張でカラカラに乾いた舌と喉は掠れた声を出すのに十分で、それでもなんとか用件を言つてのけた。キヴィイが目を細めて品定めするかのごとくサーントを頭から足まで一瞥した。

「あんたが水の精霊のせいで死ぬつてことをかい？」

「はい。」

キヴィイが話しの流れから彼の言いたいことを読み取り、確認をとる。しかし、その中身にキヴィイは眉を顰めた。そして、一言。

「ふーん、なんでもまたそんなややこしい事。」

ぽつりと呴いた彼女の問いに、サーントは苦笑つてこう言つた。

「だつて、ラジウ様へこむでしょ？せつかく倒したのに。それに、多分ラジウ様はまだ人の死を知らないと思うんです。だから、きっとそんなこと伝えたらショックを受けるだらうな。つて。」

言つてから、笑つているような悲しきような曖昧な表情になり、少

し影が落ちているように周りから見えた。複雑な心境なのがよくわかる。

「そりゃあ、受けるだらうね。あんたのこと氣に入ってるみたいだし。でも、それはあんたが死んだ後にわかつても同じことだと思つけどねえ。」

けれど、キヴィはサー卜の返答に眉を顰め、疑問を口にした。結局のところ、彼が死ねばラジウは知つてしまつであろう。彼がどうして死んだのかを。

「はは、そうかもしませんね。でも、今は知られたくないんです。だって、ラジウ様の落ち込んだ顔なんてみたくありませんから。」

にこやかに笑うサー卜だが、でもと続けてから真剣な表情に戻り、シルキア、クレク、キヴィと順々に見ていく。まるで、同意してほしいもしくは強制的に納得させるような視線。

「やうかい。別にいいけどね。元から言つつもりはないし。」

「私も言つつもりはありません。それにしても、なぜサー卜さんはそこまでラジウ様を？」

シルキアはなんの反応も示さなかつたが、それは既にサー卜と彼の間で話がついていたからである。他の二人は同時に頷いてみせた。キヴィは肩を竦めてからにつと笑つて敵意がないことを現し、クレクも柔軟な笑みでサー卜に答えた。それから首を傾げ、今まで聞いていた中で引っかかるることを彼に問いかけたのである。

「弟……だからです。オレの父の息子ですから、やっぱり大切にし

たいんです。ノメルと同じよつ。「

どこか淡い印象を受ける笑みを浮かべたサートの顔は、どこか遠くを見ているようだった。昔のなつかしい思い出。父のこと思い出しているのであつことは、少なからずその場にいた三人は感じ取っていた。

「よし、それじゃあこれは他言無用つてことでもう解散しようかね！」

「はい、ありがとうございます！」

キヴィが手をパンパンと打ち鳴らして解散の合図をし、クレクとシリキアは頷いてそれに同意を示す。彼等の様子を見て、嬉しそうな表情を浮かべたサートだった。

解散ということでサートとシリキアが踵を返す。その反面、小さな人影がゆらりとドアの近くで揺れたことは誰一人として気付いていない。

「さて、それじゃあ、あたしはノメルを部屋に連れてくかね。」

また、キヴィがノメルを抱きかかえた時、彼女の目が薄つすらと開いていたことにもその場の全員が気付くことができなかった。

それが、今後にどういう意味を持つのか……彼等はまだ知ることはない。

第三章～失うもの～（6）

「はあはあ……。」

一人廊下を走る少年が居た。全速力で駆け抜け、もう疲れたはずなのにでも止まれないでいる。

彼の頭の中はいささか混乱していた。

それもそのはず。聞いてはいけないことを聞いてしまったのだから。

「なんだよつ、サー、ト……僕だつて……。」

小さく咳きながら頬から滴る涙を荒々しく右腕で拭い去った。
息を切らしてまでやつてきたのは、城の入り口より奥に行つた場所にひつそりと佇む一つの墓の前。そこまでくると立ち止まり、ドカつという音を立てて座り込む。座り込むというよりはこたさか倒れこむに近かったかもしれない。

「父……上……。」

四肢が動ぐのを止めたせいで、涙が先程よりも更に流れ出た。ラジウは墓の前でうな垂れた。

「なんでかな。なんで、僕は誰一人救えないんだろう？守れないんだろう？」

言葉が、涙と一緒に次から次へと溢れ出す。もう、ラジウ自身にもどうしようもなかつた。誰かに聞こえてしまつとか、そんなこと考えていいられるほどの余裕もなかつたし、感情をこれ以上押さえ込んでいられるほど大人でもなかつたから。

「なんで？ なんでなの？ 倒したじゃん。僕、あいつ倒したじゃんか！ なのに、なんで今更になつて…… サートの身体になんか…… サートの馬鹿。馬鹿野郎つ！ なんで僕に言ってくれないの！ ？ なんで弟なんて…… 友達だと思つてた。思つてたのに、結局僕は…… 守られてるのかよっ！」

一つのこととに集中さえできない。精霊のこと、サートのこと、父ホーデュのこと、自分のこと。すべてが思ひ出されてしまふ、次から次へと感情の波が押し寄せて…… 今にも頭がパンクしそうだった。

「お悩みのよひですね。」

悲鳴に近い声を搔き消すように、低い声が割つて入ってきた。一瞬空耳かと疑うほど突然耳に入つてた声は、ラジウの身体を震わせた。

「だ…… だれ？」

上擦つた声からは緊張が感じ取れる。ラジウがゆっくりと振り返ると、黒装束に身を包み鋭くとがつた一本の角を持つ者がすぐ近くに立つていた。ぎょっとして、ラジウは思わず身を引く。

「今朝お会いしたと思つますが？」

彼はそれだけ言つて名乗ろうとはしなかつた。ラジウは未だに驚きで頭の中が真つ白のため動くことが出来ない。

「お教えいたしましょうか？ 精霊にとり憑かれたあの子供達を助ける方法を。」

「へつ？あ、あるの？」

口の端が上がりにやりとした笑みを浮かべる彼の言葉に、ラジウは思わず食いついた。キヴィでさえ無理だと言ったことだ、てっきり方法がないものだと思っていたのだ。

「ええ。知りたいですか？」

「も、もちろん！」

嫌な笑みに少し戸惑いを感じながらも、サークルを助けられるのであればという気持ちのが先行し、大きく頷くラジウ。黒装束の彼は白い歯を見せて笑った。鋭い八重歯が不気味に光り、ラジウの背中に冷たいものを走らせる。

「貴方が死ねば良いのですよ。」

彼の一言にラジウは耳を疑つた。だから、驚きの声も上げられずに目を見開いて彼を見ることしかできない。

「当たり前でしきう？命を助けるには命の代償が必要なのですよ。あの精靈は貴方を恨んでいる。だからこそ、その恨みが原動力になつて彼等を糧に貴方に復讐しようとしている。ならば、その原動力を取り除けばいい。貴方が死ねば、彼女は原動力を失い、彼等の中で静かに眠ることでしきう。彼等が寿命で死ぬまで。」

ラジウが口を挟まないのをいいことに、男は淡々と説明していく。まるで、全てを知つているとでも言つかのように。

「……ほ、他の方法は？精靈を殺すとか、消すとかつ。」

氣迫といふか雰囲氣といふかなんとも妖しい感じに蹴落とされながらも、ラジウはやつと言葉を口にした。

死んでまで助けたくないと思つたわけではない。けれど、やはり死にたくはないし、でも助けはしたかった。矛盾が駆け巡る中出てきた答えは別の方法を探すということだけ。

「ははは。」

ラジウの言葉に、男は声を上げて笑つた。突然のことにはラジウは彼を凝視する。何か自分がおかしなことでも言つたのか、不安が頭をもたげた。

「精靈を殺す？そんなことは無理ですよ。あれは自然界においてもつとも必要なモノ。あれらがいなくなれば自然が消滅してしまう。言つなれば、水の精靈を殺せば水自体がなくなってしまうのです。それを神が消すことを許すとでも？決していなくならないのが彼等ですよ。不老不死の存在。太古から存在しているのです。」

一気に捲くし立て、狂氣を含んだ黒色の瞳を垣間見せ、彼は言った。絶望をあたえるのがさも愉しそうに、垂んだ笑みがラジウに向けられている。

「じゃ、じゃあ。」

「方法は一つですよ。貴方が死ぬこと。それ以外に方法はありません。まあ、お考えになつて行動してください。ラジウ様。」

ラジウの言いかけた言葉を遮り、最後に釘を刺す彼。そしてすつと足元から彼は消えていった。

ラジウは追いすがろうと手を伸ばすが、その手は宙を切るだけ。

「ああ、そうでした。明日、早朝。貴方の国はなくなりますのでご了承願いますラジウ様。賢ければ来ないでしうが、お伝えしておきましょう。では。」

声だけが辺りに響く。忠告。それが頭に入つてくるほどラジウはまだ落ち着いていない。

しばらく誰もいなくなつた宙を眺めているしかなかつた。時間は進み、日が沈み辺りが暗くなつた頃。クレクは廊下を早足で歩いていた。それというのも、夕食にさえラジウの姿が見られなかつたからだ。

シルキアやサーートが言ひには、先に城に戻つてきているはずなのだが。

「ラジウ様、どこかで迷子になつてているのでしょうか？」

一抹の不安を感じながらクレクは城中を歩き回る。

ふと、暗い中で何かが動いたように思えて足を止めた。うつすらと開く扉の向こには闇、その場所は昔この城の主ホーデュが使つていた書室だった。ひとたび足を踏み入れると埃やカビの臭いがむわっと鼻につく。

何年も使われていないのだろう。もつてたランプで、クレクは中を照らした。

すぐさま床についた足跡と、何かの丸い跡を見つけた。それを追つて明かりを移動させると埃を被つた机が姿を現した。更に奥まで照らすと、椅子に座つて埃まみれになり机に突つ伏しているラジウの姿が見られた。

クレクはほつと胸を撫で下ろし彼に近づいて行く。

「いんなところで寝ていたのですか……。」

明かりを机に置いたクレクの田に、ラジウの下にある本が田に入つた。一瞬迷惑ったものの、好奇心にかられゆづくらとラジウの手をどかし本を引っ張り出す。

「これは……。」

それは、まだ何も書かれていない日記だった。いや、よくみると少し黒ずみ跡が残っている。何度も書いては消し書いては消した証拠だ。

そこから辛うじて読み取れるのは『死』という言葉。クレクは尙も文章を解読しようと本を明かりに近づけたり、透かしてみたり、遠ざけてみたり。

「自分の死と……彼の死……どちらを……。」

田を細め、読める単語を読んだ。それだけでラジウが何か悩んでいることを察することができた。何か、大きな壁にぶつかっている。それが何なのかはわからないが、クレクは苦笑った。

そして、を開じてラジウの隣に置き、明かりを手に取る。明かりが部屋の中を照らしていく。

ぎっしり詰まつた本の一つ一つのタイトルを田で追い、何かを捜すクレク。一番上端の本で彼の田は止まった。

真っ黒で、背びれには何も書いていない本。背伸びしてその本を手に取る。

「懐かしいですねえ。まさかまだ有つたとは……これが力になつてくれるといいんですが。」

一人呟いてラジウのところへ戻り、先程の何も書いてない本へその黒い表紙の本を乗せた。

それからラジウに自分の上着をかけると、クレクは静かにその場を跡にするのであった。

第二章～失うもの～（7）

ドタドタと廊下を走る音で、ほぼ全員が目を覚ます。それはまだ霧が濃い早朝の時間。

「誰だいつー騒がしいのはつ……」

無理矢理起こされ不機嫌になつているキヴィイが、怒鳴りながら自分の部屋から出てきた。そこへ丁度ドタバタと足音が近づいてくる。

「じりり、ラジウー朝つぱらからなんだって言つだじーつるわこよつーー！」

「あ、キヴィイ！大変なんだよーー！」

キヴィイの声で彼女に気付くと、ラジウはキーっと急ブレーキをかけた。そして、怒気のはらんだ声色をまったく気にしない様子で、腕をぶんぶんと振り慌てる様子を見せる。それには流石にキヴィイも不思議に思つたのだろう首を少し傾けてラジウを凝視する。

「何がだい？」

「僕の国がなくなつちやつてーー！」

「はつ？」

落ち着けという意味を込めてゆつくりと話しかけた問いに、早口で返ってきた答え。それが一瞬何を言つてゐるのかキヴィイにはわからず

に、素つ頬狂な声をあげさせる。

「だーかーらーつー今日の朝、僕の国がなくなるつてーー。」

「ちょ、ちょっとお待ちよラジウ。こいつは全体そんな話し、誰から聞いたんだい？」

興奮して顔を赤くしながら急かすように怒鳴るラジウに、キヴィイは自分の手を彼との間に置き何度も揺らす。落ち着けとこいつは囁いた。

「……。」

キヴィイの言葉にはつと田を見開くラジウ。どうやら自我を取り戻したようだ。けれど、なかなか質問に対する言葉が出てこず、口をパクパクと動かしたり、視線をあちらこちらにやつたりしている。

「……あんた……不確かな情報なんじゃな……なつーー。」

呆れ口調だったキヴィイだが、でかかつた言葉を途中で飲み込み驚きの声を上げる。一心にラジウの後ろを凝視しているキヴィイ。ラジウも彼女の視線につられて振り返った。

「……そ、そんな……。」

キヴィイの視線の向こう側。木が生い茂り視界を塞ぐその向こう側。ようやくと覗く空に立ちのぼる黒い煙が一人の目に入ってきたのだ。その方向は、ラジウが逃げてきた方向。つまりはホーマイ国の方だ。

「どうこうじだいーー? ラジウーーあんた、なんでこんなことにな

るつて……返答しだいじゃあたしも本気で怒るからね……！」

もう既に本気なのではないかといつくらいにキヴィは眉をハの字にし、鋭い視線でラジウを射抜いている。しかし、ラジウが少々びびつて足を後ろに下げるのと同時に、彼女は廊下を蹴っていた。

慌ててラジウも彼女を追いかける。

「クレク！ シルキア！ いや、全員城の入り口に集合しな！！」

キヴィの大声が城中に木霊する。大して大きくない城にはそれで十分だった。部屋のドアが開き、人が出てくる。数分も経たないうちに、入り口にはクレク、キヴィ、シルキア、ラジウ、サート、ノメル、子供達全員が集まっていた。

「どうしたんですか？ キヴィさん。」

ことの事態を理解していないクレクだが、キヴィの緊迫した雰囲気に何かが起こったと感じながら慎重に言葉を発した。

「ホーマイ国が……多分魔物達に襲われている。」

「なつー！」

キヴィが自分のおおよその見当を述べると、クレクが驚きの声をあげ、子供がざわめき出した。キヴィは、顎の下を手で押さえながら何か思考をめぐらせてている。

「ねつー！ クレク！ 馬あつたよねー？ 僕、行くから連れてってー！」

そこへ、いてもたつてもいられなくなつたラジウが割つて入つてくる。

る。クレクの服を掴み、引っ張りながら懸命に彼を見上げていた。

「え、ええ。わかりました。」

「お待ち……」

クレクも焦らされたせいか思考が回らなかつたのだろう、ラジウの言葉に頷き踵を返そうとしていた。そこに、切り裂くようなキヴィの鋭い声が止めに入る。

「ラジウ。あんた、誰からこの話を聞いたんだい？」

答えなければ行かせない。睨まれたラジウはそう感じていた。威圧が物凄い勢いで押し掛かってくる。

「……魔物……。」

答えたくは無かつた。けれど、答えなくてはならなかつた。からからに乾いた舌で、やつと一単語だけ搾り出した。

キヴィは、ラジウが予想していたみたく目を見開いて驚くわけでも、顔を真っ赤にして怒鳴りちらすわけでもなかつた。ただ、冷静にラジウを見つめている。

「……あんた、他に何か言われただろ？ それも言いな。」

そして、冷たくいつもよりもドスのきいた低い声で、静かに命令をしてきた。口調もさることながら、その雰囲気は命令以外の何モノでもなかつた。しかも、決して逆らうことのできない……そんな命令。

ラジウは一瞬戸惑い、助けを求めてクレクを見るが、彼もまたキヴ

イ同様にじつと自分を見つめていた。それで、ラジウは悟った。今の状況では決して誰も自分の味方になつて助けてくれるものはないと。

「…………。」

ラジウは顔を落とした。困惑したのには訳がある。もし、言われたことを言つながら、盗み聞きしていたことも言わなければならなかつたからだ。

「…………。」

キヴィは黙つたままラジウを見つける。彼が言わないならば、彼女はここを動きはなかつた。いや、誰もここから動かそつとは思つていなかつたのだ。

「…………」めんつ。サーツー！

意を決して言葉を発した後、ラジウは顔を上げた。その顔には不安も迷いも感じられない。真剣な瞳が彼が全てを言つ覚悟をしたこと伝えていた。

「僕、魚釣りに言つた後。ちよつと寄り道しててサーツー達より後にキヴィのところについたんだ……そしたら、サーツー達が話して……聞いちやつたんだ。それから、父上の墓に言つたら魔物に会つて……サーツーを助ける方法を……教えてもらつたんだ。」

段々と重くなる口調で、魔物に教えてもらつたことが全く良いものではないと、その場にいた誰もが感じていた。サーツーもなんと言つてよいのかわからずには口を挟めないでいた。

「その方法は？」

「……僕が死ぬこと。」

キヴィイが促すと、ラジウは彼女とサークルから顔をふいつと逸らして、苦しそうに呻く。

「わかつた。それじゃあ、あんたは行っちゃ駄目だ。絶対あんただけはここにいるな。」

そんなラジウから視線を外して、キヴィイはすっとシルキアの方に足を向けた。けれど、ラジウが自分の言葉にばつと顔をむけてきたので、キヴィイは思わず再びラジウを凝視してしまった。

「い、いやだっ！ なんでそりなるのやー？」

「当たり前だろ？ 魔物の狙いはあんたの命さ。だから、あんたはここに居なくちゃならない。」

今にも泣き出してしまいそうに握りこぶしを奮わせるラジウ。けれど、こうこうの場面には慣れているのか、まったく動じることもなくキヴィイは説明を返した。

「僕の命？ それなら会つた時に殺してたはずじゃないかっ！」

「あわよくば死んで欲しい程度だらうけどね。あんたが死んでサポートが助かるって一のは、自殺を。あんたの国が無くなるっていうはあんたが戦場に駆け付けて死ぬことを……あわよくば狙っているのさ。しかも、そんなこと言われて、あんたまだ頭がおつづいてない

「いだらう！？ 迷いがある奴が戦場なんかに言つて、帰つて来れるなんて思つんじやないよつ！」

尚も食い下がるラジウに、キヴィは眉を顰めた。そして、彼女もそろそろ限界だった。すぐさま本当は駆けつけたい気持ちを抑えていたのだから当たり前であろう。今まで我慢していた分をぶつけるほど勢いよく捲くし立てた。

「……キヴィ。僕、迷つてなんかないよ。」

ラジウはわかつてしまつた。キヴィがどうして自分を止めたのかを。彼女は今までの話を聞いて、推し量つたのだ。ラジウ自身が、死を選択してしまうのではないかと。

「確かにね、サートの話や魔物の話しさ聞いたときは本気で悩んだよっぢうじょうつて。でも、僕は自分から死のうなんて思わない。ううん。僕は死なない。」

ラジウは口の両端を上げ笑つてみせた。キヴィは、目を白黒させてラジウを見た後、ちらりとサートを見た。ラジウとは裏腹に複雑な表情のサート。

「サート。ごめんね。僕は自分からは死はない。だって、サート、僕が死んだら嫌でしょ？」

「……ラジウ様。」

ラジウは笑顔をサートに向けた。サートは、未だに言葉が見つからず名を呼ぶだけ。それに応えるようにラジウの顔が真剣な顔つきに戻つた。

「僕、サーントに自分の死を背負わせるなんて絶対嫌だよ。でもね、きっと僕が死ななきや本当にサーントは助けられないと思うんだ。だからセ、サーント。僕らの命運は運任せにしようじやないか。どっちが死んでも恨みつこなし！」

ビシツとサーントに人差し指を突きつけながら、ラジウは再び笑む。指差されほんの少し畠然としたサーントだが、ラジウの笑みに釣られるかのように彼も笑んだ。

「はいー・ラジウ様！」

サーントは助けたいけど、サーントに自分の死を背負つて欲しくはなかった。その矛盾を解決することなんてできない。だから、ラジウは成り行きに任せてみることにしたのだ。

「あ、でも。サーントも死ぬなんて思うなよー！生きてたら他の方法探せるんだしさー！」

「もちろんですよー！」

意氣巻いている一人に、キヴィはため息をついた。

「ちよっとお待ちよ、あんた達そろいも揃つて行く気なのかい？」

『もちろんーー。』

嫌そうに言ったにも関わらず、帰ってきたのは元気に揃つた声。キヴィは頭を抱えた。

「キヴィイ、お願ひだよ！僕、父上の身体を取り返したいんだ！」

ラジウは未だに納得のいかない彼女に身を乗り出しつて自分の目的を話す。

「身体？」

「そうでしたか、それならわたくしがお供します。ホーデュ様の身体はホーマイ国に収められております。このままではきっと魔物の手にホーデュ様の身体も……取り返さなくては。」

キヴィイの言葉よりも先に、クレクが身を乗り出して深々とラジウに向かつて礼をした。こうなつては仕方ない。現保護者のクレクがそこまで言つのなら、キヴィイにはこれ以上口を挟むことができないのだ。

クレクの鋭い視線が一時キヴィイに向けられたことから、キヴィイはそれを理解していた。

「ガキ共は残して行くんだろう？」「

今までのことを見にも留めないよつに、シルキアが平然とキヴィイに聞く。

「ああ、もちろん。本当はクレクに留守番頼もうかと思つたんだけどね……あの調子じゃ無理そだしどう……。」

既に馬の準備をしているクレクに目をやつて、肩を竦めるキヴィイ。長い付き合いの中で、シルキアは彼女が言いたいことがわかつていた。そのせいか無表情な顔の額に皺が寄つていく。

「シルキア、後よりしぐー…

「ふん。」

予想通りの言葉に、シルキアは鼻を鳴らして答えただけだった。しかし、顔はいたさか不満そうである。

「仕方ないだろ？　あたしや医者として行かなきゃなんないんだから。」

「わかつてる。ひとつと行け。馬は一頭しかいないぞ。」

呆れ顔で言う自分をうつとうしうつて手を振り、追い払うシルキアの行動に、キヴィは少し膨れつ面をしてあっかんベーをした。シルキアは再びそれにふんっと鼻を鳴らすのだった。

「サー、ト、行くよー。」

ラジウとクレクが馬に乗っているのを確認して、キヴィは走り出した。途中、ぼーっと突っ立てるサーに気付く、足は止めずに声だけかけるしまつ。

「あ、はーつー。」

慌ててサーはキヴィを追いかけた。ラジウとクレクもすぐに馬で彼女達を追う。

「ふん。城に入るぞ。広間で待つ。」

残った子供にそれだけ告げると、見送りもほどほどにシルキアは城

へと消えていった。子供達もそれに続く。ただ一人を除いては。

第三章～失つもの～（8）

馬が森の中を駆けていく音が響く。

「ラジウ様、よくキヴィさんの問い合わせに答えられましたね。」

背後に乗り、馬の手綱を握っているクレクが前方を注意しながら言った。ラジウは首だけ後ろに捻り、クレクの顔色を窺う。

「うふ。本当はね、悩んでたんだ。」

そして、正直に言った。「ここで彼に嘘をついたことで、それを彼が察しないわけがないからだ。それに、クレクには本当のことを見つてもいいと、ラジウは心のどこかで思っている。

「おや、じゃあ先程のは嘘だったのですか？」

「ううん。違うよ。僕ね、起きるまで悩んでたんだよ。でも、起きてなんとか知らないけど父上の日記が置いてあって……それ読んだらね。決心がついたんだ。」

「なんて……書いてあったのですか？」

クレクの声はしさか楽しそうで、少しおちよくなっているのが嫌でもわかる。けれど、その裏には多少の本音が隠れていることをラジウは感じていた。だから、返答はいく真面目に返したのである。彼の返答に、これ以上ふざけてはいけないとクレクも考えたのだろう。今度は真剣にひとつと言葉を選んで問いをぶつけたのだった。

「父上のにつきには、父上の友達が命を犠牲にして助けてくれたことが書いてあつたんだ……。父上は物凄く後悔したんだって。自分が死ねば良かつたとか……生きてく方が辛いときもあるんだな。つて思つたよ。」

「そうですか。」

ラジウは顔を前に戻すと、真正面を見据えた。だんだんとホーマイ国のかわいい象徴である大きな城が形を成してきていた。それと同時に煙や赤い炎もちらりと姿を現す。

ラジウは一瞬口をぎゅっと硬く結んでから、ゆっくりと開いた。

「僕はさ、死ぬのも怖いから生きたいんだ。でもね、僕にはまだよくわかんないんだ……生きたいけど、死んででも助けたい。どっちをとつたらいいのかわからない……。ねえ、サートの命を助けられないうかもしないけど僕は生きたいって道を選んだ。間違ってると思う?」

「……いえ。綺麗ごとだけを言つ人間は嫌いですから。私はラジウ様のそういうわからないことをわからないと言えるところは好きですよ。」

自分に背中をむけているラジウの頭を、クレクは右手の手綱を離し優しく撫でる。ラジウの背中が小さく震えていたので、泣いたのではないかと少しクレクは思ったのだ。が、ラジウは泣いてはいなかった。なんとか自分の心を奮い立たせて真剣に正面を見据えていたのだ。

目の前にはもう、火の海が迫つてゐる。

「クレク。もう、この話は後だ!今は父上の身体を取り戻す!!」

「はい……」

ラジウが吼えると、それに応えるよつてクレクは手綱をぎゅっと力強く握り、馬を走らせた。速く、はやく……。

そして、走つていくと縁を抜け、姿を現したのは炎の海だった。クレクは一旦手綱を引き、馬を止める。馬が仰け反つて前足を挙げ一鳴きした。

「な、なに……これ……。」

言葉がでない。田を見開きあたりを見回すラジウ。そこに転がっていたのは草やゴミなどではない。形を成さない肉片だった。黒いモノ、赤いモノ、赤黒いモノ。それらが人の肉片だといち早く気付いたのはクレク。慌ててラジウの田を両手で覆おうとしたが、ラジウにその手をはじかれてしまった。

「ラジウ様……。」

「これって……うつ……。」

ラジウは未だにそれが何かわからなかつた。けれど、鼻には悪臭が訴えてきていた。それが、決して普段目にしないモノである。悪臭と視界に入る赤い血が訴えてきたものに、ラジウは思わず吐き気をもよおしてしまつた。胃がひっくりかえるような気持ち悪さに、口を押さえて必死に耐える。

クレクは心配気にラジウを見やつたが、ここまで来て退く性格ではないことを知つていたからだろう。無言で馬を再び走らせた。ラジウも何も言わずに馬にしがみついている。

ラジウたちが走り去つて、しばらくするとその場に一つの影が現れ

た。

「はあはあ……」「うう……」「ううやあ、ひどこねつ。」

口元を押さえて悪態をつくのは、赤と黒の世界で城が際立つて目立つ医者のキヴィだつた。しかし、彼女は慣れているのだろうか、一瞬足を止めただけでズカズカと肉片の中を歩き出す。

「え、キヴィさん……。」

その後ろを、なるべく他の場所を見ないようにキヴィの背中を凝視しながらつぶつぶるのサート。

「なんだい、サート。正直、こんなところで会話なんてしたくないんだけどねえ。」

不機嫌に言つキヴィ。それはもちろん、しゃべると悪臭と空氣に混じつた鉄の味がするからに他ならない。しかも、先へ進めば進むほど熱さに喉がやられてしまいそうだ。

「あの……足元に転がっているのはなんなんですか……？」

「ああ？ せりゃあ、人の死体に決まつてんだろ。」

「え、っ？」

サートの質問にあつせつと返答するキヴィ。そもそもが当たり前だとでも言つかのように、口調は冷たい。しかし、内容にサートは聞き返すしかなかつた。

「さて、そんなことより。サー^ト、あなたはあつちへ行つて街の人を城へ導きな。あたしゃ、こつちで怪我人の手当てすつかね。」

キヴィは、サー^トの呻きに誓い聞き返しをさらりとスルーするし、指示を与えた。あつちと言つて指差した方向は、まだ炎がなく建物がズラリと並んでいた。人がひしめき合つて押しつ押されつの状態が遠くの通りに見える。瓦礫がところどころ転がっているあたり、だいぶ破壊されているようだ。

「え、でもつ。」

正直な話し、サー^トはここで一人になるのは嫌だつた。普段目にするはずのない光景。異臭。悲鳴が自分の感覚を麻痺させて行くのがよくわかつていたから。

しかし、キヴィも自分のことで手一杯で人にかまつていられないのだろう。サー^トの言葉を無視してさつさと歩いていつてしまつ。彼女は死体の中を氣にも留めない様子で進んでいく。けれど、サー^トはそこで踏みどどまつてしまつたのだ。死体の上を歩くことが……彼にはできなかつたのだ。

だから、サー^トはくるりとキヴィに背を向ける。仕方がない。進めないのである。今は自分ができることをしよう。そう自分に言い聞かせ、サー^トは歩み出すのであつた。

そこで二人は結局別れてしまう形になつた。キヴィは死体の中に生きた人間を捜しに。サー^トは、街の方へ人に声をかけに。

そして、キヴィは、後ろが気になりながらも振り返ることなく先へと進んだ。振り返つてしまえば、更に後ろ髪を引かれてしまうことが目に見えていたからだ。

「おや、あんたは生きてるね。大丈夫かい？」

しばらく歩き、人の死体が形をとどめている一角へとキヴィイは足を踏み入れた。その中で、腕が動いたのをみつけ駆け寄る。

なんとか引きずり出したが、相手は返事もできないほど弱っていた。仕方無しにキヴィイは手当てを施す。

ガツ

鋭く刺さった音と共に、キヴィイの顔の横に棒が姿を現した。棒が槍であるということにすぐさまキヴィイは気付き、ぱつと振り返る。そこで目を見開いてキヴィイは固まってしまった。

馬に乗り逆光で影を落としている人物が、キヴィイを見下ろして立っている。その影にキヴィイは見覚えがあった。だんだんと目が慣れていくことで人の全容が明らかになっていく。

まずはつきりとしたのは金色の鎧だった。胸から腰にかけていきさか尖ったデザインでその部分と胸元は開いている鎧を身につけていた。豊満な胸と、短いスカートをたなびかせていることから、相手が女性だと言う事が窺える。また、首、腕、肩には胴と同じ素材の飾りをつけ、マントを肩の飾りで留めていた。

そして、顔もだんだんと形を成す。鋭い瞳に、キリっとした眉。銀色になびく髪は頭上で一つに縛られていた。

「ねえ…… わん。」

キヴィイが目を見開いたまま呟いた。彼女の目は不安と戸惑いが色濃く現れ、自分を見下げている女性を凝視している。

よく見知った顔。しかし、傍から見れば彼女達は丁度同じ年ぐらいいしか見えなかつた。艶のある肌、さらさらの髪の毛はまだ若々しさを物語つている。

「……。」

女は黙つたまま武器を引き抜き、まるでキヴィイが見えてないとでも言つかのように無言で馬の手綱を引き、踵を返した。

キヴィイの背後でうつという呻き声が聞こえたと同時に、彼女の白衣に赤い点々が彩られる。キヴィイが姉さんと呼んだ女は、ただ生き残りを殺しに来ただけに過ぎないのだ。だから、敵かもわからぬいキヴィイのことなど眼中になかったことが、今やつとキヴィイは理解した。

苦虫を潰したような感覚にキヴィイは強く噛み締めるしかなかつた。そして、しばらく彼女の後ろ姿を見送り、頭の混乱を整えることに時間を費やす。

一方、別れたサー^トはまだ形のある街へと足を踏み入れていた。崩れた家の瓦礫や、燃えさかる炎がなくてを遮つている。しかも、人々は混乱しているためか道を同じ方向へと押しながら走行していた。

サー^トはできるだけ大きな声で「丘の上の城へ！」と声を掛けるが、叫び声などでかき消され、人に伝わっているのかも定かではない。

「咄つ！ そんな押し合つたら怪我人……あつ！」

叫ぶ中で、目に入ってきたものに一瞬体内からガクンと揺さぶられ、サー^トは膝をついてしまう。けれど、目はそれを離せない。

初めはただの炎かと思った。だが、それは見ているうちに形を成していく。その形の形成をサー^トは見たことがあった。それは炎ではなかつた。まして今形作つている形とはあまりにも違つてゐるが……。しかし、頭では警告を放つていた。

炎は人型へと形を完成させた。すらりとした身体だが、どこが幼さが残る等身と大きな瞳。けれど、少し釣りあがつた目は意思の強さ

が読み取れる。髪の毛は逆立ち、全身はとにかく炎が浮いていたり身体と混じっていたりする。

「よう、水の。」

そして、にっこり笑いサートに話しかけてきたのだ。サートは確信した。彼が炎の精霊なのだと。そして、水というのは自分の身体の中にいる水の精霊のことなのだと理解した。なにせ、さつきから心臓の鼓動が大きく早くなつて彼に対し反応を示しているのだから気付かない方がどうかしているだろ？

「お前、いつまでそんな中で鳴りを潜めてやがる？」

「……っ！」

身体を体内から再び揺さぶられるような感覚に、気持ち悪さを覚えて、サートは懸命に足に力を入れて立ち上ると走り出した。一分一秒もこんなところに居たくない。これ以上いたら何かが終わってしまう。その恐怖に駆られていたからだ。

必死に走つて、あたりがふと暗くなつたことでサートは足を止めた。そこはどこか食料でも入れておくであろう倉庫の役割を成したメントだった。

それほど大きくない空間に、サートは一人佇み。ふと、自分の手を見た時。

サートはもう諦めてしまった。

第三章～失うもの～（9）

「……そんなり……。」

ぽつりと呟く台詞にも霸気がない。

サーントの手から汗、既に無数の透明な液体が触覚のよつて手の皮を破つて顔を覗かせていた。それが何を意味するのか、言つまでもなく理解できるだらう。

サーントは天井を見上げて、声を上げながら笑つた。いや、笑うしかなかつた。ただ空しくテントに笑い声が響きわたる。

憎むがいい

頭に直接高い声が話しかけてくる。サーントが「誰を？」と頭の中で返すと、声は答えた。

あのワジウとかいう小僧を。憎めばいい。

「なぜ？」

あいつが死ねば、お前は生きられた。

「……。」

あいつのせいだ。あいつのせいでお前は死ぬのか。

「違う。」

サーントは田を瞑つて頭の中の声を聞いていた。そして、今度は口に

出して否定の言葉を発する。

「違うよ。オレが弱かつたんだ。不安で押しつぶされてつ……お前になんか負けたからつ。」

サートの目から涙が零れ落ちる。それは、決してラジウを恨む涙ではない。自分の不甲斐なさに出てきた涙だった。止める気も止めることもできずに涙は次から次へと溢れ出していく。

な、何を言つ？あの小僧を憎めつー憎むのだつ！

「そんなことひ……しない。オレはこゝでお前を道連れに逝つてやる。知つているんだ。精霊は復活する際、食らつた者の性格、感情を反映すると……だから、ラジウ様を恨むお前なんかつ！」

サートは目を見開いた。既に身体の半分は透明な物に支配されていた。しかし、不思議と痛みはなかつた。

な、何を言ひつ。私は復活するのだ。貴様が一人孤独に死ぬだけ……

「一人じゃないよ……。」

サートはそう言つてこりこりと笑つてみせた。笑みを浮かべたその先にいたのはサートと同じように半ば半透明になりかけている一人の少女。

「やつと、見つけた……お兄ちゃん。」

「ノメル……。」

ノメルをぎゅっと抱きしめて、サーントは笑った。先ほどの一人でいる時よりも落ち着いて、そして暖かい何かを感じていた。ノメルが自分と同じように精霊の水を飲んでしまったことは知っていた。だから、助けたいと思つていた。けれど、サーントとノメルの心は精霊を通して否応無しに影響を受けていた。人一倍怖がりなノメルの感情が流れてくると、サーントも不安が頭をもたげたりもした。けれど、今は逆にサーントの気持ちがノメルに伝わっていた。彼女が優しく自分を抱きしめ返してくれる。

『二人一緒に怖くない。』

や、やめろ……。

「お兄ちゃん、最後は一緒にいこうって言つた……よね？」

にっこりと笑うノメル。それにサーントは頷いて笑い返し、再び彼女を抱きしめた。暖かい雰囲気がテントを支配したが、すぐさまその場には誰もいなくなつた。

半透明の液体に飲まれ、サーントもノメルも姿を消し、残つたのは彼等の服と半透明の液体。

「……。」

半透明の液体は形を成してから無言のままゆっくりとテントを出た。

「よっ。戻ったのか、水の。」

「ええ、迷惑をかけました。」

外で待っていた炎の精靈に、水の精靈はこくんと頷くだけで足の進みを止めはしない。声は前ほどのかなり麗ではなく、少し低めの声をしていた。それを不思議に思つて炎の精靈は首を傾げながら宙をすつと移動し水の精靈について行く。

「ど」「行くんだ?自分を倒した奴でも殺しに?」

「家に帰るだけです。私は平穏に生きて行きますので。」

水の精靈の返答に豆鉄砲でも食らつたかのように驚きの表情を見せる炎。水はにつこりと優しい笑みを浮かべて、形を変形させるとその場から姿を消してしまった。

「をいをい。だいぶ純粹なのに取り付いちましたんだな。あいつ。今後は戦力になりやあしねえな……まあ、いいか。俺様が戦えばいいだけだしな。」

頭をボリボリと搔いて呆れた口調だったが、すぐに気を取り直してにつと笑い炎の精靈もさつと風に吹かれて姿を消すのだった。その場に残っているのは古びたテントと瓦礫の山だけだった。

第三章～失うもの～（10）

「誰もいないねっ！」

城に到着して大声を上げるラジウの口を、クレクは慌てて塞いだ。そして、辺りをキヨロキヨロと見回して誰もいないのを確認している。

ラジウはバリッと無理矢理クレクの腕をはがしてさつさと城内へと足を進めた。仕方なくクレクは手を押さえながらそれを追う。

「……にして、何で誰もいないんだ？」

やはり声を気にすることなく、自分の言いたいことを言うラジウ。とめても無駄だと判断したのだろう、クレクは苦笑うだけで今度は何もしなかった。そして、彼の返答に答えるべく口を開く。

「逃げたのでしきう。魔物がまず攻め落とすならこの拠点となる城でしきうから。気をつけてくださいね？まだ魔物がそこら辺をうろついているかもしませんから。」

「わ、わかった。」

神妙な顔で口元に指を押し当てるながら話すクレクにラジウもようやつと危機感を持つた様子で、声を殺して頷くのであった。そして、あたりをキヨロキヨロと見回すが、やはり他に影はない。

「さあ、まずは王の間。そこにホーデュ様の亡骸が……置いてあるはずです。」

立ち止まっているラジウに対し、今度は逆にクレクがスタッタと先へ進んでしまう。それに慌てて追いかけるが、大人の足の幅で早足ともなればラジウは走る他無かった。

「一つの足音が城内に響く。廊下を進み、突き当たるそこは目指す王の間」。

二人は口を閉じ、沈黙を守つたまま間へと足を踏み入れた。広く開かれたその中央に、前には王の……ラジウの父の椅子があつた場所に、一つの棺桶が祭られていた。

「あつたーーー！」

棺桶に目が行くと、すぐさま歓喜の声を上げるラジウ。声はかなり大きく、開かれたホールに響き渡つてしまつ。木靈する声を気にする」ともせず、ラジウは喜びのあまり駆け出した。棺桶に向かつて。

「ラジウ様！」

それと同時にクレクが叫ぶ。棺桶の後ろに黒い影が見えたのだ。案の定、黒い影はラジウが棺桶に近づくとすばやく動き、彼の体めがけて襲い掛かる。クレクは慌ててラジウの体に腕を伸ばし、自分の方へと引き寄せた。ラジウが小さな声をあげつつバランスを崩したため、クレクも後方に引っ張られて座り込むような形になつてしまふ。

「あつ。」

影は舌打ちすると空ぶつた空間を通り過ぎ、ラジウの目の前に着地した。

「あつ。」

ラジウは小さな声を上げた。田の前に下りた影はマントがなびき、姿を表す。それは、まさしくラジウと見まごつ金髪の少年だった。少し違うといふならば、彼はどこか雰囲気がサークと似ているくらいだろう。ラジウがおもむろに立ち上ると、背丈も一緒に服が同じならばだいたいの人物は見分けられないだろう。

「ラジウ様……？」

クレクが目の前の人物を見てポツリと呟く。ラジウは自分の腕の中にいるのだから違つとはわかつても、その容姿があまりにも似ていたために頭が混乱し、口をついてしまったのだろう。

「ふざつけるなっ！」

しかし、その一言に目の前の人物は肩を怒らせて怒鳴り散らした。今にも血管がはち切れんばかりに青筋を立て、拳を震わせながらクレクを睨みつける様は、どこか怯えているように見える。

ラジウはぽかんと口を開いたまま目の前の人物を凝視していて、すぐには話しだせる状態ではなかった。

「お前のせいで、私はつ！…」

先程は怒鳴っていたせいか声質がわからなかつたが、裏返つたような甲高い声が耳をつく。それと同時に田の前の彼の目からぽろぽろと小さな零が零れ落ち、ぎゅっと口を結ぶ音がした。子供特有の高い声…と言えなくもなかつたが、それはラジウよりも少し高い声で、女性のものだとクレクも気が付く。

「……あ、あの。落ち着いてください。貴方はいつたい……？」

相手が今にもまた掴みかかって来そうな勢いだったので、クレクは慌てて起き上がり静止するように掌を相手の前へと突き出した。そして、もう片方の手でラジウを助け起こしながら、視線で目の前の彼女をじっと凝視する。

やはり、見た目はどうとでもラジウに見える。けれど、それは怒っている顔が似ているだけということに他ならなかつた。涙を流して少し弱気になつた彼女はラジウよりも弱弱しい。時折ひつとじしゃくりあげる声がクレク達の耳に届く。

「ふざけるなつ！ 私に影武者をやらせたんだろ！？ お前がラジウだつてわかつてるんだつ！…」

クレクの言葉に逆上を示す彼女。彼女の台詞にクレクは思わず額を掌で押された。彼はわかつたのだ。噂で聞いた”ラジウが白に戻つた”という話しの真相が彼女であることに。これだけそつくりならば誰も信じて疑わないだろう。ラジウが戻ってきたのだと。まして、ラジウと付き合いがない国民なら尚更疑うこともしないであろうことが用意に想像がつき、クレクは深いため息を吐いた。

「……はい、こちらはラジウ様ですが。私達が貴方に影武者をやらせたわけではありません。私達は本当にここから出て行つたのです。その後に關しては何も関与しておりません。今は丘の上の城へと拠点を置いておりますが……つかのことお伺いいたしますが、貴方は誰なのですか？ どうやつてここへ？」

聞きたいことはたくさんあつた。しかし、相手の興奮状態を見ればすぐさま答えを聞けないことぐらいクレクにも予想ができる。けれど、聞くしかなかつた。聞かなければ何も状況がわからないからだ。クレクの落ち着いた様に、彼女も少し落ち着いた様子で息を吐き、

涙を拭つた。

「……私は、リュウキ。ホーデュ・マイナーの子供の一人さ。どうやつてなんてわかつてんだろ？あいつのバカな性癖しつって、子供全員知つてる奴なんかほとんどないんだからセー！」

「ああ。」

彼女……リュウキの返答にクレクは小さな声を漏らして頷いた。所謂お偉いさんと呼ばれるホーデュに仕える人のことを指しているのだとわかつたから。ラジウがいなくなれば国が混乱する。それをとめるための手立てとしてこの子を利用した。それだけに過ぎないのだろうと、クレクは思つて頭を垂れる。申し訳ない。その気持ちでいっぱいだった。

「ちょ、ちょっと待つて！？」とは君サートやノメルと一緒にこと！？」

「な、なんであんたがサート兄やノメルのこと知つてるのさ！？」

はつと我に返つたラジウが慌てた口調で問いかける。リュウキもまた驚いたのだろう、目を見開いてラジウの顔を凝視している。

「知つてるも何もつ！」

ラジウが慌てて説明しようとする口を、クレクは塞いだ。そして、相手の目をじつと見つめると、何もしゃべってはいけない。自分がしゃべると、ラジウを田で制す。ラジウは彼の目を見ると開いたままの口をそつと閉じ、了承の意を示した。

「サーートさんもノメルさんも、ラジウ様に付いてきてくださいました。ですから、お城の方でラジウ様と仲良くしていただいて今に至るわけです。彼らは元気にしておりますよ。如何ですか？貴方も一緒に来ては……。」

緩やかな笑みを浮かべて、相手の安堵を誘うような優しい口調でクレクは問う。その口調に落ち着いたらしく、リュウキは黙つてクレクの話を聞いている。一瞬頷こうとする仕草が見られたが、意識的にとめたのだろう一瞬からだが強張つてそのまま半分頷きかけた形で止まつてから、すぐに顔を上げてしまった。戸惑っている……彼女の行動を見てクレクはそう思った。

「……来れない理由が……おありますか？」

静かに、相手を煽らないように言葉を慎重に選びながらクレクはリュウキをまっすぐに見つめた。ラジウと似た勝気な青い瞳が彼の視線とぶつかる。

「私は……サーート兄やノメルに会いたい。いつまでも……こんなところで一人なんて嫌だ……でも、でもっ！父さんの……父さんの体がっ。」

掌をぎゅっと握り締め、力の入れすぎでブルブルと小さく震える小さな手。心なしか肩も小さく震えている。必死になりすぎてリュウキの目の前が霞んだ……それが涙だと気付くのはクレクだけで、彼女の言葉に頭に血が上ったラジウには到底気付ける変化ではなかつた。

「父上の……？」

一声上げると、ラジウはクレクがとめる間もなく走り出していた。祭られた棺桶に向かつて……。

「ぱつ！待て、お前……」

「ラジウ様っ！いけませんっ！」

リュウキが目を見開いてラジウの姿を追う、クレクも手を伸ばして彼を止めようとしたがそれは空しくも宙を切った。ラジウは早いスピードですぐ祭壇に駆け上る。そして、何の躊躇もなく祭られている飾りを外し、棺桶の蓋へと手を伸ばした。

「うわー？」

ズルつという音とともに棺桶の蓋が開き後ろへと滑り落ちた。同時にラジウが悲鳴に近い驚いた叫びを上げ、身を引く。棺桶から、黒い影がゆらりと立ち上ったからだ。

クレクは走るよりも先に自分の獲物へと手を伸ばす。走つて彼を棺桶から引き剥がす時間よりも、獲物を使って相手を倒すほうが早いと判断したからだ。すぐさま弦を引き、矢をセットして目標へと向けた。

黒い影は大きく立ち上ったかと思うと急に留まり、ラジウへとゆっくり近づく。ラジウは固まつたままそれを凝視した。そしてラジウは見た。自分と同じ二つの蒼眼を。暗い中に光を放つて自分を凝視している眼……それが誰のものか、ラジウは直感的にわかっていた。ラジウが固まつている間に、クレクは狙いを定めて溜めもなく弓矢を放つた。ラジウの頬の横をビュッと風が切つて矢が黒い影を突き抜ける。黒い影が歪み、一瞬白い牙のようなものがラジウの目の前に現れて、ラジウは思わず一步後ろに下がってしまった。

「つー？」

すぐ後ろの階段に足を取られて、ラジウは勢い良く2・3段階段を落ちてしまつ。痛さに身動きが取れないラジウにクレクが駆け寄つた。

「いっただ……。」

頭を押されて、痛みに耐えるもすぐさま先程の光景が脳裏に蘇つてラジウはバツと祭壇を見上げた。しかし、そこにあるのは蓋の開いた祭壇だけ。黒い影はどこにも見当たらない。辺りを見回してどこかにあれがないかとラジウは探す。けれど、やはり黒い影はどこにも見当たらなかつた。

「……父上……。」

ラジウは寂しそうに瞳を揺らした。しかし、泣きはしなかつた。クレクが声をかけようかどうしようか迷つてゐる間にすつとラジウは立ち上がつた。そして、ゆっくりと祭壇を登つて棺桶を覗き込む。クレクもリュウキも今度はとめる声は出でずに固唾を呑んで彼を見守つた。

ラジウはゆつくりと首を横に振つた。彼の動作を見てリュウキは両手で口元を押さえ小さく呻いた。クレクもラジウから顔を逸らして視線を床に落とし、小さくため息を吐いた。

「……父上は、どこに行つたの？」

棺桶の中はもぬけの殻。何も入つていない空の箱の中身をじつと見つめ、ラジウはポツリと呟いた。頬を我慢しきれなくなつた涙が流れる。

「や、そんなつ……それじゃあ私は何のためにここにいるの。」

小さな振るえる声をラジウの耳が捕らえた。暗い沈黙が辺りに走る。ラジウはぐつと片腕で自分の涙を拭つた。自分はここで泣いている場合じゃないと、自分を奮い立たせてラジウはきゅっと口を結んだ。

「帰らう。クレク……それに……僕の兄弟。サートやノメルに会いに行こうよ。きっと一人とも喜ぶからさ。」

クルッと方向転換をして一人の方へ向き直ると、ラジウは笑顔を浮かべて言った。そして祭壇を降り、手を一人に向けて差し出す。クレクは頷いてすぐさま彼の手を取つた。けれど、リュウキは戸惑つて目を見開いたままラジウを凝視している。

「こじう、リュウキ。こじに父上はいない……いないんだからさ。」

ラジウは彼女の手をとつてぎゅっと握る。笑つたつもりだったが、その表情はどこか寂しそうで苦笑してるみたいだった。リュウキは下唇をぎゅっと噛んで眼から零をポロポロと零して……何も言わずニラジウの手をぎゅっと握り返した。また、頭を落としてひつくてすすり泣く声を出す。

クレクはラジウの手を引っ張つた。彼がリュウキに何か言いかけてやめたのを見て、戸惑つていることを知つたから。今は何も言わずに全員で城に帰るのが一番だと考へての行動だ。

ラジウはクレクに促されるまま歩き出す。すると必然的にリュウキの手が引っ張られ、彼女も共に歩き出した。誰も何も言わずに彼ら三人は静かに城へと向かう。

仲間がいる信じていてるその場所へ、何も知らずに進んでいく。

第二章／失うものの（1-1）

城で待つシルキアは胸騒ぎを覚えていた。彼は、城の入り口から少しは慣れたところに積み上げられている木箱の一つに腰を下ろし、足を組んで手に持っている赤いリンゴを眺めていた。ただ、ひたすら誰かが帰ってくるのを待つ。もしくは敵が攻めて来るのを神経を張り巡らせて警戒していなくてはならない。心底疲れる役割だと、シルキアはため息を吐いてぼやいた。

「……誰か、死んだな。」

なんとなくの感覚でシルキアは天井を仰いだ。胸元にズンと来る感覚。それが今までの経験から誰かの死を自分が感じ取っているのだと十分理解していた。きっと、今回も誰かが死んだ。そう思うとまた深いため息が出た。

バタン！！

いきなりの扉の開閉音にシルキアはリンゴを地面に投げ捨て、腰に刺している短剣の手をかけすぐさま仕掛けられるよう扉方向に身体を向けた。相手を見るとシルキアは手に力を込めて相手の前に躍り出る。そして息の根を止めようと短剣を相手の首に滑らせる。相手の首元がスパつという音と共に切れる。が、すぐに何事もなかったかのようにその喉は元に戻ってしまう。ちつと小さく舌打ちする。シルキアは床を蹴って後ろに飛び、相手との距離を保つた。

「シルキア……さん。」

それが自分の名前を呼ぶのでシルキアはぎょっとし、身体を強張らせた。まじまじと相手を見る。しかし、どう見てもそれは前に戦つた水の精霊の姿で、シルキアは名前を呼ばれる謂れなど毛頭なかつた。

「……貴様なぜ、俺の名前を知っている?」

小さく。しかし多少怒氣の孕んだ低い声で唸るよう相手に問う。水の精霊は表情を変えずに口を開く。

「私は……サーートとノメルの意を継ぐモノ。それと同時に地を守る精霊です。私は自分の家へと戻ってきた……ただそれだけです。」

淡々とした口調で少し苦笑う相手に、シルキアは眼を瞬いてから短剣を降ろした。意を継ぐもの。もちろんシルキアは精霊が取り込んだ者の性格と感情を受け継ぐことを知っていた。そのことをサーートに教えたのはシルキアだったのだから。

「そうか。あいつ等が……お前は、どうするんだ。」

苦笑する相手の表情を見ると彼を思い出してシルキアの中にやるせない気持ちが込み上げて、ギリッと奥歯を噛み締めてしまう。水の精霊から思わず視線を逸らし、シルキアは質問を投げかけた。

「静かに暮らします。私の湖があるこの地を守りながら。けれど、貴方達の戦いに巻き込まれるつもりはありませんので悪しからず……それがノメルが望んだこと。ノメルを思つてサーートが望んだこと。決して戦いはしません。」

水の精霊は優しく頬を緩めて笑いかけた。幸せそうに……シルキアの喉の奥がぐっと閉まつてしまつぱさが広がる。苦しかつた。何よりも戦いを望まない子供さえ巻き込んで、見殺しにして、結果助けられたのは自分達の方だった。水の精霊の恐怖から解き放つてくれたのは他でもない死んだ彼ら。悔しくて、シルキアは爪が食い込むほど自分の手をぎゅっと握り込んだ。

「悪かつたな……。」

ただ、その一言だけが言えた。搾り出すような声だったが、水の精霊はゆっくりと頭を垂れてお辞儀をするとそのまますっと姿を消してしまつた。湖へと帰つたのだろう。

シルキアは後味の悪さを噛み締めて、ただそこに立ち尽くすしかなかつた。しばらくして全員が帰つてくるまで……。

初めに帰つてきたのは、ラジウとクレク。そして見知らぬ子供だつた。クレクが馬を引き、子供一人が馬に乗つて城へと帰つてきたのだ。

「……誰だ？」

場内へと足を踏み入れた三人に視線を送ると、シルキアは静かに声を出した。いつもと変わらぬ感情が読めない無機質な声色で。

「ただいま！シルキアー！へへ、俺の兄弟だよ！」

誰もいない場所をただひたすら馬に乗つてきたラジウは、今朝あつた顔でもえらく久しぶりに感じてパアッと顔を輝くと嬉しそうに相手へ駆け寄つた。そして、後ろにいる自分と似ている彼女を指差して相手へと紹介する。

しかし、彼女は不満そうにふいっとそっぽを向くだけで、挨拶をし

ようとはしなかつた。

「また……お前の兄弟か。」

複雑そうにシルキアは相手を見た。「ラジウとそつくりの顔をしている子供に眉を顰めるも何も言わない。

「なあ、サーント兄とノメルは？」

シルキアの視線にちらりと視線を返してから場内を見回してリュウキは気になることを单刀直入に言う。見当たらぬ探し人に不安を隠せないようで、組んだ手の先でトントンと自分の腕を小刻みに叩いている。

「あれえ？まだ帰ってきてないのかな？ねー、シルキアーー・サートはー？」

「…………。」

ラジウも首を傾げて留守番をしていた相手に聞く。しかし、シルキアは言葉に詰まった。何を相手に言つていいのか……それを迷つて口を一回開けては閉じてしまう。

ガタつ！

クレクが不思議に思つて聞いたとした時、後ろで物音が聞こえた。びっくりして四人は一斉にそちらに向かつて振り返る。見た場所に居たの顔を蒼白にした女性。青緑色した髪と瞳が印象的

で、それだけが存在を主張している。

「キヴィ！？」

ラジウが彼女の名前を呼んで駆け寄る。心配そうに相手の肩に手を添えて顔を覗き込む。焦点の定まらない眼に冷や汗を大量に搔いている彼女は、普通とは言えない。

「……どうした？」

異様さに流石にシルキアも心配そうに眉を顰める。そして、ゆっくりと彼女に近づいた。すると、キヴィはシルキアの声に判のして顔を挙げ、彼を見上げた。揺らめく青緑色の瞳。何か恐怖を訴えかけている、が、今は聞かない方がいいと、シルキアは感じていた。決して話はしないと彼女の口元が強く掬はれていたから。

「ラジウ、そいつなら大丈夫だ。放つておけ。それより、サートとノメルのことについて話してやる。」

ふんっと小さく鼻を鳴らすとシルキアはラジウの腕を取つて自分の方へ引き寄せ、そのまま引き鶴形でキヴィから彼を離した。安堵のため息がシルキアの耳を震め、何するんだよー？と喚く声でそれが搔き消された。

「あ、あんた。サート兄とノメルのこと知つてるのか！？」

シルキアの言葉に食いついたのはリュウキだった。真剣な眼差しで彼を見、話しの続きを聞きたそうにしている。シルキアはラジウとリュウキ、クレクを順に見ると口を開いた。

「奴等は死んだ。」

ただその一言だけを明確に、はつきりとした口調でシルキアは伝えた。場内にシルキアの声が木靈する。ラジウもクレクもリュウキも……そして青い顔をしていたキヴィも黙つたまま口を開けて呆然しまづ。

「ちょ、ちょっと待つとくれよ！ サートは私とさつき別れてつ……それで人の誘導しに行つたんだつ。だからまだ戻つてないだけでつ！」

口を開いたのはキヴィで、驚きのあまり早口で捲し立てる。信じたくない。拳を握つて必死にシルキアに嘘だといって欲しいと……真剣に視線をぶつける。しかし、シルキアは首を横に振つた。

「……さつき、水の精靈がここに来た。要するに復活したということが。この意味がわかる……はずだ。」

シルキアは静かに感情の籠つていらない声で説明する。それがひどく冗談みたいで、ラジウは首を横に振つて否定した。けれど、それが事実なのはシルキアの沈痛な面持ちを見れば明らかで……喉の奥がつつかえて、叫びたいのにラジウは声を失つたように立ち尽くす。

「……とうとう。食われてしまったのですか。サートさん。」

「ちょっと、どうこうことつー…？」

クレクだけは落ち着いて、シルキアの言葉を理解していた。しかし、その落ち着きにリュウキが突っかかる。相手の胸倉を掴んで、必死に見上げ訴えかけてきた。彼女の手をやんわりと自分の手で押さえ、

クレクは口を開く。

「残念ですがリュウキさん。サーントさんは水の精霊にとり憑かれておりまして……もう助かる見込みがなかつたのです。今回の戦場で気が高ぶつたせいでしょう……水の精霊がサーントさんを取り込んでしまつたようです。サーントさんはもうこの世には……。」

残念そうに言つが、やはり落ち着いた声色のクレクにリュウキは愕然とした。胸倉を掴んでた手が緩み、下へと落ちていく。けれど、胸の中の怒りはだんだんと燃り、拳を作つた手はブルブルと震えを見せていた。

「サーントが……じゃ、じゃあノメルは？」

ラジウは立ち眩みがしたもの、なんとかその場に踏みどじまつてシルキアに視線をぶつけた。彼は奴等と言つた。奴等と言つことはノメルも……？ だけどなんで？ そんな疑問がラジウの頭で幾度も回る。

「言つたはずだ。奴等。と。ノメルも、水の精霊に侵されていたらしいな。一人とも食われて死んだ……そういうことだ。」

「そんなん……。」

シルキアの返答に小さく悲鳴に近い声を上げたのはキヴィだつた。小さく気が付かなかつた……と悲愴に呟く声が静かなホールでは皆の耳に届いた。気が付かなかつたことに関してはシルキアもクレクも、ラジウでさえ同じことだつた。誰一人彼女が精霊に侵されたことを知らなかつたのだ。どれだけ彼女が苦しんだだろうかと思うと、キヴィの胸はぎゅっと締め付けられる。せめて、気が付いて

あげれば良かつたのにと、自分を責める。

「貴方のせいですよ、ラジウ様。」

沈黙した五人の間に、五人の誰のものでもない低い声が割つて入る。割つて入つた声に聞き覚えがあるラジウは目を丸くして辺りを見回した。すぐに、自分の首筋に冷たいものが触れ、ビクッと身体を強張らせて固まる。クレクが名前を呼んだ気がするが、それよりもラジウは後ろの冷たい妖気に気が気ではなかつた。

第二章～失うもの～（1-2）

「貴方のせいですよ？ラジウ様。貴方があの子達を見殺しにした。貴方が死ねば助かったのに……あーあ……貴方は自分の命を優先したのですね。酷い人だ。」

冷たい手が首筋を撫で、顎を掴み振り返ることを許さない。背筋が凍つたように冷たい何かが走る。そして、静かな低い声と共に耳元に生暖かい風が触れ、左の方に揺らめく長い髪が視界に入った。責めるような口調に、ラジウの心臓は今にも飛び出しそうなくらい波打つた。どうしよう、僕のせいだ、どうしよう。貴方の中でその二つの言葉が交互に出では消え……混乱に未だに固まつたまま動けないでいる。

「ラジウ様のせいではありません！今すぐラジウ様をお離しなさいっ！！」

先程まで落ち着いていたはずのクレクが声を荒げて相手を威嚇する。既に弓矢を構えてじりじりとラジウの方へ近づいてきている。いや、クレクだけじゃない。シルキアも自分の獲物を片手に持ち、いつでも攻撃できる態勢だ。キヴィでさえ立ち上がりて眼をギラつかせて相手を睨みつけ警戒している。ただ一人リュウキだけはなんともいえない表情でその場に立ち尽くしている。

「ふふふ……離しては貴方方が攻撃するでしょう？人質……ですよ。武器を下ろしてくださいな。」

黒装束に身を包んだ男は見える部分の口だけを妖艶に歪ませて笑い、クレクとシルキアに要求した。ラジウの首筋には彼の鋭い爪が突き

つけられていて、脅しが嘘ではないことを示している。もし応じなければ簡単にラジウの喉元を搔つ切るだらう。クレクもシルキアも仕方なく武器を床へと捨てた。カラソという音が場内に響く。

「よろしい……さあ、ラジウ様。お迎えにあがりましたよ？貴父の父の元へ……一緒に行かれませんか？これが最後の……本当に最後のお誘いになりますが。如何でしょうか？」

武器を捨てたのを見ると黒装束を纏つた彼はラジウの頬に赤い舌を這わせて微笑を浮かべた。同時にラジウの背中にぞわつとした鳥肌が立つて思わず相手を殴りそうになつたが大人の力……いや、魔物の力には勝てずにそのまま腕を掴まれて動けなくされてしまう。魔物の顔がラジウを覗き込むが、やはり彼の顔はフードと髪に邪魔されてよくは見えない。代わりに相変わらずに鋭く尖つた角が鮮やかに視界に入る。

「はつ……い、嫌だね。僕は絶対に行かない。行くもんかっ！」

相手の人間ではない風貌に、迷つていた心は吹き飛び寧ろ怒りを覚えたラジウはきつぱりと言い放つた。そして相手をきっと睨みつける。返答を聞くと、彼はすぐにラジウを掴んでる手の力を抜いた。ラジウはすぐさま相手の懷から逃げるようすり抜け、自分の頬を手の甲で拭い魔物を睨みつけた。クレクとシルキアが彼を庇う様に魔物とラジウの間に割つて入り拾つた武器を構える。

「おやおや、怖いですね。大丈夫ですよ、私すぐ帰りますから。」

威嚇する一人のさつきを受け流しながら、両手を挙げて笑みを絶やさない彼。すぐ帰ろうと足を一步後ろに退いた。

「待つて！」

しかし、彼を止めた者がいた。彼を止めたのは彼女。今まで黙つて事の成り行きを見守っていたリュウキだった。真剣な表情で彼女は彼を見る。彼も彼女の方へ身体を向けた。

「今……今の話しほんなのか!? ラジウが、ラジウが死んでればサーント兄やノメルが生きてられたって。見殺しにしたって本当なのか!?!？」

必死の問いかけに、魔物の口元が歪むのをラジウは見た。ひどく嫌な悪寒が背中を走る。否定するわけがない。彼が彼女の質問に否定するわけがない。そうするとどうなるか……ラジウは考えたくなかつた。考えたくない最悪な結末が待つている。

「ええ……そうですよ。彼はその答えを知つていてなお、自分の命を優先させた。これがどういう意味かわかりますね? 彼のせいで他の二人が死んだのですよ。関係のないことに巻き込まれ、救いもされないお二方……可哀想でなりません。」

「…………つ。ラジウ……お前のせいだつ、お前のせいでサーント兄とノメルはつ!」

誰もが予想したとおりのやり取りが眼下で行われた。みるみる顔を真っ赤にして怒りを露にするリュウキは矛先をラジウに向けた。殺意が伝わるほどの視線にラジウの胃の中にズンと何かが沈んだ。キモチワルイ。表現するならそれでしかない感情がぐるぐると胃の中で回る。

「俺はラジウ、お前を許さないつ！ 絶対に許さないつ！！！」

彼女の強い意思に、希薄に、その場に居た魔物以外は蹴落とされてしまった。眼をギラギラと光らせ今にも食つて掛かりそうな勢い、そして何よりも怒りと憎しみを孕んだ叫びに。反論しようにも何も反論していいのか……誰も言葉には出来なかつた。

「ふふ、では貴方、私と行きますか？私達はこれから私達の味方以外を全て抹消します。ラジウ様ともそのうち相見えるかもしれませんしね。」

顔を少し上にあげてラジウを見る魔物の目が始めてちらりと見えた。黒くて深いけれど細くて冷たい瞳に、ラジウは背中に冷たいものを投げ込まれた気分になり、胸元に手を当てぎゅっと服を握り締めた。

「行く！行かせて！」

リュウキは頷くと魔物に近づいた。魔物はそつと彼女に手を差し伸べる。彼女が彼の手を取るのを誰も止めはしなかつた。いや、正しくは止められなかつた。今の彼女に何を言つてもラジウへの怒りは収まらないだろ？ 本当にラジウは自分の命の方を選んだのだから……。

「ラジウ、お前を許さないっ！ いつか殺してやる……覚悟しとけ！」

リュウキはラジウを見据えたまま吐き捨てるように言い放つた。ラジウの胸にその言葉のヤリが突き刺さる。更に強くラジウは自分の胸元の服を握り締めた。涙が今にもあふれ出しそうだった。胃がひっくり返つたような、頭の後ろを鈍器で殴られたようなキモチ悪さと衝撃に立ち眩みがしそうだつた。

「では、また会いましょうね。ラジウ様。それと他の皆さん。」

リュウキが手を取るのを確認すると、魔物はラジウ達に向き直り口元を歪ませて笑った。すると、リュウキと魔物の体がだんだんと足から消えていく。リュウキが完全に消えて背の高い魔物の顔だけが残るとき、再び魔物が口を開いた。

「ああ、そうでした。キヴィさん……の方もいらっしゃいです。会つ口が楽しみですね？」

今まで固まっていたキヴィへ身体を向けると言ひつて魔物は姿を消した。キヴィは言葉にじくつと喉を鳴らし眼を見開いて消えた場所を見つめていた。

沈黙がやけに長く感じた。誰もがビビつ話を切り出していいのかわからないでいたせいかもしれない。

「……魔物との戦争か。」

口を開いたのは意外にもシルキアだった。武器をしまつと小さくボソリと呟き、最初に座っていた箱に近寄る。そして座ると足を組んで息を吐いた。疲れた……と言っているようだつた。

「それは他の国に任せられないのですか……？私達は密かにヒーローで暮らせば。」

「無理だよ、ホーテュ・マイナーが死んだんだ。太刀打ちできる輩がない。いつかはここもあいつ等と相見える日が来ちまうよ。」

クレクの儂い希望を打ち碎いたのはキヴィで、更に空気が重くなる。大人三人は重い雰囲気の中で決さなければいけないことがあるのを

わかつっていた。しかし、本当は三人とも認めたくはない。できれば平和に過ごしたいのだ。

「ねえ……僕。やっぱり死んだ方が良かつた……のかな？」

未だに頭の中じぐるぐると色々なモノが回っているラジウは唐突に三人に聞いた。三人は目を丸くしてラジウを凝視する。

「そんなことあるわけないじゃないですかつ！」

「ばっかだねえ、あんた。自分が決めたこと今更後悔するんじゃないよ。それに、今回は仕方ないだろ。お前が死んだらサーツやノメルがその悲しみ背負うんだからね。そんなことさせる方が酷せ。」

クレクとキヴィはすぐさまラジウに励ましの言葉をかけた。しかし、シルキアはじつとラジウを見ている。ラジウも何も言わないシルキアを見つめた。

「……死にたいなら殺してやる。」

無表情な顔でシルキアは言い放った。真っ直ぐに見てくる漆黒の瞳、真剣そのものが伝わってくる。ラジウは躊躇つた。こんなにも辛くて悲しくて、気持ち悪くて……いろんな感情に押しつぶされそうになつて苦しい今を生きているよりは死んだ方がマシなんじゃないか？そういう気持ちが過ぎる。

何かを言おうとラジウは口を開く。

「おーい、ラジウ様～！」こに荷物運んでいいかい？」

しかし、すぐさま違う声に邪魔された。今日はよく話しの途中で人

が来る日だとラジウは一瞬思つたが口には出さず声の方へと振り返る。振り返った場所に居たのは知らない大柄の男。いや、他にもなんだかたくさん人がいる。男の人、女人、子供、大人、老人、若者、いろんな人がいろんな物を持つて場内へと足を踏み入れている最中だつた。

それにラジウ、他三人も眼をパチクリさせて様子を伺つている。

「え？ えつと……。」

「ねー、これはどこに置けばいいのー？ 昔みたいに一階は店でいいのかしら？」

反応に口マツテどもつていると、今度は別の女性から声をかけられる。多分それはラジウではなくキヴィに向けられたものだろう、彼女がキヴィに視線を送つてゐる。そこでキヴィはあつと小さく声を出した。

「ああ、うん。好きにじとくれよ、特に何か決めてるわけじゃないんだからさ。」

そして女性に答えると軽く手を振つて好きにしてくれと意思表明をした。三人の視線がキヴィに向けられる。

「忘れてたよ。あの子はね、怪我してた子で応急処置してから城に向かうよう伝えた子だよ。きっと他の人たちもサートの呼びかけや他の伝手でここを知つてやつてきたんだろうね。ラジウ、あなたの城にわ。」

最後の言葉にラジウの無縁がドキンと高鳴つた。ラジウは着々と作業が進められていく玄関を見やつた。昔見た風景がだんだんと作ら

れていいくのを見ると、心臓の音はどんどん大きくなつていいく。

「ラジウ様！ここに呼んでくださつてありがとハハヤコます。もう街には魔物がたくさん居て帰れないのです。」

目の前に青年が来てにっこり笑つて礼を述べる。彼はどこかしら雰囲気がサー卜に似ててラジウは更にドキつとした。今、ここに来ている人たちは家などもうない。ここが全てになるのだ。ラジウはようやくと理解した。

今此処で自分がいなくなつてはいけないと、ラジウは思った。頼りにされているからじゃない、昔と同じ風景がここにあるからじゃない、いや少しそれもあるのだけれど……そうではなくて、生きてすることがラジウにはまだある。今ここに居る皆と同じで、生きてまだ何ができる。そしてしなくてはいけないことがある。ラジウは青年に笑つて見せてからシルキアに向き直つた。

「シルキア！僕、まだ死はない。死にたくなんかないよつー・絶対父さんの遺体を取り戻すんだつ。そんでもつて、できるなら皆を助けたい！」

それが、せめてものサー卜やノメルへの労い。自分がすべきことを、ホーデュ・マイナーに蒸すかである自分がすべきことをするのが彼らへの捧げ物。

「ふん……好きにしや。」

シルキアは返答を聞くと立ち上がり階段へと歩く。疲れたから寝るみたいだね、とキヴィが呟いたのがラジウの耳に聞こえた。ラジウも欠伸をすると、同じように階段へと歩いた。

キヴィもクレクも同じように歩き出す。とりあえず今は休戦と行こ

うか。だって、魔物は言った。「いつか相見える」と。それが今でないことは、全員が分かつていた。だから、しばしの休戦……休んでたたきに備えよう。

人が賑わうようになつた城は、ようやくラジウの城となつたようだ。もちろん一人の大変な友達を失うという代償があつてのことだが……だが、失うものもあれば得るものもある。

今は何も考えずに……ラジウはただ眠る。これから、まだまだ大きな試練に向けて。

第三章～失うもの～ 完

第四章／新たな仲間／（1）

ゆつたりとした時が流れた。ホーマイ国が崩れ去り、消え……魔物達の土地となつたあの日から、もう一ヶ月という月日が流れていた。何事もなく過ごす日々……けれど、ホーマイ国は魔物が支配して今はもう近寄れる場所ではない。その代わりと言うかのようにラジウの城には人が増え、賑やかになつていった。城の一階は店が立ち並び、他の階は人が住む場所となつていて。決して国の中に居た全員がそこに住んでいるわけではない。本当にごく一部だ。しかし、それでも規模はだんだんと大きくなつていった。

人口が増えるにつれて、問題点も浮かび上がってきた。増える人口は一方的に一般市民が多く、戦つたことも戦う気もない人が全体の9割近くをしめていた。

そんな中、ラジウは廊下をバタバタと音を立てて駆けていた。目的の場所へと息を弾ませ到着すると目の前に呼び込んできた人物へと声をかける。

「シルキア！」

くり抜かれたような窓の縁に腰掛け、外を眺めている彼がラジウの言葉によつて振り向いた。が無造作に縛られている少し汚れた金髪が見えなくなり、代わりに鋭く細められた黒目が姿を現す。言葉はなく、黙れという視線が返つてくるのはいつものことで、ラジウは臆することなくへらりと頬を緩ませて笑つて見せた。それにシルキアは軽く息を吐き首を傾け彼を見つめ返しす。

「ねえねえ、シルキアあ。今度さあ。君のところのお隣の山賊連れてきてよー。」

ラジウは茶化すように、わざと間延びした子供っぽい口調で意地悪く言葉を放る。」「最近毎日同じようなことを言われているシルキアにとつて眉を顰める出来事に他ならない。

改めて自分が元山賊だったことを思い出すシルキアだが、この無口で人と関わらないような性格ではお隣さんと親しかったはずがないのを、この子供はわからないのだろうかと苛立ちに駆られる。

「……無理だ。」

一言。たつたそれだけ静かに、声を押し殺すような低い声でシルキアは言い切つた。もちろん、それだけで本当に無理なのだとラジウには伝るはずだとシルキアは確信している。長い付き合いではないが、もうシルキアが嘘をつかないことくらい十分わかっているはずだ。嘘を言つべらばなら一切何も言わずに黙り込む。そういうタイプなのだと。

「えー？」

だが、それでも納得して引き下がることがラジウにとって今はできなかつた。城の当主として、少しでも戦える配下や部下が欲しいのが現実だ。戦えずしてはここを守ることはできないのだから。ここは、ラジウの城であり、すでに町と言つても過言ではない場所。彼の守るべき場所なのだ。

そのため、シルキアが無理だと何度も言つたところで山賊や海賊、少しでも戦いを経験したことのある者を仲間に引き入れたくて仕方ないラジウは、やはり食い下がるしかない。

だから、無理を可能にして欲しいと唇を尖らせ不満そうな顔をすることでもつ一度伝えてみた。

「……無理だ。」

しかし、またもやきつぱりと言い放つシルキアに、ラジウは衝撃を受けて上がった肩をがくんと落とした。そんなにはつきり言わなくてもいいじゃないか。と内心むかむかとした気持ちが込み上げてくる。

「なん、だよつー同じ山賊なんだから話くらいしてきてくれたっていいじゃないかっ！」

「……其処の奴らとの関係は一切無い。無理だ。」

怒り任せに怒鳴つてみても、シルキアは平然としたいつもの中表情で顔色一つ変えない。そして、現実を踏まえてやはりNOと言いつてしまつ。毎度毎度繰り出される否定の言葉に、自分の気持ちを汲んでもらえない切なさと怒りが込み上げてきて、ラジウは肩を怒らせた。

「んだよつーもつ、いいよ！僕一人で行つて来るからーー！」

怒りに任せてくると方向転換すると、ラジウは元来た道を駆け出し、シルキアの部屋から出て行つてしまつた。その様子を目で追つて見送り、身動き一つすらせずに止めないのは、驚きのせいだろうか。しばらく目を瞬いてそのままの体勢で彼が去つて行ったドアをシルキアは見ていた。

「……俺の隣の山賊は……魔物だぞ……。」

時間が経ち、風が自分の頬を撫ぜた時、やつと我に戻つたシルキアはぽつりと呟いた。もっと早く言えばいいものを、いつも彼はこうなのだ。一人でポツリと言つことが、何度も重要だったことか……。

今回も例には漏れず、ラジウが決して知らない重要なことを言つてのけた。けれど、めんどくさがってかそのまま手を組むと頭の後ろに持つて行き、壁へと背を預けた。そして再び彼は窓の外へと田をやり緩やかな時間を過ごすのであった。

さて、出てしまったラジウはといふと、未だにしかめつ面にぼこぼこと煙を出しながら床を踏み鳴らして廊下を歩いていた。

「まーつたく。嫌になつちやうよなあ、シルキアは。腰抜けなんだよ。」

頬を膨らませてぶちぶち文句を言い、早歩きで廊下を通り過ぎ彼は中庭に続く道へと足を踏み入れる。中庭の横を通る廊下でガツスガツスという足音が通り過ぎるのを聞いた者がいた。それは中庭で洗濯物をしていたクレクである。

彼はここに来てから掃除洗濯炊事と家事全般をなんなくこなしていた。それというのも、ラジウの側近で家事ができる人がいないからだ。いくら城に人が大勢いると言つても、皆自分が生きるだけで手一杯ということ。ラジウは所望されようが誰になんと言われようが、自分の身の回りのことを後から城に来た人間にやらせることを拒んだ。理由は”自分がまだ王ではないから”だった。

他人の上に立つ上で自分のことを認めてくれているとラジウが思つたのは最初に居た人物。クレク、シルキア、キヴィの三人だけだと伝えた。また、今はそんなことをすることより街の復旧に全力を尽くして欲しいとも伝えたことから、自分のことをあまり気にして欲しくはない。と言つたところが本音だろう。

ちなみに、街の復旧と言つてもラジウの父が作り上げた街の場所では、魔物が占拠してしまっているので、この城の内部という形になつてゐる。

「あつ、ラジウ様。何処かお出かけですか？」

そんな家事全般をこなし今の静寂を楽しんでいたクレクは、真っ赤な顔で肩を怒らせながら廊下をすつかずつかと歩くラジウに首を傾げ、声をかけた。

「うん。ちょっと山賊のところまで。」

「へえ、やうなんですか、気をつけてくださいね。」

ラジウはクレクを見ようともせず、きつぱりと返答を告げてたったかと歩いていく。返答が返ってきたことでいつも通りにクレクは言葉を紡いでしまった。しかし、しばらく経った後、慌てたような中庭へと木霊したのである。クレクが事の重大さにやっと気が付いたのだろう。しかし、時既に遅し。

ラジウは城の出口までやつて来ていた。石造りの螺旋の階段を降り、賑やかな広間より外れた壁がくり貫かれて作られた出口。所謂裏門で彼は足を止めたのだ。

「あれ？」

何かある。そう思つて足を止めた。視線の先にあるのは建物の影に覆われて暗く、黒い影としか表現できない。見ただけでは、それがなんのかよくわからなかつた。大きさはそこまで大きい物ではない、けれど小動物みたく小さくなかつた。中型の動物くらいの大きさ。

ラジウはぐくりと喉を鳴らし、決心を固めると慎重にその影へと足を進めて行つた。だんだんと形がはつきりしていく影。手があり足があるのがわかつた瞬間、ラジウは声を張り上げた。

「つー？おー！クレク！！」

慌ててラジウは自分の一番信頼する相手の名前を呼んでいた。

目の前に倒れているのは鮮やかな緑色を持つ少女だった。キヴィも緑色の髪を持つていたが、彼女は青緑といった青が混じったような色合いだったが、少女の髪は黄緑の方に近い色合いをしていた。森の色と一緒にだとラジウは思ったが口には出さない。それよりも早く、誰かを呼んで彼女を助けることが先決だった。

「どうしました！？」

ドタドタと足音がして、ラジウの声を聞きつけたクレクが駆けつけてきた。手には洗濯物を大量に持っていることから、その後も洗濯物をしつかりやっていたのだろう。

けれど、ラジウはそんなことお構い無しに彼の名をまた数度呼び、目の前で倒れている人物を指差した。

「クレク、これ！」

「つー？……これは……人……ですね。」

「なに、真剣に言つてんだよ！そんなの見ればわかるつて！――」

駆け寄ったクレクは倒れている人影の傍に肩膝を立てて覗き込む。様子を見るように顔を見た感想が出たのだが、ラジウもそのくらいのことはわかるわけで思わず突っ込んでしまった。そして、彼の隣に走りより同じように少女の顔を覗きこんだ。顔色は青白く生気がないようを感じられる。

クレクは確認するように彼女の手を取り脈動へと指を当てた。するとドクドクという強い鼓動が伝わってきて、ほつと肩を下へとおろす。

「ラジウ様。安心してください。この方。まだ生きてます。」

クレクの言葉に顔を彼に向け、ぱあっと目を輝かすラジウ。心底安心したのか大きく息を吐いてから頷き、立ち上ると拳をぐつと握り締めた。

「良かつたあーじゃ、医務室に運ぼうー」

「ええ、そうしましょうか。」

ラジウが少女に手をかけて起き上がりせよとするのを見て、クレクは微笑ましそうに頬を綻ばせた。しかし、ラジウも子供、いくら相手が少女だからと言つて運ぶには重い。なかなか持ち上がらないのを見かねると、クレクは彼女を軽く抱き上げた。そして、あつと大口を開けて自分を見上げているラジウへと、目線で城の中へ行くことを合図する。

ラジウはちゅうと小さく口を尖らせて瞳を返した。医療室に向けて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2051f/>

ウィズアウト

2011年10月14日21時10分発行